現代教養文庫
381



日本の詩歌

山本太郎　編著

古代の詩歌から今日に至る日本の「うた」の中から、永遠の名作を選び出し、各作品の持つ味わいを簡潔に解説する。
本書は従来の文学史的な定説にとらわれることなく、現代の私たちの心をうつ作品を、著者の詩人的感覚で自由に選び出したユニークなアンソロジーである。

カバーデザイン　秋月　繁

現代教養文庫

381

日本の詩歌

山本太郎 編著

社会思想社刊

目次

まえがき

歴史を遠い過去の物語としてではなく、生きてなお僕達に「つづく」ものとして感じることのできる人は、幸いである。そして歴史の体温と、じかに接触したいと思うなら、祖先の肉声である、多くのすぐれた詩歌に僕達は、耳をかたむけるがいい。

僕はけれど、国文学者ではない。時間の長いへだたりからくる古典の難解さに、何遍でもつまづきながら、信ずべき専門家の導きに服して、広大な日本語の詩歌の園を遊泳する。そして、古代人がすぐ傍に問題として、いまも生きていることに新鮮な驚きをもつのだ。僕の人生の時間軸は、僕の肉のほろびさる数十年の矮少を超えて育ち、空間軸は、例えば「旅人（タビト）」の人生流転の実相にふれ、自分の貧弱な経験世界を超然して拡がる。

詩歌は、時間に従属しない。人間の生き方の根本に発生して、常にフレッシュである。

僕達は、凡百の流行を追うより、一つのすぐれた古典にふれ得る、貴重な選択権をもっている。風俗、社会、人生観など、あらゆる時の抵抗をこえ、かりに千年閲せば、その作品にこもる人間の声は、千年の重量をもっているのだ。僕達は国文学的常識に従いながらも、それぞれ自己に照応しあう多くの「遠い言葉」を、もっと自在に鑑賞する自由も持っているはずだ。

素朴に哀しみ、素直に愛を語る――そういう「からくり」のない人生が、僕達を告発している。古代人の問答歌、万葉の東歌（アヅマウタ）のゆたかな「ひなぶり」、古今の風雅によせて物語る人間の存在論

的危機、室町の無常、芭蕉の遍歴的人生感と蕪村の美学。「美」が人間を善へ導くと考えたプロティノス的思想。詩歌に定着された人間の声が、僕達に「幸福」とは一体何であるかということを、沢山の熱い舌で語ってくれる。

「人間の厚み」を計ろう——そんな尊大な心で僕は古典に接近し、いまはただ、謙虚に、現代に生きる自分のノドで唄おうと考えるものだ。浅学につきる僕の、この粗雑な編集が、いささかでも、歴史のなかに潜在する多くの声を、キャッチできれば望外のよろこびである。

さきに編集した『愛の詩歌集』とほぼ同じ年代を対象としたため、重複をまぬがれぬ点も多いけれど、今回はできうる限り、周知の「名作」を収めようとこころがけた。ただし、現代篇においては、頁数の関係で、その作家の代表作を収録する事が不可能の場合も多くあった。短歌、俳句など、断片的な作品抄にとどまった諸家への非礼も、おわびせねばならぬと思う。

しかし、能う限り多くの作品をよみ、かなりの年月を経て、自分の詩人としてみずから好み敬愛するところを素直に編集しようと意図したことを附言したい。

出典表記の一例として「万・一」は「万葉集一巻」の意。

前詞（まえことば）の長文に亘るものは、編者がこれを口語に改めて新訳し〈……〉で示した。

脚注は新仮名遣いに統一。

人名の振仮名は、明治以降は新仮名遣いに統一、但し、作品は原文のまま。

上代の歌

上代の歌

―記紀の歌謡―

古事記（和銅五年）日本書紀（養老四年）続日本書紀（延暦一〇年）風土記（和銅六年に勅令により諸国の国司により選進されたが詳細は不明。現在、常陸・播磨・肥前・丹後・伊勢などの風土記が残っている）等におさめられた宮廷歌謡・物語歌謡・民謡・童謡などを総称して「記紀の歌謡」といっている。

日本古代の、我々の祖先の生活感情を伝えるこれらの歌は、ほとんどが烈しい男女の愛情表現であり、その率直な人間性と、ユーモラスな内容はむしろ時代をこえて新鮮である。

誤解をおそれずに言えば、古今集や新古今集の、いわゆる職業化した歌人達の定型詩よりはるかに人間の生の声がきかれる。万葉集の詩歌のごとく個人の意識は未だとぼしいが、集団的な労働や五穀の豊穣を祈る祝祭の合唱からは、素朴な生活人の息吹きがきこえてくる。

古代歌謡のリズムは概ね短歌（五七五七七）旋頭歌（五七七、五七七）片歌（五七七）長歌（五七五七…五七又は五七七七）仏足石歌体（五七五七七七七）であり、更にまたそのヴァリエーション、応用である。

そして一般にその基本的な詩形は「八雲立つ」の歌の如く前後二段の対立様式で、即ち「…出雲八重垣」までの前句が句切れとなり主題を示し、後半がその説明を了るといった形をもつ。

歌の形ばかりでなく、その内容に問答の性質があるという事は、古代の歌謡の叙事性を物語るもので、そこから次第に感性が洗練され、主情のみがのこる一人称の発想、即ち短歌的抒情の世界に移行してゆくのだ。

尚、記紀歌謡中の作者名は、何れも語り伝えによるものであることを、初に心得ておいてほしい。神楽にその俤がしのばれるように、古代、夫々の氏族は、その祖先の威業を讃える為、其の業蹟をあらわす簡単な筋書を持った舞踊劇を祭の時に演じた。其の際主人公の歌った歌が、神々の又は祖先の英雄の作った歌と考えられるようになったものであろう。

また、さきにまとめた『愛の詩歌集』との重複をさけたため、例えば、大国主命と須勢理比売との愛の歌などの多くすぐれた作品を割愛した。あわせみていただければ幸である。

須佐之男命

八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を

（古事記・日本書紀）

高比売命

天なるや　弟棚機の　項がせる　玉の御統
御統に　穴玉はや　み谷二渡らす
阿治志貴　高日子根の神ぞ

（古事記）

雲が盛に湧き立って来た、この出雲の地に妻をこもらせようと。須佐之男命が稲田姫を大蛇から救って、結婚した時の喜びの歌であるという。此のリズムが、我が国の歌の基調となっている。

天若日子は、出雲国状偵察の為、天菩比神に次いで高天原から派遣されたが、菩比神と同じく、大国主命に心服して高天原に帰らなかった。その為神々の怒の矢に当って死ぬ。その葬式に参列した阿治志貴高日子根の神の顔が、天若日子に似ていたので、高天原から駆けつけた天若日子の家族達に間違えられ、高日子根は死人と間違えられたのを怒って席を立つ。その時、妹の高比売命が、彼の名を人々に告げる為に歌ったというの

神武天皇

宇陀の　高城に　鴫罠張る
我が待つや　鴫は障らず
いすくはし　鯨障る
前妻が　肴乞はさば
立柧稜の　実の無けくを　扱きしひゑね
後妻が　肴乞はさば
柃　実の多けくを　許多ひゑね
ええしやこしや　こはいのごふぞ
ああしやこしや　こは嘲ふぞ

である。
歌の大意は――天の機織女が首にかけていたような美しい穴玉のように、二谷二丘を輝きてらすすばらしい高日子根の神だ。
高日子根神は雷神で、この歌はもともと古代人が電光を讃美した民謡であったと思われる。

記紀歌謡中、好きな歌の一つ。
大和平定の折、天皇の命を救った弟宇迦斯の主催する戦勝の祝宴で歌われた歌。兵士達の合唱であったろう。
待っていた鴫がかからないでとんでもなくでかい鯨がひっかかった。想像をたくましくすれば「美しいすらりとした今の若女房はやって来ないで、鯨みたいに肥った先妻が来ちまった」というユーモ

（古事記）

忍坂の　大室屋に　人多に　来入り居り　人多に　入り居りとも
みつみつし　久米の子が　頭椎い　石椎いもち　撃ちてし止まむ
みつみつし　久米の子らが　頭椎い　石椎いもち　今撃たば良らし

みつみつし　久米の子らが　粟生には　臭韮一本
其ねが本　其根芽つなぎて　撃ちてし止まむ

みつみつし　久米の子らが　垣下に　植ゑし椒
口ひびく　我は忘れじ　撃ちてし止まむ

神風の　伊勢の海の　大石に　這ひ廻ろふ
細螺の　い這ひ廻り　撃ちてし止まむ

楯並めて　伊那佐の山の　木の間よも　い行き目守らひ

アかも知れない。そしてお前には「実の無けくを」若い女房には「実の多けくを」やれ、というのであるから痛快だ。さいごの囃詞も健康な哄笑をきく思いがする。

神武天皇が土雲八十建を、謀を以て撃とうとする時、部下に合図する為に歌った歌。頭椎い——刀の柄頭が椎の形をしたもの。石椎い——石作りの頭椎の刀。

同じく、登美毘古を撃つ時の歌。臭韮一本——くさい一株のニラ。根芽つなぎて——つなぎ捨てるように敵を数珠つなぎに滅ぼそう。口ひびく——口がぴりぴりして（その痛手を忘れられない、仇はうつぞ）。

同じく、兄師木、弟師木と戦って疲れた時の歌。

戦へば　我はや飢ぬ　島つ鳥　鵜飼が伴　今助けに来ね　（古事記）

伊須気余理比売

〈大久米命が神武天皇の心を比売につげたとき、比売が歌ったうた〉

胡燕子鶺鴒　千鳥ま鵐　何ど裂ける利目

〈大久米命が答へて歌ったうた〉

娘子に　直に逢はむと　我が裂ける利目　（古事記）

狭井河よ　雲立ち渡り　畝火山　木の葉さやぎぬ　風吹かむとす

畝火山　昼は雲とゐ　夕されば　風吹かむとぞ　木の葉さやげる

神武天皇の重臣であった大久米命が、天皇の恋心をかわって伝えようとしたとき比売が「貴方は何故、雨燕や頰白のようにそんな大きな目をしてごらんになるのです」と歌った。大久米命は仲々の粋人で「お嬢さん、私は御主人の命令で美しい貴女にあいたくてこんなに大きな眼をしているのです」と答えたという。古代人は、求婚に際してこうした機智にとんだナゾナゾ問答のようなことを楽しみ、難題を上手にといた男に身をゆるす風習があったのだろう。

比売は天皇の后になった。

神武天皇崩御後、后の伊須気余理比売は、異腹の皇子当芸志美美命に結婚を求められたがその時、実の皇子達が彼によって殺害されようとするのを知り、歌を以て急を

（古事記）

幣羅坂の少女

御真木入日子はや　御真木入日子はや
己が命を　盗み死せむと
後つ戸よ　い行き違ひ　前つ戸よ　い行き違ひ
窺はく　知らにと　御真木入日子はや
（古事記）

倭建命

やつめさす　出雲建が　佩ける太刀
黒葛多巻き　さ身なしにあはれ
（古事記）

新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる　（命）
日日並べて　夜には九夜　日には十日を　（火焼の老人）

尾張に　直に向かへる　尾津の埼なる　一つ松　あせを
（古事記・日本書紀）

知らせたと伝えられる。風吹かむとす——いまに大事件がやってきますよ、の意。

崇神天皇（御真木入日子）の御代、伯父の大毘古の命が四道将軍の一人として北陸地方に赴く時、道に少女が現れて、天皇に謀反する者があると告げる歌を歌い、かき消す様に見えなくなったという。その歌。ともに物語歌の一種である。

倭建命が出雲建を謀殺した時の歌。即ち、命は木刀を作って密かに相手の刀と取替え、試合に事よせ相手を斬った。

東国から甲斐の国に入った時の命と老人の問答形式の歌。

往きに一本松の下で食事した時掛

一つ松　人にありせば　太刀佩けましを　衣着せましを　一つ松
あせを　（古事記・日本書記）

大和は　国の真秀ろば　畳なづく　青垣
山籠れる　大和しうるはし

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の
熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子

はしけやし　我家の方よ　雲居立ち来も

嬢子の　床の辺に
我が置きし　つるきの太刀　その太刀はや　（古事記）

大御葬の歌

なづきの　田の稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　薢葛

け忘れた太刀が帰りに見るとそのまま残っている。あたかも一本松が命を待っていたようであった。

能煩野滞在の時、故郷の大和を偲んで歌ったという。命は此の地で病死する。

命の全けむ――若い健康な人。畳薦――平群の枕詞。歌垣の民謡で若者に青春を無為にすごすなとさとす老人歌。

五七七の形をとった片歌である。はしけやし――我家をほめた修飾語。

尾張の美夜受姫のところに置いてきた草薙の剣を思ってうたう。

白鳥となって墓から飛び立つ命をしたって、妃や皇子等が追いつつ歌ったと伝えられ、代々の天皇の

浅小竹原　腰泥む　空は行かず　足よ行くな

海が行けば　腰泥む　大河原の　殖草　海がは　いさよふ

浜つ千鳥　浜よは行かず　磯伝ふ　（古事記）

弟橘比売命

さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の
火中に立ちて　問ひし君はも　（古事記）

葬送の時歌われていた。足で歩くまだるっこさ、海草にはばまれて白鳥を追ってゆけないくやしさを歌う。

伝説では弟橘比売が荒海に身を投じたときよんだ歌になっている。さねさし――相模の枕詞。「かつて相模の野中で賊の火攻めにあったとき貴方はそんなときでも私の身を気づかって下さった」という倭建命への恋心を歌ったうたであるが、「問う」というのは普通は「つまどい」つまり求婚の事である。相模地方の民謡と考えれば、野火をたく相模地方の早春の頃、ロマンティックな雰囲気のなかで愛を語る若い男女の自然詠としてたのしめよう。

忍熊王

いざ吾君　振熊が　痛手負はずは
鳰鳥の　淡海の海に　潜きせなわ
（古事記）

酒楽の歌

この御酒は　我が御酒ならず
酒の司　常世にいます
石立たす　少名御神の
神寿き　寿き狂ほし
豊寿き　寿き廻し
献り来し　御酒ぞ　残さず飲せ　ささ
この御酒を　醸みけむ人は

仲哀天皇崩御後、皇子忍熊の王は、神功皇后腹の皇子が皇位に即くことを不平として謀叛を起すが、かえって大敗し、琵琶湖に入水自殺する。吾君は部下の将軍に呼びかけた。振熊は皇后の将軍。書紀にはこの後に建内宿禰が歌ったという、皇子の死体捜索に関する歌がのっている。

応神天皇が皇太子時、忍熊王の乱を平げて無事に大和に還った。これを祝って母の神功皇后が歌い、酒をすすめたという。

次の歌は、皇子に代ってこれに答える建内宿禰の歌。共に、当時酒宴の席で歌われた代表的なものである。琴歌譜に採録され後世まで行われた。

ささ――栄えよ、という囃しことばであるがその音楽的効果はす

その鼓　臼に立てて
歌ひつつ　醸みけれかも
舞ひつつ　醸みけれかも
この御酒の　御酒の　あやに転楽し　ささ
（古事記）

ぱらしい。

国主等の歌

品陀の　日の御子
大雀　大雀　佩かせる太刀
本つるぎ　末振ゆ
冬木の　素幹が下木の　さやさや

吉野の国主等が、大雀の命すなわち仁徳天皇の太刀を佩いた姿をほめて歌った歌。次のは、酒を献上する際に舞踏をともなって歌われたもので、後世まで産物献上の時歌われた。

白檮の生に　横臼を作り
横臼に　醸みし大御酒
甘らに　聞こし以ち食せ　まろが親
（古事記）

応神天皇

千葉の　葛野を見れば
百千足る　家庭も見ゆ　国の秀も見ゆ
（古事記）

旅先から故郷を望んで歌ったという。倭建命の条にあるのと同じく故郷讃歌である。

須須許理が　醸みし御酒に　我酔ひにけり
事無酒　笑酒に　我酔ひにけり　（古事記）

大山守命

ちはやぶる　宇治の渡に　棹執りに　速けむ人し　我が許に来む

宇治稚郎子

ちはやひと　宇治の渡に　渡り瀬に　立てる　梓弓檀弓
い伐らむと　心は思へど　い取らむと　心は思へど　本方は
君を思ひ出　末方は　妹を思ひ出　苛なけく　そこに思ひ出
かなしけく　ここに思ひ出　い伐らずそ来る　梓弓檀弓　（古事記）

豊楽の祝歌

百済から学者や技術者が来た時、その中に醸酒の名人須須許理が居た。天皇はその良い酒に心も浮々して散歩に出た。酔った勢で、ステッキで道の石をたたくと石が走ってどいた。「堅い石でも酔っぱらいをよける」という諺が古事記のこの条に附け加えられている。

応神天皇崩御、大山守命は皇位をねらったが、却て大雀命や宇治の稚郎子にさとられ、謀にあって無惨な最期をとげる。これは舟を覆えされ、水中で矢を受けて死ぬ時の歌という。

次の歌は、反逆者とはいえ、さすがに兄弟なので、自分の手にかけかねている心を歌う。

日本で雁が卵を産んだのは珍しいことなので、長命で物知りの建内

たまきはる　内の朝臣　汝こそは　世の長人
そらみつ　大和の国に　雁卵産と聞くや　（仁徳天皇）

高光る　日の御子　諾こそ　問ひ給へ　真こそに　問ひ給へ
吾こそは　世の長人　そらみつ　大和の国に　雁卵産と　いまだ聞
かず

汝が御子や　遂に知らむと　雁は卵産らし　（建内宿禰）　（古事記）

枯野を　塩に焼き
其が余り　琴に作り　掻き弾くや
由良の門の　門中の海中に
振れ立つ　漬の木の　さやさや　（古事記・日本書紀）

宿禰に問うたのに対し、全く初耳です、これはあなたさまが長く此の国を治められるめでたいしるしでしょう、と答えたのである。

都のはずれに巨大な樹があった。朝日が当れば影は淡路島にとどき、夕日が当れば影が高安山を越えるという。これで船を作った所、非常に快速である。これで天皇に差上げる水を淡路から運んだ。廃船になってから焼いて琴を作ると、その音響が七つの里に響き渡ったという。其の美しい音色に、紀淡海峡の海藻が踊っている情景を歌ったもの。

履中(りちゅう)天皇

多遅比野(たぢひの)に　寝(ね)むと知(し)りせば
防壁(たつごも)も　持(も)ちて来(き)ましもの　寝(ね)むと知(し)りせば

埴生坂(はにふざか)　わが立(た)ち見(み)れば
かぎろひの　燃(も)ゆる家群(いへむら)　妻(つま)が家(いへ)のあたり

大坂(おほさか)に　遇(あ)ふや　嬢子(をとめ)を　道問(みちと)へば
直(ただ)には告(の)らず　当芸麻道(たぎまち)を告(の)る　（古事記）

穴穂皇子(あなほのみこ)

大前(おほまへ)　小前宿禰(をまへすくね)が　金門蔭(かなとかげ)
かく寄(よ)り来(こ)ね　雨立(あめた)ち止(や)めむ　（皇子）

志都歌つまり地方民謡の一つ。

新穀を神に供える儀式の後の宴会で、天皇が酔って眠った所を、弟の墨江(すみのえ)の中王(なかつみこ)に襲われた。天皇は帰化人の役人に救出され、避難の途中で目覚めて歌った、と古事記にある。

防壁は野宿の時、風を防ぐ道具。独立させて恋歌として味わうと面白い。

同じく避難の旅の途中、女が現れて、此の先に軍勢が待ち伏せしているから、と、別の遠廻りの道を教えたそれに対する歌。

軽太子(かるみこ)の不倫の恋に驚き怒った朝廷の要人や人民は、皆太子にそむいて、穴穂皇子についた。太子は大前小前宿禰の邸に逃げ込み、戦の準備をした。穴穂皇子も軍勢を

宮人の　足結の小鈴　落ちにきと
宮人響む　里人もゆめ　（大前小前宿禰）

（古事記・日本書紀）

雄略天皇

み吉野の　小牟漏が嶽に　獣伏すと　誰ぞ　大前に申す
やすみしし　我が大君の　獣待つと　呉床にいまし
白妙の　袖着備ふ　手腓に　虻掻き着き　その虻を　蜻蛉早咋ひ
かくの如　名に負はむと　そらみつ　大和の国を　蜻蛉島とふ

以て邸を囲み、歌を歌って宿禰に呼びかけた。次のは、宿禰の答の歌である。「袴を結えた紐の小鈴が落ちた、不吉だと高貴のお方がさわいで居られる。家の者共よ、落着け」という意。この後、宿禰が中に立って事をおさめ、太子は朝廷軍に引渡された。

太子は伊予に流され、恋の相手、軽の大郎女は、太子を慕って同じく伊予に下り、其の地で心中を遂げる。『愛の詩歌集』——木梨の軽の太子——参照。

天皇が狩に行き、腰を下しているとを虻に刺された。その虻は丁度飛んで来た蜻蛉に食われた。天皇は喜んで歌い、其の名を記念して国の名としたという。

次の歌は、手負猪に追われた天皇が、榛の木に逃げ登り、木の枝に

やすみしし　我が大君の　遊ばしし　猪の　病猪の
吼き恐み　我が逃げ登りし　在峰の　榛の木の枝　（日本書紀）

嬢子の　い隠る岡を
金鉏も　五百箇もがも　鉏き撥ぬるもの　（同）

水そそく　臣の嬢子　秀罇取らすも
秀罇取り　堅く取らせ
下堅く　弥堅く取らせ　秀罇取らす子　（同）

隠国の　泊瀬の山は　出で立ちの　宜しき山
走り出の　宜しき山　隠国の　泊瀬の山は
あやにうら麗し　あやにうら麗し　（日本書紀）

籠もよ　み籠もち　ふくしもよ　みぶくし持ち　この丘に　菜摘ます児　家聞かな　名告らさね　そらみつ　やまとの国は　おしなべて　吾こそをれ　しきなべて　吾こそませ　我こそは　告らめ　家をも名をも　（万・一）

感謝した歌。

書紀の記載によれば、天皇に、猪を殺すことを命ぜられた舎人が、逃げて木に登った。その為、天皇の怒にふれて斬られようとする時歌った、とある。天皇は、皇后になだめられて舎人をゆるした。

「嬢子の」の歌は、岡に逃げ込んだ袁杼比売を探し出すのに、五百の鉏で岡を掘り返したい、という意。

つぎの歌は、酒宴の時、天皇に酒を献ずる袁杼比売に呼びかけた歌。秀罇はたけの高い口附の酒器で、「秀罇をしっかりお持ちよ」の意。盞歌として琴歌譜に採録。

「隠国の」の歌は、故郷讃歌である。万葉集三三三一に、やや言葉を変えて、載っている。

夕されば小椋の山に臥す鹿の今夜は鳴かず寝ねにけらしも　（万・九）

右は或本に云はく岡本天皇（舒明又は斉明）の御製なりと云へり。正しく指すところを審かにせず。因りて累ね載す。

婇の歌他六首

纒向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日影る宮
竹の根の　根足る宮　木の根の　根蔓ふ宮　八百土よし　杵築宮
真木栄く　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる　百足る　槻が枝は
上つ枝は　天を覆へり　中つ枝は　東を覆へり　下づ枝は　鄙を覆へり　上つ枝の　枝の末葉は　中つ枝に　落ち触らばへ　中つ枝の
枝の末葉は　下つ枝に　落ち触らばへ　下づ枝の　枝の末葉は　蚕衣の　三重の子が　捧がせる　瑞玉盞に　浮きし脂　落ちなづさひ
水こをろ　こをろに　是しも　あやに畏し　高光る　日の御子
事の語り言も　こをば

読人しらず。

古事記には、雄略天皇が酒宴を催した際、盃を奉った伊勢の国出身の婇は、盃の中に槻の葉が落ち入ったのを知らずに居たので、天皇の怒りにふれて斬られそうになった、其の時、婇が歌った、とあり、槻の葉が盃に浮ぶのは吉兆であるという意味が述べられている。婇は為に赦された。

大和の　この高市に　小高る　市の高処　新嘗屋に　生ひ立てる
葉広　斎つ真椿　其が葉の　広り坐し　其の花の　照り坐す　高

同じ時、皇后の歌ったものという。

光る　日の御子に　豊御酒　献らせ　事の語り言も　こをば

百敷の　大宮人は　鶉鳥　領巾取り掛けて　鶺鴒　尾行き合へ
庭雀　踞集りゐて　今日もかも　酒漬くらし　高光る　日の宮人
事の語り言も　こをば

同じ時の天皇の歌。以上三首は伊勢出身の海人語部に伝えられた、天皇讃歌である。

やすみしし　我が大君の　朝問には　い倚り立たし
夕問には　い倚り立たす　脇几が　下の　板にもが　あせを
（古事記）

脇息の下板となって朝夕天皇に仕えたい、という意。

大和辺に　見が欲しものは
忍海の　この高城なる　角刺の宮
（日本書紀）

清寧天皇崩後、姉君の飯豊王が角刺の宮で政を行った。時の人々が歌った歌。

やすみしし　我が大君の　隠ります　天の八十蔭　出で立たす
御空を見れば　万代に　斯くしもがも　千代にも　斯くしもがも
千代にも　斯くしもがも　畏みて　仕へ奉らむ　拝みて　仕へ奉ら
む　歌附きまつる
（同）

蘇我の馬子が推古天皇を祝福して歌ったといい、蘇我氏の氏上の歌で、「天語歌」（前出）である。

真蘇我よ　蘇我の子らは　馬ならば　日向の駒　太刀ならば　呉の

次のは、これに答えて、蘇我氏を賞讃する天皇の歌。

真鋤　諾しかも　大君の　使はすらしき　（同）

袁祁王

物部の　わが夫子が　取り佩ける　太刀の手上に　丹書き著け
その緒には　赤幡を載て　赤幡を　立てて見れば　い隠る　山の
御峰の竹を　掻き刈り　末押し縻ぶる如す　八つ絃の　琴を
調べたる如　天の下　治めたまひし　伊邪本和気の　天皇の御子
市辺の　押歯の王の　奴　御末ぞ　（古事記）

稲莚　川副楊　水行けば　靡き起き立ち　その根は失せず

倭は　そそ茅原　浅茅原の　弟日　僕らま

石の上　布界の神楹　本伐り　末截ひ　市辺の　宮に　天の下治らしし　天万国万　押磐の尊の　御裔　僕らま　（日本書紀）

室寿の歌

築き立つる　稚室葛根　築き立つる　柱は　此の家長の　御心の

清寧天皇の御代、山辺連小楯が播磨国の長官となって赴任した時、土地の豪族の新築祝に招かれた。酒宴の席で次々に人が舞い、竈の傍に居た火焼き係の二人の少年の番になった。少年達は人々に笑われながら出て来たが、其の時此の歌を歌い、自分達が実は雄略天皇に殺された押歯の王の皇子であると名乗ったのである。伊邪本和気天皇は履仲天皇の事。小楯はびっくりして、此の亡命中の二皇子の為に宮を造り、都に報告したのであった。この皇子等は後に顕宗天皇、仁賢天皇となる。

袁祁王が、志自牟の邸に亡命中、新築祝の酒宴に歌ったと書紀に記されている。

鎮りなり　取り挙ぐる　棟梁は　此の家長の　御心の林なり
取り置ける　椽橑は　此の家長の　御心の斉ひなり　取り置ける
蘆萑は　此の家長の　御心の平ぎなり　取り結へる　縄葛は
此の家長の　御寿の堅めなり　取り葺ける　草葉は　此の家長の
御富の余りなり

出雲は　新墾　新墾の　十握稲の穂を　浅甕に　醸める　酒
美らにを　飲喫ふるがね　吾が子等

あしひきの　此の傍山の　牡鹿の角　挙げて　吾が儛へば　旨酒
餌香の市に　直もちては買はず　手掌も摎亮に　拍ち上げ賜はね
吾が常世等

（日本書紀）

天皇を悟す歌

神風の　伊勢の　伊勢の野の
栄枝を　五百経る懸きて
其が尽くるまでに
大君に　堅く仕へ奉らむと
我が命も　長くもがと
言ひし工匠はや　あたら工匠はや

家のすばらしさを讃め、主人の人徳と健康をたたえた歌。

若者たちよ、たのしく飲みなさい、の意。

尊敬するお年寄たちよ、たのしくお遊びなさい、の意。

雄略天皇の命に依って楼を築いた闘鶏の御田という者は、釆女と情交があるかと疑われ、死刑にされようとした。其の時、秦の酒の公は琴に合わせて歌い、天皇を悟した。

あたらしき　猪名部の工匠　繋けし墨縄
其が無けば　誰が繋けむよ　あたら墨縄

（日本書紀）

ぬばたまの　甲斐の黒駒
鞍着せば　命死なまし　甲斐の黒駒

（日本書紀）

歯田根命

山辺の　小島子ゆゑに
人衒らふ　馬の八匹は　惜しけくもなし

（日本書紀）

吉備臣尾代

建築の名人猪名部真根は、失敗することが一度も無かったが、天皇の謀にひっかかって、遂に失敗し、死刑にされようとした。仲間達が、真根を惜しんで歌い、天皇も反省したという。

「ぬばたまの」は、反省した天皇が、赦免の使を立てる時、乗馬の装備に手間取っては、真根が処刑されてしまったろう、急いでよかった、と歌った趣である。これは、書紀では天皇の歌となっている。

歯田根命は、采女、山辺小嶋子との情交を、雄略天皇にとがめられて捕えられ、領地や、財宝を没収された。其の時の歌で、恋の歌である。

雄略天皇の御代、新羅遠征軍の将

道に闘ふや　尾代の子
母にこそ　聞こえずあらめ　国には聞こえてな

（日本書紀）

歌垣の歌

志毘
大宮の　彼つ鰭手　隅傾けり

袁祁の命（王子）
大工匠　拙劣みこそ　隅傾けれ

志毘
大君の　心を緩み
臣の子の　八重の柴垣　入り立たずあり

王子
潮瀬の　波折りを見れば

軍尾代の軍勢には、蝦夷の部隊が混っていた。この蝦夷部隊が、途中で天皇崩御の報を聞いて叛乱を起した。尾代は自ら叛乱部隊を鎮圧した。その武勇を故郷の人に知らせたいという心を歌ったと、書紀には記されている。

歌垣の時、袁祁命が気に入った豪族の娘を、志毘の臣がいちはやく口説き落して一緒に居た。がっかりしている袁祁の命をひやかして、志毘が「貴方の家は傾いてる」と言えば、王子も負けずに、「それは大工が下手なせいだ」と言い、「油断してる間に、王子は私の厳重な囲の中に入れなくなった」と言えば、「鮪が雌と連れだって遊んでる」と言い返す。又、「王子がいくら厳重な囲を作っても、こわれた

遊び来る　鮪が鰭手に　妻立てり見ゆ

志毘

大君の　御子の柴垣
八節結り　結り廻し　截れむ柴垣　焼けむ柴垣

王子

大魚よし　鮪突く海人よ
其が離れば　うら恋しけむ　鮪突く志毘

（古事記）

顕宗天皇

浅茅原　小谷を過ぎて
百伝ふ　鐸ゆらくも　置目来らしも
置目もや　淡海の置目

り焼けたりするよ」と悪態をつき、王子も女性を鮪にたとえて、「その鮪は今に私が取ってやる、鮪が居なくなったら、鮪突き漁師のお前は恋しがることだろうね」という具合に、歌い負かそうと互に張合うのである。日本書紀には、少し言葉のちがう歌が同じ歌争いの形で記されている。但し、志毘の相手は武烈天皇で、志毘はこの為に殺されたという。万葉集巻九（一七五九）に歌垣（嬥歌会）を詠んだ歌がある。『愛の詩歌集』参照。

天皇の父市辺王は、雄略天皇に殺された。其の骨を探している時、淡海の一老女が、市辺の王の骨の特徴をあげて、骨の埋められている場所を教えた。天皇は喜んで、その老女に「置目の老媼」という

明日よりは　み山隠りて　見えずかもあらむ　（古事記）

名を附けて、優遇した。古事記では、天皇が老女に逢いたい時、鈴を鳴らすと記され、書紀には、老女が紐につかまって歩くように工夫され、その紐に鈴が附けてあったと説明されている。
次の歌は、置目が高令の故を以て帰郷を願い、帰ることになった時の、名残を惜しむ天皇の歌。

葬送の歌

石の上　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多に　大宅過ぎ　春日
春日を過ぎ　妻ごもる　小佐保を過ぎ　玉笥には　飯さへ盛り
玉盌に　水さへ盛り　泣き沾ち行くも　影媛あはれ　（日本書紀）

武烈天皇に殺された志毘の葬列に、泣きながらついていく影媛を歌ったもの。書紀には、次の歌と共に影媛が歌ったと記されている。

青土よし　奈良の峡間に　獣じもの　水漬く辺隠り　水そそく　鮪
の若子を　漁り出な猪の子　（同）

失政の為、任那から呼びもどされた毛野の臣は、帰国の途中病死する。夫を出迎えに来た妻が其の葬

枚方ゆ　笛吹き上る　近江のや　毛野の若子い　笛吹き上る　（同）

韓国の　城の上に立ちて
大葉子は　領巾振らすも　日本へ向きて　（同）

童謡

畝傍山　木立薄けど
頼みかも　毛津の若子の　籠らせりけむ　（日本書紀）

大和の　忍の広瀬を　渡らむと
足結た作り　腰作らふも　（同）

岩の上に　小猿米焼く

列に逢い、悲しみ歌ったという。

欽明天皇の御代、任那の総督、調の伊企儺は、新羅に敗れて殺された。其の時の妻の姿を歌ったもの。書紀では、妻の作となっている。

推古天皇崩後、皇太子が定っていなかったので、田村皇子（舒明天皇）を擁する蘇我蝦夷と、聖徳太子の遺子、山背大兄王を擁する境部の摩理勢が対立した。大兄王は、世の乱れを憂えて自ら退き、其の弟皇子も死去した為、摩理勢は孤立し遂に蘇我氏に攻め亡ぼされた。毛津の若子は、摩理勢の子。畝傍山で自害した。歌は、勢力の弱い山背大兄王を頼りにして亡びた境部一族に同情したもの。

「大和の」は、武力強大となった

米だにも　食げて通らせ　山羊の老翁　(日本書紀)

向つ峰に　立てる夫らが
柔手こそ　我が手を取らめ
誰が裂手　裂手そもや　我が手取らすもや　(同)

はろばろに　言そ聞こゆる　島の藪原　(日本書紀)

遠方の　浅野の雉
響さず　我は寝しかど　人そ響す　(同)

小林に　我を引き入て　奸し人の
面も知らず　家も知らずも　(同)

蘇我氏の得意をあらわす。山羊はかもしか。通りかかった白いひげの老人に、焼いた米でも食べておいで、と歌ったもの。書紀は、蘇我入鹿(蝦夷の子)が、山背大兄王一族を圧し、遂にその邸を焼き、胆駒山に追いつめ、斑鳩寺内で自殺せしめた事件を諷した歌としている。

「向つ峰に」も「岩の上に」と同じく、当時の歌垣で歌われた民謡である。

歌垣の歌である。「はろばろに」はかすかにの意。男女が人目をさけて語り合っている。次は、雉の様にさわがず、ひっそり寝たのに人がはやし立てるという意。男の歌。三首目は女の歌。書紀は、これらを、専横をきわめた蘇我氏が、中大兄皇子(天智天皇)藤原鎌足

太秦は　神とも神と　聞こえくる
常世の神を　打ち懲ますも
（同）

平偏僂の　作れる
尾上田を　雁雁の食らふ
御狩の　弛みと
尾上田を　雁雁の食らふ
御言　弱みと
尾上田を　雁雁の食らふ
（日本書紀）

らによって討伐された事件を諷したものと解説している。即ち(1)謀議(2)山背大兄王は滅亡したが、他の人が黙っていなかった(3)入鹿は大極殿中で暗殺され、手を下した人が分らない、の意とする。

＊皇極天皇の御代、不尽河の辺の大生部多という人が橘につく青虫を、常世の神だと言って、村の人に祭らせ、財産を巻き上げた。秦の造河勝は、大生部多を打ち懲しめて、村人を迷信から目覚めさせた。その功績を讃えた歌である。

＊原文はそのまま読み下すと到底わけが分らない。上の文は、土橋寛氏の訳による。文中の文字をあちこち入れ替えると、こんな風に読める。斉明天皇の御代、新羅遠征軍の為に大船を作ったが、夜中に妙に向きが変ったりして、敗戦

打橋の　頭の遊びに　出でませ子
玉手の家の　八重子の刀自
出でましの　悔いはあらじぞ　出でませ子
玉手の家の　八重子の刀自　（日本書紀）

橘は　己が枝枝　生れれども
玉に貫く時　同じ緒に貫く　（同）

み吉野の　吉野の鮎
鮎こそは　島辺も良き　え苦しゑ
水葱の本　芹の本　吾は苦しゑ　（同）

臣の子の　八重の紐解く
一重だに　いまだ解かねば　御子の紐解く　（同）

の前兆の様であった。この歌は、朝廷の政治の弱さを諷したもので、その為、ナゾナゾめいた歌になったか。

歌垣の歌。「橋の附近での遊びに、奥さん出ていらっしゃい。面白いですよ。後悔なんぞなさるまい」の意。書紀は、法隆寺が焼けた事件とからませ、「早く寺から出ておいで、損はしない」の意と解す。

＊天智天皇の御代帰化人の学者技術者に冠位を授けた。不公平な事無く各々に栄誉がさずけられたことを賞めた歌。天智天皇崩御の後歌われたという。

「み吉野の」は、「大海人皇子よ、悠々と吉野に落ち着いて居ないで立ち上って我々を救って下さい」という農民の歌とも、時節を待ちつつ逼塞している大海人皇子が、

赤駒の　い行き憚る　真葛原
何の伝言　直にし良けむ
（同）

伝説の歌

愛しきかも　我が子孫
高きかも　神宮
天地の共　日月の共
人民集ひ賀ぎ　飲食豊かに
代代に絶ゆることなく　日に日に弥栄えむ
千秋万歳に　遊楽窮らじ
（常陸風土記）

鮎に訴えている歌とも解せる。
「臣の子の」は、天皇崩後、大臣等がぐずぐずしている間に、大海人皇子が政権を握ったことを諷す。
「赤駒の」は、遠慮して人に伝言させたりしないで、御自分で直接おっしゃればいいのに、という恋歌だが、書紀はこれを、「誰にも憚らず、御自分の方針を断行なさい」と、皇子を激励する歌と解す。

昔、祖神が諸神を訪問されたことがあった。富士山の神は、とり込み中だからと祖神を玄関払いした。祖神はこれを恨んで、富士山を呪った。其為富士山は年中凍って人々が訪ねて行かれない。次に筑波山を訪ねると、筑波山も忙しかったが、こころよく祖神をもてなした。祖神は上の歌で筑波山を

篠原の　弟姫の子を
さ一夜も　率寝てむ時や　家に下さむ

（肥前風土記）

常世辺に　雲立ち渡る
水の江の　浦島の子が　言持ち渡る

大和辺に　風吹き上げて　雲離れ
退き居りともよ　我を忘らすな

子らに恋ひ　朝戸を開き　我が居れば

祝福した。それで此の山には年中人民が集りにぎわい栄えているという起源説話に関わる歌。

大伴の狭手彦が任那へ赴任して数日後、恋人の弟日姫子の所に、狭手彦とそっくりの青年が現れて夜な夜な通うようになった。姫子が怪んでつけて行くと、それは沼に住む蛇だった。その蛇が歌ったとある。もとは、独立した歌垣の歌であろう。

雄略天皇の御代、水の江の浦島子が、釣に出かけ、五色の亀をとったが、その亀が美女に化け、海中の大きな島に浦島をつれてゆく。数年すごし故郷忘れがたく名残を惜しみながら浦島が帰ってみると三〇〇年経っていた。知る人もない。唯みやげの玉手箱だけが浦島

常世の浜の　波の音聞こゆ
水の江の　浦島の子が
玉匣　開けずありせば　又も会はましを
常世辺に　雲立ち渡る
玉匣　はつかに開けし　我ぞ悲しき
（丹後風土記）

天の原　ふり放け見れば
霞立ち　家路まどひて　行く方知らずも
（同）

の持物だ。彼は神女を慕うあまり約にそむいてその箱をあけてしまう——という有名な浦島伝説を唄ったもの。

「言持ち渡る」——雲が浦島の言葉を常世の国に持ち渡る。

「大和辺に」は、雲が運んで来た浦島の歌に返す神女の唄。「退り居りともよ」とは「たとえ離れても」の意。

「子らに恋ひ」は、神女を慕う浦島の唄。

「水の江の」は、後の代の人が唄った浦島伝説の唄。

「常世辺に」も、後の代の人が浦島の身になって歌った唄。

「はつかにあけし」は「わづかにあけし」の意。

丹後の比治山の泉に天女が八人下りて水浴していたが、中の一人は

翁に衣をうばわれ天に帰れなくなり、翁の娘になった。その天女が歌ったという伝説の唄。

飛鳥・奈良時代の歌

飛鳥・奈良時代の歌

―万葉集ほか―

万葉集は僕達の祖先がつくった最古の独立歌集である。一部二〇巻、四五〇〇余首の歌が収められていて、短歌形式の作品がその大半を占めている。

時代的に言うと、大体舒明天皇（紀元六二九年）から淳仁天皇（紀元七五九年）の一〇〇余年間の作品集で、更にこれを特徴づけるならば

第一期（飛鳥時代）――記紀の歌謡にみられるごとき「物語のなかの歌謡」から独立して「個性的な歌」として作られるようになった。額田王がその好例。

第二期（天武―聖武天皇にいたる奈良時代）――集中の圧巻で、人麻呂、赤人、憶良、旅人、石川郎女、大伴坂上郎女などの歌人が輩出し、日本詩歌の一大源流を形成した。

第三期（聖武、孝謙、淳仁の藤原氏専横時代）――歌人も専門化し、宮廷の宴席で歌の技巧派の色彩がやや濃くなり、歌調も形式化への途をたどる。精彩を保つのはかろうじて、大伴家持、高橋虫麻呂、笠女郎などであろう。

万葉集は、（天皇、皇族、宮廷貴族の歌は別として）三つの大きな特徴を持っている。その一つは、飛鳥時代の柿本人麻呂を頂点とする、山部赤人、笠金村、高橋虫麻呂（ともに奈良時代）などの職業的宮廷歌人の系列である。彼等の伝記はいずれも不詳に近いが、恐らくはじめは吟遊詩人の如く諸国を歩き、後に宮廷の庇護をうけ、天皇讃歌を主な仕事にするようになったものであろう。その古代調の大らかな詩の世界は卓抜した技巧と相俟って万葉集の主流を形成する。第二はいわゆる太宰府を中心とする筑紫歌壇の存在である。斜陽貴族大伴旅人、外国帰りの知識人山上憶良などが、中央政権に秘かに対抗しながら歌った世界は、一層人間的で宮廷歌人の古代ぶりにくらべ、人生批判の味があり、はるかにモダーンなものであった。そうした環境に幼時を過した大伴家持が示す一種人生無常の抒情が万葉第三の性格であり、その延長線上に僕達は古今集的世界をみることができる。

併し、万葉集には更に注目しなければならぬ第四の性格がある。それら貴族、官僚階級の職人的な歌ではなく、東国地方の民間で生れた、いわゆる一群の東歌、即ち民謡と防人の歌である。

これらの歌は表現も洗練されておらず、さして豊かな教養の裏うちも持っていないけれど、いま僕達の心をもっとも強く打つ。何故か？　類型化しない生活感覚と、人間の肉声がこもっているからだ。たとえそれらが万の歌より選ばれた秀逸ばかりだとはいえ、肉声を言葉に移してかほどまでに緊迫感を盛る事の出来たのは、当時の人々の語感のたしかさを証明するものだ。

巻一四に収められた「東歌」は奈良時代、中央政府の治下にあった遠江、駿河、相模、武蔵、上総、下総、常陸、信濃、上野、下野、陸奥の一一ケ国の農民生活の報告ともいえよう。歌の殆どが相聞。つまり恋の歌で、農耕という共同生活体のなかでとりかわされる労働の歌でもあった。当時の朝廷が諸国の事情を知る資料として国司に採集させたこれらの歌の母胎を考えるとき、僕達は貧しい暮しのなかで尚、生々と呼吸していた上代日本人の姿を、誇らしく思い返すのだ。

防人の歌――昔から東国の男児は剛勇をもって鳴っていたらしい。都に栄える貴族の風雅の肌合、その絹のような抒情味とは違って、これらの歌には、ゴツゴツした木綿の肌ざわりがある。彼等は壱岐、対馬を中心に外敵に備えて徴兵された。むろん死は覚悟の上である。農村のいたるところで親と別れ妻と別れ、子と生別する断腸の場面が展開した。交通の便もない頃である。旅の途中で病に倒れる者も多かったろう。防人の歌には、隠そうとして隠しきれぬ人間くさいドラマがたちこめている。

太平洋戦争当時、軍部は防人の歌を、特攻精神昂揚のスローガンに利用した。しかし、これらの歌には、戦を否定する更に深く強い底音のある事に軍人達はきがつかなかった。防人の歌によって僕達が知らされたのは皮肉にも特攻精神ではなく「戦争悪」であった。

東国の農民がその貧しい経済的背景のなかで、せめてもの生活庇護をたよりに、より強大な権力に服従してゆく姿には、原始社会の悲しい倫理、人間関係がある。作歌にはもっとも縁遠い素朴な百姓が、思いをこめて吐きだした告白に単純に感動ばかりもしていられないような気もする。

万葉集の編者は正しくは不明というべきだろうが巻三、四、六、八、一七、一八、一九、二〇は大伴家持、巻五が憶良（又は家持）ではないかといわれている。

聖徳太子(しょうとくたいし)

上宮の聖徳太子、竹原井に出遊(いでま)しし時、龍田山の死(みまか)りし人を見て悲傷(かなし)みて作りませる御歌

家にあらば妹が手まかむ草まくら旅に臥(こや)せるこの旅人あはれ　（万・三）

しなてる　片岡山に　飯に飢(ゑ)て　臥(こや)せる　その旅人(たびと)あはれ
親無しに　汝生(なれな)りけめや　さす竹の君はや無き
飯に飢て　臥せる　その旅人あはれ　（日本書紀）

用明天皇の第二皇子。推古天皇の皇子として政を執り、冠位及び憲法を制定、国史編纂事業を行う。博学聡明、仏教に帰依し、法隆寺を建立した。推古天皇二一年一二月、片岡山に行かれたときの歌と伝えられるが、太子の慈悲深い性格や行為を賛える説話の中に織込まれたもので、正しくは作者不詳というべきであろう。行き倒れの病人や死者を歌ったものは他にもあり、当時の旅の困難さの他、社会全体の貧しさは想像に余る。又、これを歌で悼んでいるのは、死者への同情と共に、横死した霊の祟りを防ぐ意味もあったかと思われる。

舒明(じょめい)天皇

敏達天皇の孫。第三四代。蘇我蝦夷に推され、山背大兄王(やましろのおおえのみこ)（聖徳太子の皇子）を退けて即位。在位

天皇香具山に登りて望国しましし時の御製の歌

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　かまめ立ち立つ　うまし国ぞ　あきづ島　大和の国は　（万・一）

中皇命

天皇（舒明天皇）内野に遊猟しましし時、中皇命、間人連老をして獻らしめたまへる歌

やすみしし　わが大君の　朝には　とり撫でたまひ　夕には　いより立たしし　御執らしの　梓弓の　なか弭の　音すなり　朝猟に　今立たすらし　暮猟に　今立たすらし　御執らしの　梓弓の　なか弭の　音すなり

反歌

たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝ふますらむその草深野　（万・一）

中皇命、紀の温泉に往きましし時の御歌

君が代もわが世も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな
吾背子は仮廬作らす草なくは小松が下の草を刈らさね
わが欲りし野島は見せつ底ふかき阿胡根の浦の玉ぞ拾はぬ　（万・一）

一三年。六四一年崩御。

中皇命は、間人皇女（舒明天皇皇女。孝徳天皇皇后）とする説と、斉明天皇（舒明天皇皇后）とする説とがある。

有間皇子

有間皇子、みづから傷みて松が枝を結ぶ歌二首

磐白の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへり見む

家におれば笥に盛る飯を草まくら旅にしあれば椎の葉に盛る

長忌寸意吉麻呂、結び松を見て哀咽める歌二首

磐白の岸の松が枝結びけむ人はかへりてまた見けむかも

磐白の野中に立てる結び松情も解けずいにしへ思ほゆ

山上臣憶良の追ひて和ふる歌

つばさなすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

大宝元年辛丑、紀伊国に幸しし時、結び松を見る歌

（柿本人麻呂歌集より）

後見むと君が結べる磐白の小松が末をまた見けむかも　（万・二）

孝徳天皇皇子。斉明天皇四年、蘇我の赤兄は、朝廷の失政を皇子に説いた。皇子は赤兄を信頼して、現政権を倒そう、と語ったが、たちまち通報されて捕えられ、絞首された（一九才）。上は護送される時の作という。皇子が人々の同情を集めた様子が、後世の歌人達の歌で分る。

天智天皇

舒明天皇皇子。母は斉明天皇。第三八代の天皇。藤原鎌足とともに

中大兄（天智天皇）三の山の歌

香具山は　畝火を愛しと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくなるらし　いにしへも　しかなれこそ　うつせみも　つまを　争ふらしき

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原

渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清明くこそ　（万・一）

倭姫王

天皇（天智天皇）聖躬不予みたまひし時、太后の奉れる御歌

天の原ふりさけ見れば大君の御命は長く天足らしたり

天皇崩りましし時、倭太后の作りませる御歌

人はよし思ひ止むとも玉かづら影に見えつつ忘らえぬかも

天皇の大殯の時の太后の御歌

いさな取り　淡海の海を　沖放けて　こぎ来る船　辺附きて　こぎ来る船　沖つ櫂　いたくな撥ねそ　辺つ櫂　いたくな撥ねそ　若草の　つまの　おもふ鳥立つ　（万・二）

大化改新を行い、唐制にならって、皇室中心の中央集権国家の確立に努力。孝徳・斉明二代の皇太子として政治を執る。斉明天皇崩御後、近江に都を定め、六六八年即位。六七一年一二月三日崩御。

天智天皇皇后。古人大兄皇子（舒明天皇皇子）の女。病気平癒を祈って、長寿を祝う言葉を用いたのである。

鏡王女

①秋山の樹の下隠り逝く水の我こそ益さめ御思ひよりは　(万・二)

②風をだに恋ふるはともし風をだに来むとし待たば何か嘆かむ　(万・四)

神奈備の伊波瀬の社の喚子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる　(万・八)

額田王

①秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の宮処の仮廬し思ほゆ

熟田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出でな

額田王近江国に下りし時、作れる歌

②味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積るまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見さけむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや　(万・一)

③あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る　(万・一)

額田王の姉。天智天皇に仕えたが、後、藤原鎌足の夫人となって不比等を生む。

①天智天皇の御歌に和えたもの。

②額田王の「君待つと」に対してよんだ歌。

鏡王の娘。天智・天武両天皇の愛を受けた。十市皇女（天武天皇皇女）を生む。

①此の歌は斉明天皇の行幸に従った時のものであるが、天皇の御製との説もある。

②近江遷都の折、旧都を出て国境で振返り、大和鎮護の三輪山の神に手向をしたのである。

③天智天皇が弟の大海人皇子と共に薬猟の遊びをした時の歌。天皇

やすみしし　わご大君の　かしこきや　御陵(みはか)奉仕(つか)ふる　山科の
鏡の山に　夜(よる)はも　夜のことごと　昼はも　日のことごと　哭(ね)のみ
を　泣きつつありてや　ももしきの　大宮人は　去(ゆ)き別れなむ　（万・二）

④君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　（万・四）

山科(やましな)御陵（天智天皇）より退散(おらけまな)りし時、額田王の作れる歌

吹芡刀自(ふぶきのとじ)

十市皇女伊勢神宮に参赴(まゐむ)きし時、波多(はた)の横山の巌を見て吹芡(ふふき)刀自の作れる歌

川上のゆつ岩群(いはむら)に草むさず常にもがもな常処女(とこをとめ)にて　（万・一）

真野の浦の淀の継橋情(こころ)ゆも思へや妹が夢にし見ゆる　（万・四）

河上のいつ藻の花のいつもいつも来ませ我背子時じけめやも　（同）

麻続王(をみのおほきみ)

麻続王(をみのおほきみ)の伊勢国伊良虞島(いらごのしま)に流さえし時、人の哀傷して作れる

の寵姫であり、又皇子の恋人であった額田王が、皇子の親しげな行為に困惑しながらも喜びをかくしきれない気持があふれている。

④天智天皇の訪問を待っている時の歌。

十市皇女は天武天皇皇女。母は額田王。

天武天皇四年、皇女は伊勢神宮に参拝した。川上の激流に洗われて苔の生えぬ岩群の様に、いつまでも新鮮な処女でありますように、の意。

系譜不明。海人部の伝承した貴人流転伝説の主人公。書紀、天武紀四年、麻続王は罪を犯したので因

歌

打麻を麻績王白水郎なれや伊良虞が島の玉藻刈ります　（万・一）

麻績王、聞きて感傷みて和ふる歌

うつせみの命を惜しみ波にぬれいらごの島の玉藻刈り食む　（同）

大伯皇女（大来皇女）

大津皇子竊かに伊勢神宮に下りて上り来ましし時、大伯皇女の作りませる御歌

わが背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露にわが立ちぬれし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

大津皇子薨りましし後、大来皇女、伊勢の斎宮より京に上りましし時、作りませる御歌二首

神風の伊勢の国にもあらましをいかにか来けむ君もあらなくに

見まく欲りわがする君もあらなくにいかにか来けむ馬疲るるに

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬りし時、大来皇女哀傷みて作りませる御歌二首

うつそみの人なる吾や明日よりは二上山を兄弟とわが見む

播に流された、とある。常陸風土記には、板来の駅（潮来の辺）の西の榎の林が、麻績王の流罪の地であったと伝えている。イナバ・イラゴ・イタコと音が似ている為、種々の伝承が生れたか。

大津皇子は天武天皇の皇子。学才に秀で、雄弁で文学を愛し、詩賦を振興する。容姿も立派で、天智天皇に愛されたと書紀にある。天武天皇の御代朝政にもあずかったが、天皇崩御の直後、謀反のかどで死刑となる(二四才)。大伯（大来）皇女とは同母姉弟である。わが背子は弟皇子を指す。

磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに　（万・二）

大津皇子

大津皇子の被死えし時、磐余の池の般にして流涕みて作りませる御歌一首

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ　（万・三）

天武天皇

吉野宮に幸しし時の御製の歌

淑き人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見つ

持統天皇

春過ぎて夏来たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山　（万・一）

天皇、志斐の嫗に賜ふ御歌一首

天智天皇の弟。第四〇代天皇。天智天皇の東宮となり、譲位の詔を下されたが辞退して吉野にこもる。崩後、兵を興して近江を攻め、大友皇子（弘文天皇）を敗って政権をとる。都を飛鳥の浄御原にうつし、新政を行う。律令の制定、記紀の編纂事業は有名である。六八六年崩。

天智天皇皇女。天武天皇皇后。天武天皇崩後、藤原宮で政を執る。天武天皇在世中から内助の功績大きく、人望が高かった。

不聴と言へど強ふる志斐のが強語このころ聞かずて朕恋ひにけり

志斐の嫗の和へ奉る歌一首

否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語と詔る　（万・三）

石川郎女

春日野の山辺の道を恐なく通ひし君が見えぬころかも　（万・四）

舎人娘子

ますらをがさつ矢手ばさみ立ち向ひ射る的形は見るに清けし　（万・一）

但馬皇女

但馬皇女、高市皇子の宮に在しし時、穂積皇子を思びて作りませる御歌一首

①秋の田の穂向のよれることよりに君によりなな言痛かりとも

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣しし時、但馬皇女の

語部の職務と生活がうかがわれる歌である。当時は既に文字による記録方法が確立し、文献の整理もされていたが、語部は存続されて居り、天皇に昔語をお聞かせする形式も残っていたとみえる。

大伴安麿の妻。坂上郎女の母。命婦として朝廷に仕えた。

伝来詳。

「ますらをが……射る」までは「的形」の形容である。

何れも天武天皇の皇子、皇女。

但馬皇女。母は藤原鎌足の女、氷上娘。

高市皇子。母は胸形君徳善の女、尼子娘。持統天皇即位の年、大政大臣となる。同じく一〇年薨ず。

作りませる御歌一首

②おくれゐて恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ吾背

但馬皇女、高市皇子の宮に在しし時、竊かに穂積皇子に接ひ、
事既にあらはれて作りませる御歌一首

人言をしげみ言痛みおのが世にいまだ渡らぬ朝川渡る　（万・二）

穂積皇子

但馬皇女薨りましし後、穂積皇子、冬の日雪ふるに、御墓を
遥望け、悲傷み流涕きて作りませる御歌一首

③ふる雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに　（同）

今朝の朝け雁が音聞きつ春日山もみぢにけらしわが情痛し　（万・八）

④家にありし櫃に鏁さし蔵めてし恋の奴のつかみかかりて　（万・一六）

志貴皇子

明日香宮より藤原宮に遷りましし後、作りませる御歌

釆女の袖吹きかへす明日香風京を遠みいたづらに吹く　（万・一）

穂積皇子。母は蘇我赤兄の女、大蕤娘。

①世間の取沙汰はやかましいが、私の愛はひたすらです。

②残って恋に悩むより追って行こう、岐れ道に道しるべをつけて下さいね。

③雪よ多く降るな、愛する人の墓地が寒いであろう。

④宴の際、興が乗ってくると、皇子はいつもこの歌をうたわれたという。

天智天皇皇子。光仁天皇の父。春日宮御宇天皇、田原天皇の称がある。二品。霊亀二年（七一六）歿（続日本紀）。或は元年（万葉集）。

難波宮に幸しし時、作りませる御歌

葦辺ゆく鴨の羽交に霜ふりて寒き夕は大和し思ほゆ　（万・一）

むささびは木末求むとあしひきの山の猟夫にあひにけるかも　（万・三）

大原のこの市柴の何時しかとわが思ふ妹に今夜あへるかも　（万・四）

石ばしる垂水の上のさ蕨の萠え出づる春になりにけるかも　（万・八）

神名備の磐瀬の杜のほととぎす毛無の岳にいつか来鳴かむ　（同）

作品はおおらかでしかも優美な歌風である。

柿本人麻呂

藤原宮時代の宮廷詩人。伝不詳。大和の豪族。後世、歌聖と仰がれた。

近江の荒れたる都を過ぎし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

玉だすき　畝火の山の　橿原の　日知の御代ゆ　生れましし　神の
ことごと　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを
天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに
おもほしめせか　天ざかる　夷にはあれど　石走る　淡海の国の
ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の
尊の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の

天智天皇が、神武天皇以来朝廷の置かれた大和の地をはなれて、近江に都を定められたが、崩御の後はたちまち滅びて、政権は飛鳥の清見原（天武天皇）に移った。廃都に立って一代の革新政治家天智天皇をしのぶ歌である。

茂く生ひたる　かすみたつ　春日の霧れる　ももしきの　大宮処見れば悲しも

反歌

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたもあはめやも　（万・一）

吉野宮に幸しし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

やすみしし　わが大君　神ながら　神さびせすと　芳野川　たぎつ河内に　高殿を　高しりまして　のぼり立ち　国見を為せば　たたなはる　青垣山　山祇の　奉る御調と　春べは　花かざし持ち　秋立てば　もみぢかざせり　ゆき副ふ　川の神も　大御食に　仕へまつると　上つ瀬に　鵜川を立ち　下つ瀬に　小網さし渡す　山川も依りて奉れる　神の御代かも

反歌

山川もよりて奉れる神ながらたぎつ河内に船出するかも　（万・一）

持統天皇は吉野の地を愛してしばしば幸した。わが天皇の為に、山の神は花や紅葉で山を飾り、川の神は豊富な魚を準備する、という意味で、天皇を讃美した歌。人麻呂は此の他、行幸に従った時の長歌が多い。

天皇、雷岳に御遊しし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも　（万・三）

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

日並皇子は草壁皇子（天武天皇皇

天地の　初の時　ひさかたの　天の河原に　八百万　千万神の　神集ひ　集ひいまして　神分ち　分ちし時に　天照らす　日孁尊　天をば　知らしめすと　葦原の　瑞穂の国を　天地の　依り合ひの極知らしめす　神の命と　天雲の　八重かき別きて　神下し　いませまつりし　高照らす　日の皇子は　飛鳥の　浄の宮に　神ながら太しきまして　天皇の　敷きます国と　天の原　岩戸を開き　神上り　上りいましぬ　わが大王　皇子の命の　天の下知らしめしせば春花の　貴からむと　望月の　満はしけむと　天の下　四方の人の大船の　思ひ憑みて　天つ水　仰ぎて待つに　いかさまに　思ほしめせか　つれもなき　真弓の岡に　宮柱　太しきまし　御殿を　高知りまして　朝ごとに　御言問はさず　日月の　まねくなりぬれ
そこ故に　皇子の宮人　行方知らずも

反歌二首

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも
あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

（万・二）

讃岐の狭岑島に、石の中に死れる人を視て、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

子）。皇太子に立ったが、持統天皇三年薨ず。
殯宮は、崩御又は薨去の際、本葬の時まで棺を収めておく一時的の宮をいう。
人麻呂はこの他、明日香皇女、高市皇子の殯宮の時のほか、妻の葬送、吉備津采女、土形娘子の葬儀、無縁の死者をとむらう歌等多い。

玉藻よし　讃岐の国は　国柄か　見れども飽かぬ　神柄か　ここだ
尊き　天地　日月とともに　満りゆかむ　神の御面と　継ぎて来る
中の水門ゆ　船浮けて　わが漕ぎ来れば　時つ風　雲居に吹くに
沖見れば　とゐ波立ち　辺見れば　白波さわく　鯨魚取り　海を恐
み　行く船の　梶引き折りて　をちこちの　島は多けど　名くはし
狭岑の島の　荒磯面に　いほりて見れば　波の音の　繁き浜べを
敷栲の　枕になして　荒床に　自伏す君が　家知らば　行きても告
げむ　妻知らば　来も問はましを　玉桙の　道だに知らず　おぼほ
しく　待ちか恋ふらむ　愛しき妻らは

反歌

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや
沖つ波来よる荒磯を敷栲の枕と枕きて寝せる君かも　（万・二）

柿本朝臣、香具山の屍を見て、悲慟みて作れる歌

草まくら旅の宿に誰が夫か国忘れたる家待たまくに

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島が崎に船近づきぬ　（万・三）
淡路の野島が崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす　（同）
稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ　（同）

以下六首旅の歌。旅の風光を讃めでながら、巧に望郷の心を織りまぜている。

天ざかる夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ　（万・三）

飼飯の海のには好くあらしかりこもの乱れ出づ見ゆ海人の釣船　（同）

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ　（同）

溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬りし時作れる歌

山のまゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく　（同）

八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ　（同）

み熊野の浦の浜ゆふ百重なす心は思へど直にあはぬかも　（万・四）

以下四首は恋の歌。

いにしへにありけむ人もわがごとか妹に恋ひつついねかてずけむ　（同）

今のみのわざにはあらずいにしへの人ぞまさりて哭にさへ泣きし

百重にも来及かぬかもと思へかも君が使の見れど飽かざらむ

人麻呂歌集

人麻呂の歌（及び人麻呂作と信じられた歌）と、人麻呂が集めた他の人の歌とを含む歌集。大方作者不明である。

あしひきの山河の瀬の響るなへに斎槻が嶽に雲立ち渡る　（万・七）

ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しも嵐かも疾き　（同）

君がため浮沼の池にひし採むと我が染めし袖ぬれにけるかも　（同）

巻向の山べとよみて行く水の水沫のごとし世の人吾は　（同）

剱(たち)の後(しり)鞘(さや)ゆ納野(いりの)に葛(くず)引く吾妹(わぎも)
真袖もち著せてむとかも夏草刈るも　（万・七）

住吉(すみのえ)の波豆麻(はつま)の公(きみ)が馬乗衣(うまのりころも)
さひづらふ漢女(あやめ)をすゑて縫へる衣ぞ　（同）

住吉(すみのえ)の出見(いづみ)の浜の柴(しば)な刈りそね
未通女(をとめ)らが赤裳の裾のぬれてゆかむ見む　（同）

住吉(すみのえ)の小田を刈らす子奴(やつこ)かも無き
奴あれど妹が御為(みため)に私(わたくしだ)　田刈る　（同）

池のべの小(を)槻(つき)が下(もと)の細竹(しの)な刈りそね
そをだに君が形見に見つつ偲(しの)ばむ　（同）

天にある姫菅原の草な刈りそね
みなの腸(わた)か黒き髪に芥(あくた)し著くも　（同）

夏影の房の下に衣裁つ吾妹
裏設けてわがため裁たばやや大に裁て　（万・七）

梓弓引津の辺なる莫告藻の花
採むまでにあはざらめやも莫告藻の花　（同）

うち日さす宮路を行くに我が裳は破れぬ
玉の緒の思ひ萎えて家にあらましを　（同）

君がため手力疲れ織れる衣ぞ
春さらばいかにかいかにすりては好けむ　（同）

橋立の倉椅山に立てる白雲
見まく欲りわがするなへに立てる白雲　（同）

橋立の倉椅川の石走はも
壮子時にわが渡りてし石走はも　（同）

橋立の倉椅川の河のしづ菅
わが刈りて笠にも編まず川のしづ菅 （万・七）

春日すら田に立ち疲る君は哀しも
若草の妻無き君が田に立ち疲る （同）

山城の久世の社の草な手折りそ
わが時と立ち栄ゆとも草な手折りそ （同）

青みづら依網の原に人もあはぬかも
石走り淡海県の物がたりせむ （同）

水門の葦の末葉を誰か手折りし
わが背子が振る手を見むと我ぞ手折りし （同）

垣越ゆる犬呼び越して鳥猟する君
青山のしげき山べに馬息め君 （同）

海の底沖つ玉藻の名告藻の花
妹と吾とここに何にありと莫告藻の花　（万・七）　名告藻は「ほんだわら」のこと

この岡に草刈る小子然な刈りそね
ありつつも君が来まさむ御馬草にせむ　（同）

江林に宿る猪鹿やも求むるによき
白たへの袖まき上げて猪鹿待つ我背　（同）

霰降り遠江の阿渡川楊
刈れどもまたも生ふとふ阿渡川楊　（同）

健男の思ひ乱れて隠せるその妻
天地に徹り照るとも顕はれめやも　（万・一一）

恵しとわが思ふ妹は早く死なぬか
生けりとも吾に依るべしと人の言はなくに　（万・一一）

朝戸出の君が足結をぬらす露原
早く起き出でつつ吾も裳裾ぬらさな　（同）

山城の久世の若子がほしといふ余を
あふさわに吾をほしといふ山城の久世　（同）

ひさかたの天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも　（万・一〇）

たらちねの母が手放れかくばかり術なき事はいまだせなくに　（万・一一）

いつはしも恋ひぬ時とはあらねども夕片設けて恋は術なし　（同）

世の中し常かくのみとおもへども半手忘れずなほ恋ひにけり　（同）

なかなかに見ざりしよりは相見てし恋しき心まして思ほゆ　（同）

いでいかにここだはなはだ利心の失するまで思ふ恋ふらくのゆゑ　（同）

玉久世の清き河原に身祓して斎ふいのちは妹がためこそ　（同）

君に恋ひうらぶれをれば悔しくもわが下紐の結ふ手いたづらに　（同）

いかならむ名を負ふ神に手向せばわが思ふ妹を夢にだに見む　（同）

是川の瀬瀬のしき波しくしくに妹は心に乗りにけるかも　（同）

言に出でて云はばゆゆしみ山川のたぎつ心を塞きあへにたり　（同）

たらちねの母が養ふ蚕の繭隠りこもれる妹を見むよしもがも　（万・一二）

朝づく日向ふ黄楊櫛旧りぬれど何しか君が見るに飽かざらむ　（同）

赤駒の足搔速けば雲ゐにも隠り往かむぞ袖まけ吾妹　（同）

吾妹子を夢に見え来と大和路の度瀬ごとに手向わがする　（万・一二）

葦原の　水穂の国は　神ながら　言挙せぬ国　しかれども　言挙ぞ
わがする　言幸く　まさきくませと　つつみなく　さきくいまさば
荒磯波　ありても見むと　百重波　千重波にしき　言挙する吾は
言挙する吾は

反歌

しき島の日本の国は言霊のさきはふ国ぞまさきくありこそ　（万・一三）

かはづ鳴く吉野の河の滝の上のあしびの花ぞ地に置くなゆめ　（万・一〇）

春日野に煙立つ見ゆをとめ等し春野のうはぎ採みて煮らしも　（同）

春の野に心のべむと思ふどち来し今日の日は晩れずもあらぬか　（同）

物皆は新しき良しただ人は旧りぬるのみし宜しかるべし　（同）

今更に君はい往かじ春雨の情を人の知らずあらなくに　（同）

ほととぎす今朝の朝明に鳴きつるは君聞きけむか朝宿か寝けむ　（同）

夕星も通ふ天道をいつまでか仰ぎて待たむ月人壮子　（同）

吾背子にうら恋ひをれば天の川夜船(よぶね)こぎ動(とよ)む楫の音(と)聞ゆ　（万・一〇）

蟋蟀のわが床の隔(へ)に鳴きつつもとな　起きゐつつ君に恋ふるに寝ねかてなくに　（同）

誰が苑(その)の梅の花ぞもひさかたの清き月夜にここだ散り来る　（同）

東歌(あづまうた)

常陸国の歌

筑波嶺(つくばね)の新桑蚕(にひぐはまよ)の衣(きぬ)はあれど君がみ衣(けし)しあやに著(き)ほしも　（万・一四）

筑波嶺に雪かもふらる否(いな)をかも愛(かな)しき児ろが布乾(にのほ)さるかも　（同）

相模国の歌

足柄(あしがり)の麻万(まま)の小菅(こすげ)の菅枕(すがまくら)あぜかまかさむ児(こ)ろせ手枕(たまくら)　（同）

武蔵国の歌

武蔵野の小岫(をくき)が雉(きぎし)立ち別れ往(い)にし宵より夫(せ)ろにあはなふよ　（同）

上総国の歌

馬来田(うまぐた)の嶺(ね)ろに隠りゐかくだにも国の遠かば汝(な)が目ほりせむ　（同）

下総国の歌

葛飾の真間の手児奈をまことかも吾(われ)に寄すとふ真間の手児奈を　（同）

常陸国の歌

東国地方歌の意。遠江以東陸奥までの土地で歌われていた歌謡を集めてある。長い年月多くの民衆に歌われていたので、作者は不明。当時東国で用いられていた地方語で書かれて居り、内容は生活に則したものであって、発想も表現も、他の巻に見られぬ独特の趣がある。此の時代の民衆の感情や生活形態を知るにも重要な手がかりとなる。

筑波嶺の彼面此面に守部すゑ母し守れども魂ぞあひにける（万・一四）

常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ（同）

信濃国の歌

信濃道は今の墾道刈株に足ふましなむ履著け吾背（同）

信濃なる筑摩の川の細石も君しふみてば玉と拾はむ（同）

上野国の歌

吾が恋はまさかも悲し草まくら多胡の入野のおくもかなしも（同）

国名不詳の歌

都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の殿の仲子し鳥狩すらしも（同）

鈴が音の早馬駅家のつつみ井の水をたまへな妹が直手よ（同）

間遠くの雲ゐに見ゆる妹がへにいつか到らむ歩め吾が駒（同）

うらもなくわが行く道に青柳の張りて立てればもの思ひ出つも（同）

稲つけばかかる吾が手を今宵もか殿の若子が取りて嘆かむ（同）

あひ見ては千年や去ぬる否をかも吾やしか思ふ君待ちがてに（同）

麻苧らを麻笥に多に績まずとも明日著せさめやいざせ小床に（同）

安波をろのをろ田に生はるたはみ蔓引かばぬるぬる吾を言な絶え（同）

吾が面の忘れむ時は国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲ばせ（同）

面形の忘れむ時は大野ろにたなびく雲を見つつ偲ばむ　（万・一四）
からすとふ大をそ鳥のまさでにも来まさぬ君をころくとぞ鳴く（同）
水くく野に鴨の匍ほのす児ろが上に言をろ延へていまだ寝なふも（同）
沖に住も小鴨のもころ八尺鳥息づく妹を置きて来のかも（同）
人の児の愛しけ時は浜渚鳥足悩む駒の愛しけくもなし（同）
崩岸の上に駒を繋ぎて危ほかど他妻児ろを息にわがする（同）
苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るるまにまに何かかなしけ（同）

藤原宮の役の民の作れる歌

やすみしし　わが大君　高照らす　日の皇子　あらたへの　藤原が
上に　食国を　見し給はむと　都宮は　高知らさむと　神ながら
思ほすなへに　天地も　寄りてあれこそ　磐走り　淡海の国の　衣
手の　田上山の　真木さく　檜のつまでを　もののふの　八十氏川
に　玉藻なす　浮べ流せれ　そを取ると　騒く御民も　家忘れ　身
もたな知らず　鴨じもの　水に浮きゐて　わが作る　日の御門に
知らぬ国　寄し巨勢道より　わが国は　常世にならむ　図負へる
神しき亀も　新代と　いづみの河に　持ち越せる　真木のつまでを
百足らず　いかだに作り　のぼすらむ　勤はく見れば　神ながらな

藤原宮造営の為、諸国の人民が徴集された。官人（人麻呂かという）がこの歌を作って作業に従事する人々に歌わせたとの説もあるが、或は、宮廷歌人が天皇の権勢の強大さを讃美する為、賦役の民を材に取っただけかも知れない。

らし　（万・一）

藤原宮の御井の歌

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　あらたへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　在り立たし　見し給へば　大和の　青香具山は　日の経の　大御門に　春山と　繁さび立てり　畝火の　この瑞山は　日の緯の　大御門に　瑞山と　山さびいます　耳無の　青すが山は　背面の　大御門に　宜しなへ　神さび立てり　名ぐはし　吉野の山は　かげともの　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける　高知るや　天のみかげ　天知るや　日のみかげの　水こそは　常にあらめ　御井の清水

短歌

藤原の大宮づかへあれつぐや処女がともはともしきろかも　（万・一）

日並皇子の舎人等

皇子尊の舎人等、慟傷みて作れる歌

①高光るわが日の皇子の万代に国知らさまし島の宮はも

②島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさずとも

御井を讃え、同時に天皇を祝福した歌。作者は人麻呂と思われる。

日並皇子の殯宮の時、舎人達が墓前で合唱する為に作られたもの。作者は人麻呂であろう。二三首の歌が一つの感動の流に乗って配列されている。

①②③⑧⑩⑪⑮⑱⑲皇子が亡くなられて、さびれ行く宮殿の様子を

③高光るわが日の皇子のいましせば島の御門は荒れざらましを
④外に見し真弓の岡も君ませば常つ御門と侍宿するかも
⑤夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするか佐日の隈廻を
⑥天地とともに終へむとおもひつつ仕へまつりし情違ひぬ
⑦朝日照る佐太の岡べに群れゐつつわがなく涙やむ時もなし
⑧御立せし島を見る時にはたづみ流るる涙とめぞかねつる
⑨橘の島の宮には飽かねかも佐田の岡べに侍宿しに行く
⑩御立せし島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで
⑪御立せし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも
⑫鳥くら立て飼ひしかりの児巣立ちなば真弓の岡に飛び帰り来ね
⑬わが御門千代常とはに栄えむとおもひてありし吾し悲しも
⑭東の滝の御門にさもらへど昨日も今日も召すこともなし
⑮水伝ふ磯の浦廻の石つつじ茂く咲く道をまた見なむかも
⑯一日には千たび参入りしひむかしの大き御門を入りかてぬかも
⑰つれもなき佐太の岡べに反りゐば島の御階に誰か住まはむ
⑱朝覆日の入りぬれば御立せし島に下りゐて嘆きつるかも
⑲朝日照る島の御門におほほしく人音もせねばまうらがなしも
⑳真木柱太き心はありしかどこのわが心しづめかねつも

悲しむ。
④⑦⑨⑫⑰㉒殯宮に集って悲む舎人達の様。
⑤⑥⑬⑭⑯⑳㉑㉓頼みに思う皇子を亡って途方に暮れ、皇子の健在だった頃の活気にあふれた生活をなつかしむ歌。

㉑けころもを春冬片設けて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも
㉒朝日照る佐太の岡べに鳴く鳥の夜鳴かはらふこの年ころを
㉓やつこらが夜昼といはず行く路を吾はことごと宮道にぞする　（万・二）

高市黒人

伝不詳。人麻呂と並ぶ藤原宮時代の宮廷歌人。旅の歌、叙景歌にすぐれた作品多く、後の山辺赤人の歌風の先駆をなす。高市古人とあるのも同人と思われる。

いづくにか船泊すらむ安礼の崎こぎ廻み行きし棚無し小舟　（万・一）

大上天皇（文武天皇）吉野宮に幸しし時、高市連黒人の作れる歌

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる　（万・一）
旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖にこぐ見ゆ　（万・三）
桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる　（同）
いづくにか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば　（同）
とく来ても見てましものを山城の高の槻群ちりにけるかも　（同）
吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ　（同）

近江の旧き都を感傷して作れる歌

古の人に吾あれやささなみの古き都を見れば悲しき　（万・一）
ささなみの国つ御神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも　（同）

婦負の野の薄押しなべ降る雪に宿借る今日し悲しくおもほゆ　（万・一七）

上の歌は、三国真人五百国が伝えたものである

長忌寸意吉麿

大宮の内まで聞ゆ網引すと網子調ふる海人の呼び声　（万・三）

引馬野ににほふ榛原入り乱り衣ににほはせ旅のしるしに　（万・一）

伝未詳。人麿とほぼ同時代の人。旅の歌、即興の歌が得意だったらしい。

春日蔵首老

川上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は　（万・一）

つのさはふ磐余も過ぎず泊瀬山いつかも越えむ夜は更けにつつ　（万・三）

はじめ僧で、弁基と称したが大宝元年（七〇一）姓名と位とを朝廷より賜り、還俗。和銅七年従五位下。懐風藻に詩がある。

忍坂部乙麻呂

大行天皇、難波の宮に幸しし時の歌

大和恋ひ眠の寝らえぬに情なくこの渚崎廻に鶴鳴くべしや　（同）

石上卿

石上麿。中納言太宰帥、大納言を経て、慶雲元年右大臣。和銅元年

志賀に幸(いでま)しし時、石上卿の作る歌一首

ここにして家やも何処(いづく)白雲のたなびく山を越えて来にけり　（万・三）

左大臣。養老元年（七一七）三月歿。七八才贈従一位。

安部女郎(あべのいらつめ)

今更に何をか思はむうちなびきこころは君によりにしものを（万・四）

吾背子は物な思ほし事しあらば火にも水にも吾無けなくに（同）

吾背子が著(け)せる衣の針目落ちず入りにけらしも我が情(こころ)さへ（同）

伝未詳。

山上憶良(やまのうへのおくら)

大宝元年遣唐少録として渡唐、慶雲年間帰国。和銅七年従五位下、霊亀二年伯耆守、養老五年東宮侍講、神亀末年筑前守、天平五年（七三三）都で歿す。七四才。筑前時代大伴旅人と交り作歌、社会的思想的な歌を詠む。漢詩文にも長じていた。類聚歌林七巻を編む。はじめより五首、憶良の作品には珍しい抒情的な歌。妻の死後の空虚さを歌う。

挽歌（反歌）

家に行きていかにか吾(あ)がせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも（万・五）

はしきよしかくのみからに慕ひ来(こ)し妹(いも)が心の術(すべ)もすべなさ（同）

悔(くや)しかもかく知らませばあをによし国内(くぬち)ことごと見せましものを（同）

妹が見しあふちの花はちりぬべしわが泣く涙いまだ干(ひ)なくに（同）

大野山霧立ちわたるわが嘆くおきその風に霧立ちわたる（同）

神亀五年七月二十日

世間(よのなか)の住(とどま)り難きを哀(かな)しめる歌一首并(ならび)に序

人世の春はいくばくもなく老醜を

集ひ易く排ひ難きは八大の辛苦、遂げ難く尽し易きは、百年の賞楽。古人の歎きし所、今亦之に及けり。所以因りて一章の歌を作りて、以ちて二毛の歎を撥ふ。その歌に曰く、

世間の　術なきものは　年月は　流るるごとし　取りつづき　追ひ来るものは　百種に　責め依り来る　娘子等が　娘子さびすと　唐玉を　手本に纏かし　同輩児らと　手携はりて　遊びけむ　時の盛を　留みかね　過しやりつれ　蜷の腸　か黒き髪に　いつの間か霜の降りけむ　紅の　面の上に　いづくゆか　皺がきたりし　ますらをの　壮士さびすと　劔太刀　腰に取りはき　猟弓を　手握り持ちて　赤駒の　倭文鞍うち置き　はひ乗りて　遊びあるきし　世間や　常にありける　をとめらが　さなす板戸を　押し開き　い辿りよりて　真玉手の　玉手さし交へ　さ寝し夜の　いくだもあらねば手束杖　腰に束ねて　か行けば　人に厭はえ　かく行けば　人に悪まえ　老男は　かくのみならし　たまきはる　命惜しけど　せむ術も無し

反歌

常磐なすかくしもがもと思へども世の事なれば留みかねつも（万・五）

神亀六年七月二十一日

人にうとまれる人間の運命の悲しさを歌う。やや観念的である。唐の詩にもよく用いられる材料である。

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、衆生を等しなみに思ふこと、羅睺羅のごとし。又説きたまはく、愛しみは子に過ぎたるは無しとのたまへり。至極の大き聖すら、尚し子を愛しむ心あり。況むや、世間の蒼生、誰か子を愛しまざらむ。

瓜食めば　子等おもほゆ　栗食めば　ましてしのばゆ　いづくより
来たりしものぞ　まなかひに　もとな懸りて　安眠し寝さぬ

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる宝子に如かめやも　（万・五）

書殿に餞酒せし日の倭歌

天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び帰るもの
人皆のうらぶれをるに龍田山御馬近づかば忘らしなむか
言ひつつも後こそ知らめとのしくも不楽しけめやも君いまさずして
万代にいまし給ひて天の下まをし給はね朝廷去らずて　（同）

敢へて私懐を布ぶる歌

天ざかる鄙に五年住ひつつ京の風俗忘らえにけり
かくのみや息づきをらむあらたまの来経往く年の限知らずて

子に対する愛情をこれほど率直に表現した歌は古代にはあまり見られない。歌が、神への祈願や、異性への求愛、宴席や儀式に於ける合唱、唱和のためのものから、個人の心の内部の風景を描く芸術へと移向してゆく有様がここに見られる。仏教・儒教等、大陸の精神文化の影響が、形の上のみでなく、思想生活に及んで来たことが思われるのである。

太宰の帥（九州太宰府の長官）であった大伴旅人が大納言に任ぜられて京へ上ることになった時、送別の宴が開かれた。その席で詠まれた歌である。

吾が主の御たま賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はね　（万・五）

貧窮問答の歌

風まじり　雨降る夜の　雨まじり　雪降る夜は　術もなく　寒くしあれば　堅塩を　取りつづしろひ　糟湯酒　うちすすろひて　しはぶかひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　ひげかきなでて　吾を除きて　人は在らじと　誇ろへど　寒くしあれば　麻ぶすま　引き被り　布肩衣　有りのことごと　著襲へども　寒き夜すらを　吾よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒からむ　妻子どもは　乞ひて泣くらむ　この時は　いかにしつつか　汝が世は渡る

天地は　広しといへど　吾が為は　狭くやなりぬる　日月は　明しといへど　吾が為は　照りや給はぬ　人皆か　吾のみや然る　わくらばに　人とはあるを　人並に　吾も作れるを　綿もなき　布肩衣の　海松のごと　わわけさがれる　かかふのみ　肩に打ち懸け　伏いほの　曲いほの内に　直土に　藁解き敷きて　父母は　枕の方に　妻子どもは　足の方に　囲みゐて　憂へ吟ひ　かまどには　火気ふき立てず　こしきには　蜘蛛の巣かきて　飯炊く　事も忘れて　奴延鳥の　のどよひをるに　いとのきて　短き物を　端きると　いへるがごとく　楚取る　里長が声は　寝屋処まで　来立ち呼ばひぬ

奈良時代の庶民生活の貧しさ、その上に立って、大陸の先進国の文化に追いつこうとする無理な政治が、一層辛く農民の上にはね返って来る。人間らしい喜びも安息すら得られぬ彼等の、反抗する気力さえ失った哀れな姿を、詩人は憤りと悲しみを以て歌っている。同じ無力な人間として、同じく絶望の中から。

かくばかり　術無きものか　世間の道

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

（万・五）

老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦みまた、児等を思ふ歌

たまきはる　現の限は　平らけく　安くもあらむを　事も無く　喪も無くあらむを　世間の　厭けく辛けく　いとのきて　痛き瘡にはから塩を　灌くちふがごとく　ますますも　重き馬荷に　表荷打つと　いふことのごと　老いにてある　わが身の上に　病をと　加へてあれば　昼はも　歎かひ暮らし　夜はも　息づきあかし　年長く病みしわたれば　月累ね　憂へ吟ひ　ことことは　死ななと思へど五月蠅なす　騒く児等を　棄つてては　死は知らず　見つつあれば心は燃えぬ　かにかくに　思ひわづらひ　ねのみし泣かゆ

老いて病が長びけば、一応の身分を保証されている者であっても、生活に支障を来たす筈である。まして幼い子供が粗末な身なりで無心に遊んでいるのを見ては、自分の死後孤児となった日のことを想像して、死ぬに死ねない思いがしたであろう。病苦に責められるよりは、死んだ方が楽であろうと思いながら、子等の為には千年だって生きて居なくては、と思い返すのである。

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴き往く鳥のねのみし泣かゆ

術も無く苦しくあれば出で走り去なと思へど児らに障りぬ

富人の家の子等の著る身無み腐し棄つらむ絹綿らはも

あらたへの布衣をだに著せかてにかくや歎かむせむすべを無み

水沫なすもろき命もたく縄の千尋にもがと願ひ暮しつ

倭文手纏数にもあらぬ身にはあれど千年にもがど思ほゆるかも
（万・五）

痾に沈みし時の歌

士やも空しかるべき万代に語り続ぐべき名は立てずして　（万・六）

不遇な一生を顧みての歎息である。

大伴旅人

安麿の長子。左将軍・中務卿を経て、養老二年に中納言、翌年正四位下、山背国摂官となり、養老四年征隼人持節大将軍として乱を平げ、神亀元年正三位、五年（七二八）頃大宰帥となる。天平二年（七三〇）冬大納言となり帰京。天平三年正月従二位、七月二五日歿。六七才。九州時代の作歌が多く、山上憶良と共に、思想性ある歌を詠んで、都における赤人や金村の伝統的宮廷歌に対し、新風を興した。

酒を讃むる歌

験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし
酒の名を聖と負せしいにしへの大き聖の言のよろしさ
いにしへの七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし
賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし
言はむすべせむすべ知らず極りて貴きものは酒にしあるらし
なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ
あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る
価無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも
夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも
世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣するにあるべかるらし
今の世にし楽しくあらば来む生には虫にも鳥にもわれはなりなむ

生者遂にも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな
黙然をりて賢しらするは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり（万・三）

①君がため醸みし待酒安の野にひとりや飲まむ友無しにして（万・四）

②ここにありて筑紫やいづく白雲のたなびく山の方にしあるらし（同）
草香江の入江に求食るあし鶴のあなたづたづし友無しにして（同）

③世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（万・五）

④やすみししわが大君の食国は大和も此処も同じとぞ思ふ（万・六）
いざ児ども香椎の潟に白たへの袖さへぬれて朝菜つみてむ（同）
湯の原に鳴くあし鶴はわがごとく妹に恋ふれや時わかず鳴く（同）

わが岳にさを鹿来鳴く先萩の花妻問ひに来鳴くさを鹿（万・八）

遊女　児島

冬十二月太宰帥大伴卿の京に上りし時、娘子の作れる歌

①凡ならばかもかもせむを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも
大和道は雲隠りたりしかれどもわが振る袖を無礼しと思ふな（万・六）

---

①太宰府の次官が解任となって都へ帰る時の作。

②京に上った後、彼を慕う沙弥満誓の歌に答えたもの。

③神亀五年六月二三日の日附。妻の死後、親友の弔問にこたえたと記されている。

④少弐石川足人が、「さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君」と詠んだのに答えた歌。

天平二年冬、大伴旅人は大納言に任命され、上京した。

①普通の方なら（別れを惜しんで）ああもこうもするところですが、貴方様は御身分が高くて恐れ多い

余明軍

天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨りし時の歌

愛しきやし栄えし君し座しせば昨日も今日も吾を召さましを
かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも
君に恋ひいたも為便無み蘆鶴の哭のみし泣かゆ朝夕にして
遠長く仕へむものと思へりし君座さねば心神もなし
若子の這ひたもとほり朝夕に哭のみそわが泣く君無しにして（万・三）

県犬養宿禰人上

見れど飽かず座しし君が黄葉の移りい去けば悲しくもあるか（同）

山口忌寸若麻呂

ので袖を振ることすらつつしんでいます。この二首に答える旅人の優しい歌が万葉集にのっている。

大伴旅人の資人、即ち、雑役警護の為に朝廷から高官に賜る従者である。帰化人と思われる。

旅人の病気について、朝廷から医薬を給せられた時、遣わされて看護に当った。しかしその甲斐もなく他界したので悲しんで詠んだ歌である。

「周防なる」以下三首は、旅人が太宰府での任をおえ、都へ上る

周防なる磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒しその道　（万・四）

時、残る人々が名残を惜しんで詠んだ歌である。

門部連石足

み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居てもわが思へる君　（同）

麻田連陽春

大和へ君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてぞ鳴く　（同）

大伴四綱

月夜よし河音清けしいざここに行くも去かぬも遊びて帰かむ　（同）

大伴坂上郎女

大伴安麿の娘。はじめ穂積皇子の寵愛をうけたが、其の薨後、藤原麿と情交があった。

佐保河の小石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか　（同）

千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波止む時も無しわが恋ふらくは　（同）

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを　（同）

千鳥鳴く佐保の河門の瀬を広み打橋渡す汝が来とおもへば　（同）

佐保河の岸のつかさの柴な刈りそね　在りつつも春し来らば立ち隠るがね　（同）

吾のみぞ君には恋ふる吾背子が恋ふとふことは言の慰ぞ　（同）

思はじと言ひてしものを唐棣花色①の変ひやすきわが心かも　（同）

思へども験もなしと知るものをいかにここだくわが恋ひわたる　（同）

あらかじめ人言繁しかくしあらばしゑや吾背子奥もいかにあらめ②　（同）

汝をと吾を人ぞ離くなるいで吾君人の中言③聞きたつなゆめ　（同）

恋ひ恋ひてあへる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば　（同）

今は吾は死なむよ吾背生けりとも吾によるべしと言ふといはなくに　（同）

女子の大嬢に贈る歌

うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無しわが恋ふらくは　（同）

早河の瀬にゐる鳥の縁を無み思ひてありしわが児はもあはれ　（同）

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ

（万・六）

〈大伴家持が越中国守となって赴任する際、贈った歌〉

①黄を帯びた赤色。色があせやすい。

②はじめからこんなに人からうるさく言われるのでは将来が思いやられます。

③他人の中傷。

草まくら旅ゆく君を幸くあれと斎瓮(いはひべ)すゑつ吾(あ)が床(とこ)のべに　（万・一七）

〈家持に贈った歌〉

常人の恋ふといふよりは余りにて吾は死ぬべくなりにたらずや　（万・一八）

片思を馬に太馬(ふつま)に負(おほ)せもて越辺(こしべ)に遣(や)らば人衒(かた)はむかも　（同）

常陸娘子(ひたちのをとめ)

庭に立つ麻手(あさで)刈り干し布(ぬの)さらす東女(あづまをみな)を忘れたまふな　（万・四）

藤原馬養(うまかひ)が常陸守として任地に在る時、彼を慕っていた少女が、彼が任を果して京へもどる時詠んだ歌。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮(いつきのみや)に遣はす時、山辺(やまのへ)の御井にして作る歌

山の辺(へ)の御井を見がてり神風の伊勢(いせ)少女(をとめ)ども相見つるかも　（万・一）

長田王(ながたのおほきみ)

和銅四年（七一一）——天平九年（七三七）。近江守衛門督摂津大夫に歴任。

長田王、筑紫に遣はされて水島①に渡る時の歌二首

聞くがごとまこと貴く奇(くす)しくも神さびをるかこれの水島　（万・三）

葦北(あしきた)の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ　（同）

隼人(はやひと)の薩摩(さつま)の迫門(せと)を雲居なす遠くも吾は今日見つるかも　（同）

①水島には貴く不思議な伝説がある。書紀、景行紀に、葦北の小島で食事の時、神に祈ると水が湧き出た、故に水島と名づけたとある。

山部赤人

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　布士の高嶺を　天の原　ふり放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　不尽の高嶺は

反歌

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける　（万・三）

神亀元年甲子冬十月五日紀伊国に幸しし時、山部宿禰赤人の作れる歌（長歌略）

沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちて隠ろひゆかば思ほえむかも

若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る　（万・六）

（長歌略）

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒ぐ鳥の声かも　（同）

ぬばたまの夜のふけぬれば久木おふる清き河原に千鳥しば鳴く　（同）

（長歌略）

あしひきの山にも野にも御猟人さつ矢手挾み散動ぎたり見ゆ　（同）

辛荷島を過ぎし時、山辺宿禰赤人の作れる歌（長歌略）

伝未詳。奈良時代初期から中期にかけて活躍した宮廷歌人。人麻呂と並び称される。叙景歌に秀で、大らかで、さわやかな歌風で知られている。

富士山には古来伝説が多いのであるが、それらには触れず、しかも、「天地創造の古から神々しく厳かにそびえている山」と、その神秘性を讃えながらの淡々とした叙景には、もはや古代の歌謡には見られぬ知性がうかがわれる。

島隠れわがこぎ来(く)ればともしかも大和へ上(のぼ)る真熊野(まくまの)の船　(万・六)

勝鹿(かつしか)の真間(まま)娘子(のをとめ)の墓を過ぎし時

古に　在りけむ人の　しつはたの　帯解き交(か)へて　伏屋立て　妻問しけむ　葛飾の　真間の手児名が　奥津城(おくつき)を　こことは聞けど　真木の葉や　茂くあるらむ　松が根や　遠く久しき　言(こと)のみも吾は忘らえなくに

反歌

吾(われ)も見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城処(おくつきどころ)

葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ(万・三)

春の野にすみれつみにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿(ね)にける　(万・八)

小野老(おののおゆ)

①あをによし寧楽(なら)の京師(みやこ)は咲く花のにほふがごとく今さかりなり　(万・三)

②時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな　(万・六)

一人の乙女が、二人の青年の情熱の板ばさみとなって、死を選んだという伝説は、各地に多く、此の真間の娘子（真間の手古奈）の伝説も有名である。

養老三年（七一九）従五位下、四年右少弁、天平六年従四位下、九年（七三七）六月一一日太宰大弐で歿。①の歌は少弐だった時の作。天平二年頃か。都の繁栄に対する心からの喜びは、騒乱の世を経験し、それが鎮って、平和を迎

大伴熊凝

大伴君熊凝は、肥前国益城郡の人なり。年十八才にして、天平三年六月十七日を以ちて、相撲使某国司官位姓名の従人と為り、京都に参向ひき。天なるかも、幸あらず、路に在りて疾を獲、即ち、安芸国佐伯郡高庭の駅家にして身故りき。（中略）乃ち、歌六首を作りて死りき。その歌に曰く、

うち日さす　宮へ上ると　たらちしや　母が手離れ　常知らぬ　国
の奥処を　百重山　越えて過ぎ行き　いつしかも　京師を見むと
思ひつつ　語らひをれど　おのが身し　いたはしければ　玉ほこの
道の隈廻に　草手折り　柴取り敷きて　とけじもの　うち臥伏して
思ひつつ　歎き臥せらく　国に在らば　父とり看まし　家に在らば
母とり看まし　世間は　かくのみならし　犬じもの　道に臥してや
命過ぎなむ

たらちしの母が目見ずておほほしくいづち向きてか吾が別るらむ

えることの出来た者のみが味わえるものかも知れない。

②大弐の時の作。

伝は詞書の通り。此の歌は旅の道で死んだ少年を哀んで、誰かが物語風に作ったものと思われる。

常知らぬ道の長路をくれくれといかにか行かむ糧米は無しに
家にありて母がとり看ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも
出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも
一世には二たび見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ　（万・五）

笠金村

天平五年以前、二〇年にわたり作歌。宮廷歌人。行幸に従った時の作が多い。歌風は伝統的傾向が強い。

ますらをの弓上振り起し射つる矢を後見む人は語り継ぐがね（万・三）
塩見山うち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも　（同）

三香の原　旅の宿りに　玉ほこの　道の行合に　天雲の　外のみ見つつ　言問はむ　縁の無ければ　情のみ　むせつつあるに　天地の　神祇ことよせて　しきたへの　衣手易へて　自妻と　たのめる今夜　秋の夜の　百夜の長さ　ありこせぬかも

行幸に従った際、一目で情熱を湧かした少女に再会して、思いをとげた時の歌。

反歌

天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ縁りにしものを
今夜の早く明くればすべを無み秋の百夜を願ひつるかも　（万・四）

養老七年癸亥夏五月芳野離宮に幸しし時、笠朝臣金村の作れる歌（長歌略）

年のはに斯くも見てしかみ吉野の清き河内のたぎつ白波

山高み白木棉花に落ちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬかも　（万・六）

　三年丙寅秋九月十五日播磨国印南郡に幸しし時、笠朝臣金村の作れる歌（長歌略）

玉藻刈る海をとめども見に行かむ船楫もがも波高くとも

往きめぐり見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波　（同）

聖武天皇

　天皇、酒を節度使の卿等に賜へる御歌

食国の　遠の朝廷に　汝等し　かく罷りなば　平らけく　吾は遊ばむ　手抱きて　我はいまさむ　天皇朕が　うづの御手もち　掻き撫でぞ　労ぎたまふ　うちなでぞ　労ぎたまふ　還り来む日　相飲まむ酒ぞ　この豊御酒は

　反歌

ますらをの行くとふ道ぞ凡ろかに思ひて行くな丈夫の伴　（同）

　冬十一月、左大辨葛城王等に、姓橘氏を賜ひし時御製の歌

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹　（同）

第四五代の天皇。名は首。天平宝字二年に勝宝感神聖武皇帝の称をおくられる。文武天皇の皇子。母は藤原不比等の女宮子。大宝元年（七〇一）生。和銅七年皇太子となり、神亀元年（七二四）即位。光明子（宮子の妹）を皇后に立てた。皇族以外の女性が皇后の位についたのはこの時が初めである。天皇は深く仏教に帰依し、沙弥勝満と号す。都に東大寺、諸国に国分寺を建立、大仏を鋳造し、仏教

光明皇后

わが夫子と二人見ませばいくばくかこの降る雪の喜しからまし　（万・八）

〈春日で神を祭った日に、入唐大使藤原清河に賜った歌〉

大船に真楫繁貫きこの吾子を韓国へ遣る斎へ神たち　（万・一九）

沙弥満誓

しらぬひの筑紫の棉①は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ　（万・三）

世間を何に譬へむ朝びらき漕ぎ去にし船の跡なきがごと　（同）

②まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつをらむ　（万・四）

ぬばたまの黒髪変り白髪ても痛き恋にはあふ時ありけり　（同）

文化の盛時を現出。天平勝宝元年譲位、八年（七五六）五月崩御。最初の歌は藤原房前・宇合兄弟等の任命式の際の詠。或は元正天皇の作かともいう。

聖武天皇の皇后。藤原不比等の女。深く仏教を信仰し、貧民や、病人の救済につとめられた。（七〇一—七六〇）

笠朝臣麿。慶雲元年（七〇四）従五位下。美濃尾張守、按察使を経て、養老四年右大弁。その間、木曾路開通の功あり。従四位上となる。養老五年、元正太上天皇の御病気平癒を祈って出家。七年、九州に派遣されて観世音寺造営に当る。大伴旅人と交る。

①毎年太宰府から都へ送られてい

大伴三依

わが君はわけをば死ねと思へかも逢ふ夜逢はぬ夜二つ走くらむ
（万・四）

吾妹子は常世の国に住みけらし昔見しより変若ちましにけり（同）

高橋虫麻呂

四年壬申、藤原宇合卿を西海道節度使に遣しし時、高橋虫麻
呂の作れる歌

白雲の　龍田の山の　露霜に　色づく時に　うち越えて　旅行く君
は　五百重山　い行きさくみ　賊守る　筑紫に至り　山の極　野の
極見よと　伴の部を　班ち遣し　山びこの　応へむ極み　谷ぐくの
さ渡る極み　国状を　見し給ひて　冬ごもり　春さり行かば　飛ぶ
鳥の　はやく来まさね　龍田道の　丘辺の路に　丹つつじの　にほ
はむ時の　桜花　咲きなむ時に　山たづの　迎へ参出む　君が来ま

た、真栢かと言う。②旅人が京へ上った、彼におくったもの。

御依とも書く。天平二〇年（七四八）従五位下。主税頭参河守、仁部（民部）少輔遠江守、義部（刑部）大夫出雲守に歴任。宝亀元年従四位下、五年（七七四）五月、三位で歿。

奈良時代初期の歌人。養老年間、常陸国守だった藤原宇合の部下として常陸風土記の編集に当ったといわれる。叙事長歌に秀で、伝説に取材した作品は特に名高い。私家集「高橋虫麻呂歌集」がある。

さば

反歌

千万の軍なりとも言挙せず取りて来ぬべき男とぞ思ふ　（万・六）

高橋虫麻呂歌集

なまよみの　甲斐の国　うち寄する　駿河の国と　こちごちの　国のみ中ゆ　出で立てる　不尽の高嶺は　天雲も　い行きはばかり　飛ぶ鳥も　とびも上らず　もゆる火を　雪もち消ち　ふる雪を　火もち消ちつつ　言ひもえず　名づけも知らず　霊しくも　います神かも　石花の海と　名づけてあるも　その山の　包める海ぞ　不尽河と　人の渡るも　その山の　水のたぎちぞ　日の本の　やまとの国の　鎮とも　います神かも　宝とも　なれる山かも　駿河なる　不尽の高嶺は　見れど飽かぬかも

反歌

不尽の嶺にふりおける雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

不尽の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかりたなびくものを　（万・三）

有名な山辺赤人の富士の歌と比べてみると面白い。雲よりも高く、年中雪をいただいている姿を詠じた所は同じであるけれど、虫麻呂の作には、山に対する古代人らしい恐れが表されている。

菟原処女の墓を見る歌

真間の手古奈の話と同類の伝説で

葦屋の　菟原処女の　八年児の　片生の時ゆ　振分髪に　髪たくまでに　並びゐる　家にも見えず　虚ゆふの　隠りてをれば　見てしかと　いぶせむ時の　垣ほなす　人の誂ふ時　血沼壮士　菟原壮士の　廬屋焼く　進し競ひ　相結婚ひ　しける時は　焼大刀の　柄おし撚り　白檀弓　靫取り負ひて　水に入り　火にも入らむと　立ち向ひ　競ひし時に　吾妹子が　母に語らく　倭文たまき　賤しき吾がゆゑ　ますらをの　争ふ見れば　生けりとも　あふべくあれや　ししくしろ　黄泉に待たむと　隠沼の　下延へ置きて　うち嘆き　妹が去ぬれば　血沼壮士　その夜夢に見　取り続き　追ひ行きければ　後れたる　菟原壮士い　天仰ぎ　叫びおらび　地に伏し　牙喫みたけびて　もころ男に　負けてはあらじと　かき佩の　小劔取り佩き　ところづら　尋め行きければ　親族どち　い行き集ひ　永き代の　標にせむと　遠き代に　語り継がむと　処女墓　中に造り置き　壮士墓　こなたかなたに　造りおける　故縁聞きて　知らねども　新喪のごとも　哭泣きつるかも

反歌

葦屋の菟原処女の奥津城を往き来と見れば哭のみし泣かゆ

墓の上の木の枝なびけり聞きしごと血沼壮士にし依りにけらしも

ある。赤人の作が、人口に膾炙している伝説の地を見て来た旅行記とすれば、これは伝説に材を取った小説ともいえよう。

二人の若者から想われて、身を捨てるなどとは、少女の純情もさることながら、男達の恋の鞘当てがどんなにか凄じく野獣の牡の争のように烈しかったであろうと思われるのである。或は、都ではすでに崩れてしまっている貞操に関する掟が地方に残っていて、少女が二人の男に愛を分ける事をさまたげたのかも知れない。

湯原王（万・九）

天智天皇の孫。志貴皇子の子。歌風は志貴皇子に似て美しい。万葉後期の歌人。

○吉野なる夏実の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして　（万・三）

宴席の歌

あきづ羽の袖振る妹を玉くしげ奥に思ふを見たまへ吾君
青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし吾君　（同）

丹比真人

天平八年（七三六）従五位下。民部少輔・太宰少弐・右大弁を経て、天平宝字元年(七五七)従四位下で摂津大夫となり、又遠江守に任ぜられたが、同年の乱に連座して伊豆に流された。

鶏が鳴く　東の国に　高山は　多にあれども　朋神の　貴き山の
竝み立ちの　見が欲し山と　神代より　人の言ひつぎ　国見する
筑波の山を　冬ごもり　時じき時と　見ずて行かば　まして恋しみ
雪消する　山道すらを　なづみぞわが来し

反歌

筑波嶺を外のみ見つつありかねて雪消の道をなづみ来るかも（万・三）

紀皇女

天武天皇皇女。穂積皇子の同母妹。

軽の池の汭廻行き廻る鴨すらに玉藻のうへに独宿なくに　（万・三）

軽――奈良県橿原市大軽附近。
汭廻――入江のこと。

厚見王（あつみのおおきみ）

かはづ鳴く甘南備河（かんなびがわ）にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花　（万・八）

天平勝宝元年（七四九）従五位下・天平勝宝七年少納言で伊勢大神宮へ奉幣使として遣わされた。天平宝字元年（七五七）従四位上。

笠女郎（かさのいらつめ）

陸奥の真野の草原（かやはら）遠けども面影にして見ゆとふものを　（万・三）

わが形見見つつ偲（しの）ばせあらたまの年の緒長く吾も思（しの）ばむ　（万・四）

あらたまの年の経ぬれば今しはと勤（ゆめ）よ吾背子わが名告（の）らすな　（同）

君に恋ひ甚（いた）も術（すべ）なみ平山（ならやま）の小松が下（もと）に立ち嘆くかも　（同）

わが命の全（また）けむかぎり忘れめやいや日に異（け）には思ひ益すとも　（同）

情（こころ）ゆも吾は思（も）はざりき山河も隔たらなくにかく恋ひむとは　（同）

夕さればもの思（も）ひ益（まさ）る見し人の言問ふすがた面影にして　（同）

思ふにし死（しに）するものにあらませば千たびぞ吾は死にかへらまし　（同）

皆人を寝よとの鐘は打ちつれど君をし思（も）へば寝（い）ねかてぬかも　（同）

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後（しりへ）に額（ぬか）づくごとし　（同）

伝未詳。集中の歌はすべて家持に贈ったものである。

大伴家持(やかもち)

挽歌

かくのみにありけるものを妹も吾も千歳のごとくたのみたりける
家離(さか)りいます吾妹を停めかね山隠しつれ情神(こころど)もなし
世間(よのなか)し常かくのみとかつ知れど痛き情(こころ)は忍びかねつも
佐保山にたなびくかすみ見るごとに妹を思ひ出泣かぬ日は無し
昔こそ外(よそ)にも見しか吾妹子が奥津城(おくつき)と思(も)へば愛しき佐保山　（万・三）

笠女郎に和(こた)ふる歌

なかなかに黙(もだ)もあらましを何すとか相見そめけむ遂(と)げざらなくに　（万・四）

娘子に贈れる歌

もゝしきの大宮人は多かれど情(こころ)に乗りて思ほゆる妹　（同）
表辺(うはへ)なき妹にもあるかかくばかり人の情(こころ)を尽す思へば　（同）
思はぬに妹が笑(ゑま)ひを夢(いめ)に見て心のうちに燃えつつぞをる　（同）

大伴坂上大嬢に和(こた)ふる歌

今しはし名の惜しけくも吾は無し妹によりては千たび立つとも　（同）
うつせみの世やも二行(ふたゆ)く何すとか妹にあはずて吾がひとり宿(ね)む　（同）

旅人の子。天平一二年（七四〇）から一八年まで内舎人、一七年従五位下、一八年宮内少輔越中守、天平勝宝三年（七五一）少納言、六年兵部少輔、天平宝字元年（七五七）兵部大輔右中弁、後因幡守、薩摩守、太宰少弐参議などを経て、延暦元年春宮大夫に陸奥按察使鎮守府将軍を兼ね、二年中納言、三年持節征東将軍、四年（七八五）八月、中納言三位となり同年歿。万葉集の編集者である。

古代の名門大伴氏の氏の長者として、政権の座から没落してゆく一族の運命を支える由もなく、唯、朝廷と最も古くから関係のあった臣下であるとの誇によって、辛うじて藤原氏・橘氏の勢力下に堪えていたのである。「族(やから)を喩(さと)す歌」には、勇名高い氏族の感情が力強く

思ひ絶えわびにしものをなかなかに何か苦しく相見そめけむ（万・四）
相見てはしましく恋は和ぎむかと思へどいよよ恋ひまさりけり（同）
隠りのみをればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし（万・八）
わが屋前のなでしこの花盛なり手折りて一目見せむ児もがも（同）
さを鹿の胸別にかも秋萩の散り過ぎにける盛かも去ぬる（同）

　痩せたる人を嗤咲ふ歌二首

石麻呂に吾物申す夏痩に良しといふ物ぞ鰻漁り食せ（万・一六）
痩す痩すも生けらばあらむをはたやはた鰻を漁ると川に流るな（同）

〈初夏の頃、弟書持に送った歌〉

あしひきの山べにをればほととぎす木の間立ち漏き鳴かぬ日はなし（万・一七）
ほととぎす何のこころぞたちばなの珠貫く月し来鳴きとよむる（同）

〈詔にこたえた歌〉

新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪のふれるは（同）
馬並めていざうち行かな渋渓の清き磯廻に寄する波見に（同）

〈天平十八年九月二十五日、弟の死を悲しんで詠んだ歌〉

ま幸くといひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも（同）

表されているが、生来優雅な性格だったらしく、一般に歌風は繊細流麗、平安時代貴族の作風に似て、もっと感傷的である。

かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを　（万・一七）

〈病の重い時、悲しみ詠んだ長歌の反歌〉

世間(よのなか)は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべきおもへば　（同）

山川のそきへを遠みはしきよし妹を相見ずかくや嘆かむ　（同）

〈同じ頃、地主に贈った歌〉

春の花今は盛に匂ふらむ折りて挿頭(かざ)さむ手力(たぢから)もがも　（同）

出で立たむ力をなみとこもりゐて君に恋ふるに心神(こころど)もなし　（同）

〈恋の歌〉

ぬばたまの夢(いめ)にはもとな相見れど直(ただ)にあらねば恋ひ止まずけり　（同）

　礪波郡雄神河の辺にして作れる歌

雄神川くれなゐにほふ娘子(をとめ)らし葦附(あしつき)採ると瀬に立たすらし　（同）

　鸕(う)を潜(かづ)くる人を見て作れる歌

婦負川(めひがは)の早き瀬ごとにかがりさし八十伴(やそとも)の男は鵜川(うがは)立ちけり　（同）

　酒を造る歌

中臣(なかとみ)の太祝詞言(ふとのりとごと)ひ祓(はら)へ贖(あが)ふいのちも誰(た)がために汝(なれ)

　四月一日掾久米朝臣広縄の館に宴(うたげ)せる歌

卯の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴き響(とよ)めよ含(ふふ)みたりとも　（万・一八）

〈坂上郎女に返す歌〉

天ざかる鄙の奴に天人しかく恋ひすらは生けるしるしあり（万・一八）

常の恋いまだ止まぬに都より馬に恋来ば荷ひ堪へむかも（同）

天皇の御代栄えむと東なるみちのく山に金花咲く（同）

〈尾張少咋を教えさとす歌〉

里人の見る目はづかし左夫流児に惑はす君が宮出後風（同）

くれなゐはうつろふものぞつるばみのなれにし衣になほ若かめやも（同）

〈庭中の花を見て作った歌〉

なでしこが花見るごとにをとめらがゑまひのにほひ思ほゆるかも（同）

さ百合花後もあはむと下延ふる心しなくは今日も経めやも（同）

〈天平勝宝二年三月一日の夕暮桃李の花を眺めて作った歌〉

春の苑くれなゐにほふ桃の花した照る道に出で立つをとめ（万・一九）

わが園の李の花か庭に落りしはだれのいまだ残りたるかも（同）

〈翻び翔る鴫を見て作った歌〉

春まけて物がなしきにさ夜ふけて羽ぶき鳴く鴫誰が田にか住む（同）

〈暁に鳴く雉の声を聞いて詠んだ歌〉

あしひきの八峯の雉なき響む朝明の霞見ればかなしも（同）

〈はるかに川をさかのぼる船人のうたを聞いて作った歌〉

朝床に聞けば遙けし射水川朝こぎしつつ唱ふ船人　（万・一九）

〈少納言に昇官して、越中を去る時、送別会の席で詠んだ歌〉

玉ほこの道に出で立ち往く吾は君が事跡を負ひてし行かむ　（同）

〈天平勝宝五年二月二十三日、興によって詠んだ歌〉

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも　（同）

わが屋戸のいささ群竹ふく風の音のかそけきこの夕かも　（同）

〈二十五日〉

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独しおもへば　（同）

大伴坂上家大嬢

大伴宿奈麿の娘。母は坂上郎女。家持に嫁した。

上の歌は家持に贈ったもの。

生きてあらば見まくも知らず何しかも死なむよ妹と夢に見えつる　（万・四）

ますらをもかく恋ひけるを手弱女の恋ふる情に比へらめやも　（同）

つき草のうつろひやすく思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ　（同）

春日山朝立つ雲のゐぬ日無く見まくのほしき君にもあるかも　（同）

紀女郎

伝未詳。集に依れば、鹿人大夫の女。名は小鹿。安貴王の妻という。天平時代の人。

怨恨の歌

世間の女にしあらばわが渡る痛背の河を渡りかねめや　（万・四）

今は吾はわびぞしにける気の緒に思ひし君をゆるさく思へば　（同）

白たへの袖別るべき日を近み心にむせびねのみし泣かゆ　（同）

平群氏女郎　伝未詳。

〈大伴家持に贈った歌〉

須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも吾はするかも　（万・一七）

万代と心は解けて吾背子が抓みし手見つつ忍びかねつも　（同）

高田女王　長皇子の曽孫。伝未詳。

山吹の咲きたる野辺のつぼすみれこの春の雨に盛なりけり　（万・八）

海犬養岡麻呂　伝未詳。聖武天皇の頃の人。身分の低い役人であったか。

御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時に遇へらく思へば　（万・六）

元興寺の僧　伝未詳。元興寺は、奈良市にある。法相宗華厳宗の大寺として栄えていた。

白珠は人に知らえず　知らえずともよし
知らずとも吾し知れらば　知らずともよし

右の一首は或は云はく、元興寺の僧、独り覚りて智多けれども、未だ顕れ聞ゆるところあらず、衆諸狎れ侮りき。これによりて、僧この歌を作りて、みずから身の才を嘆きといへり。（万・六）

狭弟上娘子〈又は、狭野茅上娘子〉

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし（万・一五）
君が行く道の長路を繰り畳ね焼き亡ぼさむ天の火もがも（同）
人の植うる田は植ゑまさず今更に国別れして吾はいかにせむ（同）
他国は住み悪しとぞいふ速けく早帰りませ恋ひ死なぬとに（同）
天地の至極のうらに吾がごとく君に恋ふらむ人は実あらじ（同）
春の日のうらがなしきにおくれゐて君に恋ひつつ現しけめやも（同）
あはむ日の形見にせよと手弱女の思ひ乱れて縫へる衣ぞ（同）
魂はあしたゆふべに魂ふれど吾が胸痛し恋の繁きに（同）
このころは君を思ふと術も無き恋のみしつつねのみしぞ泣く（同）
帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて（同）
吾背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな（同）
しろたへの吾が衣手を取り持ちて斎へ吾背子直にあふまでに（同）

聖武天皇の頃、朝廷に仕えた蔵部の女嬬(下級女官)。身分上の掟を破って中臣宅守と情交を結び、その為に宅守は流罪となった。
上の歌は、すべて、流刑地に去った恋人を慕う歌であるが、誰かが二人の贈答歌をもとに、事件に取材して創作したものと思われる。

中臣宅守

狭野弟上娘子との恋愛事件で越前国へ配流となったが、後赦されて官に復帰し、従五位下となる。

かしこみと告らずありしをみ越路のたむけに立ちて妹が名告りつ　（万・一五）

遠き山関も越え来ぬ今更にあふべきよしのなきがさぶしさ　（同）

あはむ日をその日と知らず常闇にいづれの日まで吾恋ひをらむ　（同）

うるはしと吾が思ふ妹を山川を中に隔りて安けくもなし　（同）

向ひゐて一日もおちず見しかども厭はぬ妹を月わたるまで　（同）

吾が身こそ関山越えて此処にあらめ心は妹に寄りにしものを　（同）

たちかへり泣けども吾はしるし無み思ひわぶれて寝る夜しぞ多き　（同）

旅にして物思ふ時にほととぎすもとな勿鳴きそ吾が恋まさる　（同）

ほととぎす間しまし置け汝が鳴けば吾が思ふこころいたも術なし　（同）

田辺福麻呂

伝未詳。私家集「田辺福麻呂歌集」から、多数の作品が万葉集に収められている。

寧楽の故りにし郷を悲しびて作る歌（長歌略）

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

なつきにし奈良の都の荒れゆけば出で立つごとに嘆きしまさる　（万・六）

難波（なには）の宮にして作る歌（長歌略）

あり通ふ難波の宮は海近み漁童女（あまをとめ）らが乗れる船見ゆ
潮干（ふ）れば葦辺に騒ぐ白鶴（あしたづ）の妻呼ぶ声は宮もとどろに　（万・六）

弟の死去（みまか）れるを哀（かな）しびて作る歌（長歌略）

別れてもまたも逢ふべく思ほえば心乱れてわれ恋ひめやも
あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば情（こころ）苦しも　（万・九）

安宿王（あすかべのおほきみ）

をとめらが玉裳裾びくこの庭に秋風吹きて花は散りつつ　（万・二〇）

長屋王（おほきみ）の子。播磨守兼内匠頭。七五七年、橘奈良麻呂の乱に座して佐渡に流された。後赦されて、高階（たかしな）真人の姓を賜る。上の歌は、宮中の御宴の際の作である。

天平八年の遣新羅使達の歌

大船に妹乗るものにあらませば羽（は）ぐくみもちて行かましものを　（万・一五）
君が行く海べの宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ　（同）
真幸（まさき）くて妹が斎（いは）はば沖つ波千重に立つとも障（さはり）あらめやも　（同）
別れなばうら悲しけむ吾が衣したにを著ませ直（ただ）にあふまでに　（同）
わがゆゑに思ひな痩せそ秋風の吹かむその月あはむものゆゑ　（同）
海原に浮宿（うきね）せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ妹もあらなくに　（同）

月よみの光を清み神島の磯廻(いそみ)の浦ゆ船出す吾は　（万・一五）
妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れておもへや　（同）
天離(あまざか)る鄙(ひな)の長道(ながち)を恋ひ来(こ)れば明石の門(と)より家のあたり見ゆ　（同）
阿胡(あご)の浦に船乗りすらむ娘子(をとめ)らが赤裳(あかも)の裾に潮満つらむか　（同）
わがゆゑに妹歎くらし風早(かざはや)の浦の沖べに霧たなびけり　（同）
沖つ風いたく吹きせば吾妹子が嘆(なげき)の霧にあかましものを　（同）
あかときの家恋しきに浦廻(うらみ)より楫(かぢ)の音するは海人(あま)娘子(をとめ)かも　（同）

〈暴風に遇って一晩漂流し、豊前国分間浦(わくまのうら)にたどり着いた時
　雪宅麻呂(ゆきのやかまろ)のよんだ歌〉

大君の命(みこと)かしこみ大船の行きのまにまにやどりするかも　（同）
わぎもこがいかに思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる　（同）
秋風は日に異(け)に吹きぬ吾妹子はいつとか吾を斎(いは)ひ待つらむ　（同）
天の原ふりさけ見れば夜ぞふけにける
よしゑやし独寝(ひとりぬ)る夜は明けば明けぬとも　（同）
妹を思ひ寝(い)の寝(ね)らえぬにあかときの朝霧ごもり雁がねぞ鳴く　（同）
夕されば秋風さむし吾妹子が解洗衣(ときあらひごろも)行きて早著む　（同）
わが旅は久しくあらしこの吾が著(け)る妹が衣の垢(あか)つく見れば　（同）
妹を思ひ寐(い)の寝らえぬに秋の野にさを鹿鳴きつ妻おもひかねて　（同）

あしひきの山飛び越ゆる雁がねは都に行かば妹にあひて来ね　(万・一五)

〈対島の浅茅浦に停泊中、大使のよんだ歌〉

あしひきの山した光るもみぢ葉の散りの乱(まがひ)は今日にもあるかも　(同)

ぬばたまの妹が乾すべくあらなくにわが衣手をぬれていかにせむ　(同)

草まくら旅に久しくあらぬやと妹にいひしを年の経ぬらく　(同)

大伴の御津(みつ)の泊(とまり)に船泊(は)てて龍田の山をいつか越え往(い)かむ　(同)

防人(さきもり)の歌

置きて行かば妹はまかなし持ちて行くあづさの弓の弓束にもがも　(万・一四)

防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜しみ泣きし児らはも　(同)

おの妻を他(ひと)の里に置きおほほしく見つつぞ来ぬるこの道の間(あひだ)　(同)

〈天平勝宝七年二月、交替の時期に、筑紫に遣される諸国の防人らの歌〉

遠江国

麁玉郡(あらたまのこほり)　若倭部身麻呂(わかやまとべのむまろ)

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘られず　(万・二〇)

佐野郡　丈部黒当

父母も花にもがもや草まくら旅は行くともささごて行かむ（万・二〇）

佐野郡　生玉部足国

父母が殿の後方の百代草百代いでませわが来るまで（同）

駿河国

有度部牛麻呂

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき（同）

生部道麻呂

畳薦牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが悲しさ（同）

刑部虫麻呂

国巡る獦子鳥かまけり行き廻り帰り来までに斎ひて待たね（同）

川原虫麻呂

父母え斎ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来までに（同）

丈部足麻呂

橘の美袁利の里に父を置きて道の長道は行きかてぬかも（同）

坂田部首麻呂

真木柱讃めて造れる殿のごといませ母刀自面変りせず（同）

玉作部広目
吾等旅は旅と思ほと家にして子持ち痩すらむわが妻かなしも
（万・二〇）
商長首麻呂
◎忘らむと野行き山行き吾来れどわが父母は忘れせのかも（同）
春日部麻呂
吾妹子と二人わが見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめあるか（同）
丈部稲麻呂
◎父母が頭かき撫で幸く在れていひし言葉ぜ忘れかねつる（同）

上総国

日下部使主三中の父
家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける太刀になりても斎ひてしかも（同）
日下部使主三中
たらちねの母を別れてまこと吾旅の仮廬は安く寝むかも（同）
望陀郡　玉作部国忍
旅衣八重著重ねて寝のれどもなほ膚寒し妹にしあらねば（同）
天羽郡　丈部鳥

道のべの荊の末にはほ豆のからまる君をはかれか行かむ　（万・二〇）

朝夷部　丸子連大歳

家風は日に日に吹けど吾妹子が家言持ちて来る人もなし　（同）

長狭郡　丈部与呂麻呂

たちこもの発ちの騒きにあひ見てし妹が心は忘れせぬかも　（同）

山辺郡　物部乎刀良

わが母の袖持ちなでてわが故に泣きし心を忘らえぬかも　（同）

市原郡　刑部直千国

蘆垣の隅処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ　（同）

長柄郡　若麻続部羊

筑紫べに舳向かる船のいつしかも仕へ奉りて本郷に舳向かも　（同）

茨城郡　若舎人部広足

常陸国

防人に発たむさわきに家の妹が業るべき事を言はず来ぬかも　（同）

信太郡　物部道足

常陸さし行かむ雁もが吾が恋を記して附けて妹に知らせむ　（同）

茨城郡　占部小龍

吾が面の忘れも時は筑波嶺をふりさけ見つつ妹はしぬはね（万・二〇）

久慈郡　丸子部佐壮

久慈川は幸くあり待て潮船に真楫繁貫き吾は帰り来む（同）

那賀郡　大舎人部千文

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼もかなしけ（同）

下野国

今奉部与曽布

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は（同）

物部真島

松の木の並みたる見れば家人の吾を見送ると立たりしもころ（同）

寒川郡　川上臣老

旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ（同）

津守宿禰小黒栖

母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中にあへまかまくも（同）

那須郡　大伴部広成

ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひわがする時に防人にさす（同）

塩屋郡　丈部足人

津の国の海のなぎさに船装ひ発(た)し出(で)も時に母(あも)が目もがも　（万・二〇）

下総国

葛飾(かつしか)郡　私部石島(きさきべのいそしま)

行先(ゆこさき)に波勿(な)とゑらひ後方(しるへ)には子をと妻をと置きてとも来ぬ　（同）

占部虫麻呂(うらべのむしまろ)

旅と云(へ)ど真旅になりぬ家の妹(も)が著せし衣に垢(あか)つきにかり　（同）

猨島(さしま)郡　刑部志加麻呂(おさかべのしかまろ)

群玉(むらたま)の枢(くる)に釘さし固めとし妹が心は揺くなめかも　（同）

信濃国

小県(ちひさがた)郡　他田舎人大島(をさだのとねりおおしま)

唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来のや母(おも)なしにして　（同）

埴科(はにしな)郡　神人部子忍男(かむとべのこおしを)

ちはやぶる神の御坂に幣奉(ぬさまつ)り斎ふいのちは母(おも)父がため　（同）

武蔵国

椋椅刀自売(くらはしべのとじめ)

草まくら旅行く夫(せな)が丸寝(まるね)せば家(いは)なる吾はひも解かず寝む　（万・二〇）

豊島郡　宇遅部黒女(うぢべのくろめ)

赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山歩(かし)ゆか遣(や)らむ　（同）

橘樹郡(たちばな)　物部真根(もののべのまね)

家(いは)ろには葦火(あしぶ)焚けども住み好けを筑紫に到りて恋しけもはも　（同）

椋椅部弟女(くらはしべのおとめ)

草まくら旅の丸寝の紐絶えば吾が手と附けろこれの針持し　（同）

昔年(さきつとし)の防人の歌

防人に行くは誰が夫(せ)と問ふ人を見るが羨(とも)しさ物思(ものもひ)もせず　（同）

作者不詳

河内の大橋を独去(ゆ)く娘子(をとめ)を見る歌

級照(しなて)る　片足羽河(かたしはがは)の　さ丹塗(にぬり)の　大橋の上ゆ　紅の　赤裳すそびき
山あゐもち　すれる衣著(きぬ)て　ただひとり　い渡らす児(こ)は　若草の
夫(つま)かあるらむ　かしの実の　ひとりか寝(ぬ)らむ　問はまくの　ほしき

河内国の片足羽川の大橋。紅の裳裾を引き、藍染めの衣を着た女が橋を渡っていく。人の女房か、それとも娘か、此所に我家があった

我妹が　家の知らなく

反歌

大橋の頭(つめ)に家あらばうらがなしくひとりゆく児に宿貸さましを

(万・九)

霍公鳥(ほととぎす)を詠める

うぐひすの　生卵(かひこ)の中に　ほととぎす　ひとり生れて　己(な)が父に
似ては鳴かず　己(な)が母に　似ては鳴かず　卯の花の　咲きたる野辺
ゆ　飛びかけり　来鳴き響(とよ)もし　橘の　花をゐ散らし　終日(ひねもす)に　鳴
けど聞きよし　幣(まひ)はせむ　遠くな行きそ　わが屋戸(やど)の　花橘に　住
み渡れ鳥

反歌

かき霧(き)らし雨の降る夜をほととぎす鳴きて行くなりあはれその鳥

(万・九)

水江(みづのえ)の浦島の子を詠める一首幷(ならび)に短歌

春の日の　かすめる時に　住吉(すみのえ)の　岸に出でゐて　釣船の　とをら
ふ見れば　古(いにしへ)の　事ぞ思ほゆる　水江の　浦島の児が　かつを釣り
鯛釣りほこり　七日まで　家にも来(こ)ずて　海界(うなさか)を　過ぎてこぎ行く
に　海若(わたつみ)の　神の女(をとめ)に　たまさかに　いこぎ向ひ　あひとぶらひ

ら泊めてみたい女だ、という軽い歌。

ほととぎすは自分で巣を作らず、従って卵も育てない。鶯の巣の中に生み落していく。生みの親を知らず、育ての親には似ても似つかぬ姿で、鳴声も全くちがう。孤独で自由な此の鳥を愛惜する歌。

浦島伝説の歌は雄略紀にもある。その美しいロマンと哀傷を味わって下さい。

こと成りしかば　かき結び　常世に至り　海若の　神の宮の　内の重の　妙なる殿に　たづさはり　二人入りゐて　老もせず　死もせずして　永き世に　ありけるものを　世のなかの　愚人の　吾妹子に　告りて語らく　しましくは　家に帰りて　父母に　事も告らひ　明日のごと　吾は来なむと　言ひければ　妹がいへらく　常世べに　また帰り来て　今のごと　あはむとならば　このくしげ　開くなゆめと　そこらくに　堅めし言を　住吉に　還り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　怪しと　そこに思はく　家ゆ出でて　三歳の間に　垣も無く　家滅せめやと　この筥を　開きて見てば　旧のごと　家はあらむと　玉くしげ　少し開くに　白雲の　箱より出でて　常世べに　たなびきぬれば　立ち走り叫び袖振り　こいまろび　足ずりしつつ　たちまちに　情消失せぬ　若かりし　膚もしわみぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　気さへ絶えて　後つひに　命死にける　水江の　浦島の子が　家地見ゆ

反歌

常世べに住むべきものを劒刀己が心から鈍やこの君　（万・九）

歌物語の原型と考えられるものである。広く人々に親しまれている地方の歌に由来を附会したものや、或は伝説説話に興をそそられて旅の歌人の詠んだ歌が、伝説中の人物の作のように伝えられたものなどがある。

説話、伝説をともなう歌

〈昔、桜子という少女があった。二人の若者から愛を求められたが、この二人が命懸けで争うのを悲しみ、林の中で縊死した。その時、若者達の詠んだ歌〉

春さらば插頭（かざし）にせむとわが思（も）ひし桜の花は散りにけるかも　（万・一六）

妹が名に懸けたる桜花咲かば常にや恋ひむいや年のはに　（同）

〈昔、かづら子という少女があった。三人の若者の烈しい情熱に堪えかねて、とうとう入水してしまった。その時若者の詠んだ歌〉

無耳（みみなし）の池し恨めし吾妹子が来つつ潜（かづ）かば水は涸（か）れなむ　（同）

〈昔、竹取の翁とよばれる老人があった。ある春の日丘にのぼると、九人の美しい少女が野原で料理をして居て、老人を呼びとめて調理を手伝えと言う。老人は二つ返事で一座に加ったが、しばらくすると少女らは「誰もあんたをよびはしないのに」と老人をからかいはじめた。老人は「まあまあかんべんして下され、お詫びに一つ歌でもうたいましょうかな」といって歌を作った〉

緑子の　若子が身には　たらちし　母に懐かえ　襁褓の　這児が身には　木綿肩衣　純裏に縫ひ著　頚著の　童子が身には　夾纈の袖著衣　著し我を　にほひよる　子らが同年輩には　蜷の腸　か黒し髪を　真櫛もち　是にかき垂れ　取り束ね　挙げてもまきみ　解き乱り　童児に成しみ　羅の　丹つかふ色に　懐しき　紫の　大綾の衣　住吉の　遠里小野の　真榛もち　にほはしし衣に　高麗錦紐に縫ひ著け　指さへ重なへ　並み重ね著　打麻やし　麻績の児らあり衣の　宝の子らが　打栲は　へて織る布　日ざらしの　麻てづくりを　信巾裳なす　愛しきに取りしき　屋所に経る　稲置丁女がつまどふと　我にぞ来し　遠方の　二綾したぐつ　飛ぶ鳥の　飛鳥壮士が　霖禁み　縫ひし黒沓　指しはきて　庭に立たずめば　退りな立ちと　障ふる少女が　ほの聞きて　我にぞ来し　水縹の　絹の帯を　引帯なす　韓帯に取らし　海神の　殿のいらかに　飛びかける　すがるのごとき　腰細に　取り餝らひ　まそ鏡　取り雪め懸けて　おのが貌　かへらひ見つつ　春さりて　野べを廻れば　おもしろみ　我を思へか　さ野つ鳥　来鳴きかけらふ　秋さりて　山べを往けば　懐しと　我を思へか　天雲も　行きたなびく〻　還り立ち路を来れば　うち日さす　宮女　さす竹の　舎人壮士も　忍ぶらひ

かへらひ見つつ　誰が子ぞやと　思はえてある　かくぞ為来し　いにしへ　ささきし我や　はしきやし　今日やも子らに　不知にとや　思はえてある　かくぞ為来し　古の　賢しき人も　後の世の　かたみにせむと　老人を　送りし車　持ち還り来し

反歌

死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髪子らに生ひざらめやも
白髪し子らも生ひなばかくのごと若けむ子らに罵らえかねめや　（万・一六）

〈昔、若者があった。結婚する間もなく駅使に任命されて、遠い地方へ遣わされた。幾年か経った。妻は悲しみ疲れて病気になってしまった。若者は還って来たが、妻のやつれた姿を見て涙を流し、一首の歌を誦んだ〉

かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めてわが思へりける　（同）

妻の歌

ぬばたまの黒髪ぬれて沫雪のふるにや来ますここだ恋ふれば　（同）

〈ある所に娘があった。父母には内密で一人の若者に恋をした。若者は娘の両親にとがめられるのを怖れたが、その時娘の詠んだ歌〉

事もあらば小泊瀬山の石城にもこもらば共にな思ひ吾背　（万・一六）

〈葛城王が陸奥国に公の旅行をした時、国司の応待の仕方が粗略なので、宴会に招待されても王は苦りきっていた。丁度その場に、以前宮中に奉仕したことのある優雅な女がいて、王に酒をすすめ、やさしい仕草で王の心を解いた。その時の女の歌〉

安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに　（同）

〈昔、田舎人があった。村の男女が集って遊んだとき、自分の妻が他の女たちよりも美しいのでいよいよ愛情をかきたてられて詠んだ歌〉

住吉の小集楽に出でてうつつにもおの妻すらを鏡と見つも　（同）

河村王が、酒宴の際、好んでうたった歌

柄臼は田盧のもとに吾背子はにふぶに咲みて立ちませり見ゆ　（同）

朝霞香火屋が下に鳴くかはづしのびつつありと告げむ児もがも　（同）

〈新田部親王が、勝間田の池の蓮を賞美された時、或婦人が戯れて奉った歌〉

勝間田の池は吾知る蓮なししか言ふ君が鬚なきごとし　（万・一六）

〈池田朝臣が大神朝臣奥守を嗤ふ歌〉

寺寺の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りてその子うまはむ　（同）

〈大神朝臣が返した歌〉

仏造る真朱足らずは水たまる池田のあそが鼻の上をほれ　（同）

〈平群朝臣が穂積朝臣を嗤ふ歌〉

小児ども草はな刈りそ八穂蓼を穂積のあそが腋草を刈れ　（同）

〈河原寺の仏堂内にある倭琴に書いてあった歌〉

世間の繁き借廬に住み住みて至らむ国のたづき知らずも　（同）

能登国の歌

梯立の　熊来酒屋に　真罵らる奴　わし
誘ひ立て　率て来なましを　真罵らる奴　わし　（同）

〈天平二年冬、大伴旅人の従者等が京へ上る船中で詠んだ歌〉

家にてもたゆたふ命波の上に浮きてしをれば奥処知らずも　（万・一七）

大海の奥処も知らず行く吾をいつ来まさむと問ひし児らはも　（同）

読人しらず

さ夜深けて夜中の潟におほほしく呼びし舟人泊てにけむかも（万・七）

風早の三穂の浦廻をこぐ舟の船人動ぐ波立つらしも（同）

道の辺の草深百合の花咲に咲みしがからに妻といふべしや（同）

あかときと夜烏鳴けどこの山上の木末の上はいまだ静けし（同）

西の市にただひとり出て眼並べず買ひにし絹の商じこりかも（同）

今年ゆく新嶋守が麻衣肩のまよひは誰か取り見む（同）

福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が音を聞く（同）

吾背子をいづくゆかめとさき竹の背向に宿しく今し悔しも（同）

旅にして妻恋すらしほととぎす神名備山にさ夜ふけて鳴く（万・一〇）

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ね　たらちねの母が問はさば風と申さむ（万・一一）

たらちねの母にさはらばいたづらに汝も吾も事成るべしや（同）

待つらむに到らば妹がうれしみと咲まむ姿を往きて早見む（同）

誰ぞ此のわが宿に来喚ぶたらちねの母に嘖はえ物思ふ吾を（同）

さ寝ぬ夜は千夜もありとも吾背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ（同）

色に出で恋ひば人見て知りぬべみ情のうちの隠妻はも（同）

かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ　（万・一一）

面忘れだにも得すやと手握りて打てどもこりず恋といふ奴　（同）

朝寝髪吾はけづらじ愛しき君が手枕触れてしものを　（同）

あづきなく何の狂言いま更に小童言する老人にして　（同）

しきたへの枕動きて寝ねらえず物思ふ此夕早も明けぬかも　（同）

往かぬ吾来むとか夜も門閉さずあはれ吾妹子待ちつつあらむ　（同）

解衣の思ひ乱れて恋ふれどもなぞ汝が故と問ふ人もなし　（同）

くれなゐの八塩の衣朝なさななるとはすれどいやめづらしも　（同）

はねかづら今する妹がうら若み咲みみいかりみ著けし紐解く　（同）

小墾田の板田の橋のこぼれなば桁より行かむな恋ひそ吾妹　（同）

風をいたみいたぶる波の間なくわが思ふ君は相思ふらむか　（同）

志珂の海人の火気焼き立ててやく塩の辛き恋をも吾はするかも　（同）

あしひきの山沢ゑぐを採みに行かむ日だにも逢はせ母は責むとも　（同）

吾背子がわが恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及くごとし　（同）

あしひきの山鳥の尾の垂り尾の長き永夜をひとりかも寝む　（同）

吾妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮宿の安けくもなし　（同）

思ふ人来むと知りせば八重むぐらおほへる庭に玉敷かましを　（万・一一）
玉敷ける家も何せむ八重むぐらおほへる小屋も妹とをらば　（同）
くれなゐの花にしあらば衣手に染めつけ持ちて行くべく思ほゆ　（同）
吾背子が朝明のすがたよく見ずて今日の間を恋ひ暮らすかも　（万・一二）
恋ひつつも後にあはむと思へこそおのが命を長くほりすれ　（同）
今は吾は死なむよ吾妹あはずして思ひわたれば安けくもなし　（同）
なかなかに黙然もあらましをあづきなく相見そめても吾は恋ふるか　（同）
いくばくも生けらじ命を恋ひつつぞ吾はいきづく人に知らえず　（同）
死なむ命此は思はずただにしも妹にあはざる事をしぞ思ふ　（同）
あづさ弓末のたづきは知らねども心は君によりにしものを　（同）
あづさ弓引きみゆるしみ思ひ見てすでに心はよりにしものを　（同）
たらちねの母が養ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹にあはずて　（同）
玉だすき懸けねば苦し懸けたればつぎて見まくのほしき君かも　（同）

霊合はば相寝むものを小山田の鹿猪田禁るごと母し守らすも　（万・一二）
行方なみこもれる小沼の下思に吾ぞもの思ふこのころの間　（同）
こもり沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちしろく出でぬ人の知るべく　（同）
露霜の消やすきわが身老いぬともまた若ち反り君をし待たむ　（同）
み猟する雁羽の小野のなら柴の馴れはまさらず恋こそまされ　（同）
妹が門ゆき過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまた顧みむ　（同）
わすれ草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり　（同）
なかなかに人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり　（同）
真菅よし宗我の河原に鳴く千鳥間なし吾背子わが恋ふらくは　（同）
朝がらす早くな鳴きそ吾背子が朝明のすがた見れば悲しも　（同）
気の緒にわが気づきし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも　（同）
梓弓末は知らねど愛しみ君にたぐひて山路越え来ぬ　（同）
湖廻に満ち来る潮のいや益しに恋はまされど忘らえぬかも　（同）
みをつくし心尽して思へかもここにももとな夢にし見ゆる　（同）
志珂の白水郎の釣し燭せる漁火のほのかに妹を見むよしもがも　（同）
漁する海人の楫の音ゆくらかに妹は心に乗りにけるかも　（同）
草まくら旅にしをればかりこもの乱れて妹に恋ひぬ日はなし　（同）

京師べに君は去にしを誰解けかわが紐の緒の結ぶ手懈きも　(万・一二)

まそ鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君におくれて生けりともなし　(同)

海の底沖はかしこし磯廻よりこぎたみ往かせ月は経ぬとも　(同)

時つ風吹飯の浜に出でゐつつ贖ふ命は妹がためこそ　(同)

問答

白たへの袖の別を難みして荒津の浜にやどりするかも　(同)

草まくら旅行く君を荒津まで送りぞ来ぬる飽き足らねこそ　(同)

三諸は　人の守る山　本べは　あしび花さき　末べは　つばき花さ
く　うらぐはし山ぞ　泣く児守る山　(万・一三)

ひとりのみ見れば恋しみ神名火の山のもみち葉手折りけり君　(同)

大君の　命かしこみ　見れど飽かぬ　奈良山越えて　真木積む　泉
の川の　速き瀬を　さをさし渡り　ちはやぶる　宇治の渡の　たぎ
つ瀬を　見つつ渡りて　近江道の　相坂山に　手向して　わが越え

ゆけば　ささなみの　志賀の辛崎　幸くあらば　また還り見む　道のくま　八十くまごとに　なげきつつ　わが過ぎ往けば　いや遠に里離り来ぬ　いや高に　山も越え来ぬ　劔刀　鞘ゆ抜き出でて　伊香胡山　いかにかわが為む　行方知らずて

反歌

天地を歎き乞ひのむ幸くあらばまた還り見む志賀の辛崎　（同）

或書に曰はく、穂積朝臣老の佐渡に配さえし時作れる歌なりといへり。

しき島の　日本の国に　人多に　満ちてあれども　藤波の　思ひまつはり　若草の　思ひつきにし　君が目に　恋ひや明かさむ　長きこの夜を

反歌

しき島の日本の国に人二人ありとし思はば何かなげかむ　（同）

こもりくの　泊瀬の川の　上つ瀬に　い杭を打ち　下つ瀬に　真杭を打ち　い杭には　鏡を懸け　真杭には　真玉を懸け　真珠なすわが思ふ妹も　鏡なす　わが思ふ妹も　ありと　言はばこそ　国に

も　家にも行かめ　誰故か行かむ

　古事記を検するに曰く、件の歌は、木梨の軽の太子のみづから身まかりし時に作れるものといへり。

反歌

年わたるまでにも人はありといふをいつの間ぞもわが恋ひにける

（万・一三）

さし焼かむ　小屋の醜屋に　かき棄てむ　破薦を敷きて　うち折らむ　醜の醜手を　さし交へて　寝らむ君ゆゑ　あかねさす　昼はしみらに　ぬばたまの　夜はすがらに　この床の　ひしと鳴るまで　嘆きつるかも

反歌

わが情焼くも吾なりはしきやし君に恋ふるもわが心から　（同）

うち日さす　三宅の原ゆ　直土に　足ふみ貫き　夏草を　腰になづみ　いかなるや　人の子ゆゑぞ　通はすも吾子　うべなうべな　母は知らじ　うべなうべな　父は知らじ　みなの腸　か黒き髪に　真木綿持ち　あざさ結ひ垂れ　大和の　つげの小櫛を　抑へ插す　さすたへの子は　それぞわが妻

反歌

父母に知らせぬ子ゆゑ三宅道の夏野の草をなづみ来るかも　（同）

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに　おの夫し　歩より行けば　見るごとに　ねのみし泣かゆ　そこ思ふに　心し痛し　たらちねの　母が形見と　わが持てる　まそみ鏡に　蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　馬替へ吾背

反歌

泉川渡瀬ふかみ吾背子が旅ゆき衣ひづちなむかも

まそ鏡持てれど吾はしるしなし君が歩行よりなづみ行く見れば

馬かはば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ（同）

鳥が音の　聞ゆる海に　高山を　障になし　沖つ藻を　枕になし　ひむし羽の　衣だに著ずに　鯨魚取り　海の浜べに　うらもなく　寝ねたる人は　母父に　愛子にかあらむ　若草の　妻かありけむ　思ほしき　言伝てむやと　家問へば　家をも告らず　名を問へど　名だにも告らず　泣く児なす　言だに語はず　思へども　悲しきものは　世間にあり　世間にあり

備後国神島の浜に放置された屍を見て、調使首が詠んだものであるとして、万葉集には類似の歌が次にならべてのせられている。

反歌

母父(おもちち)も妻も子どもも高高に来むと待ちけむ人の悲しさ　（万・一三）

琴歌譜(きんかふ)

①しづ歌

②御諸(みもち)に　築(つ)くや玉垣(たまがき)　③斎(つ)き余(あま)す　④誰にかも依らむ　⑤神の宮人

短埴安振(みじかはにやすぶり)

少女(をとめ)ども　少女さびすと　唐玉を　袂に纏(ま)きて　少女さびすも

継根振(つぎねぶり)

①つぎねふ　山城川に　蜻蛉(あきつ)　②嚏(はな)ふく　嚏ふとも　我が愛者(はしもの)に
逢はずは止まじ

庭立振(にはたちぶり)

庭に立つ　①ふふきの雄鳥　しついついつら　愛子夫(いとこせ)　我が夫(せ)　暁(あかとき)
と知らに　我が寝ば　しついつら　打ち起せ雄鳥

古い民謡（記紀中に見える歌謡を含む）を宮廷風に編曲したもの。和琴(わごん)（六絃琴）の伴奏で唱う。

「しづ歌」――①曲調名。②神を祀(まつ)る場所。③余りにも長い年月神に奉仕した。④誰を頼りにしよう。⑤神社に奉仕する人。（巫女か）

「短埴安振」――少女の舞姿の初初しさを讃えたもの。

「継根振」――悪い前兆があったが、ものともせず恋人に逢いに出かける男の歌。①枕詞。②くしゃみする。

「庭立振」――こっそり通って来る恋人が寝すごして人に見とがめられぬ様、雞に目覚し役をたのんだ歌。雞の声を恨めしがった後世の歌と対象的。

七日あゆだ振

高橋の　甕井の清水　あらまくを　すぐにおきて　出でまくを　すぐにおきて　何か汝が此処に　出でて居る　清水

石の上　布留の山の　熊が爪六つ　まろかもし　鹿が爪八つ　まろかもし　睦しみ　我こそ此処に　出でて居れ　清水

朝猟に　汝夫が通りし　橋の前　杭を宜しみ　かひのえの　つきをよろしみ　我こそ此処に　出でて居れ　清水

「七日あゆだ振」――男女の問答歌。不明の語が多いが、清水（村の共同水場）の辺に立っている娘に、朝猟に出かける若者が親しみを表して歌うのに対し（一段）娘が立っている理由をいろいろ並べたものか。（二・三段）

平安時代の歌

平安時代の歌（和歌及び歌謡）

都が京都に定められ、諸制度が整って、政権が一応安定すると、貴族等は競って文化的向上に力をそそぐようになった。生活様式は益々華麗となり、祭典儀式は複雑になり、範例格式が重んぜられた。然し、倫理よりも情趣を重んずる傾向は古代から引きつがれ、文学の世界は尚、抒情詩の全盛時代である。当時の文学芸術はほとんど貴族に独占されて、地方民の生活を映した作品がきわめて乏しいのが古代との大きな違いである。勅撰集などには庶民の詩は特に読人しらずとして僅少とり上げられているが、庶民の姿を直に表現していない。貴族等が、京都の内及び極く近い周辺のみを唯一の活動の場とし、極端に言うならば、宮中の内外をかぎって生活していた為、新鮮な歌材に乏しく、歌合の題詠や形式的贈答歌は遊戯的衒学的傾向におちいりやすかったのである。ともあれ、洗練された教養と感覚から、或は生活的無気力さから、前時代の歌に見られぬ哀調を持った纎細流麗な詩の世界が展開される。此の傾向は時代が下り、貴族社会が衰微するに従い、仏教的無常観すらともなって来る。つまり、古代の歌がたくましい自己主張であり、挑戦であり、人生への慾求の赤裸々の表現であったのに比べ、これは、運命に対する抵抗と諦めとの間の彷徨から生れた吐息の産物に変った。しかし、貴族等もそういつでも沈みこんでいたわけではない。祭典や宴会の時には民謡を基調とする愉快な歌が唱和され、（神楽歌・東遊歌・催馬楽・風俗歌）これらの歌はちょうどかくれ水の様にこの時代の底を流れて、やがて和歌の衰退に代って、中世の末頃から庶民音楽と共に文化の表面に現れて来るのである。

この時代の勅撰集、古今和歌集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・詞花集・金葉集・千載集・新古今集は世に八代集と称して、後世、和歌の模範とされた。

又此の時代には「物語」「日記」等の散文が多く制作されたが、その世界は和歌の世界と全く同じものであり、又、歌物語は言うまでもなく、一般の物語にも、和歌は重要な役割をもって挿入されている。

其の他、平安時代初期には、漢詩の形式による作品も多く、それらを収めたものに扶桑集・本朝文粋・和漢朗詠集・江談抄等があるが、本書では割愛した。私家集も多く、中でも西行の山家集は有名である。

神楽歌

榊（採物）

本　榊葉の　香をかぐはしみ　求め来れば　八十氏人ぞ　円居せりける　円居せりける

末　神籬の　御室の山の　榊葉は　神の御前に　茂りあひにけり　茂りあひにけり

篠（同右）

本　篠の葉に　雪降りつもる　冬の夜に　豊の遊びを　するが愉しさ

末　瑞垣の　神の御代より　篠の葉を　手ぶさに取りて　遊びけらしも

しなが鳥（前張）

本　しながどる　や　猪名の湊に　あいそ　入る船の　楫よくまかせ　船傾くな　船傾くな

末　若草の　や　妹も乗せたり　あいそ　我も乗りたりや　船傾くな　船傾くな

我妹子（同右）

神々を招き、なぐさめ愉しませる歌で、古代から各地の神社にあったものが、平安時代のはじめ頃（貞観—延喜？）撰定集成され、曲調がととのえられて、宮中の神事に用いられた。（これに対して地方民間で行われるものを里神楽という）。神事は夜に入って篝火をたいて始められ、歌舞は終夜行われて、やがて夜明と共に終る。「採物」は、人長（楽長）が神聖な草木の枝や武器等を手にして舞い、神を天から招く歌。本末の二手に分れた合唱で行われる。「前張」は神の心を和らげ人も共に愉しむものであるから此の夜の歌舞の主要部分である。元来民謡であったもので、内容表現共に素朴でユーモラスな趣が面白い。

「星」は夜明と共に神々が帰られ

本　我妹子に　や　一夜肌触れ　あいそ　誤りにしより　鳥も獲られず　鳥も獲られず　や

末　然りとも　や　我が夫(せ)の君は　あいそ　五つ獲り　六つ鳥獲り
七獲り　八つ鳥獲り　九(ここの)よ　十(とを)は獲り　十は獲りけむや

細波(さきなみ)（同右）

本　細波や　滋賀の辛崎や　御稲(みしね)搗(つ)く　女の佳(よ)さ　さや　それもがな　かれもがな　愛子夫(いとこせ)に　ま　愛子夫にせむや

末　蘆原田の　稲舂(いなつ)き蟹の　や　汝(おのれ)さへ　嫁を得ずとてや　捧げては下(おろ)し　や　下しては捧げ　や　肱挙(かひなげ)をするや

（本末繰返し）

本　あいし　あいし

末　あいし　あいし

蟋蟀(きりぎりす)（同右）

本　蟋蟀の　妬(ねた)さ慨(うれた)さ　や　御園生(みそのふ)に参りて　木の根を掘り食(は)むで
おさまさ　角折れぬ　おさまさ　おさまさ　角折れぬ

末　おさまさ　妬さ慨さ　御園生に参りて　木の根を掘り食むで
おさまさ　角折れぬ

早歌(さうか)（同右）

るので、それを送る心持で歌われる。

本　何れぞも　泊まり

末　かの崎こえて

本　深山の小葛

末　繰れ繰れ小葛

本　鷺の頸取ろむと

末　いとはた長うて

本　あかがり踏むな　後なる子

末　我も目はあり　前なる子

本　舎人こそ憂　後こそ憂

末　我もこそ憂　後こそ憂

本　あちの山背山

末　背山や背山

本　近衛の御門に巾子落つと

末　髪の根の無ければ

本　揺り上げよ　そそり上げ

末　そそり上げよ　揺り上げ

本　谷から行かば　尾から行かむ

末　尾から行かば　谷から行かむ

本　これから行かば　かれから行かむ
末　かれから行かば　これから行かむ
本　女子の才は
末　霜月師走の　かい壊ち
本　翻り戸や　檜張戸
末　檜張戸や　翻り戸

得選子（星）

本　得選子が閨なる　や　霜結ふ檜葉を　誰かは手折りし　得選子
や　たたら濃き日よや　誰かは手折りし　得選子
末　我こそは　見ればや　慨さあみ　手折りて来しかや　得選子や
たたら濃き日よや　手折り来しかや　得選子

催馬楽

高砂

高砂の　さいささごの　高砂の　尾上に立てる　白玉　玉椿　玉柳
それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒染緒の　御衣架にせ
む　玉柳　①何しかも　さ　何しかも　何しかも　心も②またいけ
む　百合花の　さ百合花の　今朝咲いたる　初花に　あはましもの

風俗歌（古代の民謡）中から撰んで雅楽調の曲で歌われたもの。選定統一されたのは平安時代初期の頃と思われるが、歌詞の成立はもっと以前であろう。「催馬楽」の名称の由来については、唐楽の「催馬楽」の曲調や拍子で歌ったから、

を　さゆり花の

夏引(なつひき)

①夏引の　白糸　七量(はかり)あり　さ衣に　織りても着せむ　汝妻(ましめ)離れよ
②頑(かたく)なに　もの言ふ女かな　な　汝麻衣(あさぎぬ)も　我が妻(め)のごとく　袂よく　着よく肩よく　小頸安らに　汝着せめかも　縫ひ着せめかも

貫河(ぬきがは)

貫河の瀬瀬の　やはら手枕　やはらかに　寝る夜はなくて　親離(さ)くる夫(つま)　親離くる夫は　①ましてるはし
しかさらば　矢矧(やはぎ)の市に　沓買ひにかむ
沓買はば　②線鞋(せんがい)の　③細底(ほそしき)を買へ　さし履きて　表裳(うわも)とり着て　④宮路かよはむ

東屋(あづまや)

東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそぎ　我立ち濡れぬ　殿戸(とのと)開かせ
鎹(かすがひ)も　錠(とざし)もあらばこそ　その殿戸　我鎖(さ)さめ　おし開いて来ませ　我や人妻

飛鳥井(あすかゐ)

飛鳥井に　宿りはすべし　①や　②おけ　蔭もよし　御甕(みもひ)も寒し

という説が有力である。

「高砂」――美少女を花や柳にたとえて、恋を打明けようとしたが焦って失敗した男の気持を歌う。①どうして、②急いでしまったんだろう。

「夏引」――一段は女から男への歌。貴方、奥さんと別れちゃいなさいよ。そしたらあたし、上等の糸で着物作って上げる。①夏の間につむいだもの。二段は男から女へ。とんでもない事言うね、君は。僕の奥さんの真似は一寸君にゃ出来ないさ。②おろかにも、の意。

「貫河」――一段女の歌。私の恋人は親ががんばって、逢うに逢えない。①一そう可愛い。「ましてうるはし」の略。二段男の歌。三段女の歌。②紐附の絹製のはきもの。③底の細いもの。女用。④宮

御秣(みまくさ)もよし

我が門(かど)を

我が門を　①とさんかうさん　練(ね)る男　②由(よし)こさるらしや　由こさるらしや
③由なしに　とさんかうさん　練る男　由こさるらしや　由こさるらしや

大路(おほぢ)

大路に　沿ひてのぼれる　青柳が花や　青柳が花や
青柳が　撓(しな)ひを見れば　今さかりなりや　今さかりなりや

朝津(あさむづ)

①朝津の橋の　とどろとどろと　降りし雨の　古りにし我を　誰ぞこの　仲人(なかびと)たてて　②御許(みもと)の容姿(かたち)　消息も　訪ひに来るや　③さきむだちや

挿櫛(さしぐし)

挿櫛は　①十まり七つ　ありしかど　②たけくの③掾(ぞう)の　朝に取り夜さり取り　取りしかば　挿櫛もなしや　さきむだちや

道の口

①道の口　②武生(たけふ)の国府(こふ)に　我はありと　親に申したべ　③心あひ

路山麓の里の辺をいうか。

「東屋」――一段男の歌に対し二段女の歌。「他人の奥さんじゃあるまいし、どんどん入っていらっしゃいよ」の意。

「飛鳥井」①②は囃詞(はやしことば)。暑い日に馬で旅していて、木蔭の冷たい清水と柔い青草にほっとした気持を現した素朴な歌。

「我が門を」――うちの前を、ポーズ作って行ったり来たりしてるあの人、わけがありそうね、用も無いくせに、行ったり来たりして。①とさまかうさま②由こそあるらしや③表向の理由がなくて、の意。

「朝津」――このおじいちゃんに美人を紹介する世話好きがいるよ、やれやれ。①越前国丹生郡にある。②先方の女の顔姿。③囃詞。意味は無い。

の風やさきむだちや

　いかにせむ

いかにせむ　せむや　鴛鴦の鴨鳥　や　出でてゆかば　親は歩くと
さいなべど　夜妻さだめつや　さきむだちや

　老鼠

西寺の　老鼠　若鼠　御裳喰むつ　袈裟喰むつ　袈裟喰むつ　法師
に申さむ　師に申せ　法師に申さむ　師に申せ

　桜人

①桜人　その舟止め　島つ田を　十町つくれる　見て帰り来むや
②そよや　明日帰りこむ　そよや
言をこそ　明日ともいはめ　遠方に　③妻ざる夫は　明日もさね来
じや　そよや　明日もさね来じや　そよや

　山城

山城の　狛のわたりの　瓜つくり　①な　②なよや　③らいしなや
④さいしなや　瓜つくり　瓜つくり　⑤はれ
瓜つくり　我を欲しといふ　いかにせむ　な　なよや　らいしなや
さいしなや　いかにせむ　いかにせむ　はれ
いかにせむ　⑥なりやしなまし　⑦瓜たつまでに　や　らいしなや

「挿櫛」――あの人ったら、来る度に私の櫛を欲しがって、とうとう皆持ってっちゃったのよ。①十余り七つ。②不明　③地方官の三等官。

「道の口」――旅愁。①街道沿の比較的京都に近い国。②越前国丹生郡。③仲よしの風。

「いかにせむ」――僕が彼女の所へ出かけると、遊び歩くといって親は怒るけど、結婚の相手をきめてもくれないでさ。

「老鼠」――じい様鼠や若鼠、西寺お倉にぞーろぞろ。大事な御衣装がーりがり。もしもしそこのお坊様、お住持様にお知らせを。

「桜人」――一段男の歌。さくらの人よ、舟を止めて私をちょっくら乗せてくれ。島に一〇枚程田を持ってるんでね、見廻って明日帰

さいしなや　瓜たつま　瓜たつまでに

青馬

①青の馬放れば　取り繋げ　さ青の馬放れば　取り繋げ　②しのい箭矢の　しのい箭矢の　③箭せ子が孫なる　④さ郎子　または太郎子の子なる　さ郎子

総角

①総角や　②とうとう　③尋ばかりや　とうとう　離りて寝たれども　転びあひけり　とうとう　か寄りあひけり　とうとう

力なき蝦

力なき蝦　力なき蝦　骨なき蚯蚓　骨なき蚯蚓

我家

我家は　①帷帳も　垂れたるを　②大君来ませ　聟にせむ　御肴に　何よけむ　鮑③栄螺か　④石陰子よけむ　鮑栄螺か　石陰子よけむ

ろう。①地名か。②囃詞。二段女の歌。明日だなんて口ばっかり。あそこに好きな人が居るんだから。③妻ぞあるの略。

「山城」――娘の歌。①②③④⑤囃詞。⑥結婚話うまく行くかしら。⑦瓜が熟す頃までに。

「青馬」――①平安時代には白色の馬を指したが、それ以前は黒毛の馬の事だったらしい。②矢羽の種類に依る名称。どんな物か不明。③個有名詞。④「さ」は接頭語。郎子は男を親しんでいう語。「坊や」程の意。

「総角」――少年と少女とが、ふと情熱にかられて抱き合った趣である。①髪を左右に分けて耳の上で束ねたもので、少年少女の髪型。転じて少年少女。②囃詞。③両手を開げた間の距離。

東遊歌（あづまあそびのうた）

駿河舞

や　有度浜に　駿河なる有度浜に　打ち寄する浪は　七草の妹　こ
とこそ良し　ことこそ良し　七草の妹は　ことこそ良し　逢へる時
いざさは寝なむ　や　七草の妹　ことこそ良し

風俗歌（ふぞくうた）

「力なき蝦」——神楽早歌の類である。

「我家」——お越し下されお殿様。家の座敷は豪華版。娘を妻に進ぜよう。御馳走ならば海の幸。①帷は間じきりの垂幕。帳も同様で鴨居に固定されない種類らしい。経済力や格式のある事を示した言葉。②元来皇族をいう。③さざえ。④うに。

東（あづま）(東海地方以東)の風俗歌の中、相模駿河の歌舞の或物が芸能的価値を認められて、中央の神社や宮廷に採り入れられ、倭舞（やまと）に対して東舞（あづま）とよばれ、延喜年間に「東遊」として曲や舞の形式が定められた。中には中央歌人の作品も歌詞に用いられている。

古代の地方民謡の内、平安時代に

こよるぎ

①小余綾(こよろぎ)の　磯②立ちならし　磯ならし　菜摘む③少女(めざし)　濡らすな
濡らすな　沖に居れ　居れ　波や
濡ろ濡ろも　君が食(め)すべき　食すべき　菜をし摘み　摘みてばや

遠方(をちかた)

遠方や　彼の方や　①安達(あだち)の原　立たる幹(から)に　立たる幹に　植(う)わる
幹に　己(おの)を似寄する　②さ寝(ぬ)としなくに
寄(い)せば寄せ　寄せば寄せ　よそふる人の　憎からなくに

小車

①小車錦(をぐるまにしき)の　紐解かむ　宵入(よいり)を忍ばせ夫(せ)　②よやな
我忍ばせ③子　我忍ばせ　そよ　まさに　④寝てけらしも
月の面を　さ渡る雲の　まさやけく見る　こさやけく見る

筑波山(つくばやま)

筑波山　葉山繁山(はやましげやま)　繁きをぞ　や　誰が子も通ふな　下に通へ　我
が夫(つま)は下に

鸛(おほとり)

①鸛の羽に　②やれな　霜降れり　やれな　誰かさ言ふ　千鳥ぞさ
言ふ　③鶍(ふやくぎ)ぞさ言ふ　④蒼鷺(みとさぎ)ぞ　京より来てさ言ふ

曲調が整えられて、貴族間に愛好されたものをいう。

「こよるぎ」――一段男の歌。二段女の応じた歌。①相模の地名。ここでは磯の枕詞。②走り廻って。③前髪を分けずに目の上で切り揃えた形。少女の髪型である所から、転じて少女を言った。

「遠方」――一段は自分を立派な樹木にたとえた男を嘲った歌。二段は彼の魅力を認めた歌。①岩代国に在る原。②惚れてやるわけじゃないのに。

「小車」――一段女の歌。二段男の歌。三段其の夜の情景。①小車の型を織り出した錦。②囃詞。③女性をいとしんで呼ぶ詞。④家の連中は寝静まったらしいな。

「鸛」――①鷲・鶴・鵠等大形の鳥。②囃詞。③かやくぐり。④五

ちちらら

①ちちらが門に　②嘯吹麻呂こそ立てれ　③調度を提げて　何ど
かはや立てりしもせざらむ　己がや愛子夫の　門に調度を提げて

甲斐風俗

甲斐人の　嫁にはならじ　事辛し　甲斐の御坂を　夜や越ゆらむ
（承徳本）

たたらめ

①たたらめの花の如　かい練好むや　実に紫の色好むや
（政事要略）

うばらこぎ

茨小木の下には　鼬鼠笛吹く　猿奏づ　稲子丸は　拍打つ　蟋蟀は
鉦鼓打つ
（体源抄）

民謡

船歌

春の野にてぞ　ねをば泣く。

位鷺の一種。

「ちちらら」――①下の「ら」は自称の接尾語。②口笛の好きな（得意な）男のアダ名。③ここでは弓の事か。

「甲斐風俗」――「夜通し山坂を歩かなくちゃならないから」は口実。山深い寒村は生活が辛いので有名だったらしい。

「たたらめ」――①植物の名。赤紫の花をつける。

「うばらこぎ」――小動物のおどけた感じの生態や、虫の跳び方、鳴声などから童話的な情景を空想した歌。梁塵秘抄等に相似のものが採録されている。

神楽歌・東遊歌・催馬楽・風俗歌の中に採録されない種々の歌謡が、民間に存在していた。土佐日

若薄（すすき）に手切る切る摘んだる菜を
親やまぼるらん、しうとめや食ふらん。①かへらや。
②よんべのうなゐもがな、銭（ぜに）こはん。
③虚言（そらごと）をして、おぎのりわざをして
銭ももて来ず、おのれだに来ず。
（土佐日記）

東歌（あづまうた）

みちのくうた

みちのくはいづくはあれど塩釜の浦漕ぐ舟の綱手かなしも　（古今）

さがみうた

君をおきて仇し心を我が持たば末の松山浪も越えなん　（同）

こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざし濡らすな沖におれ波　（同）

ひたちうた

つくばねの此のも彼のもに影はあれど君がみかげに増す影はなし　（同）

かひうた

甲斐が嶺（ね）をさやにも見しがけけれなく横ほり伏せる小夜の中山　（同）

甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもやことづてやらん　（同）

記（紀貫之が土佐守を解任となって帰る時の紀行文）の中に記されているこの船頭の歌も、それらの一つである。
①囃詞。②昨夜の子供が来ないかな。③嘘をついて、掛買をして。

東国地方の民謡であるが（万葉集中の東歌参照）これが宮廷の舞曲「東遊（あづまあそび）」の詞章として用いられ、後世まで行われた。

読人しらず

野辺ちかく家居しせれば鶯のなくなる声は朝な朝な聞く　（古今）
かすが野は今日はな焼きそ若草の妻も籠れり我も籠れり　（同）
春日野のとぶ火の野守出でてみよ今いくかありて若菜つみてん　（同）
をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも喚子鳥（よぶこどり）かな　（同）
色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも　（同）
この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて　（同）
春毎に花の盛はありなめど相見んことは命なりけり　（同）
待つ人も来ぬもの故に鶯の鳴きつる花を折りてける哉　（同）
駒並めていざ見に行かむふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ　（同）
五月（さつき）待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　（同）
我が背子が衣の裾を吹き返しうら珍しき秋の初風　（同）
木の間より洩りくる月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり　（同）
白雲に羽打ち交し飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月　（同）
さ夜中と夜は更けぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ　（同）
ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山のかげにぞありける　（同）

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき　（古今）　猿丸太夫作の伝あり

立田川もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨降るらし　（同）

夕されば衣手寒しみ吉野の吉野の山にみ雪降るらし　（同）

我君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで　（同）

かりごもの思ひ乱れて我恋ふと妹知るらめや人し告げずは　（同）

恋せじとみたらし川にせみそぎし神はうけずぞなりにけらしも　（同）

打ちわびてよばはん声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ　（同）

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき　（同）

むば玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり　（同）

みちのくの浅香の沼の花かつみ且見る人に恋ひやわたらん　（同）

伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあく由もがな　（同）

宮木野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそまて　（同）

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり　（同）

玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし　（同）

いつはりと思ふものから今更に誰がまことをか我は頼まん　（同）

忘れなんと思ふ心のつくからにありしよりけに先づぞ恋しき　（同）

かたみこそ今は仇なれこれ無くは忘るる時もあらましものを　（同）　伊勢

来めやとは思ふ物からひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつつ　（同）

月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨も降らなんわびつつも寝ん　(同)

久しくもなりにけるかな住吉のまつは苦しきものにぞありける　(同)

わびはつる時さへものの悲しきは何処をしのぶ涙なるらん　(同)

男の、人の国にまかれりける間に、女、俄に病をしていと弱くなりにける時、詠みおきて身まかりける

声をだに聞かで別るる魂よりも亡き床に寝ん君ぞかなしき　(同)

紫の一もと故に武蔵野の草はみながらあはれとぞみる　(同)

我心なぐさめかねつ更科やをば捨山に照る月をみて　(同)

我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらん　(同)

世中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬になる　(同)

山里は物のわびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり　(同)

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれ家にせむ　(同)

世に経れば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道踏みならしてん　(同)

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん　(同)

或人、此の歌は昔大和国なりける人の女に、或人住みわたりけり。この女、親も亡くなりて、家も悪くなり行く間に、この男河内の国に人を相知りて通ひつつ、離れやうにのみなり行きけり。さりけれどもつらげなる気色も見えで、河内へ行

くごとに男の心のごとくにしつつ、出だしやりければ、怪しと思ひて、若し無き間に異心(ことごころ)もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、河内へ行く真似にて、前栽の中に隠れて見ければ、夜更くるまで琴をかき鳴らしつつ打ち歎きて、此の歌を詠みて寝にければ、これを聞きて、それより、又外(ほか)へもまからずなりにけりとなん言ひ伝へたる。

うちわたす遠方人(をちかたびと)にもの申すわれ
そのそこに白く咲けるは何の花ぞも

初瀬川古川の辺に二本(ふたもと)ある杉
年を経て又も相見ん二本ある杉

誹諧歌

枕よりあとより恋の攻め来れば為(せ)む方なみぞ床の中に居る （古今）

何をして身の徒(いたづら)に老いぬらん年の思はん事ぞやさしき （同）

伝承歌

（六九八？―七七〇）霊亀二年（七一六）一六才で留学生に選ばれ、翌養老元年唐に留学し、唐の朝廷

安部仲麿

もろこしにて月を見て詠みける

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　（古今）

この歌は、昔、仲麿を唐土に物習ひに遣はしたりけるに、数多の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、此の国より又使ひまかり到りけるにたぐひて、まうで来なむとて、出で立ちけるに、明州という処の海辺にて、彼の国の人「むまのはなむけ」しけり、夜になりて月のいと面白く差し出でたりけるを見て、詠めるとなむ、語り伝ふる。

伝教大師

比叡山中堂建立のとき

阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ　（新古今）

で用いられた。天平勝宝三年（七五一）遣唐使の藤原清河が帰朝する際、共に彼の地を出発したが、暴風にあって安南に漂着、土民に迫害されながら辛うじて唐にもどり、宝亀元年（七七〇）彼の地で歿した。安禄山の乱の後、玄宗が帝位を去り、政情の定まらぬ頃のことである。上の望郷歌は、仲麿伝説の中に挿入された古歌であろう。

諱は最澄。近江国志賀郡の人。一二才で僧となり、唐で仏教を学ぶ。延暦寺を創建して、我が国に於ける天台宗の祖となる。これより山嶽仏教起り、代々皇室の尊崇を受けて、平安朝を通じ其の勢力は強大であった。

この歌は大師作として伝承された古歌である。

清水観音

猶頼め標茅（しめぢ）が原のさせも草我が世の中にあらんかぎりは　（新古今）

或女が世の中をはかなんでいる折に、清水観音が現れて教え導いたと「袋草子」にある。神仏が歌を詠んだり、歌に感じて人間を助けたという説話は多い。

清原深養父（きよはらのふかやぶ）

月のおもしろかりける夜、あかつきがたに詠める

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらん　（古今）

恋ひ死なば誰が名は立たじ世中の常無き物と言ひはなすとも　（同）

豊前房則の子。従五位下内蔵大允となる。中古三十六歌仙。深養父集がある。

小野篁（をののたかむら）

隠岐国に流されける時に、船に乗りて出で立つとて、京なる人の許につかはしける

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟　（古今）

隠岐国に流されて侍りける時に詠める

思ひきや鄙（ひな）の別れに衰へて海人の縄たき漁（いさり）せんとは　（同）

（八〇二—八五二）岑守の子。承和元年（八三四）遣唐副使に任ぜられ、同三年五月出発したが、途中暴風に遭って引き返した。同五年、再び出発することとなった時、大使藤原常嗣が、篁の船を自分の船とした事などから、篁は出発しなかった。その為に罰せられて隠岐へ流されたという。然し、同七年には召喚され、参議となっ

藤原（ふじはらの）良房（よしふさ）

染殿の后の御前に花がめに桜の花をささせ給へるを見て詠める

年経れば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし（古今）

遍（へん）昭（ぜう）

①蓮葉（はちすば）の濁りに染（し）まぬ心もて何かは露を玉とあざむく（古今）

②名にめでて折れるばかりぞおみなへし我落ちにきと人に語るな（同）

深草の帝の御時に、蔵人頭（くらうどのとう）にて夜昼馴れ仕うまつりけるを、諒闇になりにければ、さらに世にも交らずして比叡の山に上りて、かしら下してけり。その又の年皆人御服（おんぶく）ぬぎて、或は

た。漢学者で、漢詩の作品も多い。

（八一〇?―八七二）冬嗣の二男。天安元年従一位太政大臣となり、翌二年清和天皇即位の折、摂政となる。藤原氏が摂政となる初めである。染殿大臣（そめどののおとど）と称す。歿後、忠仁公の謚号を賜る。歌は、娘の幸運を喜びたたえたもの。染殿の后、(明子)は其の女で、文徳天皇の后、清和天皇の母君である。

（八一六―八九〇）俗名良岑宗貞。大納言正三位安世八男。従五位上。蔵人頭左少将となり、仁明天皇崩御の際出家した。

①あざむかれる方に心の迷いがある為か。

②お前さんの優しい名前に一寸よろめいただけなんだよ。

かうぶり賜はりなど、喜びけるをききて詠める

③皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ　（古今）

五節の舞姫を見て詠める

④天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の姿しばしとどめん　（同）

題知らず

源　常

末の露もとの滴や世の中のおくれ先立つためしなるらん　（新古今）

鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと　（古今）

在原　行平

①立ち分れいなばの山の峰に生ふる松とし聞かば今帰りこむ　（古今）

田村の御時に、事に当りて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮の内に侍りける人につかはしける

②わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ　（同）

光孝天皇

君がため春の野に出で若菜つむ我衣手に雪は降りつつ　（古今）

---

③喪が明けても自分の悲しみは尽きない。

④十一月に宮中で行われる豊明節会で舞を舞う少女の美しさを天女にたとえて歌ったもの。

嵯峨天皇の御子。源の姓を賜り左大臣、左近衛大将となる。東三条の左大臣と称す。

業平の兄。斉衡二年(八五五)従四位下、因幡守。後、参議中納言。

①因幡守となって赴任する時の別れの作。

②文徳天皇の御代、事件に関係して須磨に流された時のもの。

(八三〇—八八七)　仁明天皇第三皇子。母は贈皇后宮藤原沢子。第五八代天皇。諱は時康。中務卿・

惟喬親王（これたかのみこ）

白雲の絶えずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそありけれ　（古今）

僧正遍昭に詠みて贈りける

桜花散らば散らなむ散らずとて古里人の来ても見なくに　（同）

在原業平（ありはらのなりひら）

なぎさの院にて桜を見て詠める

世中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし　（古今）

桜の花の盛りに、久しく訪はざりける人の来りける時に詠める　読人しらず

①あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待ちけり　（同）

返し

②今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや　（同）

堀川の太政大臣（おほいまうちぎみ）の四十賀、九条の家にてしける時に

上野守・太宰権帥・式部卿等を歴任。五五才で位に即かれた。

（八四四—八九七?）文徳天皇第一皇子。母は紀名虎の女静子。貞観一四年（八七二）出家。在原業平が仕えた。

（八二五—八八〇）弾正尹阿保親王御子。母は伊登内親王（桓武天皇女）兄行平と共に在原の姓を賜り、従四位上蔵人頭、右近中将となる。（在五中将とよばれるのは、在原氏の五男で中将という意）在原業平朝臣集があり、伊勢物語は業平をモデルに組まれた物語で、業平の作品が多数ふくまれている。

①浮気だと評判する人もいるけれ

桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに

東（あづま）の方へ、友とする人一人二人いざなひて行きけり。三河国八橋といふ処に至れりけるに、その河の辺に、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木のかげに下り居て、かきつばたといふ五文字（いつもじ）を句の頭（かしら）に据ゑて旅の心を詠まんとて詠める

③唐衣きつつ馴れにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ（古今）

武蔵国と下総国との中にある隅田川の辺に至りて、都のいと恋しう覚えければ、しばし河の辺に下り居て、思ひやれば限りなく遠くも来にける哉と思ひわびて、ながめ居るに、渡守「早舟に乗れ、日暮れぬ」と言ひければ、舟に乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折りに、白き鳥の、嘴と足と赤き、川の辺に遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず。渡守に「これは何鳥ぞ」と問ひければ「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きて詠める

④名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人は有りやなしやと（同）

東の五条わたりに人を知り置きてまかり通ひけり。忍びなる処なりければ、門よりしもえ入らで、垣の崩れより通ひける

ど、この通り、たまに来る貴方をお待ちする真実がありますのよ。

②偶然、貴女が待っている日に来合せたのさ。一日違ったらどうなっていたものやらね。

③日頃馴れ親しんだ妻を故郷において来たので、実に遠くまで来てしまったという思いが深い。

④都という名を持った鳥、「都鳥」よ、お前には都の様子が分るのだろうね、聞かせておくれ、私の愛する人は無事に暮しているかどうかを。

伊勢物語中有名なくだりで、謡曲「隅田川」にも、ほとんど全文が紹介されている。

を、度重なりければ、主聞きつけて、かの道に夜毎に人をふせて守らすれば、行きけれど、え逢はでのみ帰りて、詠みてやりける

⑤人知れぬ我が通路の関守は宵宵毎に打ちも寝ななん　（同）

⑥五条の后の宮の西の対に住みける人に、本意にはあらで物言ひわたりけるを、睦月の十日余りになん、他へかくれにける。在り所は聞きけれど、えものも言はで又の年の春、梅の花盛に、月の面白かりける夜、去年を恋ひて彼の西の対に行きて、月の傾くまで、あばらなる板敷に伏せりて詠める

⑦月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして　（同）

病して弱くなりにける時に詠める

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを（同）

惟喬親王の狩しける伴にまかりて、宿りに帰りて、夜一夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日の月もかくれなんとしける折に、親王酔ひて内へ入りなんとしければ詠み侍りける

⑧飽かなくにまだきも月のかくるるか山の端逃げて入れずもあらなん　（同）

業平の朝臣の母の親王、長岡に住み侍りける時に、業平宮仕

⑤私の秘密の通路の番人よ、毎晩寝てしまっておくれ、の意。番人を置く手間で垣の修理をしたらよいのに、と思うのは現代的すぎるだろうか。のどかな時代が想像される。

⑥大っぴらに出来ず、忍んで愛していた女性が行方不明になってしまった。一年経って去年を思い出して詠んだ。

⑦月の姿は変ったろうか、変りはしない、春の景色は昔と違うだろうか。否々。唯、自分ばかり、形はもとの私だけれど、運命はまるっきり変ってしまった。

⑧未だ眺めていたい月が隠れようとしている、山の頂よ、引き下って、月の入るのをふせいでおく

へすとて、時時もえまかりとぶらはず侍りければ、師走ばかりに、母の親王の許より、とみの事とて文を持てまうで来り。開けて見れば、言葉は無くて、有りける歌

⑨老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな

返し

世中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため　（古今）

惟喬の親王の許にまかり通ひけるを、頭おろして小野といふ所に侍りけるに、正月に訪はんとてまかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひて彼の室にまかり至りて、拝みけるに、つれづれとして、いともの悲しくて、帰りまうできて詠みて贈りける

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪踏み分けて君を見んとは　（同）

東のかたにまかりけるに、浅間の嶽に煙の立つを見てよめる

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ　（新古今）

駿河国宇津の山に逢へる人につけて、京につかはしける

駿河なる宇津の山辺の現にも夢にも人に逢はぬなりけり　（同）

葦の屋の灘の塩焼き暇なみ黄楊の小櫛もささで来にけり　（伊勢物語）

れ。

⑨年とると、のがれられぬ別離の時(死別)があると申します故、一層、お目にかかりたく存じます。

晴るる夜の星か河辺の螢かも我が住む方の海人のたく火か　（古今）

大江千里

是定のみこの家の歌合によめる

月見れば千千に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど　（古今）

文集嘉陵春夜詩「不レ明不レ暗朧々月」といふ事を詠み侍りける

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき　（新古今）

小野小町

①花の色はうつりにけりな徒に我が身世に経るながめせしまに　（古今）

思ひつつ寝ればや人の見えつらん夢と知りせば覚めざらましを　（同）

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼み初めてき　（同）

いとせめて恋しき時はむば玉の夜の衣を返してぞ寝る　（同）

見るめなき我が身を浦と知らねばや離れなで海人の足たゆく来る　（同）

秋の夜も名のみなりけり逢ふと言へば事ぞともなく明けぬるものを　（同）

参議音人卿の子。或は孫ともいう。兵部大丞。中古三十六歌仙。大江千里集がある。

二首目の歌は、題詠というよりも翻訳というべきであるが、当時は、古歌や漢詩の内容に、なじみ易い形態を与えるという意味で、かなり行われていたものである。

出羽国郡司の女という。仁明天皇の頃の人。美人として有名であったが、出生や晩年が明かでなく、種々の伝説を生んだ。

①長雨に打たれて花が色あせる様に、歎きの多い年月を送った私の容色はむなしく衰えてしまった。

②うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしさ　（古今）

色見えでうつろふものは世中の人の心の花にぞありける　（同）

秋風に逢ふ田の実こそ悲しけれ我が身空(むな)しくなりぬと思へば　（同）

③わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ　（同）

あはれてふ事こそうたて世中を思ひはなれぬほだしなりけれ　（同）

あはれなり我が身の果やあさ緑遂には野辺の霞と思へば　（新古今）

在るは無く無きは数そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん　（同）

須磨の蜑の浦こぐ舟の梶を絶え寄辺なき身ぞ悲しかりける　（続古今）

源(みなもとの)　当純(まさずみ)

寛平の御時きさいの宮の哥合のうた

谷風にとくる氷のひまごとに打ち出づる波やはるの初花　（古今）

藤原敏行(としゆき)

秋立つ日詠める

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　（古今）

②現実には人目をはばかる恋であっても、夢の逢瀬にまで人目を気遣うとはわびしい限りです。

③文屋康秀が地方の役人となって赴任する際「御一緒に如何」と言ってよこしたのに対する歌。人の心の頼み難さに、思案する力も尽きました。優しい言葉をかけて下さる方があれば従ってゆこうと思います、の意。

源能有（文徳天皇の御子）の子。

（——九〇七）寛平八年従四位下、後に従四位上右兵衛督となる。

寛平の御時、后の宮の歌合の歌

住吉(すみのえ)の岸に寄る波夜さへや夢の通路(かよひぢ)人目避(よ)ぐらん　（古今）

伊勢(いせ)

知ると言へば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名の空に立つらん　（古今）

①夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝な我おもかげに恥づる身なれば　（同）

物思ひける頃、ものへまかりける道に野火の燃えけるを見て詠める

冬がれの野辺と我身を思ひせば燃えても春を待たましものを　（同）

難波潟短き葦の節の間も逢はで此の世を過ぐしてよとや　（新古今）

素性法師(そせいほふし)

花ざかりに京をみやりてよめる

みわたせば柳桜をこきまぜてみやこぞ春の錦なりける　（古今）

雲林院の親王のもとに、花見に、北山の辺(ほとり)にまかれりける時に詠める

大和守従五位上藤原継蔭の女。伊勢の御ともいう。父が元、伊勢守だった為である。七条院后宮（宇多天皇の后、温子）に仕えた。藤原仲平に愛され、又宇多天皇の寵を受けて親王を生み、又、敦慶親王との間に中務を生んだ。中古三十六歌仙。伊勢集がある。

①自分で鏡を見ても恥かしい姿なのだもの、あの方の夢の中に出て行くのもつつしみましょう。

左近少将良岑宗貞（遍昭）の男。俗名良岑玄利。左近将監となったが、出家して権少僧都雲林院別当となる。

中古三十六歌仙。素性法師集がある。

いざけふは春の山辺にまじりなん暮れなばなげの花の蔭かは　（古今）

春のうたとて詠める

思ふどち春の山辺に打ち群れてそことも言はぬ旅寝してしが　（同）

今宵来む人には逢はじ七夕の久しき程に待ちもこそすれ　（同）

はかなくて夢にも人を見つる夜は朝の床ぞ起き憂かりける　（同）

今来んと言ひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな　（同）

①底ひ無き淵やは騒ぐ山河の浅き瀬にこそ仇浪はたて　（同）

思ふとも離れなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ見め　（同）

菅原　道真

東風吹かば匂をこせよ梅の花主なしとて春を忘るな　（拾遺）

君が住む宿の梢を行く行くとかくるるまでもかへりみしはや　（同）

朱雀院の奈良におはしましたりける時、手向山にて詠みける

此度はぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに　（古今）

山別れ飛び行くものの帰り来る影見る時はなほ頼まれぬ　（新古今）

九日後朝同賦ニ秋思一応レ制

①本当に真実のある人は、やたらにうまい事を言ったり、これ見よがしの行為はしないものだ。やたらに大げさに騒ぐのは、心の深くない証拠だ。

是善の子。昌泰二年（八九九）右大臣となったが、失脚して延喜元年太宰権帥に左遷され、太宰府で死去した。歿後延喜二三年、左大臣を贈られ、更に正一位太政大臣を贈られた。漢学者で、書道、漢詩に秀でていた。思慮深い人格者で宇多天皇の信任厚く、左遷は藤原時平等の陰謀によるものであると生前から人々に信ぜられ、歿後は怨霊神として北野に祀られた。

去年の今夜清涼に侍し
秋思の詩編独り断腸。
恩賜の御衣、今此所に在り、
捧持して毎日余香を拝す。
（菅家文草）

藤原興風（おきかぜ）

誰をかも知る人にせむ高砂（たかさご）の松も昔の友ならなくに　（古今）

延喜四年上野権大掾、一四年下総権大掾となる。管絃の上手として有名であった。

藤原因香（よるか）

心地そこなひて患ひける時に、風に当らじとて、おろし籠めてのみ侍りける間に、折れる桜の散りがたになれりけるを見て詠める

たれこめて春のゆくゑも知らぬまに待ちし桜もうつろひにけり　（古今）

貞観・寛平・延喜時代に典侍をつとめた。

紀友則（きのとものり）

玉桙（たまぼこ）の道は常にもまどはなん人を訪ふとも我かと思はむ　（同）

梅花をとりて人に贈りける

有友の子。寛平九年（八九七）土佐掾となり、少内記を経て、延喜

君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　（古今）

　桜の花の散るを詠める

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　（同）

　寛平の御時后の宮の歌合の歌

五月雨(さみだれ)に物思ひ居れば郭公(ほととぎす)夜深く鳴きていづち行くらむ　（同）

　惟定親王の家の歌合の歌

露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく　（同）

下にのみ恋ふれば苦し玉の緒の絶えて乱れん人なとがめそ　（同）

坂上是則(さかのうへのこれのり)

　大和国にまかれりける時に雪の降りけるを見て詠める

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　（古今）

紀貫之(きのつらゆき)

初瀬に詣づる毎に、宿りける人の家に、久しく宿らで、程経て後に至れりければ、彼の家の主、「かくさだかになん宿りはある」と言ひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りて詠める

四年大内記となる。古今和歌集撰者の一人である。

（?——九三〇）従四位下好蔭の子。従五位下御書所預大内記加賀介清水寺別当。三十六歌仙。坂上是則集がある。

望行の子。延喜一三年大内記、同一七年従五位下、延長八年（九三〇）—承平四年（九三四）まで土佐守となる。任期を終えて京に帰って来る時の旅行中の出来事や感想を、女性の日記風に書いたのが、

人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香に匂ひける　（古今）

志賀の山越えに女の多く逢へりけるに詠みてつかはしける

梓弓春の山辺を越え来れば道もさりあへず花ぞ散りける　（同）

山寺に詣でたりけるに詠める

宿りして春の山辺に寝たる夜は夢の内にも花ぞ散りける　（同）

我恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞわびしかりける　（同）

いそのかみ布留の中道なかなかに見ずは恋しと思はましやは　（同）

色もなき心を人に染めしより移ろはむとは思ほえなくに　（同）

河原の左の大臣（おほいまうちぎみ）の身まかりて後、かの家にまかりてありけるに、塩釜といふ処の様を作れりけるを見て詠める

君まさで煙たえにし塩釜の浦淋しくも見えわたるかな　（同）

延喜の御時の月次の御屏風に

逢坂の関の清水にかげ見えて今や引くらむ望月の駒　（拾遺）

思ひかね妹がり行けば冬の夜の河風寒み千鳥鳴くなり　（同）

凡河内躬恒（おほしかふちのみつね）

春の夜梅の花を詠める

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる　（古今）

土佐日記である。天慶三年玄蕃頭、同八年木工権頭となる。早くから歌才を認められて、歌合せの指導者等をつとめた。古今和歌集の撰者の一人。

延喜七年丹波権大目、一一年和泉権掾。又、淡路掾となる。度々行幸に従って歌を作った。古今和歌集撰者の一人。

亭子院の歌合の春の果ての歌

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかげかは　（古今）

白菊の花を詠める

心当てに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　（同）

池の辺にて紅葉の散るを詠める

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつつ　（同）

頼めつつ逢はで年経るいつはりにこりぬ心を人は知らなむ　（同）

山の法師のもとへつかはしける

世を捨てて山に入る人山にても猶憂き時はいづち行くらん　（同）

壬生忠岑（みぶのただみね）

古今和歌集撰者の一人。延喜の頃右衛門府生、後、兵衛府生を経て左近将監となる。天慶八年（九四五）「和歌体十種」をえらんだ。

惟定親王の家の歌合の歌

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覚しつつ　（古今）

み吉野の山の白雪踏み分けて入りにし人の訪れもせぬ　（同）

命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬ夢の覚むるなりけり　（同）

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものは無し　（同）

あひ知れりける人の身まかりにける時に詠める

寝（ぬ）るが中（うち）に見るをのみやは夢といはん果敢（はか）なき世をも現（うつつ）とは見ず　（同）

右大将定国の四十の賀に、内より屏風調じて賜ひけるに

大荒木の森の下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな　（拾遺）

右大将定国の家の屏風に

千鳥なく佐保の川霧たちぬらし山の木の葉も色かはりゆく　（同）

斎宮女御（さいぐうのにょうご）

（九二九—九八五）醍醐天皇の皇子、重明親王の女。徽子（きし）。伊勢の斎宮であったが、後、村上天皇の女御となり、承香殿の女御と称す。中古三十六歌仙。「斎宮女御集」がある。

野宮（ののみや）の斎宮の庚申し侍りけるに、松風入ル夜琴ニといふ題をよみ侍りける

琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒よりしらべ初（そ）めけむ　（拾遺）

村上の御時、八月ばかり上（うへ）久しう渡らせ給はで、しのびて渡らせ給ひけるを、知らず顔にて琴ひき侍りける

さらでだにあやしきほどの夕暮に萩ふく風の音ぞきこゆる　（後拾遺）

ただにもあらで里にまかり出で侍りけるに、十月ばかり程近うなりて、うちより御とぶらひありける返事にたてまつり侍りける

枯れはつる浅茅が上の霜よりも消ぬべき程を今かとぞ待つ　（同）

大空へ風待つほどのくものい（蜘蛛の巣）の心細さを思ひやらなむ　（同）

曽禰好忠（そねのよしただ）

父祖不詳。寛和の頃活躍した人で、丹後掾であったところから、曽丹とよばれた。中古三十六歌仙。曽禰好忠集がある。異色ある歌風を持った人である。

だいしらず

神奈備の三室の山を今日見れば下草かけて色づきにけり　（拾遺）

秋風は吹きな破りそ我が宿のあばらかくせる蜘（くも）のすがきを　（同）

三島江につのぐみ渡る蘆の根の一（ひと）よのほどに春めきにけり　（後拾遺）

鳴けや鳴け蓬（よもぎ）が杣（そま）のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞかなしき　（同）

川上やあらふの池のうきぬなは憂きことあれやくる人もなし　（同）

雪消えばゑぐの若葉もつむべきに春さへ晴れぬみ山べの里　（詞花）

深くしも頼まざらなむ君ゆゑに雪ふみ分けて夜な〳〵ぞ行く　（同）

あらを田の去年（こぞ）の古跡の古よもぎいまは春べとひこばえにけり　（新古今）

人は来ず風に木の葉の散り果てて夜な〳〵虫は声弱るなり　（同）

片岡の雪間に根ざす若草のほのかに見てし人ぞ恋しき　（同）

蚊遣火の小夜更（さよふ）けがたの下こがれ苦しや我身人知れずのみ　（同）

由良のとを渡る舟人楫を絶え行方（ゆくへ）も知らぬ恋の道かも　（同）

我妹子が衣薄れて見えしよりたはれねせじと思ひ初めてき　（曾丹集）

待ちかねて妹やねむらむ冬の夜は深けにたりとも猶やゆかまし（同）

藤原道綱母

入道摂政まかりたりけるに、門をおそく開けければ、「立ちわづらひぬ」と言ひ入れて侍りければ

歎きつつひとり寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る　（拾遺）

曇る夜の月と我が身の行く末とおぼつかなさはいづれまされり　（後拾遺）

和泉式部

性空上人の許によみて遣はしける

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月　（拾遺）

小式部内侍なくなりて、孫どもの侍りけるを見てよみ侍りける

とどめ置きて誰を哀れと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり　（後拾遺）

敦道親王に後れてよみ侍りける

今はただそよその事と思ひ出でて忘るばかりの憂き事もがな

藤原倫寧の女。藤原兼家（東三条入道前摂政太政大臣）の寵を受け、天暦九年（九五五）道綱を生む。著書、「蜻蛉日記」は、兼家の愛情の変転に悩みながら、道綱の成長に生き甲斐を見出すまでの心の跡をたどった、平安朝女流文学の代表作である。

越前守大江雅致の女。母は越後守保衡の女。和泉守橘道真に嫁し小式部を生む。次いで弾正尹為尊親王・源雅通・道命阿闍利・敦道親王の愛を受ける。敦道親王薨後上東門院に仕え、後、藤原保昌の妻となって丹後に下る。

作品は家集「和泉式部集」の他「和泉式部日記」があり、敦道親王と

（後拾遺）

の恋愛生活を物語風に記している。

同じ頃、尼にならむと思ひてよみ侍りける

捨てはてむと思ふさへこそ悲しけれ君になれにし我が身と思へば　（同）

男の、はじめて人のもとに遣はしけるに、代りてよめる

おほめくな誰ともなくて宵々に夢に見えけむ我ぞその人　（同）

黒髪の乱れも知らずうち臥(ふ)せばまづかきやりし人ぞ恋しき　（同）

あらざらむ此の世のほかの思ひ出に今一度の逢ふこともがな　（同）

男に忘られて侍りける頃、貴船にまゐりて、みたらし川に螢の飛び侍りけるを見てよめる

もの思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂(たま)かとぞ見る　（同）

頼めたりける男を今や〳〵と待ちけるに、前なる竹の葉に霰の降りかかりけるを聞きてよめる

竹の葉に霰ふる夜はさらさらに独りは寝べき心地こそせね　（詞花）

弾正尹為尊親王におくれて、歎き侍りける比

ねざめする身を吹きとほす風の音を昔は袖のよそに聞きけん　（新古今）

題不ㇾ知

今日も又かくや伊吹のさしもぐささらば我のみ燃えや渡らん　（同）

枕だに知らねば言はじ見しまゝに君語るなよ春の夜の夢　（新古今）
見えもせむ見もせむ人を朝毎に起きては向ふ鏡ともがな　（新勅撰）
いかにせむいかにかすべき世の中を背けば悲し住めば恨めし　（玉葉）
つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り来むものならなくに　（和泉式部集）

心細き事のたまはせつるをと心乱れて

現にて思へば言はむかたもなし今宵のことを夢になさばや　（同）
思ひきやありて忘れぬおのが身を君がかたみになさむものとは　（和泉式部続集）
ひたすらに別れし人のいかなれば胸にとまれる心地のみする　（同）
いづこにと君を知らねば思ひやるかたなくものぞ悲しかりける　（同）

儀同三司母

中関白通ひ初め侍りけるころ

忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともがな　（新古今）

赤染衛門

中の関白、少将に侍りける時、はらからなる人に物言ひわた

高階貴子。従二位成忠の女。中関白藤原道隆の室。藤原伊周（儀同三司）・定子（一条天皇の后）の母。円融天皇の内侍となり高内侍とも称せられる。従三位。

赤染時用の女。藤原道長の妻倫子に仕え、上東門院（道長の女）に仕えた。大江匡衡に嫁し、挙周

り侍りけり。頼めて来ざりける翌朝、女にかはりてよめる

やすらはで寝なましものをさ夜ふけて傾くまでの月を見しかな　（後拾遺）

たのみ侍りける人におくれて後、初瀬に詣でて、夜泊りたりけるところに草をむすびて、「枕にせよ」とて、人のたびて侍りければよみ侍りける

ありし世の旅は旅ともあらざりき独り露けき草枕かな　（新古今）

大江挙周、はじめて殿上ゆるされて、草深き庭に下りて拝しけるをみ侍りて

草分けて立ちぬる袖のうれしさに絶えず涙の露ぞこぼるる　（同）

和泉式部、道貞に忘られて後、程なく敦道親王通ふときききてつかはしける

うつろはでしばし信太の杜を見よかへりもぞする葛のうら風　（同）

清少納言

大納言行成、物語などし侍りけるに、内の物忌にこもればとて急ぎ帰りて、翌朝「鳥の声にもよほされて」といひおこせて侍りければ「夜深かりける鳥の声は函谷関のことにや」といひ遣はしたりけるを、立ち帰り「これは逢坂の関に侍り」

を生む。温厚な人柄で、同僚からも信頼されていたらしい。梨壺五歌仙・中古三十六歌仙。赤染衛門集がある。栄華物語（藤原氏全盛時代の歴史を小説風に書いた）の作者かといわれる。

清原元輔の女。和漢の学問に通じ、一条天皇の皇后定子（道隆の女）に仕えて寵遇を受け、宮廷に於て才女の名を擅にした。晩年は明かでないが、道隆一門の衰微、定子の出家・崩御に逢い、不幸で

とあれば、よみ侍りける

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ　（後拾遺）

紫式部（むらさきしきぶ）

亡せにける人の文の、物の中なるを見出でて、其のゆかりなる人のもとにつかはしける

暮れぬまの身をば思はで人の世のあはれを知るぞ且ははかなき　（新古今）

年暮れて我がよふけゆく風の音に心のうちの冷（すさま）じきかな（紫式部日記）

行尊（ぎょうそん）

閑中春雨といふ事を

あったと思われる。「枕草子」は、豊な感覚と才気にあふれた随筆として出色。他に「清少納言集」がある。上の歌は「枕草子」（一三六）にも記載がある。

越後守藤原為時の女。藤原宣孝の妻となって、大弐三位を生む。夫の死後、上東門院（一条天皇中宮彰子）に仕え、その学識文才は清少納言と並び称された。著書源氏物語は中古貴族文学の頂点を示すばかりでなく、日本古典文学の代表の一として世界的に有名である。「紫式部日記」は中宮の御産を中心に、宮廷生活を描き、又、女官達に対する人物評論などもある。

（一〇五五―一一三五）参議源基平の子。右大臣頼宗に養われ、大

つく〴〵と春のながめの淋しきは忍ぶに伝ふ軒の玉水　（新今古）

藤原顕輔（あきすけ）

崇徳院に百首歌たてまつりけるに

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出づる月の影のさやけさ　（新古今）

能因（のういん）

正月ばかりに津の国に侍りける頃、人のもとに言ひ遣はしける

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを　（後拾遺）

山里にまかりてよみ侍りける

山里の春の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける　（新古今）

陸奥国（みちのくに）にまかりける時、よみはべりける

夕されば潮風こして陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり　（同）

僧正明尊・大僧正覚円の弟子となる。園城寺長吏、天王寺別当、四四代天台座主を経て大僧正となる。行尊大僧正集がある。

（一〇八九―一一五五）　修理大夫顕季の三男。非参議正三位左京大夫となる。詞花集の撰者。左京大夫顕輔卿集がある。

俗名橘永愷（ながやす）。出家して摂津古曽部に住み、古曽部入道と号した。歌を長能に学ぶ。これが、師の歌風を伝える傾向を世に起したはじめという。中古三十六歌仙、玄々集・能因歌枕・能因法師集がある。

源　俊頼（みなもとのとしより）

水風暮涼といへる事をよめる

風吹けば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの声　（金葉）

うづら鳴く真野の入江の浜風に尾花なみ寄る秋の夕暮　（同）

湖みてば野島が崎の小百合葉に浪越す風の吹かぬ日ぞなき　（千載）

日暮るれば逢ふ人もなしまさ木散る峯の嵐の音ばかりして　（同）

（—一一二九？）大納言経信の子。少将を経て木工頭となる。金葉集の撰者。「俊頼口伝」・「散木奇歌集」がある。

崇徳院（すとくゐん）

いつしかと荻の葉向（はむけ）の片よりにそそや秋とぞ風も聞ゆる　（新古今）

うたた寝は荻吹く風におどろけど長き夢路ぞ覚むる時なき　（同）

夢の世に馴れ来し契り朽ちずしてさめむあしたに逢ふこともがな　（玉葉）

思ひやれ都はるかにおきつ浪たちへだてたる心細さを　（風雅）

御軍（いくさ）やぶれて後御髪おろさせ給ひて

思ひきや身を浮雲となしはてて嵐の風に任すべしとは　（保元物語）

憂き事のまどろむ程は忘られて覚（さ）むれば夢の心地こそすれ　（同）

蔵人右少弁資長仁和寺にまゐりて讃岐に遷（うつ）しまゐらすべきよ

（一一一九—一一六四）諱は顕仁。第七五代天皇。鳥羽院第一皇子。御母待賢門院。皇位継承問題に、藤原氏の権力争いがからみ、当時抬頭して来た武士の実力が双方に加わったため、保元元年（一一五六）京都に戦乱が起った。保元の乱である。結果は崇徳上皇方の敗北に終り、上皇は出家して讃岐に遷御、四六才で其処に崩ぜられた。

し聞え奉りしとき

都には今宵ばかりぞ住の江のきし道おりぬいかで罪見し　（保元物語）

讃岐国松山といふにおはしまして

浜千鳥あとは都にかよへども身は松山に音（ね）をのみぞ泣く　（同）

俊恵（しゅんえ）法師

俊頼の子。近衛天皇頃の人。鴨長明の歌の師。「歌苑集」・「林葉和歌集」がある。

夜もすがらもの思ふ頃は明けやらぬ閨（ねや）の隙さへつれなかりけり　（千載）

春といへば霞みにけりな昨日まで浪間に見えし淡路島山　（新古今）

源頼政（みなもとのよりまさ）

（一一〇四—一一八〇）兵庫頭仲正の子。保元・平治の乱に功があったが余り報いられず、非参議従三位で治承三年出家。翌四年、以仁（もちひと）王を奉じて平家追討を図り、敗れて宇治で自刃した。

庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな　（新古今）

今夜誰すず吹く風を身にしめて吉野の嶽の月を見るらん　（同）

平忠度（たひらのただのり）

（一一四四—一一八四）清盛の弟正四位下薩摩守。歌を俊成に学ぶ。一谷合戦で戦死。

さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな　（千載）

行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主（あるじ）ならまし　（平家物語）

平康頼（たいらのやすより）

薩摩潟沖の小島に我ありと親には告げよ八重の潮風　（千載）

思ひやれしばしと思ふ旅だにもなほふるさとは恋しきものを　（玉葉）

藤原実定（ふじはらのさねさだ）

暁に郭公を聞くと言へる心を詠み侍りけるに

時鳥（ほととぎす）鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる　（千載）

なごの海の霞の間（ま）より眺むれば入る日を洗ふ沖つ白浪　（新古今）

夕されば荻のはむけを吹く風にことぞともなく涙おちけり　（同）

夕凪に門（と）渡る千鳥浪間より見ゆる小島の雲に消えぬる　（同）

（今様）

①ふるき都を来て見れば浅茅が原とぞ荒れにける
月の光はくまなくて秋風のみぞ身にはしむ　（平家物語）

安元の頃、鹿ケ谷で平家打倒の密議に参加し、捕えられて俊寛・丹（たん）波（は）成経と共に鬼界ケ島に流された。この歌は、配所で故郷への慕情を卒都婆に書いて流したものと伝えられる。治承二年、赦されて都にもどり出家した。日本・中国・印度の説話を採録した「宝物集（ほうぶつしゅう）」は彼の著作といわれる。

（一一三九―一一九一）　大炊御門右大臣公能の子。母は中納言俊忠の女。正二位左大臣となる。後徳大寺左大臣と称す。建久二年出家して如円という。同年歿。西行とは和歌の友であった。「林家集」がある。

①平家一門が安徳天皇を擁して福原に遷都した後、京都の秋をなつかしんで、姉の大宮を訪ねた。その時詠唱したものという。

小侍従

見し夢の覚めぬやがてのうつつにて今日と頼めし暮を待たばや　（千載）

待つ宵に更け行く鐘の声きけば飽かぬ別れの鳥はものかは　（新古今）

つらきをも恨みぬ我にならふなよ憂き身を知らぬ人もこそあれ　（同）

しきみ摘む山路の露にぬれにけり暁起きの墨染の袖　（同）

八幡別当光清の女。太皇太后宮多子（近衛天皇の后藤原公能の女）に仕え、待宵小侍従とも言われた。「小侍従集」がある。

藤原俊成

摂政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて

過ぎぬるか夜半の寝ざめの郭公声は枕にある心地して　（千載）

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里　（同）

石ばしる水の白玉数見えて清滝川に澄める月影　（同）

さりともと思ふ心も虫の音も弱りはてぬる秋の暮かな　（同）

まばらなる槇の板屋に音はして漏らぬ時雨や木の葉なるらむ　（同）

浦づたふ磯の苫屋の梶枕聞きもならはぬ波の音かな　（同）

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる　（同）

駒とめて猶水かはん山ぶきの花の露そふゐでの玉川　（新古今）

入道前関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りける

（一一一四―一二〇四）　権中納言俊忠の子。母は敦家朝臣の女。非参議正三位皇太后宮大夫となる。安元二年出家して法名を釈阿という。歌を基俊に学び、作風は幽玄の趣を旨とした。此の風はやがて新古今調に発展し、中世の美の感覚の基礎となるものである。正治奏状・古来風体抄・万時・長秋詠藻等がある。

郭公歌

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山郭公(やまほととぎす)　(同)

雨そそぐ花橘に風過ぎて山ほととぎす雲に鳴くなり　(同)

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

雪降れば峯のまさかきうづもれて月にみがける天の香具山　(同)

千五百番歌合に

けふごとに今日や限りと惜しめども又も今年にあひにけるかな　(同)

祝ひの心をよみ侍りける

君が世は千代ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなければ　(同)

母の思ひに侍りける秋、法輪寺に籠りて、嵐のいたく吹きければ

浮世には今は嵐の山風にこれや馴れゆくはじめなるらん　(同)

定家朝臣母みまかりてのち、秋の比、墓所ちかき堂にとまりて詠み侍りける

まれに来る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらん　(同)

老いぬとも又も逢はんと逝く年に涙の玉を手向(たむ)けつるかな　(同)

勝命(しょうみょう)法師

藤原憲親。美乃権守。安徳・後鳥羽天皇頃の人。

清輔朝臣のもとにて、雨中苗代といふ事をよめる
雨降れば小田のますらをいとまあれや苗代水を空に任(まか)せて　（新古今）

西行(さいぎやう)法師

（一一一八—一一九〇）俗名佐藤義清(のりきよ)。はじめ徳大寺実能の随身となり、後、鳥羽上皇の北面の武士として兵衛尉となるが、二三才の時出家した。動機に種々伝説があるが、不明。法名円位。西行と号す。高野山で修業し、晩年は四国・熊野・伊勢・奥州などを行脚、吉野にしばらく住んでいたこともあり、諸国に西行に関する伝説が多い。俊成と親交があった。歌風は、中央の歌壇のそれとはなはだしい差はないが、自由で素直な感じ方、詠み方は独特なものである。御裳濯川歌合・宮河歌合・山家集がある。

(1)歎けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな　（千載）
花にそむ心のいかで残りけむ捨てはてにきと思ふわが身に　（同）
岩間閉ぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水道もとむらん　（新古今）
　花の歌とてよみ侍りける
吉野山去年(こぞ)のしをりの道変へてまだ見ぬ方の花を尋ねん　（同）
　だいしらず
道の辺に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ　（同）
よられつる野もせの草のかげろひて涼しくくもる夕立の空　（同）
あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬ宮城野(みやぎの)の原　（同）
(2)心無き身にもあはれは知られけり鴫(しぎ)立つ沢の秋の夕暮　（同）
小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな　（同）
蟋蟀(きりぎりす)夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく　（同）
津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり　（同）

淋しさに堪へたる人の又もあれな庵ならべむ冬の山里　（同）

みちの国へまかりける野中に、目に立つ様なる塚の侍りけるを、問はせ侍りければ、「これなん中将の塚と申す」と答へければ、「中将とはいづれの人ぞ」と問ひ侍りければ、「実方朝臣の事」となん申しけるに、冬の事にて、霜枯の薄ほのぐ見え渡りて、折ふし物悲しう覚え侍りければ

朽ちもせぬ其の名ばかりを留め置きて枯野の薄形見にぞみる　（同）

みちのくにへまかりける人に、餞（はなむけ）し侍りけるに

君いなば月待つとてもながめやらん東（あづま）のかたの夕暮の空　（同）

遠き所に修行せんとて出でたち侍りけるに、人人別れを惜しみてよみ侍りける

たのめおかん君も心や慰むと帰らん事はいつとなくとも　（同）

数ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそは身をも恨みめ　（同）

③よしの山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん　（同）

しをりせで猶山深く分け入らん憂き事聞かぬ所ありやと　（同）

願はくは花の本にて春死なむその如月（きさらぎ）の望月の頃　（続古今）

真菅（ますげ）生ふる荒田に水をまかすればうれし顔にも鳴く蛙かな　（風雅）

庵に漏る月の影こそ寂しけれ山田は引板（ひた）の音ばかりして　（同）

①感動の源はすべて自己の内部に発するもので、対象は単に誘因となるにすぎないとの理を詠んだもの。

②喜怒哀楽の感情を超越した筈の世捨人でも、すべてが凋落していく秋の夕暮と、ふと飛立った鴫の可憐な生命との調和には感動を覚えずにはいられない。

③吉野山の住所は心に適ったから、このまま他所へは行くまいと思っているが、他人は「一所（ひとところ）にじっとして居られぬ西行のことだ、花が散ったら又動き出すさ」と待っているとことだろう。

④どんな栄華を尽くし、野望をとげても、死ねば一切空。此の世の執着を早く捨てて、静かに成仏なさいませ。崇徳院は、生前の恨みの為、地獄の魔王になったといわ

夕されや檜原の峯を越え行けばすごく聞こゆる山鳩の声　（山家集）

白峯と申しける所に御墓（崇徳院）の侍りけるに詣りて

④よしや君昔の玉の床とてもかからむ後は何にかはせむ　（同）

土佐の方へ罷らましと思ひ立つ事侍りしに

ここをまた我住み憂くてうかれなば松はひとりにならむとすらむ　（山家集）

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ　（同）

梁塵秘抄

仏は常にいませども　現ならぬぞあはれなる　人の音せぬ暁に　ほのかに夢に見え給ふ

①万の仏の願よりも　千手の誓ぞたのもしき　枯れたる草木も忽ちに　花咲き実成ると説いたまふ

眉の間の白毫は　五つの須弥をぞ集めたる　眼の間の青蓮は　四大海をぞ湛へたる

れていた。

後白河法皇御撰の歌謡集。全二〇巻の内、現在伝えられているものは巻二及び巻一の一部分。平安朝末期の雑芸（民間芸能）の歌詞を集成したもので、仏教歌・神歌・民俗歌に大別される。徒然草に「梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、また、あはれなる事は多かめれ」とあり、平易な表現の中に庶民の詩とユーモアがあふれたこれらの歌は、遊女・傀儡子等に依って歌い伝えら

我等が宿世のめでたさは　釈迦牟尼仏の正法に　此の世に生れて人となり　一乗妙法きくぞかし

②仏も昔は人なりき　我等も終には仏なり　三身仏性具せる身と知らざりけるこそあはれなれ

暁静かに寝覚して　思へば涙ぞおさへあへぬ　はかなく此の世を過しても　いつかは浄土へ参るべき

熊野へ参らむと思へども　徒歩より参れば道遠し　すぐれて山きびし　馬にて参れば苦行ならず　空より参らむ羽たべ若王子

我が身は罪業重くして　終には泥犂へ入りなんず　入りぬべし　佉羅陀山なる地蔵こそ　毎日の暁に　必ず来りて訪うたまへ

③万劫年経る亀山の　下は泉の深ければ　苔生す岩屋に松生ひて梢に鶴こそ遊ぶなれ

れ、貴族・武士階級の人々にも愛好されたものである。

①平家物語中、鬼界ヶ島に流された康頼の夢に官女が現れて歌った歌はこれの同類、第四節が「花咲き実成るとこそ聞け」とある。

②平家物語中、妓王が歌った歌はこれの変形であろう。第四節「(具せる身を)へだつるのみこそ悲しけれ。」

③鶴亀を歌い込んで祝意をこめたものは他に多くあり、平家物語に、仏御前が清盛の為に歌ったと記されているものは、

　君をはじめて見る時は
　千代も経ぬべし姫小松
　お前の池なる亀岡に
　鶴こそ群れ居て遊ぶめれ

である。これらには定まった作者がなく、歌い手が自由に詞章を変

えて、其の時の心持や雰囲気に応じたのである。

筑紫の門司の関　関の関守老いにけり　鬢白し　何とて据ゑたる関の関屋の関守なれば　年の行くをば留めざるらん

よくよくめでたく舞うものは　巫　小楢葉車の筒とかや　やちくま侏儒舞手傀儡　花の園には蝶小鳥

百日百夜は独り寝と　人の夜夫はいなじせうに　欲しからず　宵より夜半まではよけれども　暁鶏鳴けば床さびし

我を頼めて来ぬ男　角三つ生いたる鬼になれ　さて人に疎まれよ　霜雪霰降る水田の鳥となれ　さて足冷かれ　池の萍となりねかし　と揺りかう揺り揺られ歩け

冠者の妻設に来んけるは　かまへて二夜は寝にけるは　三夜といふ夜の夜半ばかりの暁に　袴取して逃げにけるは

御厩の隅なる飼猿は　絆はなれてさぞ遊ぶ　木にのぼり　常盤の山なる楢柴は　風の吹くにぞ　ちうとろ揺ぎて裏返る

遊びをせんとや生れけむ　戯れせんとや生れけん　遊ぶ子供の声きけば　我が身さへこそ動(ゆる)がるれ

媼が子供は唯二人　一人の女子は二位中将殿の厨雑仕に召ししかば　奉(たてま)てき　弟の男子は　宇治の大宮司が　早船舟子に乞ひしかば　奉(また)いてき　神も仏も御覧ぜよ　何を崇りたまふ若宮の御前ぞ

我が子は十余に成りぬらん　巫(かうなぎ)してこそ歩くなれ　田子の浦に汐ふむと　いかに海人集(つど)ふらん　正(まさ)しとて　問いみ問はずみ嬲るらん　いとをしや

わが子は二十になりぬらん　博打(ばくち)してこそ歩くなれ　国々の博党にさすがに子なれば憎かなし　負(まか)ひたまふな　王子の住吉西の宮

媼の子供の有様は　冠者は博打の打負や　勝つ世なし　禅師は夙(まだき)に夜行好むめり　姫が心のしどけなければ　いとわびし

山城茄子(なすび)は老ひにけり　採(と)らで久しくなりにけり　あこかみたり

さりとてそれをば捨つべきか　措いたれ〳〵種採らむ

尼はかくこそ候へど　大安寺の一万法師も伯父ぞかし　甥もあり
東大寺にも修学して子を持たり　雨気の候へば　物も着で参りけり

茨こきの下にこそ　鼬が笛吹き猿奏で　かい奏で　蟲螽麿めて拍子
つく　たて蟋蟀は　鉦鼓の〳〵好き上手

滝は多かれど　嬉しやとぞ思ふ　鳴る滝の水　日は照るとも絶えで
とふたり　やれことつとう

舞へ舞へ蝸牛　舞はぬものならば　馬の子や牛の子に蹴させてん
踏破せてん　真に美しく舞うたらば　華の園まで遊ばせん

聖をたてじはや　袈裟を掛けじはや　珠数を持たじはや　年の若き
折戯せん

ゐよゐよ蜻蛉よ　牛足をまいらんさて居たれ　働かで　簾篠の先に

馬の尾縒合せて掻附けて　童冠者ばらに繰らせて遊ばせん

いざれ独楽　鳥羽の城南寺の祭見に　我は罷らじ恐ろしや　懲り果てぬ　作り道や四塚に　焦心る上馬の多かるに

後鳥羽上皇

はるのはじめのうた

ほの〴〵と春こそ空にきにけらし天の香具山霞たなびく　（新古今）

をのこ共、詩を作りて歌に合はせ侍りしに水郷春望といふ事を

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋と何思ひけん　（同）

最勝四天王院の障子に、吉野山書きたる所

み吉野の高ねの桜散りにけり嵐も白き春のあけぼの　（同）

住吉歌合に、山を

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん　（同）

高倉院第四皇子。御母は七条院（贈左大臣藤原信隆の女）第八二代の天皇。諱は尊成。寿永二年受禅。建久九年譲位院政。承久三年討幕を計画されたが失敗し、隠岐に遷御された。（承久の変）出家して法諱良然。延応元年（一二三九）二月二二日崩御。六〇才。和歌の道に熱心で、和歌所を再興し水無瀬・宇治に離宮を造営、しばしば幸されて和歌の会を催された。定家・家隆らを中心とする新古今調の象徴的抒情詩は此所を舞台として完成。新古今集撰集を親裁。後鳥羽院御口伝・後鳥羽院御集がある。

寂(じゃく)蓮(れん)

五十首歌たてまつりし時

暮れて行く春の湊(みなと)は知らねども霞におつる宇治の柴舟　(新古今)

題知らず

寂しさは其の色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮　(同)

五十首歌たてまつりし時

村雨の露もまだ干ぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋の夕ぐれ　(同)

(――一二〇二)　藤原氏。俊成の兄弟阿闍梨俊海の子。俊成に養われたが、俊成に成家・定家が生れた後出家。和歌所寄人となり、新古今和歌集撰者の一人である。歌風は幽玄静寂の美を表現するものである。寂蓮法師集（歌集）がある。

藤原清輔(きよすけ)

冬枯の森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影の寒けさ　(新古今)

ながらへば又此の頃やしのばれん憂しと見し世ぞ今は恋しき　(同)

左京大夫顕輔の子。太皇太后大進正四位下となる。六条派の歌人で二条天皇の勅により続詞花集を撰したが、崩御の為、勅撰集とならなかった。袋草子・奥儀抄・和歌初学抄・清輔朝臣集がある。

藤原忠良(ただよし)

千五百番歌合に

夕づく日さすや庵の柴のとに淋しくもあるかひぐらしの声　(新古今)

(一一六四―一二二五)　六条摂政基実の二男。母は顕輔の女。正二位大納言となる。鳴滝大納言と称す。承久三年出家。

藤原秀能（ふじはらのひでよし）

夕月夜潮満ち来らし難波江の葦の若葉に越ゆる白浪　（新古今）

父秀宗身まかりての秋、寄ㇾ風懐ㇾ旧といふことをよみ侍りける

露をだにいまはかたみの藤衣あだにも袖を吹くあらしかな　（同）

（一一八四―一二四〇）従五位下河内守秀宗の子。はじめ土御門内大臣通親に仕え、後、後鳥羽院北面の武士となる。従五位上出羽守。院に認められて和歌所寄人（よりうど）となり、承久の変の折には院方の大将となったが、院方は敗北。後熊野で出家して如願といった。如願法師集がある。

鎌倉・室町時代の歌

鎌倉・室町時代の歌

平安時代末期、政治の矛盾、富の偏在は、社会秩序の混乱という形で表面化し、実際に土地を管理し、中央貴族の政治を代行していた地方の実力者、即ち豪族らが、私兵を養って抬頭し、ついに中央の政変に参加して、政界を牛耳ることとなる。平清盛は太政大臣となり、源頼朝は鎌倉に幕府を開いて天下に号令する。北条氏が執権としてこれをつぎ、この間、後鳥羽上皇を中心とする旧貴族、後に後醍醐天皇を中心とする旧貴族の政権奪還の活動があるが、いずれも果さず、足利氏が京都室町に幕府を置いて、武士中心の政治が長く我が国の経済や文化をも規定していく。いわゆる封建時代の前期ともいうべきものが、鎌倉・室町時代である。詩歌の特徴としては、武士や僧侶が、前時代末より作者として参加しているが、いずれもその作風は旧貴族のものであり、朝廷中心の雰囲気を持つ。詩歌の指導者は依然として旧貴族だったのである。彼らの精神は貴族全盛時代への追憶に閉じこもり、有為転変の無常観に圧倒されて居り、あまつさえ朱子学の伝来は、教養人達に人間本来の生々しい慾求を表現することをはばからせてしまった。従って新しい時代の息吹を盛ったものは、文学の本流には無く、のみならず、詩歌を職業とする貴族は、家門保全の策から「古今伝授」などという作歌上の諸制約を作って指導した為、和歌を個性のない、血の通わぬものにしてしまった。その結果、それら諸制約と生活感情とのずれを補う手段として、連歌が生れ、俳諧連歌が行われて、近世俳諧の母胎となる。又、民間に田植歌や、遊里を中心として小歌が盛になり、庶民生活の向上と共に、歌も又、身分・富・教養にかかわりなく、ひろく一般に親しまれるものとなった。

藤原定家（さだいへ）

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

春の夜の夢の浮橋とだえして嶺に分るゝ横雲の空　（新古今）

守覚法親王家五十首歌に

大空は梅のにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月　（同）

西行法師、すすめて、百首歌よませ侍りけるに

見渡せば花も紅葉も無かりけり浦の苫屋の秋の夕暮　（同）

百首歌たてまつりし時

駒とめて袖打はらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮　（同）

母みまかりける秋、野分しける日、もと住み侍りける所にまかりて

たまゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風　（同）

旅歌とてよめる

旅人の袖吹き返す秋風に夕日淋しき山のかけはし　（同）

（一一六二―一二四一）俊成三男。母は前若狭守藤原親忠の女。権中納言正二位となり、天福元年（一二三三）出家。法名明静。歌才を後鳥羽院に認められ、良経・家隆・寂蓮らの支持を得て、いわゆる新古今調と称される象徴的歌風を確立した。和歌所寄人。新古今・新勅撰両和歌集の撰者。古今集・源氏物語等古典校勘の他、連歌も作り、明月記（日記）・顕註密勘・二四代集・詠歌大概・毎月抄・近代秀歌・拾遺愚草等、著書が多い。

藤原家隆（いへたか）

霞たつ末の松山ほのぼのと浪にはなるるよこ雲の空　（新古今）

（一一五八―一二三七）光隆の子。法名仏性。寂蓮の婿となり、歌を俊成に学ぶ。新古今集撰者の一

寛喜元年女御入内の屏風

風そよぐならの小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける　（新勅撰）

述懐の歌あまた詠み侍りし時

何か残る君が恵みの絶えしより谷の古木の朽ちも果てなで　（壬二集）

秋の野と成り行く庭に飛ぶ蝶も音にこそたてね物や悲しき　（同）

式子内親王

百首歌奉りし時、春の歌

山深み春とも知らぬ松の戸に絶々かかる雪の玉水　（新古今）

窓ちかき竹の葉すさぶ風の音にいとど短きうたゝ寝の夢　（同）

百首歌たてまつりしに

日数ふる雪げにまさる炭竈の煙もさびし大原の里　（同）

百首歌の中に忍恋

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶる事の弱りもぞする　（同）

俊成女

人。家集「壬二集」歌論書「家隆卿口伝抄」などがある。

前斎院准三后。後白河院皇女。御母高倉三位成子。平治元年より嘉応元年まで賀茂斎院。建久八年出家して法名承如法。宮内卿・俊成女と共に三才女と称せられた。式子内親王家集がある。

実は俊成の娘の娘で即ち孫であるが、俊成の子として育てられた。

千五百番歌合に

風かよふ寝覚の袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢　（新古今）

橘のにほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする　（同）

通ひこし宿の道芝かれがれに跡なき霜のむすぼほれつつ　（同）

夢かとよ見し面かげも契りしも忘れずながら現（うつつ）ならねば　（同）

思ひ寝の夢よりほかに道もなき心のかよふまぼろしもがな　（続後撰）

父は尾張守盛頼。後鳥羽院に仕えて、宮内卿と共に歌才を称えられた。越部禅尼消息・俊成卿女集がある。

宮内卿（くないきやう）

うすく濃き野べの緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え　（新古今）

五十首歌たてまつりし中に湖上花を

花さそふひらの山風吹きにけり漕ぎゆく舟の跡みゆるまで　（同）

聞くやいかに上（うは）の空なる風だにも松に音する習（なら）ひありとは　（同）

賤（しづ）がふくあやめの末をたよりにて棲所（すみか）ならぶる軒のささがに（蜘蛛）　（玉葉）

右京権大夫源師光の女。後鳥羽院に仕えた。俊成の女と並ぶ閨秀歌人で、又絵にも優れていた。

藤原良経（よしつね）

和歌所歌合に、関路秋風といふ事を

み吉野は山も霞みて白雪の降りにし里に春は来にけり　（新古今）

後法性寺九条入道前関白（兼実）の二男。母は藤原季行の女。元久三年（一二〇六）三月歿。三八才。摂政。従一位。後京極殿と称す。

空はなほ霞みもやらず風さえて雪解にくもる春の夜の月　（新古今）
きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき独りかも寝む　（同）
人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後は只秋の風　（同）
浮き沈み来む世はさてもいかにぞと心にとひて答へかねぬる　（同）
我ながら心の果を知らぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき　（同）

土御門院

吹く風の目に見ぬかたを都にて忍ぶも苦し夕暮の空　（続古今）
いとどまた跡なき庭となりぬらむ払ふ人なき雪の故郷　（土御門御集）
暁の鴫の羽がきかきもあへじ吾が思ふことの数を知らせば　（同）
かゞみ野や誰が偽の名のみして恋ふる都の影もうつらず　（同）
暁を憂しと思ひし吾しもぞ今年はいたく寝覚がちなる　（同）
浦々に寄するさ浪にこと問はむおきの事こそ聞かまほしけれ　（承久記）

順徳院

百敷や古き軒端の忍ぶにもなほあまりある昔なりけり　（続後撰）
入日さす峯の浮雲たな引きてはるかにかへる鳥の一声　（風雅）

新古今集仮名序の作者。殿記・秋篠月清集がある。和歌に熱心であった。

（一一九五―一二三一）第八三代天皇。後鳥羽天皇の第一皇子。御名為仁。建久九年即位。在位一三年で、承元四年、弟の順徳天皇に譲位。承久の変の後、土佐次いで阿波に遷され、その地に崩ぜられた。都をしのび、隠岐の父帝を思いやられる歌が多い。

（一一九七―一二四二）第八四代天皇。後鳥羽天皇第三皇子。御名守成。承元四年即位、在位一一年。承久の変によって佐渡に遷され、

いかならむ明日に心を慰めて昨日も今日もすぐす頃かな　（順徳院御集）

山里のそともの竹を吹く風に夕日涼しき日ぐらしの声　（同）

暮れかかる新島守は霜の袖こほりな果てそ忘れがたみに　（順徳院御集拾遺）

消えかぬる命ぞつらき同じ世にあるも頼みはかけぬ契りを　（同）

源実朝（みなもとのさねとも）

今朝みれば山も霞みて久方の天の原より春はきにけり　（金槐）

吹く風の涼しくもあるか自（おのづか）ら山の蟬鳴きて秋はきにけり　（同）

もののふの矢並（やなみ）つくろふ籠手（こて）の上に霰（あられ）たばしる那須（なす）の篠原（しのはら）　（同）

雪降（ふり）てけふとも知らぬ奥山に炭やく翁あはれはかなみ　（同）

奥山のいはがき沼に木の葉落ちて沈める心人知るらめや　（同）

わが背子を待乳（まつち）の山の葛（くず）かづらたまさかにだにくるよしもがな　（同）

浜へ出でたりしに海士（あま）の藻汐火（もしほび）をみて

いつもかく寂しきものか葦の屋にたきすさびたる蜑（あま）の藻汐火　（同）

我のみぞ恋しとは思ふ波のよる山のひたひに雪の降れゝば　（同）

世の中はつねにもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも　（同）

箱根の山をうち出て見れば波のよる小島あり。供の者に此の

二二年の後其の地に崩ぜらる。撰集「八雲御抄」歌集「順徳院御百首」「順徳院御集」等がある。

（一一九二—一二一九）頼朝の第二子。鎌倉幕府第三代将軍。右大臣にまで進んだが、執権北条氏に実権を握られ、自らは歌道の研究、歌人との友交を事とした。承久元年、兄頼家（修善寺で暗殺された）の子、公暁に殺害された。二八才。歌風は、新古今集・万葉集を範としたものが多い。

浦の名は知るやとたづねしかば伊豆の海となむ申すと答へ侍りしをききて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ　（金槐）

走湯山参詣の時

わたつ海のなかに向ひて出る湯のいづのお山とむべもいひけり（同）

懺悔歌

塔をくみ堂をつくるも人なげき懺悔にまさる功徳やはある（同）

思二罪業一歌

炎のみ虚空にみてる阿鼻地獄行方もなしといふもはかなし（同）

心の心をよめる

神といひ仏といふも世中の人の心のほかのものかは（同）

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも（同）

相州の土屋と云ふ所に年九十にあまれる朽法師あり、おのづから来り、昔語などせしついでに、身の起居に堪へずなむ成りぬる事を、泣く〳〵申して出でぬ。時に老といふ事を人々に仰せてつかうまつらせし次によみ侍りし

道遠し腰は二重にかがまれり杖にすがりてここまでも来る（同）

さりともと思ふ物から日を経ては次第々々に弱るかなしき （同）

あら磯に浪のよるを見てよめる

大海(おほうみ)の磯もとゞろによする波われてくだけて裂けて散るかも （同）

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを、そのあたりの人に尋ねしかば、父母なむ身まかりにしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をたづぬる （同）

慈悲の心を

物いはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかな親の子を思ふ （同）

建暦元年七月洪水天を漫(ひた)す、土民愁歎(うれひなげ)きせむ事を思ひて、一人本尊に向ひ奉りて聊(いささ)か念を致すと云

時により過(す)ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ （同）

京極為兼(きやうごくためかね)

（一二五四—一三三二） 藤原為家の孫。玉葉集の撰者。為兼卿家集・為兼卿和歌抄・為兼卿家歌合等がある。

いづくよりおくともしらぬ白露のくるれば草のうへにみゆらむ （玉葉）

言のはに出でし恨は尽きはてて心にこむるうさになりぬる （同）

波のうへにうつる夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり （同）

一しきり吹きみだしつる風はやみて誘はぬ花も長閑(のどか)にぞ散る （風雅）

庭のむしは鳴きとまりぬる雨の夜の壁に音するきりぎりすかな　（同）

永福門院（えいふくもんゐん）

鳥の声轉りつくす春日影くらしがたみに物をこそ思へ　（玉葉）

群雀（むらすずめ）声する竹にうつる日の影こそ秋の色になりぬれ　（風雅）

真萩散る庭の秋風身にしみて夕日の影ぞ壁に消え行く　（同）

此の暮の心も知らでいたづらによそにもあるか我が思ふ人　（同）

後村上院（ごむらかみゐん）

都をもおなじひかりと思はずば旅寝の月をたへて見ましや　（新葉）

鳥のねにおどろかされて暁のねざめしづかに世を思ふ哉　（同）

百首歌よませ給うて、前大納言為定もとへつかはされける中に

あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉をひろふ世もがな　（同）

百首歌よませ給うける中に

つかふべき人やのこると山ふかみ松のとざしも猶ぞたづねん　（同）

うへのをのこども歌合し侍りける次（ついで）に、思ニ往事一といふ事をよませ給うける

（一二七一―一三四二）　伏見天皇の中宮。名は鏡子。太政大臣西園寺実兼の娘。正応元年入内。永仁六年院号宣下、永福門院と称し、後出家して真如源と号す。

（一三二八―一三六八）　第九七代天皇。名は義良。後醍醐天皇の皇子。延元四年、吉野行宮（あんぐう）で即位。足利氏の勢力の消長につれ、賀名生（あなふ）・京都・男山等に遷御された。在位三〇年、父帝の志をつぎ、南朝の興隆に努められ、吉野で崩御。歌は「新葉和歌集」に百首収められている。

忘ればや忍ぶもくるしかずくに思ひ出でてもかへりこぬ世を　（新葉）

宗良親王（むねながしんのう）

後醍醐天皇の皇子。征夷将軍に任ぜられ（一三五二）、各地に転戦。後、吉野に還り、歌集「新葉和歌集」を編す（一三八一）。天中二年薨去。年七三。

帰る雁（かり）なに急ぐらん思出もなき古郷（ふるさと）の山としらずや　（新葉）

こしの国に侍りし比、羈中百首歌よみて、都なる人の許へつかはし侍りし中に、初冬を

都にも時雨やすらん越路（こしぢ）には雪こそ冬の始なりけれ　（同）

元弘二年三月とほき方におもむかん事も、ただ今日明日ばかりなり侍りしに、雨さへ降り暮していとど心細さもたぐひなく覚え侍りしかば

憂きほどはさのみ涙のあらばこそ我が袖ぬらせよその村雨　（同）

あづまのかたに、ひさしく侍りし、ひたすらもののふの道にたづさはりつつ、征東将軍の宣旨など下されしも、思ひの外なるやうに覚えて、詠み侍りし

思ひきや手もふれざりしあづさ弓起き伏し我が身馴れん物とは　（同）

田植草子

酒来る時の歌

酒は来る肴は何か萵苣の葉
　萵苣の葉を酢和へにあへては御肴
酒の肴に麻の辺の萵苣の葉
酒の肴に五条へ参れ萵苣の葉

今日の田人に酒を参らせうやれ
　いざ参らせうやれ千代の御杯に
ひとつ参れや是おち酒の壺底
酌を取らせて参れや加賀の菊酒
酒の肴に京早生豆の塩打

三ばいに御酒参らせうや良い酒
　長柄の銚子に千代の御杯に
三ばいの御酒を参るは長柄の銚子に三つとや

農耕神事に関する歌謡は、我が国歌謡の始源の一つで、而も今日各地で歌われている。田植草子は、中世初期の頃、ほぼ形の定まった田植行事（囃田・花田植など）の歌を書きとめたものである。

朝歌・昼歌・酒の歌・晩歌・あがり歌と、作業にともなった歌の進行があり、ササラ太鼓・調子鉦・横笛で囃しつつ、田の神の司祭者で、同時に田植作業の進行係であるサンバイが、早乙女と共に歌う。内容は、豊作を祈願する心、歴史上の有名な人物や事件、庶民の日常生活の中、興味ある事柄（男女の情愛とか）を扱い、特に固苦しい約束は無く、随時、即興の詞を交えるのが普通である。

田歌は此の他にも、各地方に伝承されているものが多い。

三ばいの御酒を参るは砂田へ水の引く田
ちりやれ〳〵と濁り酒にちりあれ
　ちりあらばな飲うぞや我郎等が舞ふぞ
飲うで酔はぬは皆買酒の習か
安い酒やれ五文に酒は八提げ
水臭いのは稲取酒の習か
参れ〳〵と強ひるは田酒の習か

　　晩歌四番

大磯の虎御前は恋に沈うだり
　曽我の十郎参する恋の慰みに
虎御前恋をば止めて参らせう
恋には歌が詠まれて
何と虎御前何時見て我を恋るか
白い小袖に麝香移いたり
　くる原御寮と寝て移いたり

麝香薫物移れや袖の匂ひに
何と言ふとも忘れぬくる原御寮は
いつまでも忘れやらぬ寝乱れ髪の姿は

沖の浜の白石に貝添うたり
　忙しかろもの掻い添うたり
あやれ其方は愛しい顔のゑくぼや
ゑくぼに酸漿(ほほづき)添へいで
禿は好いもの鬢(びん)櫛毛抜要(い)らいで

忍ぶ殿のおりやるやろ裏の車戸が
　きりりきつと鳴る裏の車戸がな
忍ぶ殿御は狗犬(ゑのこいぬ)やら戸を明けかねて呻(うめ)いた
刀をば枕許に太刀(たち)をば屏風の折目に
忍び参らう何の間(ど)に君は御寝(およ)るか

唐糸の真糸を繰り合(や)へる所へ
　太郎殿の御座らば絡(からま)巻いて取り置け

からいとからからからからまいて取り置け
君に逢うては袖を引かれて
太郎殿の御座った程は無いもの

糸のもつれは解くとも
　人のもつれたをば得解かじ
解かじと思ふがもつれ合うたを
一具瓶子の並うだ仲の好さよや
仲が好いやら瓶子の酒が冷いた

愛しき桜花折り持ちて来いやれ
　閨の挿頭に折り持ちて来いやれ
花を何せう太刀こそ閨の挿頭よ
閨の挿頭にあの山中の桜を

地白の帷子は宵に着べいものやれ
　傾城早少女は宵には晴をやろうや
地白の帷子傾城こは目に迷うた

面白いぞや傾城こはめどはないて

向ひなる笹原は楼か主殿(しゆでん)造りか
　楼でもない主殿でもない然(さ)も寝好い笹原
畳より篠笹原が寝好うて
片敷寝たにも二人好いもの
忍ぶつまをあの笹原で落いた

日の暮に鴫こそ二つ西へ行く
　西にも池が有るげな
鴫が落ちつるあの山中の小池に
鴫が契るか声の高いは
二つ連れたる並うだ仲の好さよなう

日は暮れる行くや御前西の山端にな
　蓮華の花よ咲いて傾(こた)れ撓(たわ)うだ
咲いて散るらう西山寺の蓮華が
今日の日もはや山の端へかゝり給ふよ

極楽は十二にや御前我が植ゑし木はな
　松か竹か柳か我が植ゑし木はな
松の茂りにや海(わた)（原？）のはゝの暗いに
時鳥(ほととぎす)松に止るよ鷺鳥は呉竹(くれたけ)
番匠暗くは柿(こけら)を点(とぼ)いて

空色の檜扇に月の輪を画(か)いたと
　実(げ)に画いた殿ならば心憎い殿ぢや
画きも画いたよ白地の屛風に檜扇
愛(いっ)くしうても肌に添はぬは屛風に画いた絵女房
忍ぶ殿御が好うだ扇差された

筑紫船の船頭殿の夜寝言には
　盃は七つ天目八つに金(かね)は十六丁有り
犂(ねこ)が来るやろ傘差し掛けて艪(ろ)を押す
出でて見よかし此方の犂の証(しるし)を
犂の証(しるし)に数々宝を積まれた

能狂言の中に含まれている小歌の類。室町期に流行した歌謡が、原型に近い形や、少しく変形したものでとり入れられ、或はその狂言の為に作られたものなども混る。

狂言歌謡

「暁の明星」（鷺）より

暁の明星は、西へちろり東へちろりちろりちろり〳〵とする時は、扇おつ取り刀指いて太刀の柄に手打ちかけて、去なうよ戻ろよと云うては袂に取り付いた、去なうとも戻ろとも何とも其方の御はからひと云うては小腰に抱き付いた、最愛しにや限りりんの、きりりりん〳〵。限りりんの、きりりりんの、手も力も無い物を。

「節分」より　(一)

余りの徒然に、余りの徒然に、門に瓢箪吊いて、折節風が吹いて来て、彼方へちやきりひよ、此方へちやきりひよ、ひよ〳〵らひよ、瓢箪吊いて面白やなう。

「荘気」より

荘気したる物あり、張子の顔や塗り児、縮砂結びに篠結び、山科結びに風車、瓢箪に宿る山雀、胡桃に耽る友鳥、虎斑の狗、起揚がり小法師、振り鼓、手鞠や踊る鞠小弓。

「一の瀬」より

一の瀬殿は正体ない人で、得踊らぬ我に踊れと仰しやる、踊りて振を見せまゐらせう。くわんこ〱くわんこや、てれつくに〱、したんにたたんに、たつほゝ〱、たつほ〱たつほゝゐい、はらにはらに、ゐいきりにきりに、からりちんに、ひゆやに〱、ちやうらゝに、ひゆやに、ついや〱、ついやろに、ちやうらゝに、ひつ。

「いもあらひ」より

芋よ〱、殿御が愛ほし〱。雨土塊に叩かるゝ、側子が愛ほし側子が愛し、真丸におりやれ、真丸におりやれ、十五夜の月の輪の如く、十五夜の月の輪の如く。己が殿御は都におりやる、〱。由無い事はせぬものぢや、〱。

「なるこ」より

上の林に、鳥が棲むやらう、花が散り候、いささらば、鳴子をかけて、花の鳥追はう。

「末ひろがり」より

笠を差すなる春日山、〱。是れも神の誓とて人が笠をさすならば我も笠をささうよ、実にもさあり、やようかりもさうようなう〱。

「うつぼざる」より

御知行増るめでたき能仕まつる、踊るが手許、館御厩に牧下ろしの、

春の駒が鼻を揃へて参りたりや、もとより太鼓は波の音、寄り来る波を譬へ申せば、真如の囀り、音楽の声、諸法実相と響き渡れば、地から泉が相生して、天より宝が降りくだる、ありや興がり、きよくしんなり。

「昆布売り」より

昆布召せ〳〵おこぶ、若狭の小浜の、飯の昆布。

「鶉舞」より

昨今の御肴に、鶉一羽射んとて、弓取つて押し張り、田の畦を狙うた。案の如く鶉が、唯一羽這うたり。射てくれうぞ鶉よ。あれほどの鶉に、弓も矢も要らぬぞ、手捕まへにしてくれう。かしましいぞ子供よ、羽を抜いて取らせうぞ。胡鬼にせよやまつ御前。狙ひ寄つて這ひ寄つて、捕まへてみたれば、興がつた鶉で、鳴様が違うた。何と又鳴いたぞ。ものと又鳴いたよ。胡鬼遣らうと鳴いたは。

「節分」より ㈠

忍ぶ其の夜の太刀は鍔白し、大長刀はぎやう〳〵し、槍は柄長ちや、弓靫は犬が吠え候、竹杖はお忌々しや、棒支棒がな突いて行かう、虎落跳ねん越えて。

「田植」より

水口「田植ゑい早少女、植ゑい〳〵早少女、

女「目出度い御田植に、苗代に下り立ち、

水口「下り立ちて〳〵、田植ゑい早小女、笠買うて着せうぞ、

女「笠買うて賜ぶならば、〳〵、猶も田を植ゑうよ、

水口「いかに早少女、富岡山に白玉椿の、花の咲いた見たるか、

女「八千代を重ねて咲いたるぞめでたき、

水口「いかに早少女、早苗取るとて、手をとるぞをかしき、

女「取つたら大事か、若い時の習ひよ、

水口「早苗取る山田の懸樋漏りにけり、

女「引く注連縄に露ぞかゝりたる、

水口「五月の早女房と春の鶯と、

女「声競べせう春の鶯と、

水口「いかに早少女、懸想文が欲しいか、

女「懸想文賜ぶならば、さぞな嬉しからまし、

水口「懸想文取つたりと、何にせうぞ容色悪、

女「面憎い男の言うた事の腹立ち、

水口「まことに腹が立つかや、まことに腹が立つならば、水鏡を見よかし、

女「早少女の影映す苗代の、隅々の水は鏡かは、
水口「鏡は見たりとも、顔は汚れたり、
女「顔は汚れたりとも、思ふ人は持たり、
水口「いかに早少女、此の所の山々に花の咲いた見たるか、
女「げに、きつと見たれば、黄金の花も咲いたり、
水口「あう、めでたや、
女「めでたや、
水口「げに、めでたかりけり、まことにめでたかりけり、
同「めでたき御世には、千乗万乗富降れり、降れりや降れり、富降れり

「恋のおふぢ」又は「枕物狂」より

枕物にや狂ふらん、〱、寝るも寝られず、起きもせず、理や枕の、後より恋の責め来れば、安からざりし、身の狂乱は、木枕なりけり、ありや笹の張枕、〱、主ぞ恋しかりける、乙御前ぞ恋しかりける、逢ふ夜は君の手枕、来ぬ夜は己が袖枕、枕余りに床広し、寄れ枕、此方寄れ枕、枕さへ疎むか、実にもさり、やようがりもさうよなう。

「どぶかつちり」「ごぜさとう」より

抑一の谷の合戦やぶれしかば、源平互に入り乱れ、掛る者は頤を

盲の法師が川を渡る時、石を投げ込んで川の深浅をしらべ、どんぶ

切られ、逃ぐる者は踵を切らるゝ者もあり、いそがはしき時の事なれば、踵を取つて頤に付し、頤を取つて踵に付したれば、生えうず事と、踵に鬚が、むつくり〳〵と生えたりけり、冬にもなれば、切れうず事と、頤にあかがりが、ほつかり〳〵と、切れたりけり。

正徹

おく霜も氷れる影の物ごとにきしる音して更くる夜の月　（草根集）
遠方に鳴きたつ蟬の声過ぎて梢静かに暮るる夏かな　（同）
風きけば嶺の木の葉の中空に吹き捨てられて落つる声々　（同）
老いはてて寒き霜夜に消えぬべき我をいけおく埋火のもと　（同）

心敬

おのづから燈す爪木の一すぢに蚊の声細き山の下庵　（権大僧都心敬集）
秋の行く心もさぞな薄散る枯野の上に細き月影　（同）

連歌

浪風も江の南こそ長閑なれ
難波にかすむ紀路の遠山　心敬

り、かっちりと底に当る音を聞きわけた、その擬音が題名になっている。歌は盲法師が劇中で歌うもの。

（一三八一―一四五九）　招月・松月とも号す。和歌を冷泉為尹に学ぶ。著に「草根集」「正徹物語」「なぐさめ草」がある。

（一四〇六―一四七五）　権大僧都。和歌・連歌を正徹に学ぶ。「ささめこと」「権大僧都心敬集」がある。

連歌――古くは短歌一首の上下二句を二人で詠んだもので、後には一七字の長句と一四字の短句を交互によんで一篇とした。二〇韻、

我心たれに語らん秋の空
荻に夕風雲にかりがね　　心敬
音ぞのどけき故郷の雨
秋はたゞしのぶにかゝる軒朽（くち）て　　心敬
月さむしとや千鳥鳴らん
霜こほる袖の川原をかへる夜に　　心敬

飯尾（いひを）宗祇（そうぎ）

連歌、水無瀬三吟百韻より

雪ながら山もと霞む夕かな　（宗祇）
行く水遠く梅にほふ里　（肖柏）
河がせに一むら柳春見えて　（宗長）
舟さす音もしるき明け方　（宗祇）
月やなを霧り渡る夜に残るらん　（肖柏）
霜置く野原秋は暮れけり　（宗長）
鳴（なく）虫の心ともなく草枯れて　（宗祇）

五〇韻、百韻、更に多くは千句・万句に及ぶものもある。百韻が普通の形だ。万葉集の家持と尼との唱和を初めとし、鎌倉初期に藤原定家・家隆等が漢詩の連句に倣って試みたりした。

（一四二一―一五〇二）自然斎・種玉庵とも号す。室町時代末期の連歌師。一生を旅に送り、彼の作風と人格を慕う門人が多かった。著に「竹林抄」「新択菟玖波集」「萱草」等がある。

垣根を訪へばあらはなる路　(肖柏)

山崎宗鑑（やまざきそうかん）

伝未詳。最初の俳諧集「犬筑波集（いぬつくば）」の撰者と伝えられる、江戸俳諧の祖である。

正月六日

なべて世に敲くは明日のくひなかな

手をついて歌申上ぐる蛙かな

月に柄（え）をさしたらばよき団扇（うちは）かな

荒木田守武（あらきだもりたけ）

（——一五四九）伊勢内宮の神官。連歌をよくした。

落花枝に帰ると見れば胡蝶（こてふ）かな

青柳の眉かく岸の額かな

元日や神代の事も思はるる

夏の夜は明くれどあかぬまぶたかな

閑吟集

編者未詳。永正一五年成る。小歌を主とし、謡曲の一節や早歌など成立時代の新旧や地域など様々であるが、室町時代の歌謡を三百余

花の錦の下紐は、とけて中々よしなや、柳の糸の乱れ心、いつ忘れ

うそ、寝乱れ髪の面影。

老をなへだてそ垣穂の梅、さてこそ花の情知れ、花に①三春の約あり人に一夜を馴れそめて、後いかならんうちつけに、心そらにならしばの、馴れはまさらで、恋のまさらんくやしさよ。

上の林に鳥が棲むやらう、花が散り候、いざさらば、鳴子を掛けて花の鳥追はう。

あら美しの塗壺笠や、これこそ河内陣土産、②えいとろえいと、えいとろえいとな、③湯口が割れた、心得て踏まい中④たゝら、えいとろえいと、えいとろえいな。

思へど思はぬ振をして、しやつとしておりやるこそ、底は深けれ。

唯人は情あれ、夢の〳〵、昨日は今日の古、今日は明日の昔。

唯、人には馴れまじものぢや、馴れての後に、離るるるるるるるるる

首収めている。一節切を伴奏に歌われたものである。

①孟春・仲春・季春（一、二、三月）の季節を守って咲く事。

②はやし詞。③溶けた金属を鋳型に注ぐ為の口。④ふいご。

が、大事ちやもの。

人買舟は沖を漕ぐ、⑤とても売らるゝ身を、たゞ静かに漕げよ、船頭殿。

来ぬも可なり、夢の間の露の身の、逢ふとも宵の稲妻。

⑥人気も知らぬ、荒野の牧の、駒だに、捉れば、遂になつくもの。

山田つくれば庵寝する、いつか此の田を刈り入れて、思ふ人と寝うずらう、⑦寝にくの枕や、寝にくの庵の枕や。

一夜来ねばとて、咎もなき枕を、縦な投げに、横な投げに、なよな枕よ、なよ枕。

⑧うへさ（上様）に人の打ち被く、⑨煉貫酒の仕業かや、彼方よろり、此方よろよろよろ、腰の立たぬは、あの人の所為よなう。

⑤所詮。どうしても。

⑥人跡未踏の荒野に育った野生の馬でも。

⑦独身者のわびしい生活。

⑧「煉貫」にかかる序の詞。⑨豊後地方に出来る上等の酒。

赤きは酒の咎ぞ、鬼とな思しそよ、恐れ給はで、我に相馴れ給はば⑩興がる友と思(おぼ)すべし、われも其方の御姿、⑪打ち見には〱、恐しげなれど、馴れて⑫つぼいは山臥(やまぶし)。

ひとり寝しもの、憂(う)やなふたり寝、寝初(そ)めて憂やな、独り寝。

人の情のありし時、など独(ひと)り寝を習はざるらん。

独り寝はするとも、嘘な人は嫌よ、心は尽いて詮無(せんな)やなう、世の中の嘘が去(い)ねかし、うそが。

鎌倉へ下(くだ)る道に、⑬竹剝(へげ)の丸橋を渡いた、木が候はぬか、板が候はぬか、竹剝の丸橋を渡いた、木も候へど板も候へど、憎い若衆を落ち入らせうとて、竹剝の〱、丸橋を渡いた。

⑭靨(あくげ)の中へ身を投げばやと、思へど底の邪が怖い。

⑮嫌(いや)申すやは、たゞ〱打て、柴垣に押し寄せて、其の夜は終(よもす)

⑩つき合って面白い友達。
⑪一寸見た所では。⑫親しみのある、(又は)可愛い。
⑬竹を薄く削ったものを束ねて橋に渡したものであろう。
⑭女の笑顔に誘われたのがもとで、身をあやまつ例の多いのを怖れたもの。
⑮手を打って踊る柴垣節に寄せ

夜現なや。

見る甲斐ありてうれしきは、契りし今朝の玉章、除目の朝の上書。

⑯大外の重の孫三郎が、織り手を留めたる織り衣、牡丹・唐草・獅子や象の、雪降り竹の籬の桔梗と、移れば変る白菊の、大外の重の竹の下、裏吹く風もなつかし、鎖すやうで鎖さぬ折木戸、など待つ人の来ざるらむ。

忍ばば目で締めよ、言葉なかけそ、⑰あだ名の立つに。

おりやれ〳〵、おりやり初めて、おりやらねば、俺が名が立つ、只おりやれ。

⑱余り見たさに、そと隠れて走て来た、先づ放さいなう、放して物を言はさいなう、そゞろ愛ほしうて、何とせうぞなう。

人の辛くは、我も心の変れかし、憎むに愛ほしいは、⑲あんはちや。

て、愛人との逢瀬を歌ったもの。

⑯禁裏（御所）の門外。

⑰恋愛の噂がたつから。

⑱男女の対話が歌になっている。

⑲あほらしい。愚なことだ。

恋の中川、うつかと渡るとて、袖を濡いた、あら何ともなの、さても心や。

隆達小歌

①君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほと成りて苔のむすまで

あひ思ふ、中さへ変る　世の習ひ、ましてや②薄き　人な頼みそ

根みあるこそ　頼みなれ　思はぬ仲は　ふらずふられず。

③比翼連理の　語らひも　心変れば　水に降る雪。

君待ちて　待ちかねて　定番鐘の　其の下での　じだ〳〵じだだ、じだ〳〵をふむ。

千年経るとも　散らざる花と　心の変らぬ　人もがな。

作者隆達は泉州堺の人。出家して顕本寺内の自在庵に住む。家は富商で、天性才智に富み、日蓮宗信仰の他に禅も修め、又、連歌・音曲・書画などにも練達していたという。自ら小唄を作詞して曲をつけ、世に隆達節と称して行われた。もっとも、後世隆達節とよばれるもの全部が彼の作品というのではない。三味線が普及する以前のことで、扇拍子や、一節切（尺八の一種）、小鼓等を伴奏として歌われた。

①あなたの寿命は。

②薄情な人を頼みに思うな。

③男女の仲の睦じいたとえ。

思ひよらずの　④会釈（えしやく）のふりや、恨みのことも　はたと忘れた。

④愛敬あるそぶり

とても名の立たば、宵からおりやれ、よそへ忍びの帰るさはいや。

独り寝もよやの、あかつきの、別れ思へばの。

独り寝はいやよ、あかつきの、別れありとも。

⑤乱れそめては、人目もいらぬ、馴れぬ昔に、思案せうずもの。

⑤恋心が深まってからでは思慮する余裕がない。

忍ぶ身にさへ、悋気（りんき）をめさる、忍ばぬ身ならば、扨何（さて）とあらふぞの。

つれなのふりや、すげなの顔や、あのやうな人が、⑥はたと落つる。

⑥急に情にほだされてなびく。

尺八の、ひとよぎりこそ、音もよけれ、君と一夜は寝も足らぬ。

いとはるゝ、身となり果てば、せめてわが、身の咎も身の咎（とが）も、身の咎もがな。

夢になりとも情はよいが、人のつらさを　聞くもいや。
底は打ち解けて、うはの空するふりは　猶いとおしい。

江戸時代の俳諧および和歌

江戸時代の俳諧および和歌

古代社会の崩壊が著しくなったのが鎌倉・室町期であり、いよいよこれが顚覆してしまって弱肉強食戦国百余年の動乱時代となる。しかしやがて秩序と平和を望む人心が、新しい封建制度を打ち樹てた。徳川幕府を中心とする政治体制である。人々の身分は安定し、商工業は盛となった。文化の種は庶民の生活に流れ寄って芽を出し、而も新しい土壌に育って新しい花を開いた。世に庶民文化とよばれ、町人文学と称される。作家は庶民であり、読者も庶民、書かれる内容も庶民の姿であり生活であった。然してその特徴は、太平に馴れた町民の物質慾・情慾に取材したもの又それを形式化した儒教道徳で飾り立てたもの等の多いことである。舞台は主に江戸又は大阪で、前時代、未だ文学を持たなかった彼らの祖先の奔放な精神が、どこで陥没してしまったかと思われる洗練ぶりである。武力による出世や征服への野望を捨てた（或は閉された）人間の情熱が、方向を変えて富と愛慾に集中したのだろうか。

ただしこれは主に散文に扱われた世界であって、韻文の世界は不思議にも前時代の精神主義的、幽玄高尚の伝統をついでいる。庶民の姿を写し、その生活を描いてはいても、中世的に鍛えられた作者の精神によって、生臭さを濾過され、町民文学とはいささか異る風味を持つ。而して此の風格は近代の詩歌にまで受けつがれていると考えられるが、一方この時代の末頃には既に近代的抒情・感傷が和歌・俳諧に現われて来るのである。

俳諧の作家には、武士も町民も隠者的風流人もあるが、文学的精神乃至感覚はそれらを超越していて、身分制度などという環境を超えて人の心に訴えるうたの大きな力を、ここでも強く教えられるのである。

尚、ここでは俳諧の作者と和歌の作者とを別項に分けそれぞれ年代順に配列した。

松の葉

琉球組

深山おろしの小笹の霰の、さらりさら〱としたる心こそよけれ、険しき山の九折の、かなたへまはり、此方へまはり、くるりくるくるとしたる心は面白や。

鳥組

お目と目と目を見合せて、はなれ難なのその面影を、夢にも見もせず、うつゝになりとも逢せてたもれ、逢ねば心がもだもだと、おもひの種や、あこがるゝ身をなとせうぞの。

腰組

成ると成らずと文をばつくせ、心強やつれなや、とにかくに、我は数ならぬ身じやほどに、君来うか〱往こか、来ずば戻ろに。

いやと言ふたものかき口説いてのう、何ぞやそなたの一花心、思へ

編者は秀松軒という人であるが、此の人の伝については殆ど分らない。只、三味線音楽に精通していたことは想像される。元禄頃の人である。

「松の葉」は室町末期から江戸初期へかけて流行した三味線歌謡、又は琴歌の集成で、元禄一〇年刊行。遊里情調の濃厚なものや、古典に材をとった優雅なもの、地方民謡をもとにしたものなど、様々である。これらの歌はいずれも同類のものが多く、伝えられる人と所によって、多少違ったりしているのである。

「松の葉」をはじめ、此の後「落葉集」（元禄一七年刊、大木扇徳編）・「若緑」（宝永三年刊、静雲閣主人編）・「松竹梅」（宝永六年刊）・「松の落葉」（宝永七年刊）・

や君さま、かなえや我が恋、あら現無（うつつな）の浮れ心や、揉（も）まいの〱、さゞらもまいの、我等も若い時は殿にもん揉まれた。

不祥組（ふしやうくみ）

月の夜に打つ砧の音の、えいはら〱ほろ〱はらほろと、又しても①おどろく夜も夜もあるに、独り寝よとは何事ぞ、②思はざな来（き）そ、③増す花狂（くるひ）しやうずもの、④わざくれ。

飛騨組（ひんだくみ）

明日は出（じ）よずもの、舟が出よずもの、⑤思たげもなと、お寝（よ）る殿御や、あゝお寝（よ）る殿御や、飛騨のをどりを一踊（ひとをどり）〱。

浮世組（うきよくみ）

文もやるまい便宜（びんぎ）もせまい、返事さへせぬ憂さつらさ、君をば人に思はせて、かほどに辛きものぞと、おんもひ思ひ知らせで、とは思へども、身の上になれば、更に思ひ切られぬ。

まつにござれ

「続松の葉」（正徳三年刊）など、歌謡の編集は盛に行われた。これは三味線が琉球から伝わって人々に愛好され普及したのと、太平の時代、町民の生活が前時代に比べ向上したことを物語るものであろう。

①目をさます。
②真実が無いなら来なさるな。
③他に好きな女が出来て心をうばわれている人なんか。
④どうともなるがいいわ。
⑤気にもかけないで（私の方は気をもんでいるのに）

われが殿御は藤五郎どの、朱雀、粟田口より石また曳きやる、えいや、やころさに、やつといふて曳きやる、お声聞くさへ四肢が萎ゆる、まして添ふたら死のずよの。

葛の葉

さてもやさしの、いよ葛の葉や、何を便りに這いかゝる、いよえい這いかゝる。

浅き契にあひ馴れそめて、ふかき思はあゝさて涙川、君に逢瀬を待つばかり、あゝさて待つばかり。

長崎

昔より今に渡りくる⑥黒船、縁が尽くれば鱶の餌となる、さんたまりや。

⑦しもさそほり

甲斐の国なる信玄様のな、一度もござらぬ、二度もござらぬ、⑧おちよぼ⑨忍ぶに六の苦が候、まづ一番に雨に霰に夜露に柴垣、のう

⑥西洋の鋼鉄船。
⑦下総ほそり節。細り節とは小歌を声を細めて歌うものか。
⑧下女の名。⑨忍び会いに行くの

さて、犬のあだ吠え、それ月は猶、月はのうさて、月は⑩ゑせ者。

京鹿子(きやうがのこ)

吹けよ松風、あがれよ簾(すだれ)、今の小歌(こうた)の主(ぬし)見たや。

錦木(にしきぎ)

山雀(やまがら)が、籠の中(うち)での恨み言、籠が小籠で、もんどり打たれぬ。

⑪とてもお捨ちやるものゆへに、去り難いとて抱かりようか、浮世の中の⑫讃歎(さんだん)にさ、⑬言ひつる事よのと、言はりよりも、なまなか一夜(いちや)は⑭まいるまいよ、いや〱いやなら、初(はじめ)に嫌とはおしやらで、今さら何となろふぞのう、思はざな来(き)そ、増花狂(ますはなくるひ)せうずもの、わざくれ。

青柳

明日は殿御(とのご)の砧打(きぬたうち)、⑮おかた姫御も出て打たい、砧踊は面白や、砧踊は一踊(ひとをどり)。

に苦労が六つある。⑩邪魔者。

⑪どうせお捨てなさるのだもの。⑫評判。⑬そう言わないこっちゃない。⑭お相手しますまいよ。

⑮身分の高い家のお嬢様。

早　舟

沖の引く汐に、竹に油を塗るやうに、とろり〳〵と歌ふて名乗りて、漕ぐや船方はえい、上様の御座船か、⑯またのんえいそれ、艪では遣らいで唄でやる。

⑯囃詞。

宮へは三里へのうえい、三里も近三里、廿日市の源三が塗物は、漆では塗らいで、梔子ばかりでさつと一刷、⑰えいそれはつたらずんでんどう、そのやうな塗物は、只は呉るゝとも、俺はいや〳〵嫌で候、やがて剝ぐるに。

⑰囃詞。

八　幡

あの山陰を、すぐに来るだに遅いに、なよ真実、根言さしおいて、まづ抱いてお寝れのう、なよしんじつ。

みす組

割れた尺八手なかけそ、とても鳴るまいもの故に。

割れた尺八⑱手がござる、じいじと締むれば鳴るものを、取りて吹きて見たれば、節が⑲ちやうどした、⑳れつろれつろつりよれつの

⑱方法。⑲ちよっと鳴った。⑳尺八の音階の表示。問答の形をした唄。

れがつれつろ

㉑さんや踊

今度はじめてお江戸に住めば、天下輝く光をくれて、切れよ下れよ振袖伊達を、だてを駿河の富士白山ぞ、だてな若い者山谷へ通へ、忍ぶ畦路で、虻めが我に当ておつた、かつ憎けれど、君が為なりやつらさもういこんだ、浮世しのぶの深編笠の、姿かたちで若きは見ゆる、篠の芒で末とげぬ、よしなの思ひじやな、誰も好いたるお江戸の風や、生田昆陽野の敦盛さまが、熊谷笠に破竹杖、二つ紋のちんちり緬のべんべを着せて、せんせかしよ、憂き身の寝乱れ髪を、いつに忘りよぞ、さても差いたる長刀、お気の通つたお若衆様の、いつくに〱、㉒血眼玉が放され申さない、伊達も浮気も命の中よさ、やがて死ぬ〱、ひつ弾け、うん飲め騒げ、明日をも知らぬ身に。

浮れ女

花は吉野よ紅葉は高雄、松は唐崎霞は外山、いつも常磐の振はさんさしほらしや、兎に角思はるゝ。

㉑山谷の遊廓のにぎわいを歌ったもの。武士も深編笠や刀の差し方などスタイルに気をつかい頽廃的な風潮が興りつつある時代を想像させられる。

㉒血走った眼。

薩摩ぶし

親は他国に子は島原に、桜花かやちり〲に。

しら雪

嘘のかたまり、真の情、この真中にかきくれて、降る白雪の人心、降る白雪の人心、積る思ひと冷いと、わきて言はれぬ世の中。

みだれ髪

君と我とは七つ八つ、十で殿御を見そめて染めて、人こそ知らね、振分髪を、其方ならでは誰にか見せん、此の黒髪を、今は仇なる乱れ髪、乱れ心やあゝ〱、逢いた見たさに来たぞかし、つらや〱と思ひはすれど、また捨てられぬ、憎さ余りて愛しさ増さる、さても命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死んでまた来て、その〱、その先の世も思ひ知らせん、思ひしれ、袖の湊の恋の淵、渡りくらべん涙川、色に沈みて死のとも、引きはかへさじ早小舟、名は流さじ。

いけだ

池田伊丹の㉓六尺達は、昼は縄帯縄だすき、㉔夜は綸子の八重まはり。

失念

今度長崎で変つた小歌を習うた、あとさきは覚えないが、中の唱歌を忘れた、㉕さこそあるべいとて書いてもらつたが、それさへ出口で落した、これ面目ない、㉖首尾も諸分けも此の通り、これ面目ない。

松永貞徳

しをるるは何か杏子の花の色

皆人の昼寝の種や秋の月

松江重頼

順礼の棒ばかり行く夏野哉

秋や今朝一足に知る拭ひ縁

㉓もと駕籠舁人の事。転じて下男。ここでは酒造男のことをいう。京都の方言。㉔昼はきたない身なりで働いているが、夜はしゃれた格好をして遊びに行く。

㉕そんな事だろうと（すぐ忘れるのだろうと）。㉖一切白状しますと以上のようなわけ。申しわけない。

京都の人。少年の頃から連歌を里村紹巴に学び、また和歌を九条植通・細川幽斎に学び、後、俳諧一道の祖となる。承応二年（一六五三）歿。年八三。「淀川」「油粕」「御傘」などの撰著がある。

京都の人。俳諧を貞徳に学んだが、後独立して一派を成した。延宝八年（一六八〇）歿。七四歳。「犬子集」「毛吹草」「佐夜中山集」「時世粧」「大井川藤枝集」などの撰著がある。

安原貞室（やすはらていしつ）

これはこれはとばかり花の吉野山

名は正章。俳諧を貞徳に学ぶ。延宝元年（一六七三）歿。六四歳。「正章千句」「玉海集」などの撰著がある。

西山宗因（にしやまそういん）

白露や無分別なる置き所
有明の油ぞ残るほととぎす
月出でて一燈空し谷の庵（いほ）
風に乗る川霧軽し高瀬舟
秋はただ法師姿の夕べかな
菜の花や一本咲きし松のもと

名は豊一。肥後の武士であったが後大阪に出て連歌の宗匠となる。宝文の頃、俳諧の新風を唱え、談林風の祖と称された。天和二年（一六八二）歿。七八歳。「西翁十百韻」「天満千句」「宗因五百韻」「釈教百韻」などの撰著がある。

井原西鶴（ゐはらさいかく）

長持（ながもち）に春ぞ暮れ行く更衣（ころもがへ）
鯛は花は見ぬ里もあり今日の月
枯野哉つばなの時の女櫛（をんなぐし）
山茶花を旅人（りよじん）に見する伏見哉
玉笹や不断時雨（しぐ）るる元（もと）箱根

大阪の人。若くから宗因に俳諧を学ぶ。延宝三年西鶴と号して活躍したが、晩年はもっぱら小説作家として有名となった。元禄六年（一六九三）歿。五二歳。「生玉万句」「西鶴大句数」「物種集」「西鶴五百韻」「大矢数」などの撰著

人間五十年のきはまりそれさへ我にあまりたるにましてや
浮世の月見過しにけり末二年

がある。

小西来山

白魚やさながら動く水の色
秋立つやはじかみ漬も澄みきつて
これ程の三味線暑し膝の上
見かへれば寒し日暮の山桜
行水も日まぜになりぬ虫の声
我が寝たを首上げて見る寒さ哉

大阪の人。談林派の宗匠となったが、その作風からは、正風に近い感覚を見ることが出来る。句は「今宮草」「続今宮草」に集録。享保元年（一七一六）歿。六三歳。

椎本才麿

笹折りて白魚のさえぐ青し
鶯の細脛よりやこぼれ梅
梅が香に更けゆく笛や御曹司
白雲を吹き尽したる新樹かな
猫の子に嗅れてゐるや蝸牛
五月雨や梅の葉寒き風の色

大和宇陀の人。宗因・西鶴に学ぶ。蕉風過渡期の俳人。江戸・大阪で活躍した。元文二年（一七三七）歿。八二歳。「坂東太郎」「椎の葉」「後椎の葉」「うきゝ」などの撰がある。

時雨そめ黒木になるは何々ぞ
美しい皺を見せけり芥子の花
夕暮のものうき雲やいかのぼり

上島鬼貫

本名平泉治房。摂津国伊丹の人。壮年の頃筑後柳河侯や大和郡山侯に仕えたが、後致仕して専ら俳諧に親しんだ。句は「七車」「鬼貫句選」などに収められている。「独言」によって主張した俳論〃誠の説〃は名高い、元文三年（一七三八）歿。七八歳。

春の水ところどころに見ゆる哉
曙や麦の葉末の春の霜
行く水や竹に蟬鳴く相国寺
庭前に白く咲いたる椿哉
そよりともせいで秋立つ事かいの
行水の捨所なき虫の声
秋風の吹きわたりけり人の顔
冬枯や平等院の庭の面

山口素堂

名は信章。甲斐の人。儒を江戸の林春斎に学び、俳諧を京の北村季吟に学ぶ。後、芭蕉と交る。享保元年（一七一六）歿。七五歳。

春もはや山吹白く苣苦し
　鎌倉にて
目には青葉山時鳥 初鰹

南瓜やずつしりと落ちて暮淋し
あはれさやしぐるる頃の山家集

松尾芭蕉

あら何ともなや昨日は過ぎてふくと汁　（江戸三吟）
枯枝に烏のとまりけり秋の暮　（曠野）
芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな　（武蔵曲）

千里に旅立て路粮をつゝまず三更月下無何入といひけむ昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の声そゞろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな
道のべの木槿は馬にくはれけり
義朝の心に似たり秋の風
秋風や藪も畠も不破の関
明ぼのや白魚白きこと一寸
海くれて鴨のこゑほのかに白し
春なれや名もなき山の朝霞
山路来て何やらゆかしすみれ草

名は宗房。伊賀上野の人。藤堂良忠（蟬吟）に仕え、季吟に師事した。寛文六年蟬吟の死後江戸に出て深川に芭蕉庵を結び、俳諧の道を究め深めて、これを文学として真に価値あるものとして大成した。人生を旅と観じて各地に旅行し、「野ざらし紀行」「鹿島紀行」「笈の小文」「更科紀行」「おくのほそ道」の紀行文を著す。元禄七年（一六九四）歿。五一才。旅を生涯の「すみか」とした芭蕉が、その人生の航路にのこしていった大きな遺産として、連句の仕事が考えられる。旅のさきざきで蕉門の子弟たちと取かわした芸術問答としての連句は、単に芭蕉生

湖水の眺望

辛崎の松は花より朧(おぼろ)にて　（以上　野ざらし紀行）

古池や蛙飛びこむ水の音　（春の日　他）

名月や池をめぐりて夜もすがら

対友人

君火をたけよきもの見せむ雪丸(まろ)げ

よく見れば薺(なずな)花咲く垣根哉

花の雲鐘(かね)は上野か浅草か　（以上　続虚栗　他）

神無月の初、空定めなきけしき身は風葉の行末なき心地して

旅人と我名よばれん初しぐれ

冬の日や馬上に氷る影法師

骨山と云は鷹を打処(うつところ)なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ鷹など歌にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし

鷹一つ見付(つけ)てうれしいらこ崎

箱根こす人も有(ある)らし今朝の雪

いざ行(ゆか)む雪見にころぶ所まで

旧里(ふるさと)や臍(ほぞ)の緒(を)に泣く年の暮

涯の変風をうかがう資料にとどまらず、彼によって蘇生された新しい芸術様式として再評価されなければならない。

連句つまり俳諧の附合(つきあわ)せは、鎖連歌ともいわれ、俳人達の言葉遊びとしてはじめられた。五七五と一人がよめば他の一人が七七とつけ、さらに五七五—七七と続いてゆく。そのつけ方には複雑なきまりがあるけれど、初期に於て言葉のゴロ合せにすぎなかった連句は、芭蕉に於て一躍言語芸術のきびしい修練の場にかえられた。前の句の言葉尻をとらへてゆく「ものづけ」ではなく、その内的世界を問題にする「匂いづけ」では、句を詠む人の精神的な深さが強く要求されてくる。俳諧という短詩形が宿命的にになう閉鎖的な表現

何の木の花とは知らず匂哉

此山のかなしさ告よ野老掘

草臥て宿かる頃や藤の花

　初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

　西河

ほろほろと山吹ちるか滝の音

日は花に暮れてさびしやあすならふ

　高野

ちちははのしきりに恋し雉の声

　明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

（以上　笈の小文）

弥生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は在明にて光をさまれるものから、不二の峯幽に見えて、上野谷中の花の梢又何時かはと心細し。睦じき限りは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千住と云ふ所にて舟をあがれば前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

世界は、異った個性のこうした交響に於て、形式的にも内容的にも拡がり深化してゆく筈である。歌の始源が天然自在な自由発想にあり、即興性にある事はいうをまたない。真に高度の「即興」に於て詩人は広大な宇宙的表現にふれうるのだ。芭蕉が連句に於て作句の緊張とその連続とを意図したことは非常に興味深い事実といえよう。彼は表現の「高悟帰俗」を説いた。高度な心の内容を易しく表現する、ということだ。更に晩年は「軽み」ということを云った。才能のなさを駄じゃれや、理屈っぽさでカバーしようとする多くの俳人を悲しんで「この道やゆく人なしに」と歌った。しかし「軽み」の形而上的な深さを月並に模倣する多くの門人達も、連句に於ては、

田一枚植て立ち去る柳かな

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。(中略)さても義臣すぐつて此城に籠り、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり。城春にして草青みたり」と笠打敷きて、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。(中略)七宝散り失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢となるべきを、四面新に囲みて甍を覆ひて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に清閑の地也。(中略)岩に巌を重ねて山とし、松柏年旧り土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覚ゆ。

閑さや岩にしみ入る蝉の声

芭蕉の高さに影響され、触発されて傑作をのこしている。思うに連句のダイヤローグの世界は、発句的モノローグを脱却する意味で現代にも通用する重要な方法に違いない。

芭蕉の門人達の手によって編集された連句七部集が長く蕉風俳諧の聖典として重用されたゆえんはそこにある。

俳諧七部集は次の如し。

「冬の日」貞享元年名古屋で野水・荷兮・重五・杜国・正平等と歌仙五巻他をのこした。未だ美的陶酔の気分がのこっていて少し現実的重量に乏しい。

「春の日」貞享三年八月に出た。撰者に越人とも荷兮ともいわれている。「古池や」の句もこのなかに収められている。「冬の日」にくら

五月雨をあつめて早し最上川

暑き日を海に入れたり最上川

松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

荒海や佐渡に横たふ天の河

一笑を云ふ者は此の道に好ける名のほの〴〵聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我泣く声は秋の風

途中吟

あかあかと日はつれなくも秋の風

太田の神社に詣づ。真盛が甲・錦の切あり。(中略)真盛討死の後、木曽義仲願状にそへて此の社にこめられ侍る由、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁起に見えたり。

むざんやな甲の下のきりぎりす

石山の石より白し秋の風　(以上　奥の細道)

初時雨猿も小蓑をほしげなり　(猿蓑　他)

べ温味のある表現。

「曠野集」元禄二年版。荷兮の選。

「ひさご」元禄三年奥羽の大旅行を終えた頃のもの。珍碩の選。

「猿蓑集」芭蕉が幻住庵に入ったのが元禄三年四月、四年には粟津の無名庵、その四月に嵯峨の落柿舎に遊んだ。奥羽旅行以後作風を一変した芭蕉芸術を代表するものが去来選によるこの一巻である。発句「初時雨猿も小蓑をほしげなり」にはじまるこの集は、蕉風の全盛を知る好個のものだ。

「炭俵」元禄七年野坡等の選、芭蕉晩年の「軽み」の実態を知るにはまずこの集をよまなければいけない。

「続猿蓑」芭蕉歿後五年を経て元禄一一年に出版。

芭蕉の項で引用した七部集からの

木の下に汁も膾も桜かな　（ひさご　他）

或時は仕官懸命の地をうらやみ、一度は仏籬祖室の扉に入らむとせしも、花鳥に情を労して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。楽天は五臓の神をやぶり、老杜は痩せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやとて思ひ捨てふしぬ。

先づたのむ椎の木も有り夏木立　（幻住庵記）

堅田にて

病む雁の夜寒に落ちて旅寝哉　（猿蓑　他）

望ニ湖水ヲ一惜ムレ春ヲ

行く春を近江の人と惜しみける　（猿蓑　他）

うき我を淋しがらせよ閑古鳥　（嵯峨日記　他）

蓬莱に聞かばや伊勢の初便　（炭俵　他）

梅が香にのつと日の出る山路哉　（炭俵　他）

ひや〳〵と壁をふまへて昼寝哉　（笈日記　他）

秋深き隣は何をする人ぞ　（笈日記　他）

所思

此の道や行く人なしに秋の暮　（笈日記　他）

句は、本来連句の形で提出すべきものではあるが、頁数の関係で、芭蕉の句のみを摘出している。

旅に病で夢は枯野をかけ廻(めぐ)る　（笈日記　他）

連句

おもへども壮年いまだころもを振はず　埜水
はつ雪のことしも袴きてかへる　杜国
霜にまだ見る蕣(あさがほ)の食(しょく)　芭蕉
野菊までたづぬる蝶の羽をれて　荷兮
うづらふけれとくるまひきけり　重五
麻呂が月袖に鞨鼓(かっこ)をならすらん　正平
桃花をたをる貞徳の富　杜国
雨こゆる浅香の田螺(たにし)ほりうゑて　埜水
奥のきさらぎを只(ただ)なきになく　荷兮
床ふけて語ればいとこなる男　芭蕉
縁さまたげの恨のこりし　野水
口をしと瘤(ふすべ)をちぎる力なき　重五
明日は敵(かたき)に首送りせん　芭蕉
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜国

縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつ〳〵とのみ地蔵切る町　荷兮
初はなの世となり嫁のいかめしく　杜国
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫛箱に餅すゆるねやほのかなる　荷兮
うぐひす起きよ帋燭(しそく)とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕(へた)さびし　野水
三味線借らん不破の関人　重五
道すがら美濃で打ちける碁を忘る　芭蕉
ねざめ〳〵のさても七十　杜国
奉加めす御堂に金(こがね)うちになひ　重五
ひとつの傘の下挙(こぞ)りさす　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜国
まどに手づから薄様(うすやう)をすき　野水
月にたてる唐輪の髪の赤枯れて　荷兮
恋せぬきぬた臨済をまつ　芭蕉
秋蟬の虚に声きくしづかさは　野水
藤の実つたふ雫ぽつちり　重五

袂より硯をひらき山かげに　芭蕉
ひとりは典侍（すけ）の局か内侍（ないし）か　杜国
三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五
しらかみいさむ越の独活（うど）刈（かり）　荷兮（冬の日）

榎本（えのもと）其角（かく）

宝井氏。寛文元年江戸に生まる。一七・八歳の頃から芭蕉に師事。才気に優れた人で、他に、書・画・儒・医学・禅などにも通じていた。芭蕉の高弟であったが、師の歿後、作風が卑俗な傾向に変っていった。宝永四年（一七〇七）歿。四七歳。撰著に「虚栗」・「続虚栗」・「新山家」・「丙寅初懐紙」・「いつを昔」・「華摘」・「雑談集」・「萩の露」・「句兄弟」・「枯尾花」・「若菜合」・「末若葉」・「錦繍緞」・「焦尾琴」・「類柑子」等あり、「五元集」・「続五元集」に作品が収められている。

日の春をさすがに鶴の歩み哉

一日長安春
鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春

四十の賀会し給ふ傍に宴遊侍坐しければ
御秘蔵に墨をすらせて梅見哉

吉野山ぶみして
明星や桜さだめぬ山かつら

越後屋に絹さく音や衣更（ころもがへ）

雨後
雨蛙芭蕉に乗りて戦（そよ）ぎけり

名月や畳の上に松の影

我が雪と思へば軽し笠の上

服部嵐雪（はつとりらんせつ）

元日や晴れて雀のものがたり
濡縁（ぬれえん）や薺（なづな）こぼるゝ土ながら
梅一輪一輪ほどの暖かさ
石女（うまずめ）の雛かしづくぞ哀れなる
竹の子や児（ちご）の歯ぐきのうつくしき
名月や烟（けむり）這ひ行く水の上
沙魚（はぜ）釣るや水村山廓酒旗（さんくわくしゆき）の風
黄菊白菊そのほかの名は無くもがな
蒲団着て寝たる姿や東山

淡路の生れ。江戸で成長した。其角と同じ頃から芭蕉に学ぶ。はじめ大名に仕えたが、後には俳諧に専心する様になった。宝永四年（一七〇七）歿。五四歳。撰著「若水」・「其浜木綿」・「杜撰集」・「若菜集」・「其袋」等。「玄峯集」に作品収録。

内藤丈草（ないとうぢやうさう）

大原や蝶の出て舞ふ朧月
春雨や抜け出たまゝの夜着（よぎ）の穴
取りつかぬ力で浮む蛙かな
鹿小屋の火にさし向くや庵（いほ）の窓

尾張の人。はじめ大名に仕えたが、元禄元年（二七歳）致仕し、芭蕉に師事し、又、禅に勉めた。宝永元年（一七〇四）歿。四三歳。随筆「寝ころび草」がある。

ばせを翁の病床に侍りて
うづくまる薬のもとの寒さ哉
幾人かしぐれかけぬく勢田の橋
鷹の目の枯野に居る嵐かな

向井去来

元日や家に譲りの太刀佩かん
上り帆の淡路はなれぬ汐干哉
何事ぞ花見る人の長刀
舟乗の一浜留守ぞ芥子の花
岩鼻やこゝにもひとり月の客

堀川を通りて

有明にふりむきがたき寒さ哉
おう〱といへど敲くや雪の門
秋風や白木の弓に弦はらん

森川許六

苗代の水に散り浮く桜かな

長崎の人。父は儒医。若い頃は芸に励んでいたが、貞享頃から芭蕉に俳諧を学び、高弟となった。宝永元年（一七〇四）歿。五四歳。「猿蓑」を凡兆と、「渡鳥集」を卯七と共に撰す。「去来抄」「去来文」「旅寝論」等は、芭蕉俳諧の神髄を伝えるものとして貴重な書である。

近江彦根の武士。芭蕉に俳諧を学び、絵もよく画いた。正徳五年（一七一五）歿。六〇歳。「韻塞」

出代りや傘提げて夕ながめ

涼風や青田の上の雲の影

新藁の屋根の雫や初時雨

大名の寝間にも寝たる寒さかな

各務支考

船頭の耳の遠さよ桃の花

食堂に雀鳴くなり夕時雨

水仙や門を出づれば江の月夜

叱られて次の間へ出る寒さ哉

歌書よりも軍書にかなし吉野山

立花北枝

田を売りていとゞ寝られぬ蛙哉

牡丹散つて心もおかず別れけり

淋しさや一尺消えて行く螢

志田野坡

「篇突」「宇陀法師」「正風彦根体」「歴代滑稽伝」「風俗文選」等の撰著がある。

美濃の人。僧侶であったが後医者となり、俳諧を芭蕉に学ぶ。六七歳。享保一六年（一七三一）歿。「葛の松原」「笈日記」「続五論」「俳諧十論」「本朝文鑑」「和漢文操」等の撰著がある。

加賀金沢の人。刀磨ぎを業とした。享保三年（一七一八）歿。「卯辰集」「喪の名残」の撰がある。

越前福井の人。江戸で三井両替屋に勤めたが、後大阪に移り、樗木社

ほのぼのと鴉(からす)黒むや窓の春
夕涼(ゆふすずみ)あぶなき石にのぼりけり
山伏の火をきりこぼす花野哉
小夜時雨(さよしぐれ)隣の臼は挽きやみぬ

杉山杉風(すぎやまさんぷう)

振り上ぐる鍬の光や春の野ら
川沿ひの畠をありく月見かな
燈を細く寝つけば響く砧かな

越智越人(をちえつじん)

うらやまし思ひ切る時猫の恋
雁がねの静に聞けばからびずや
行燈(あんどん)の煤けぞ寒き雪の暮
力無や麻刈あとの秋の風

野沢凡兆(のざはぼんてう)

鶯や下駄の歯につく小田(をだ)の土

を興す。芭蕉晩年の俳風〃軽み〃を摂ってこれをひろめた。元文五年（一七四〇）歿。七八歳。「炭俵」を撰し、句集「野坡吟草」がある。

通称鯉屋市兵衛。幕府御用の魚商。芭蕉の弟子で又、後援者。深川の別荘を提供して芭蕉庵とした。享保一七年（一七三二）歿。八六歳。「冬かつら」の撰、句集「杉風句集」がある。

北越の出身という。名古屋に住む。享保末年頃歿。「鵲尾冠」「庭竈集」がある。

加賀金沢の人。京都で医者を業とした。去来と共に「猿蓑」を撰す。

灰捨てて白梅うるむ垣根かな
花散るや伽藍の枢落し行く
市中は物のにほひや夏の月
渡りかけて藻の花のぞく流哉
初潮や鳴戸の浪の飛脚船
灰汁桶の雫やみけりきりぎりす
しぐるゝや黒木積む屋の窓明り
長々と川一筋や雪の原

浪化

首立てて鵜の群れのぼる早瀬哉

千代女

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水
月の夜や石に出て鳴くきりぎりす

炭太祇

越中国井波町瑞泉寺住職。芭蕉の門。元禄一六年歿。三三歳。「有磯海」「刀奈美山」「続有磯海」等の俳書。句集「浪化上人発句集」がある。

加賀の人。伝に諸説あって詳でない。安永四年（一七七五）歿。七三歳。「千代尼句集」がある。

江戸の人。宝暦初年京都大徳寺の僧となり道源と称したが、後、島

初恋や燈籠によする顔と顔
鯊(はぜ)釣や鼻おごめきて百(ひゃく)とよむ
盗人(ぬすびと)に鐘つく寺や冬木立
美しき日和(ひより)になりぬ雪の上
今朝見ればこちら向きたる案山子(かがし)かな

与謝蕪村(よさぶそん)

公達(きんだち)に狐化けたり宵の春
滝口に燈(ひ)を呼ぶ声や春の雨
高麗船の寄らで過ぎ行く霞かな
指南車(しなんしゃ)を胡地に引去る霞かな
易水にねぶか流るる寒さ哉
春の海ひねもすのたり〳〵かな
白梅(はくばい)や墨芳(かんば)しき鴻臚館(こうろくわん)
梅遠近(をちこち) 南(みんなみ)すべく北すべく
行く春や重たき琵琶の抱心(だきごころ)
みじか夜や波打際の捨篝(すてかがり)
五月雨や大河を前に家二軒

原の不夜庵に独居して俳諧に専念した。明和八年（一七七一）歿。六三歳。「都のつと」「鬼貫句選」「春夏」等の撰。句集「太祇句選」がある。

姓は谷口。名は寅。長庚紫狐庵・夜半亭などの号がある。摂津東成郡毛馬村の人。若い時江戸に出て早野巴人について学ぶ。師の歿後、関東・関西の処々に移り住んだが、宝暦七年より京都に定住し、いよいよその才をふるった。天明三年一二月二五日（一七八三）歿。六八歳。「蕪村七部集」・「新花摘」・「夜半楽」・「玉藻集」・「芭蕉附合集」などの撰著があり、句は「蕪村句集」（几董編）に収められている。

蕪村は画家でもあったので、その

御手打の夫婦なりしを衣更
ほととぎす平安城を筋違に
夕風や水青鷺の脛をうつ
牡丹散つて打重りぬ二三片
愁ひつつ岡に登れば花いばら
白露や茨の刺に一つづつ
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
　英一蝶が画に賛望されて
四五人に月落ちかゝる踊かな
　遊行柳のもとにて
柳散り清水かれ石ところ〳〵
夕時雨蟇ひそみ音に愁ふかな
むささびの小鳥食み居る枯野哉
（以上　蕪村句集　他）

　北寿老仙をいたむ
君あしたに去りぬ　ゆふべの心千々に何ぞはるかなる
君をおもふて岡の辺に行きつ遊ぶ　岡の辺何ぞかく悲しき
蒲公の黄に薺の白う咲きたる　見る人ぞなき
雉子のあるか　ひた鳴きに鳴くを聞けば

イメージはやはり絵画的である。蕪村の俳句は芭蕉と趣をことにしロマンティックな夢幻性にとみ、ときには「雨月物語」の作者、上田秋成の世界さえ連想させる。「春風馬堤曲」に於て漢詩と日本語との見事な調和美をつくりあげたのも偶然ではない。漢詩の持つ屈折したリズムと、語感が匂わせる色彩感とは、蕪村好みのある天上的な明るさであったに違いない。

「北寿老仙をいたむ」歌はまた驚ろくほど新鮮である。蕪村以後、島崎藤村の出現をまつまで実現しないこの日本語のメロディーが何故、突然変異のごとく江戸天明期にポツンとあるのか。短歌的世界という既成概念でしか自分の心を歌えない多くの人々のなかで、蕪

友ありき　河をへだて丶住みにき
へげの煙の　そと打ち散れば　西吹く風のはげしくて
小竹原（をざさはら）　真菅原（ますげはら）　のがるべき方ぞなき
友ありき河をへだて丶住みにき　今日はほろゝとも鳴かぬ
君あしたに去りぬ　ゆふべの心千々に何ぞはるかなる
我庵の阿弥陀仏　ともし火もものせず　花もまゐらせず
すごゝゝと彳（たたず）める今宵はことに尊き

村は、芸術に対しても自分に対してもこんなに自由であったのだ。とくに「何ぞはるかなる」「何ぞかくかなしき」という、連体終止形の持つ余韻の美しさは胸をついてやまない。終章の条りは、鴨長明「方丈記」の一節にも類似していて、蕪村の教養の深さをしのばせる。

春風馬堤曲（しゅんぷうばていきょく）

余一日問耆老於故園、渡澱水過馬堤、
偶逢女帰省郷者
先後行数里、相顧語
容姿嬋娟、癡情可憐、
因製歌曲十八首、代女述意
題曰春風馬堤曲

或日、旧里の老人を訪ねようと、澱川を渡って馬堤にさしかかった。偶然、故郷へ帰る女と道連になり、数里話し合いながら行った。優しく可憐な美人である。そこで女の心情を汲み歌を作った。春風馬堤曲という題である。

やぶ入りや浪花（なには）を出でて長柄川（ながらがは）
春風や堤（つつみ）長うして家遠し
堤下摘芳草　荊与蕀塞道　荊蕀何妬情　裂裙且傷股

渓流石点々　踏レ石撮ニ香芹一　多謝水上石　教ニ儂不レ沾レ裙
一軒の茶見世の柳老いにけり
茶店の老婆子儂を見て慇懃に無恙を賀し且儂が春衣を美む
店中有ニ二客一　能解ニ江南語一　酒銭擲ニ三緡一　迎レ我譲レ榻去
古駅三両家　猫児妻を呼べど妻来らず
呼レ雛籬外鶏　籬外草満レ地　雛飛欲レ越レ籬　籬高堕三四
春草路三叉中に捷径あり我を迎ふ
たんぽゝ花咲けり三々五々　五々は黄に三々は白し
記得す去年此路よりす
憐みとる蒲公茎短くして乳を浥せり
むかし〱しきりにおもふ慈母の恩　慈母の懐袍別に春あり
春あり成長して浪花にあり　梅は白し浪花橋辺財主の家
春情まなび得たり浪花風情
郷を辞し弟に負く身三春　本をわすれ末を取る接木の梅
故郷春深し行き〱て又行き行く　楊柳長堤道漸く下れり
矯首はじめて見る故国の家黄昏
戸に倚り白髪の人弟を抱き我を待つ春又春
君見ずや古人太祇が句　藪入の寝るやひとりの親の側

堀(ほり)　麦(ばく)　水(すゐ)

静さや蓮の実の飛ぶあまたたび

加賀金沢の人。当時流行の平俗な俳風にあきたらず芭蕉への復帰を志した。天明三年（一七八三）歿。六六歳。著書「蕉門一夜口授」・「新虚栗」。句は「樗庵麦水発句集」に収められている。

高桑闌更(たかくはらんかう)

川船や雲雀啼き立つ右左
雨乞や火影(ほかげ)に動く雲の峯
元日や松静なる東山
山里や煙斜に薄紅葉

名は忠保。加賀金沢の人。麦水と同じく芭蕉の遺風を世に顕す為に努めた。諸国行脚の末、晩年京都に住む。寛政一〇年（一七九八）歿。七三歳。「花の故事」其他の著書がある。

加舎白雄(かやしらを)

菖蒲湯や菖蒲寄り来る乳(ち)のあたり
めくら子の端居淋しき木槿(もくげ)かな
霧の香や松明(たいまつ)捨つる山かつら
いちはやく燃えてかひなし榾(ほだ)の蔦

信州上田の人。名は吉春。諸国を旅行した後、安永九年江戸に春秋庵を開いた。寛政三年（一七九一）歿。五七歳。撰著「俳諧寂栞」他がある。句は「白雄句集」に収められている。

黒柳召波

通称清兵衛。京都の人。服部南郭に漢詩を学ぶ。後蕪村に俳諧を学ぶ。明和八年（一七七一）歿。句集「春泥句集」がある。

憂きことを海月に語る海鼠かな
一函の皿あやまつや煤払

高井几董

京都の人。蕪村に学び、忠実に師風を守る。四九歳。寛政元年（一七八九）歿。「蕪村七部集」を撰し、他に「から檜葉」・「新雑談集」・「初懐紙」等がある。句は自撰集「井華集」に収められている。

恋々として柳遠のく舟路かな
青海苔や石の窪みの忘れ汐
山寺や縁の下なる苔清水
やはらかに人分け行くや勝角力
悲しさに魚食ふ秋の夕哉
鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪
冬木立月骨髄に入る夜哉

井上士朗

名は正春。名古屋の人。医者。俳諧の他、本居宣長に国学を学ぶ。画も画いた。文化九年（一八一二）歿。七一歳。撰集「士朗五七集」の他、随筆・句集等著書が多い。

たうたうと滝の落ちこむ茂り哉

小林一茶（こばやしいっさ）

家なしも江戸の元日したりけり
あばら家や其身その儘明（あけ）の春
めでたさも中位なりおらが春

親の無い子はどこでも知れる、爪をくはへて門に立つと、子供らに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、裏の畠に木萱など積みたる片かげに踞りて長の日をくらしぬ。我が身ながらもあはれなりけり。

我と来て遊べや親のない雀
雀の子そこのけそこのけお馬が通る
悠然として山を見る蛙かな
痩蛙負けるな一茶これにあり

居去（いざり）

陽炎（かげろふ）や手に下駄はいて善光寺
下谷（したや）一番の顔して更衣（ころもがへ）
大螢ゆらり〳〵と通りけり
やれ打つな蠅が手をすり足をする

信州柏原に生る。三歳の時母に死別。不幸な家庭に成長し後江戸に出て俳諧を学んだ。寛政の頃、一茶坊と号して諸国を旅行し、晩年は故郷に定住したが、弟と遺産相続権を争ったり、妻や子に死別したり災難が多かった。文政一〇年（一八二七）歿。六五歳。撰著「旅拾遺」「さらば笠」「三韓人」「おらが春」の他、遺稿集「七番日記」「八番日記」「九番日記」「我春集」「株番」、句集「一茶発句集」がある。

裏長屋のつきあたりに住みて

涼風の曲りくねつて来りけり

旅

一人（いちにん）と帳面につく夜寒哉

軽井沢

有明や浅間の霧が膳を這ふ

一人旅

次の間の灯で膳につく寒さ哉

これがまあ終（つひ）の栖（すみか）か雪五尺

うまそうな雪がふうはり〳〵と

ともかくもあなた任（まか）せの年の暮

賀茂真淵（かものまぶち）

こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清し訪ふ人もがも

信濃なる菅のあら野をとぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな

（一六九七―一七六九）国学者・歌人。岡部氏。号は県居（あがたゐ）。静岡県岡部町に生る。荷田（かだの）春満（あづままろ）に学ぶ。古典を研究し、中でも万葉集の権威であった。「万葉考」「祝詞解」「冠辞考」「歌意考」「賀茂翁家集」等の著書がある。

田安宗武（たやすむねたけ）

春雨は音静けしも妹が家にい行きかたらひこの日暮らさむ

琴の緒をさわたる風のひゞかすに秋さり来ぬと今はしるしも

菰（こも）かげに浮む沢鶏（さはかけ）その菰にとさかの匂はえていつしき

真帆ひきてよせ来る船に月照れり楽しくぞあらむその船人は

栽（う）ゑし時は枯るべく見えしわが庭のしだり柳の愛（めで）たくなりぬ

（天降言）

（一七一五—一七七一）国学者・歌人。徳川氏。八代将軍吉宗の次男。荷田春満・賀茂真淵に和歌を学ぶ。歌集「天降言」がある。

香川景樹（かがはかげき）

今よりははとり少女（をとめ）ら新桑（にひぐは）のうら葉とるべき夏は来にけり

朝づく日さしも定めぬ大ひえのきらゝの坂に時雨ふる見ゆ

我妹子（わぎもこ）が額髪結ふ元結（もとゆひ）の濃（こ）紫なる藤浪の花

浅沢の沼のま菰（こも）の墨をとりてこつま少女は眉づくりせり

月に寝ぬやもめ烏やうかれ烏うたへ諷（うた）はむ明けぬともよし

（桂園一枝）

（一七六八—一八四三）歌人。林氏。桂園と号す。鳥取の人。真淵の古典主義に対し、自然の感情を素直にうたうのを本旨とした。家集「桂園一枝」の他、歌論書が多い。

木下幸文（きのしたたかぶみ）

今年さへかくて暮れぬと故郷の空を仰ぎてなげきつるかも

（一七七九—一八二一）通称民蔵。朝三亭・亮々舎と号す。備中の人。香川景樹の門人。家集「亮々

いかにして我はあるぞと故郷に思ひ出づらむ母し悲しも
かたちはも山の猿となりぬれど人にしあれば心悲しも
古の人も飲みけむかす湯酒我もすゝらむ此の夜寒しも
ふる里のきびの小山田打ちかへし悔しき事の多くもあるかな
我が宿に何の喜びうるさうるさ門さしこめて無しといはばや

良寛

手毬をよめる

冬ごもり　春さり来れば　飯乞ふと　草の庵を　立ち出でて　里にい行けば　たまぼこの　道の巷に　子供らが　今を春べと　手毬つく　ひふみよいむな　汝がつけば　吾はうたひ　吾がつけば　汝は歌ひ　つきて歌ひて　霞立つ　長き春日を　暮しつるかも

霞立つ長き春日を子供らと手毬つきつつ今日も暮しつ

鉢の子

鉢の子は　愛しきものかも　敷妙の　家出せしより　朝には　腕にかけて　夕べには　掌上にのせて　あらたまの　年の緒長く　持たりしを　今日よそに　忘れて来れば　たつらくの　たづきも知らず　居るらくの　術をも知らず　かりこもの　思ひみだれて　夕づつの

遺稿」、歌論「亮々草紙」がある。

(一七五七―一八三一)　禅僧・歌人。俗名山本栄蔵。大愚と称す。越後の人。諸国行脚の後、故郷の上山の五合庵に住んだ。恬淡高潔な人格。書は有名である。歿後、歌集が編集された。「蓮の露」「沙門良寛師歌集」、相馬御風編「良寛和尚詩歌集」がある。

か行きかく行き　谷ぐくの　さわたる底ひ　天雲の　むかふすきはみ　天地の　よりあひの限り　杖つきも　つかずも行きて　尋めなんと　思ひし時に　人は持て来ぬ　いかなるや　人にませかも　ちはやふる　神ののりかも　ぬばたまの　夜の夢かも　嬉しくも　持て来るものか　よろしなべ　持ち来るものか　その鉢の子を

道のべの菫つみつつ鉢の子を忘れてぞ来しその鉢の子を

鉢の子を我忘るれど取る人はなし取る人はなし鉢の子あはれ

鉢坊主

鉢たがき　鉢たがき　昔も今も　鉢たがき　鉢たがき　鉢たがき
鉢たがき　鉢をたがいて　日を暮らせ

子供らと手携はりて春の野に若菜を摘めば楽しくもあるかも

鉢の子に菫たんぽぽこきまぜて三世の仏にたてまつりてむ

草の庵に足さしのべて小山田の山田の蛙聞くが楽しさ

足引の山田のをぢがひめもすにいゆき帰らひ水運ぶ見ゆ

山かげの岩間を伝ふ苔水の幽かに我はすみ渡るかも

たらちねの母の形見と朝夕に佐渡の島根を打ち見つるかな

水瓶のうた

古にありけむ人の持てりてふ大み器を我は持ちたり
月読の光を待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに
ちんばそにさけに山葵に給はるは春を寂しくあらせじとなり
（良寛歌集）

大隈言道

咲く花を尋ねてゆけばいつよりか去年こし道に道はなりきぬ
奥まれる家をぞ持たる蝸牛我があさましきふしどには似ず
泣くものは大人にならじ泣くものは柿も与へじ梨も与へじ
諸共に住めばかしまし諸共に住まねば寂しうたて妻子ども

折にふれて

①うま人にあらねばこそはやすく見れ花といへば花月といへば月

人をそしる俳諧

人心いらのいらだちあるは又なまこのなめら骨なしにして

橘曙覧

日の光至らぬ山の洞の中に火ともし入りて金掘り出だす
ま裸の男子群れゐて鉱のまろがり砕く鎚うち揮りて

（一七九八—一八六八）　清原氏。通称清助。萍堂と号す。歌人。福岡の人。歌論「ひとりごち」「こぞのちり」。家集「戊午集」「今橋集」。

①上流社会の人でない自分は花を見るにも月を見るにも気楽なことだ。（花見だ月見だと金を使って大げさに騒ぐ金持を嗤いながら、ひそかに我身の貧しさを自嘲した歌）

（一八一二—一八六八）　歌人・国学者。歌集「志濃夫廼舎歌集」「藁舎詠草」などがある。

黒煙むらがり立たせ手もすまに吹きとろかせば崩（なだ）れ落つる金（かね）

米の銭（ぜに）なほ足らずけり歌をよみ文を作りて売り歩けども

燈火のもとに夜な夜な来（きた）れ鬼我が秘め歌の限りきかせむ

楽しみは妻子（めこ）むつまじく打ちつどひ頭（かしら）ならべて物を食ふ時

楽しみは心に浮ぶはかな事思ひつゞけて煙草（たばこ）すふとき

楽しみは銭なくなりてわび居るに人の来りて銭くれし時

楽しみは乏しきまゝに人集め酒飲め物を食へと言ふ時

美豆山の青垣山の神樹葉（さかきば）の茂みが奥にわが魂こもる

（志濃夫廼舎歌集）

現代の詩歌

現代の詩歌

詩　明治初期の讃美歌や「螢の光」などの小学校唱歌群さらに明治一五年に出版された「新体詩抄」などにより、短歌・俳諧とは別の、自由な詩型が登場してきた。明治二〇年をすぎると、紅・山田美妙・落合直文・大和田建樹・北村透谷などがさかんに個性的な新体詩を書くようになり、鷗外の訳詩集「於母影」等を通して外国詩の影響も濃厚に受け、やがて藤村以降、現代詩の歴史がはじまるのだ。藤村の浪漫、有明・泣菫の象徴詩、透谷の理想主義など黎明期をいろどる色彩は卍に乱れ、現代詩は文明の進歩、社会生活の複雑化に比例して、より多彩な花々を咲かせたのだ。即ち詩は、短歌、俳句にくらべいっそう全体的に人間社会そのものと連関しつつ形成されて、未完の長い道程をゆくのだ。河井酔名のいわゆる「文庫派」からは川路柳虹などの口語自由詩運動が芽生え、鉄幹の「明星」からは白秋等の感覚優先の若々しい美学が巣立ち、「白樺」からは光太郎のヒューマニズムがうちだされた。大正期にはその暗い世相を反映して朔太郎が近代の憂愁をうたい、暮鳥・元麿などの日本的人生派のつぶやきも抒情をこえた意味の世界をさぐり、一方では労働者階級の抬頭とともにプロレタリア詩運動もさかんになり、第一次世界大戦後の混乱を象徴するダダ・無政府主義の詩・etc の現代詩は「時代の証人」としての性格を益々強く持つようになった。そして大正初期から昭和期にかけ、「四季派」の抒情、「新領土」「VOU」の超現実主義ないしはモダニズム、「赤と黒」の労働詩、「歴程」の人生派的ダイナミズムなど、多くの個性的詩人が輩出した。この集では頁数の都合で戦中、戦後の現在活躍中の詩人を収めていないが、現代詩は、いよいよ困難な歴史の内部で活潑に詩の生命を主張し

ているのだ。

短歌　鉄幹の「明星」と子規の「根岸短歌会」が明治初期から二つの潮流を形成している。子規に源を持つ歌風は「アララギ」の写実主義となり、鉄幹の門からは浪漫主義的傾向が芽生えていった。他に啄木の社会主義、牧水・夕暮の自然主義、昭和前期のプロレタリア「新興歌人連盟」があるが、現代詩の世界ほど複雑ではなく、定型の美を守ることで一致しつつ、戦後を迎える。本集では戦後活躍している歌人を収めていないが、(『愛の詩歌集』参照) 戦後は、短歌の世界にも定型への批判があらわれている。

俳句　子規・虚子を経て徹底写実をとなえる「ホトトギス」を主流とすれば、いろんな意味で反主流をとなえた人々がすべて明治以降現代に至る俳句の世界を構成している。清新な抒情をそこへ注入した秋桜子、写実に形而上的な重量を与えた山口誓子、さらに西東三鬼などの無季題の俳句を唱える新しい運動、草田男・波郷などによって現代化される現代俳句の歴史に於ても戦後は流行のごとく型破りの試みが多くなされているが、実験の域を出ないようだ。

詩

島崎藤村

千曲川旅情の歌（詩集・落梅集）

一、小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萠えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る
あたゝかき光はあれど
野に満つる香も知らず

小伝　一八七二年(明治五年)二月一七日長野県西筑摩郡神坂村馬籠に生る。本名は島崎春樹。

　三田英学校、共立学校を経て明治学院に入学、在学中牧師木村熊次にキリスト教の洗礼をうけた。卒業後、巌本善治の明治女学校の教師をしながら「女学雑誌」などに翻訳を発表、一八九三年（明治二六年）「文学界」の創刊とともに藤村の文学生活が始まった。

　この頃、北村透谷・星野天知・平田禿木などと交る。

　明治二九年東北学院に赴任、本格的な新体抒情詩を書き始め、翌年処女詩集「若菜集」を出版。「一葉集」（一八九八）「夏草」（一八九八）を相ついで上梓。

浅くのみ春は霞みて
麦の色はづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

常盤樹（詩集・落梅集）

あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな

一八九九年（明治三二年）小諸義塾に移り秦冬子と結婚、第四詩集「落梅集」を刊行、詩業に一応の段落をつけた。藤村の芸術の真価は多くの名作「破戒」「家」「春」「夜明け前」等の小説にあるといえる。彼が詩集「若菜集」で表現した抒情の世界は、現代詩の先駆であるよりむしろ、前時代の終焉を飾るにふさわしく美しいものであった。「東方の門」を執筆半ばで一九四三年歿。

鑑賞　旅情の歌は「椰子の実」など共によく唱われる有名な詩である。旅愁の色濃き作品であるが旅を人生とみる詩人の感想は、モチーフと調和して見事に表現されている。「常盤樹」は藤村の詩の傑作であろう。その格調の見事さ、はりつめた強さ、壮大もその内に

其枝に懸る朝の日
其幹を運る夕月
など行く旅の迅速なるや
など電の影と馳するや
蝶の舞
花の笑
など遊ぶ日の世に短きや
など其酔の早く醒むるや
虫草の葉に悲めば
一時にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力天を貫きて
坤軸遂に静息なし
ものみな速くうらがれて
長き寒さも知らぬ間に

こめた孤独の深さをテーマにしている。「落梅集」は藤村が二五歳から二九歳にわたる足掛五年間の作品を集めたものである。ここには「若菜集」の初々しい抒情美はいささか失われ、人生の霜雪に刻まれた人の、底音が流れている。しかし藤村は「落梅集」刊行の年、詩集合本初版の序で、次のように言っている。僕の大好きな言葉だ。

「遂に新しき詩歌の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとく呼ばゝり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。(中略)新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。そ

汝千歳の時に嘯き
独りし立つは何の力ぞ
白銀の花霏々として
吹雪の煙闇き時
四方は氷に閉されて
江海も音をひそむ時
汝緑の蔭も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野辺の帝王
ゆゝしく高く立てよ常盤樹
汝の長き春なくば
山の命も老いなんか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなんか
あしたには葉をうつ霙
ゆふべには枝うつ霰
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ

の芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。（後略）」

いづれの日にか
氷は解けて
其葉の涙
消えむとすらん
あゝよしさらば枝も摧けて
終の色の落ちなん日まで
雲浮かば
無縫の天衣
風立せば
不朽の緒琴
おごそかに
立てよ常盤樹
あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな

土井晩翠

荒城の月（中学唱歌）

第一章

春高楼の花の宴
　めぐる盃かげさして
　　千代の松が枝わけいでし
　　　むかしの光いまいづこ

第二章

秋陣営の霜の色
　鳴きゆく雁の数見せて
　　植うるつるぎに照りそひし
　　　むかしの光いまいづこ

第三章

小伝　一八七一年（明治四年）一〇月二三日仙台市鍛冶町に生る。旧家で質商を営んでいた。本名は土井林吉、第二高等学校を経て東京帝大英文科に学ぶ。一八九九年（明治三二年）に処女詩集「天地有情」を刊行。日清戦争後の国情に晩翠の軍国調は忽ち拡がり青少年の心をとらえた。一九〇一年（明治三四年）「暁鐘」出版、藤村とならび新体詩の双璧と称された。「東海遊子吟」（一九〇六）は海外留学の旅情を基にした詩集である。

　一九三四年（昭和九年）二高教師をやめホーマの翻訳に老後の情熱をそそぎ一九五〇年（昭和二五年）文化勲章を授与。一九五二年（昭和二七年）一〇月一九日、仙台で歿した。八〇歳。

今荒城のよはの月
　替らぬ光たがためぞ
　　垣に残るはたゞかつら
　　　松に歌ふはたゞあらし

第四章

天上影は替らねど
　栄枯は移る世の姿
　　写さんとてか今もなほ
　　　嗚呼荒城のよはの月

薄田泣菫

望郷の歌（詩集・白羊宮）

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、
在木の枝に色鳥の咏め声する日ながさを、
物詣する都女の歩みものうき彼岸会や、

鑑賞　現代の僕達に晩翠は藤村よりさらに古く感ぜられる。藤村が抒情なら晩翠には叙事が多すぎるのだ。漢詩調の口調にも、もはやいまの若者はなじめない。「荒城の月」は滝廉太郎の曲で余りにも有名であり、晩翠の詩としても、生硬さのすくない、美しい作品である。

小伝　一八七七年（明治一〇年）五月一九日、岡山県浅口郡連島（現在の倉敷市）に生る。本名は薄田淳介。岡山中学を二年で退学、東京の漢学塾や英学塾に学び、一八

桂をとめは河しもに梁誇りする鮎汲みて、
小網の雫に清酒の香をか嗅ぐらむ春日なか、
櫂の音ゆるに漕ぎかへる山桜会の若人が、
瑞木のかげの恋語り、壬生狂言の歌舞伎子が
技の手振の戯ばみに、笑み広ごりて興じ合ふ
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、楠樹の若葉仄かに香ににほひ、
葉びろ柏は手だゆげに、風に揺ゆる初夏を、
葉洩りの日かげ散斑なる糺の杜の下路に、
葵かづらの冠して、近衛使の神まつり、
塗の轅の牛車、ゆるかにすべる御生の日、
また水無月の祇園会や、日ぞ照り白む山鉾の
車きしめく広小路、祭物見の人ごみに、
比枝の法師も、花売も、打ち交りつゝ頽れゆく
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、赤楊の黄葉ひるがへる田中路、

九九年（明治三二年）「暮笛集」刊行。翌年大阪毎日新聞に入社、同年一〇月より「小天地」を平尾不孤・角田浩とともに創刊、関西における特異な文芸雑誌とした。「ゆく春」（一九〇一）「二十五絃」（一九〇五）「白羊宮」（一九〇六）等の詩集を上梓、蒲原有明とともに象徴派詩人の先駆となった。

一九一二年（明治四五年）再び大阪毎日新聞の学芸部長として迎えられ「茶話」「猫の微笑」「艸木虫魚」「樹下石上」等の独特の随筆を書いた。昭和二〇年一〇月郷里で歿。六九歳。

鑑賞　「望郷の歌」は「ああ大和にしあらましかば」（白羊宮・この文庫の『愛の詩歌集』に解説あり）「公孫樹下にたちて」（二十五絃）など

稲搗をとめが静歌に黄なる牛はかへりゆき
日は今終の目移しを九輪の塔に見はるけて、
静かに眠る夕まぐれ、稍散り透きし落葉樹は、
さながら老いし葬式女の、懶げに被引延へて、
物歎かしきたたずまひ、樹間に仄めく夕月の
夢見ごこちの流眄や、鐘の響の青びれに、
札所めぐりの旅人は、すゞろ家族や忍ぶらむ
　かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、朝凍の真葛が原に楓の葉、
そそ走りゆく霜月や、専修念仏の行者らが
都入りする御講凪ぎ、日は午さがり、夕越の
路にまよひし旅心地、物わびしらの涙眼して、
下京あたり時雨する、うら寂しげの日短かを、
道の者なる若人は、ものの香朽ちし経蔵に、
塵居の御影、古渡りの御経の文字や愛しれて、
夕くれなゐの明らみに、黄金の岸も慕ふらむ
かなたへ、君といざかへらまし。

とならぶ泣菫の代表作である。

　泣菫の研究家松村緑氏はその著書で上田敏が望郷の歌を激賞した一節を引用されている。『新年の「太陽」に寄せたる佳什「望郷の歌」は「ミニヨンの歌」に通ひて、而も大に日本の趣味を発揮したる所面白し』と。

　泣菫自身は後年「第三節、第四節が極く自然に出来たやうに記憶してゐます」とのべているそうだ。松村氏は春夏を歌った前半にくらべ、秋冬の後半がすぐれている理由を「作者の京都に関する体験が春、夏に浅くして、秋、冬に深かったため」とされている。

　そしてこの詩のリフレインの句「かなたへ　君といざかへらまし」を単に「ミニヨンの歌」のひきうつしとみるより、当時「結婚生活

蒲原（かんばら）有明（ありあけ）

誰かは心伏せざる（詩集・春鳥集）

煙は鈍（には）む日に、
映（うつ）りて、くらきむらさき、
ながれぬ、霜の圧（お）す

に入ろうとしてゐた作者の内的生活と無関係」ではないとも附言されている。僕も同感である。そしてなお泣菫がこのリフレインで「ああかなたへ」と言わなかった点に大いに感心してもいるのだ。「ああ」を入れるとリズムがつきすぎる。それをとると、音律がそこで、かすかな破調を起し、「かへらまし」の実感が強く湧いてくる。言葉に厳格な先達を憶う。

小伝　一八七六年（明治九年）三月一五日東京麹町隼町に生れた。本名蒲原隼雄。

国民英学会に入り小林存・林田春潮などと雑誌「落穂双紙」を創刊（明治二七年）新体詩「秋の山里」を書く。

一八九五年（明治二八年）徴兵

弓かとひくく撓みぬ。

悶ゆるけぶり、世の
底なるいぶきか、壊ゑくゑ
うづまき去るかなた、
ねびてぞ墜つる日黄なる。

夕ぞらよどむとき、
静かに、重し、すさまじ、
巷を空ぐるま
まろびてゆくに似たらず。

見よ、今煤ばめる
「工廠」いくむねどよみ、
その背をめぐらすすや
いさ、かの天の耀光。

聖なるちからには

検査のため父の郷里佐賀県に行き、唐津、有明海などの風土に親しみ、筆名を「有明」とつけた。

一九〇二年（明治三五年）処女詩集「草わかば」更に「独絃哀歌」（一九〇三）「春鳥集」（一九〇五）を上梓。一九〇六年結婚。一九〇八年「有明集」を刊行。一九五二年（昭和二七年）二月三日歿、七七歳。

鑑賞　「春鳥集」は我国ではじめての象徴詩といってもいいかと思う。有明はみずから春鳥集の序で〈元禄期には芭蕉出でて、隻問に玄致を寓せ、凡てを練りて霊を得たり。わが文学中最も象徴的なるもの。白罌粟は時雨の花にして、鴨の声ほのかに白く、亡母の白髪を拝しては涙ぞ熱き秋の霜を悲し

后土とどろき、蒸して、
騰れるゆげには
うるはし花こそこもれ。——

かからむ花はまた
世になし、ひらめくひかり
遽かに窓を洩れ、
強き香照らす束のま。

鳥啼く——ああ鉄槌の
ひびきよ、かぎろひけぶる
ただなか、戦の
胸肉刻む声なり。

誰かはこのほとり
ゆく時こころ伏せざる、——
痍にか、身に逼る
道にか、高き御名にか。

み、或は椎の花の心をたづねよといひ、或は花のあたりのあすならふを指す。「古池」に禅意ありといひ、「木槿」に教戒ありと解するは、珠玉を以て魚目と混ずるなり。

　このごろ文壇に散文詩の目あり、その作るところのもの、多くは散漫なる美文に過ぎず(後略)》

と言っている。

　有明の詩には泣菫より更に内面的な魂のニュアンスが感得される。フランスの象徴詩人ボードレールやランボーがそうであったように、有明の詩には単純な抒情美とことなる一種のグロテスクな趣好が点在している。

　そしてこの暗い部分は、詩人が人間をようやく客観的にみつめはじめたその姿勢から生れる。即ち一種のリアリズムである。

有明の詩にはむろんより一層、象徴詩特有の美学的修辞が色濃い。しかしこの詩の後半は鮎川信夫氏も指適しているように、鋭い社会批判の眼が輝いている。この詩の作られた明治三八年が日露戦争のまっただなかであった事を思えば、詩句のイロニーはなっとく出来よう。

「ゆく時こころ伏せざる」

反戦詩としての内容を感じないわけにはゆかないではないか。日清戦争のさなか、ミリタリズムをその詩句で鼓吹した土井晩翠に比し、詩人の生き方の違いに暗然。

北原白秋（きたはらはくしゅう）

酒の黴（詩集・思ひ出）

小伝　一八八五年(明治一八年)一月二五日福岡県山門郡沖端村（現在柳川市）に生る。生家は酒醸造業で通称油屋または古問屋とよばれ

酒屋男は罰被ぶらんが不思議、ヨイヨイ、足で米といで手で流す、ホンニサイバ、手で流す。ヨイヨオイ。

1

金の酒をつくるは
かなしき父のおもひで、
するどき歌をつくるは
その児の赤き哀歓。

金の酒をつくるも、
するどき歌をつくるも、
よしや、また、わかき娘の
父知らぬ子供生むとも……

2

からしの花の実になる
春のすえのさみしや。
酒をしぼる男の
肌さへもひとしほ。

る九州で有数の旧家であった。本名は隆吉。中学伝習館卒業の頃、数学の教師と衝突して退学、早稲田大学文科に入学。父・長太郎は息子が文学の道に進むことに反対したが、一九〇六年(明治三九年)与謝野寛の誘いで新詩社に入り「明星」に作品を発表して上田敏などの多くの先輩の注目をあつめた。一九〇九年(明治四二年)三月処女詩集「邪宗門」一九一一年(明治四四年)五月「思い出」を出版、この稀有の天才は忽ち詩壇の寵児になった。一九〇八年(明治四一年)に木下杢太郎・吉井勇・石井柏亭・高村光太郎・山本鼎などと「パンの会」をおこし、若き芸術家の強烈なロマンティシズムを祭った。一九一三年(大正二年)七月「東京景物詩及其他」を出したが、同

3

酒袋(さかぶくろ)を干すとて
ぺんぺん草をちらした。
散らしてもよかろ、
その実となるもせんなし。

4

酛(もと)すり唄のこころは
わかき男の手にあり。
櫂をそろへてやんさの
そなた恋しと鳴らせる。

5

麦の穂づらにさす日か。
酒屋男にさす日か。
軽く投げやるこころの
けふをかぎりのあひびき。

年一月に出版された歌集「桐の花」の鮮新な抒情は歌人としての白秋の出発点でもあった。

一九一五年（大正四年）、弟鉄雄の阿蘭陀書房から雑誌「ARS」を発刊（以降鉄雄は出版社「アルス」を、末弟義雄は同じく「アトリエ社」を起し、兄弟の美しい協調は晩年までつづく）。

白秋は童謡の世界にも巨歩を印した。一九一九年（大正八年）に出版された「蜻蛉の眼玉」を出発点に、「からたちの花」「この道」「あわて床屋」「かやの木山」などいまも盛んに愛唱される数々の懐しい歌を作った。そして更に白秋の才気は民謡にまで及び、殊に日本古来の伝承童謡の採集という地味で貴重な仕事にも着手した。この仕事は白秋の志をつぐ藪田義雄氏の

6

人の生るるもとすら
知らぬ女子のこころに、
誰が馴れ初めし、酒屋の
にほひか、麦のむせびか。

7

からしの花も実となり、
麦もそろそろ刈らるる。
かくして、はやも五月は
酒量る手にあふるる。

8

櫨(はじ)の実採の来る日に
百舌(もず)啼き、人もなげきぬ。
酒をつくるは朝あけ、
君へかよふは日のくれ。

手でなお息長くつづけられているが、日本の詩歌の隠れた脈絡を究める重要な研究といえよう。

一九四一年(昭和一六年)芸術院会員に推され、翌年一一月二日五八歳の働きざかりで多彩な詩業の幕をとじた。

鑑賞　詩・短歌・童謡・民謡と多彩な白秋の芸術は、生涯を通じ百数十冊に及ぶといわれる。短歌については本書の「現代短歌」の項でふれるが、詩に関しても、唯一篇を選出する事はかなりむずかしい。詩集「思ひ出」には処女詩集「邪宗門」所収のエキゾチックな作品より制作年代の古いものもあれば、「パンの会」「東京景物詩」のいわば頽唐趣味横溢した作品群と並行して書かれたものも入ってい

9

ところも日をも知らねど、
ゆるししひとのいとしさ。
その名もかほも知らねど、
ただ知る酒のうつり香。

10

足をそろへて磨ぐ米、
水にそろへて流す手、
わかいさびしいこころの
歌をそろふる朝あけ。

11

ひねりもちのにほひは、
わが知る人も知らじな。
頑(かた)くなのひとゆゑに
何時までひねるこころぞ。

る。　抒情小曲集と傍題されたこの有名な詩集には、故郷柳河の風物や、幼年時代の憶出を主材とした作品が大部分。白秋の豊かな感情は、幼年期の心に映ずる不思議な世界を巧みに表現している。夕日の恐怖、妖しいひがん花、そして性の芽生え。それら興味深い多くの作品から僕が「酒の黴」一篇を選出したのには理由がある。

僕も青春の一時期を九州の酒問屋ですごした。白秋の姉の婚家である。裸電球のともる暗く大きい倉庫、不思議な動物のようにうずくまる酒樽。その奥には妖しいもののけがすんでいる、と幼い子供達は本気で信じていた。その酒倉の印象がこの詩をよむと常にだぶって僕には新鮮なのだ。白秋の生家は彼が一六の時大火にあった。

12

微かに消えゆくゆめあり。
酒のにほひか、わが日か、
倉の二階にのぼりて
暮春をひとりかなしむ。

13

さかづきあまたならべて
いづれをそれと歎かむ、
唎酒(ききざけ)すなるこころの、
せんなや、われも酔ひぬる。

14

その酒の、その色の、にほひの、
口あたりのつよさよ。
おのがつくるかなしみに
囚らはれて泣くや、わかうど。

「あらゆる桶に新らしい金いろの日本酒を満たしたまま真蒼に炎上した」そのすさまじい状景は「思ひ出」の序文のなかに、鮮かに描写されていて、僕はいつのまにか「方丈記」の一節を自然に照応させて考えている。

「酒の黴」のリズムには、鴨長明から蕪村につながる清冽なローマンの香りが匂う。そしてそれはまた意外なことに、現代もっともヨーロッパ的といわれる西脇順三郎氏の初期の詩集「あんばるわりや」の詩にも共通する日本語の最も美しい音律を暗示しているのだ。

七五調のごとく形にはまって朗詠するのではなく、またわざとらしい破調があるでもなく、調和と破調が自然にくちずさむテンポでうたわれていて、かえって新

15

酒を醸(かも)すはわかうど。
心乱すもわかうど。
誰とも知れぬ、女の
その児の父もわかうど。

16

ほのかに忘れがたきは
酒のつくる日のをりふし、
ほのかに鳴いて消えさる
青い小鳥のこころね。

17

酒屋の倉のひさしに
薊のくさの生ひたり。
その花さけば雨ふり
その花ちれば日のてる。

しいのであろう。

「酒の黴25章」はまた亡父が酔うときまって愛誦する詩でもあった。白秋が「たった一人の愛する妹」と「思ひ出」に書いた僕の母は、そんな父を微笑しながらみつめていた。

18

計量機(カンカン)に身を載せて
量るは夏のうれひか。
薊の花を手にもつ
裸男の酒の香。

19

かなしきものは刺あり、
傷つき易きこころの
しづかに泣けばよしなや、
酒にも黴のにほひぬ。

20

目ざまし時計の鳴る夜に
かなしくひとり起きつつ、
倉を巡回(まは)れば、つめたし、
月の光にさく花。

21

わが眠る倉のほとりに
青き光放つもあり。
螢か、酒か、いの寝ぬ
合歡木のうれひか。

22

倉の隅にさす日は、
微かに消えゆく。
古りにし酒の香にすら、
人にはそれと知られず。

23

青葱とりてゆく子を
薄日の畑にながめて、
しくしく痛むこころに
酒をしほればふる雪。

24

銀の釜に酒を湧かし、
金の釜に酒を冷やす
わかき日なれや、ほのかに
雪ふる、それも歎かじ。

25

夜ふけてかへるふしどに
かをるは酒か、もやしか。
酒屋男のこころに
そそぐは雪か、みぞれか。

河井酔茗（かわいすいめい）

鳥（詩集・霧）

捉（とら）えて居ると思つて安心してゐると、逃出しさうにする。
そんなに逃げたければ、自由な空へ逃げて行くが好い。

小伝　一八七四年（明治七年）五月七日堺市の商家に生れた。
　一八九一年（明治二四年）一七歳の時、自作の詩を山田美妙に認められ、「青年唱歌集」に収載された。上京して東京専門学校（現在の早稲田大学）に学び、一八九五年（明治二八年）「文庫」の記者とな

捉(とら)えて居た処で私の生命に価値(ねうち)がつくでもない。
逃げたものだと思つて居ると、いつのまにか胸の巣に温まつてゐる。
いつ帰つて来たか。
鳥よ、お前が居ると胸の巣が温かい。
けれども私は鳥を温める為にばかりは生きてゐられないのだ。
忘れることもあらう。
冷たい血が巣に注(そそ)ぐこともあらう。
さうすると又逃出すだらう。

魚の血（詩集・霧）

腥(なまぐさ)い。
生きた魚と、乾いた魚の臭(にほ)ひ。
臓腑(はらわた)が腐る。
大きな魚の頭を切つて、二人(ふたり)して重さうに担いで来る。
赤い血が土の上に滴つてゆく。
脂肪(あぶら)が光に溶解(とろ)ける。
骨が見えて居る。
海の汐が血になつて、

り、一三年間新人の詩の選評をし、伊良子清白・横瀬夜雨・島木赤彦・三木露風・北原白秋・川路柳虹等多くの詩人を世におくった。

女子文壇、アルス出版部、婦人の友を経て女流文芸の推選をはかり、昭和初期、島本久恵と協力して女性時代社を興し、その仕事は塔影社と改められながら今日に及んでいる。現存詩人の最長老でもあり、夫人島本久恵さんの明治・大正・昭和三代に亘る長篇小説「長流」は昭和三六年上梓の運びとなった。日本芸術院会員。

鑑賞 詩集「霧」は一九一〇年（明治四三年）に出版されたもので、初期の「無弦弓」「塔影」と違って、口語の詩集である。

川路柳虹・服部嘉香も、口語自由詩の先駆者であるが、酔茗の「霧」

魚の頭から落ちて居る。
土が吸ふ。
日が吸ふ。
人が吸ふ。

寒い日（詩集・霧）

寒い。
太陽は何処を歩いてゐるか分らない。
光は空一面に澱(よど)んでゐる。
手頭(てさき)が麻痺(しび)れる。
皮膚の潤沢(うるほひ)が涸れる。
息が白い。
往来(みち)が白い。
曝(さら)されたる家よ。
飢(う)ゑた男が往来(みち)を歩きながら、何でも木片(きぎれ)があつたら燃さうと思つてゐる。
火！　と叫んだ。
酒と、女と、火と。

もまたその意味で長く記念されなければなるまい。

この詩の三節目と後半の五行、ことに「鳥を温める為にばかりは生きてゐられないのだ」という発想に、従来の美文調の詩にみられなかった、主観的表現を僕達は汲みとらなければいけない。

酔茗の詩の即物的な発想法は作品「魚の血」や「寒い日」をみると一層はっきり理解出来るだろう。形容句を出来るだけすてさり、現実世界の印象を適確に定着してゆく書き方は、当時としては全く新しいものであった。

彼の顔は獣のやうになつた。

木下杢太郎

五月の頌歌（詩集・食後の唄）

さう云ふ五月が街に来た。——

珍らしくも梅雨が霽れ
重重しい灰色の雲を透して太陽が
銀座の角の時計屋の窓の硝子を射とほした。
じいん・かつくう……
硬玉・碧玉・土耳古玉、
四つ葉馬蓿葉、忘れな草、
また黄金の馬の蹄の留針はむらむらぱつと輝いた。
じいん・かつくう……
折柄赤銅の小屋の屋根にて鳩は尻尾を高くあげ
一きは高く

小伝　一八八五年（明治一八年）八月一日静岡県田方郡伊東町（現在の伊東市）に生れた。本名は太田正雄。第一高等学校を経て東京帝大の医学部を卒業、一九一六年（大正五年）満州奉天の南満医学堂皮膚科教授となる。文学生活は一九〇七年（明治四〇年）「明星」に加わり、翌年「パンの会」をつくり白秋等とともに大いに耽美主義的な詩をつくった。

一九〇九年「スバル」創刊とともに小説、戯曲などを発表、「屋上庭園」でも活躍した。

一九二一年（大正一〇年）米・仏に留学帰朝後、愛知医大、東北帝大、東京帝大の医学部教授となり、傍らキリシタンの研究に全力をそそいだ。著作は「緑金暮春調」「食

じいん・かつくうと鳴きければ
主人は片眼より廓大鏡(ろうぺえ)を外し
注意深く机の片隅に置き
いまいましげなる顔をして
時計を見れば短針もⅫ(じふに)の所へ往つてゐる。
じいん・かつくう……

歌ひ時計の気楽さは
まだ午砲(どん)を鳴らさぬさきから歌ひ出し、
三味線もつた「万龍」の首を動かし白眼(しろめ)する
オルゴル仕掛のお座付は
いと興さむるわざながら、
隣の黒人は大きにはしやぎ、舌を出し、
十二の数をも待ち切れずタランタラをぞ踊りける。
じいん・かつくう……

さればあちらでもこちらでも
それをいい気に青山の喇叭調練の新兵もどき、

後の唄」「木下杢太郎詩集」、戯曲集「和泉屋染物店」「南蛮寺門前」、小説集「唐草表紙」「厥後集」 美術評論「印象派以後」「大同石仏寺」「十九世紀仏国絵画史」等がある。

一九四一年(昭和一六年)仏よりレジオン・ド・ヌウル勲章を贈られ、一九四五年（昭和二〇年）一〇月一五日、六一歳で逝去した。

鑑賞 「食後の唄」は一九一九年(大正八年)に刊行された詩集である。杢太郎は若い頃、画家を志したといわれているが、彼の詩にも絵画的イメージが濃厚である。ヨーロッパ風のエキゾティシズムと江戸趣味との不思議なミックスは、「パンの会」を中心とする当時の若きアーチストの流行でもあったのだろう。「食後の唄」には耽美的な詩

声の善いのも悪いのも節も調子もお構ひなく
じん・じん・がん・がん・じん・じん・じんと
正午の鐘を撞きならす——
日曜の寺にも似たりける

主人額に皺を寄せ、
また廓大鏡を目にはめて、
タバン会社の特製の機関をみる眼差も
五月となれば憎からず。

さう云ふ五月が街に来た。
八百屋で枇杷の走り——
一寸とお昼の献立は——茄子のしぎ焼、胡瓜もみ——
花村の店も繁昌する。
羽目に貼つたる浅葱刷、
寄席の太夫のびら札まで
にほひやかにて婀娜つぽく、
吹く風さへも花やかな、さう云ふ五月が来る時は

と更に江戸小唄の流れをひくような軽快な節まわしの小品が多くのっている。

杢太郎は五月という季節がすきだったとみえて、「五月」「五月頌歌」の他にも「金粉酒」「五月」などで、さわやかな新緑の風物を唄っている。

「五月頌歌」は一九一一年（明治四四年）の作で、当時の風俗、つまり江戸の名残と文明開化が共存する東京の独特の味わいが描写されている。よき時代のまことに平和でものういディレッタントの詩である。

寄席では風鈴かけ連ね、囃しが息むと高座では
円喬といふ落語家が羽織の紐解きお納戸の
ぞろりとしたのを後ろに投げ、
わざとわが手で頬をうち、顔しかめ、
蚊屋の外なる座頭が夜中
蚊に責められる真似をする。人さし指で蚊をつまむ。

さう云ふ五月が街に来た。
それ故角の玩具屋の鉄葉細工の噴水は
玉を転がし、からからと、また福助は太鼓をうつ。
紺の背広をかろく着け、
磨きたての赤靴に
泥をぱつけじと、心持白メルトンの縞ズボンを
かかげるやうに行く人は
黄ろい燈のつく鉄橋を
うち渡り遠き汽笛のゆるやかにながる鳴る聞けば
何となく気もせはしく、動悸かろく心臓をうつ。

さう云ふ五月が来る時は
河沿ひの酒場(ばあ)に入りて
われは静かに青きペパミントの酒を啜りて、
頌歌(ほめうた)つくるを常とする。
小さな給仕(ぼおい)は給仕とて
居睡(ゐねむ)りするのを常とする。

三木露風(みきろふう)

哀しき接吻 (詩集・廃園)

しめやかに夕暮ごろの
彼方にはともしび湿(うる)む。

いつしかに
我世は哀しき夜とぞなり
またもわが乱れごころのそことなく流れゆけり。
蒼みゆく空の色さへ、やすらかに憂(うれ)ひ深げに、

小伝 一八八九年(明治二二年)六月二三日兵庫県竜野市に生れた。本名は三木操。一三の時緋桜会を起し「秋の花」を出した。竜野中学から岡山県の閑谷義塾(現在の和気高校)に学び、一九〇五年(明治三八年)「夏姫」を出版、早稲田大学に入った。詩集「廃園」は一九〇九年(明治四二年)の上梓である。早稲田詩社を相馬御風・人見東明・加藤竹春・野口雨情等とつくり、後、慶応義塾大学の大学院に学んだ。詩集「寂しき曙」「白き手

今宵は見よ、惑の眼もて我前に親む如し。

いかで知らむ日に日の次ぐを。
かくばかり哀しきを。
夜となれば恋しさまさり謂れなくおとろへゆくを。

君の髪愁はしく、
我前に夜は流れゆく。
音もなく、いふこともなく……
われらただ青ざめて二人は生き
われらただ相抱く歎きの底。

あゝ、われらをして、
涙に濡れし接吻をのみ、求めしめよ。
哀しくなぐさめある接吻をのみ、
息塞る接吻をのみ、われらをして。

異国（詩集・廃園）

の猟人」「幻の田園」「良心」「芦間の幻影」等がある。

　一九五八年（昭和三三年）竜野市の名誉市民となる。

鑑賞　一七歳で処女詩歌集「夏姫」を出した露風はたしかに早熟の天才といえよう。「廃園」は白秋の「邪宗門」と同年に出版されている。いわゆる白露と称される明治詩壇の代表選手がそろって出発したわけだ。

　露風の作風は白秋の詩性にくらべ、内攻的で陰性の風を帯びている。そしてそれだけに詩語の格調は高い。

「哀しき接吻」は露風の作品としてはかなり抒情性のある作品だ。しかしこの愛の詩も内攻的で、くらくとじられた抜け道のない冥想

いつしかに
日暮れたり。
思ひそみ。
家畜ふし、
丘の木に
月青む時。
人は出でて
うすのぞみ
　歌をうたふ……

静かなる
海原や、
はて遠く
恋人もあり。

のなかへ僕達を誘うようだ。

露風の観念への極端な偏向が、やがて彼自身の詩根を枯らすことにもなるのだが、白秋の官能、杢太郎の耽美と異なる「廃園」の詩人の自己凝視は現在の詩人にも学ぶべき多くのものを語りかけている。

有名な童謡「赤とんぼ」の歌も露風の作詞である。「異国」という作品の末尾、「はて遠く恋人もあり」は非常に鮮明な詩情を僕達に感じさせる。「恋人も」の「も」に注意。「は」では余韻がきえよう。

高村光太郎

ブランデンブルグ（詩集・典型）

岩手の山山に秋の日がくれかかる。
完全無欠な天上的な
うらうらとした一八〇度の黄道に
底の知れない時間の累積。
純粋無雑な太陽が
バッハのやうに展開した。
今日十月三十一日をおれは見た。

「ブランデンブルグ」の底鳴りする、
岩手の山におれは棲む。
山口山は雑木山。
雑木が一度にもみぢして
金茶白緑雌黄の黄、

小伝　一八八三年(明治一六年)三月一三日東京下谷西町に生れた。父は彫刻家の高村光雲。妻・智恵子への愛を歌った詩集「智恵子抄」は最も人の知るところだが、「道程」(一九一四)「典型」(一九五〇)の二つの詩集も光太郎を語る時忘れてならぬものだ。光太郎は言っている「私ははじめ短歌を書いていたのであるが、短歌のような瞬間的感動をもととする芸術に満足しないようになってから、詩を書きたいと思うようになり、フランスでボードレールやヴェルレーヌの詩をよんで道がひらけたように感じ、日本へ帰ってから、白秋や露風や柳虹の詩にはげまされて自分の詩を書きはじめた」と。

　光太郎は彫刻家をもって自ら任じ、数々の名作も多いが、文筆の

夜明けの霜から夕もや青く澱むまで、
おれは三間四方の小屋にゐて
伐木丁丁の音をきく。
山の水を井戸に汲み、
屋根に落ちる栗を焼いて
朝は一ぱいの茶をたてる。
三畝のはたけに草は生えても
大根はいびきをかいて育ち、
葱白菜に日はけむり、
権現南蛮（ごんげんなんばん）の実が赤い。
啄木は柱をたたき
山兎はくりやをのぞく。
けつきよく黄大癡が南山の草廬、
王摩詰が詩中の天地だ。

秋の日ざしは隅まで明るく、
あのフウグのやうに時間は追ひかけ
時々うしろへ小もどりして

仕事は更に充実している。「道程」「典型」二つの詩集の間には、戦争をふくめたいくつかの社会的変動が横たわるけれど、光太郎の詩はその倫理的態度に於て一貫していた。芸術至上主義的な耽美の世界「パンの会」を離れ、むしろ「白樺派」に近づき、尚孤りで独自の詩をかきつづけたのも、光太郎の詩と生活が究極に於て一枚であったからだ。彼が技巧をもてあそぶ芸術の徒と異なる所以だ。

光太郎の詩は力強く男性的で、いうならば「体当り的」だ。そこに本領がある。

一九五六年（昭和三一年）四月二日東京中野で逝去。七四歳。

鑑賞　光太郎は戦後、東北の寒村、山口村の木小屋にひとり住んでい

又無限のくりかへしを無邪気にやる。
バッハの無意味、
平均率の絶対形式。
高くちかく清く親しく、
無量のあふれ流れるもの、
あたたかく時にをかしく、
山口山の林間に鳴り、
北上平野の展望にとどろき、
現世の次元を突変させる。
おれは自己流謫のこの山に根を張つて
おれの錬金術を究尽する。
おれは半文明の都会と手を切つて
この辺陬を太極とする。
おれは近代精神の網の目から
あの天上の音に聴かう。
おれは白髪童子となつて
日本本州の東北隅
北緯三九度東経一四一度の地点から

た。吹雪の翌朝など枕頭に白いものが吹きつもる陋屋である。戦争協力の詩を二、三書いたことへの痛烈な反省をこのような仕方で行った詩人を僕は他にみない。

「典型」の序で光太郎は「ここに来てから、私は専ら自己の感情の整理に努め、又自己そのものの正体の形成素因を究明しようと」したと語っている。

「自己流謫」という自分で裁くやり方のきびしさが、「ブランデンブルグ」になりひびいている。そしてそれは、「なんでも食って丈夫でかく」「天然力の理法に応へ」る白髪童子のすこやかな自信にもつながる。

高村さんは生ビールが好物だった。高村さんを尊敬する多くの人人の、健康の為にも上京をという

電離層の高みづたひに
響き合ふものと響き合はう。

バッハは面倒くさい岐路（えだみち）を持たず、
なんでも食つて丈夫ででかく、
今日の秋の日のやうなまんまんたる
天然力の理法に応へて
あの「ブランデンブルグ」をぞくぞく書いた。
バッハの蒼の立ちこめる
岩手の山山がとつぷりくれた。
おれはこれから稗飯だ。

根付の国（詩集・道程）

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付の
　様な顔をして
魂をぬかれた様にぽかんとして
自分を知らない、こせこせした
命のやすい

懇願でついに腰をあげ、上野駅についたとき、まづはじめに「生ビールがのみたいな」と言われた高村さんの姿をいまでも想出す。風雪に耐えた巨木のような強い貌だ。

「おれの詩」という作品で高村さんは「おれの詩はおれの五臓六腑から出る」とも「日本古典のせせらぎに沐浴し、遽々然として今原子力に瞠目するのだ」ともいった。「ブランデンブルグ」に僕達は俗流をつきぬけて立つ詩人の勁い声をきこう。

「根付の国」はいかにも彫刻家光太郎の面目躍如とした作品である。江戸っ子のはぎれもある。

見栄坊な
小さく固まつて、納まり返つた
猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、
だぼはぜの様な、麦魚(めだか)の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な日
本人

山村暮鳥(やまむらぼちょう)

風　景（詩集・聖三稜玻璃）

純銀もざいく

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
かすかなるむぎぶえ

小伝　一八八四年（明治一七年）一月群馬県高崎在の豊かな農家に生れた。幼少の頃より父と祖父との不和にはさまれ孤独であった。一六歳郷里の代用教員となり女性の宣教師ミス・ウォールを知り、クリスチャンとなる。その縁で築地の聖三一中学校に入ったが、宗教か芸術かの問題に悩み学校を出て、下級牧師として東北地方を伝道した。

一九一〇年人見東明の「自由詩社」同人となり教会から離れ、仙台、土浦、水戸と流転、一九一三

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
ひばりのおしやべり
いちめんのなのはな

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな

年福島県平市に移り第一詩集「三人の処女」を刊行、一九一五年「聖三稜玻璃」、一九一九年「風は草木にささやいた」、一九二四年「雲」、童話「小さな世界」「鉄の靴」などを書いた。

　一九二四年(大正一三年)茨城県磯浜の仮寓で死去した。

鑑賞　「聖三稜玻璃」はまことに印象的な詩集である。従来の詩形を破る暮鳥の詩は、当時の詩壇からは悪評をえたが、萩原朔太郎・室生犀星などは大いに支持したという。この「風景」という詩も大変かわっている。詩全体が傍題の如く「もざいく」模様になっている。ひとりこのような実験を行うものがいると、次々と模倣者はあらわれ、革新的な感動も、終にはごく

いちめんのなのはな
やめるはひるのつき
いちめんのなのはな

雲（詩集・雲）

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきさうじやないか
どこまでゆくんだ
ずつと磐城平の方までゆくんか

ある時（詩集・雲）

雲もまた自分のやうだ
自分のやうに
すつかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひろすぎる
涯のない蒼空なので
おう老子よ

あたりまえみたいになってしまうものだが、常に先駆者は偉大だ。

ものうい春の田園、その茫洋とした感情を、この詩の形は決定的に伝えてくれる。主題と形式がこのように見事な調和をみせた事で、この詩の存在価値が既にきまる。

徹底的なリフレイン（繰返し）のなかに挿入される異質の一行が、風景に動きを与えている。詩は常に自由でなければならない。そして詩の自由とは、詩人の心の自在さからだけ産れる。僕達が世界から手に入れる数々の感動を、どのように言葉に定着するか——その為の純粋な努力が、実に自然に、古い詩形を破ってゆくのだ。しかし、「雲」になると、暮鳥の詩心は東洋的な稚拙美の世界に下落

こんなときだ
にここにことして
ひよっこりでてきませんか

日夏耿之介

默禱（詩集・転身の頌）

黄色き地平のかなた――世界の隣室より
異相の幽人窺へる
人人　俯伏せよ
ことごとく擲て　悉皆てみな拒け斥れ
草木のひと葉ひと葉の真実の　道　をイみ聴け
威ある真実の道は命運の将来せる二の世界か
爾はその不可思議なる　霊　の所在につき困むならむ
およそ人間生の彼方につき臆ひ兜ふならむ
威ある道の中有のかなたより生れいでて
われらに示唆すは二の世界也

してゆく。「味」というものはあっても、しょせん俳諧的自己閉鎖の境地にすぎないのだ。

小伝　一八九〇年（明治二三年）二月二二日長野県下伊那郡飯田町（飯田市）知久町に生れた。本名は樋口国登。日夏耿之介は二〇歳の頃につけた筆名。

一九〇四年上京、京北中学に通ったが、神経衰弱のため二年間休学、早稲田大学高等予科文科に入学した。

処女詩集「転身の頌」を一九一七年上梓。「黒衣聖母」（一九二一）「定本詩集」（一九二七）「呪文」（一九三三）と出版した。

一九二二年早大に招かれたが、自由主義者、反戦的だという理由で一九四五年辞職、飯田市名誉市民

神のみ姿　所現れかつ沈潜ゆくとき
人間のあまた　枯れかつ萠え出る也
神よ　爾の威ある道を我に永劫ならしめたまへかし
稚淳なる草木の葉は嵐を謙抑俯伏しけり
我かぎりなく駛きまどへるか
夙く驕れる知見の触覚を亡したまへかし
鳥乎　神よ　われら久しくその道を聆く
われらの頑迷の存在をして
艸や木の一葉一葩のごとく在らしめたまへかし

海底世界（詩集・転身の頌）

青き水面に透して
日はほの赤くさせり

魚鱗のむれ　乱れ擾ぎて
海草の隙に匿れ　しばしば
雑色の埃及模様を織りなせしかば
なかば錆びたる沈没船の破片は

として、故郷に療養。「明治大正詩史」「英吉利浪曼象徴詩風」「近代日本詩史論」など研究書も多い。

鑑賞　「最大級のあらゆる唾忌に価する現代日本に於て理解者の多くを求めんとするは固より非である。只、少数の孤寂を好む、物質に貧しくとも心性裕かな、歪力に圧せられ乍らも道義感の強靭な誠ある思想上の貴人に一顧半顧を支払って貰はれれば予の望りみは足る」と耿之介は詩集巻末にのべている。

耿之介の詩はその独自の字句によって難解であるが、象形文字の機能をこのように徹底させた詩人もまたすくない。彼の詩は天才を信じる精神的な貴族主義に発するが、粉飾化粧の一途をたどる軽薄

黒色砂丘（こくしよくすなやま）のいただきに金字塔（こんじたふ）を築きたり
水死者の　蹠（あなうら）　たかきよりきたる

魚鱗（ぎよりん）のむれみだれさやぎ　いま
若き新来者（まらうど）を相抱擁（いだき）たり
観（み）よ　ここにして不思議なる観念（こころ）の裡（うち）に
青ざめし死者の笑顔（ゑがほ）を
死者は踊（をど）れる也　狂へる也
魚は魚とむすび　貝は貝とむすび
啞（ああ）　人は人と相接すなり

まとゐは尽きねど
水死の人　人魚（にんぎよ）と化（な）り
砕片は塔をなす
滄溟（おほわだ）の底（そこひ）にして
人すべて鱗族（りんぞく）たるをえうす

ああ　日（ひ）はほの赤くこの世界を訪（おとづ）るる

なる文明への反語を、詩に刻む。
字句への偏執的な傾倒は僕の好み組するところではないが、「黙禱」という作品の、草木の単一な始源的美しさを讃える主題に共鳴するところが多い。

千家元麿（せんけもとまろ）

白鳥の悲しみ（詩集・自分は見た）

美くしく晴れた日、
動物園の雑鳥の大きな金網の中へ
園丁が忍び入り、
白鳥の大きな白い玉子を二つ奪つて戸口から出ようとする時
気がついた白鳥の母は細長い首を延ばして朱色の嘴で
園丁の黒い靴をねらつてついて行つた。
卑しい園丁は玉子を洋服のポケットに入れて
どん／＼行つてしまつた。
白鳥の母は玉子の置いてあつた木の堂へ黙つて引き返し
それから入口に出て来て立止つて悲しい声で鳴いた。
二三羽の白鳥がそれの側へ首を延ばして近寄り
彼女をとりまいて慰めた。
白鳥の母は悲しく大きな声で二つ三つ啼いた。

小伝　一八八八年（明治二一年）六月八日東京に生れた。父は島根県出雲大社の宮司、男爵千家尊福で後に司法大臣にもなった。母は小川豊子、梅涯と号した日本画家である。

慶応の幼稚舎、府立四中、盛岡中学に学ぶ。一六歳の冬友人四人とブラジルに渡行をくわだてるロマンチストでもあった。一七歳の時「電報新聞」「万朝報」に詩を投稿。

一九一四年、佐藤惣之助等と雑誌「テール」に関係、「白樺」に作品を発表して詩壇に登場した。

一九一八年、詩集「自分は見た」を出版。その後「虹」「新生の悦び」「炎天」「夜の河」「真夏の星」「夏草」「昔の家」「霰」「蒼海詩集」等を上梓。

大粒な涙がこぼれる様に
滑らかな純白な張り切つた円い胸は
内部から一杯に揺れ動き、
血が溢れ出はしまいかと思はれる程
動悸を打つて悶えるのが外からあり〳〵見えた。
啼かなくなつてもその胸は痙攣を起して居た。
その悲しみは深くその失望は長くつづいた。
然しやがて白鳥の母は水の中へ躍り込んだ。
然うして涙を洗ふやうに、悲しみを紛らすやうに
その純白の胸も水の中へひたし、水煙をあげて悶へた。
然しそれはとり乱したやうには見えなかつた。
然うして晴々した日の中で悲しみを空に発散した。

その単純な悲しみは美くしく痛切で偉大な感じがした。
その滑かな純白の胸のふくらみのゆれ動くのは実に立派であつた。
まことにあんな美くしいものを見た事はない気がした。
威厳のある感じがした。
金網の周囲には多くの女や吾々が立つて見てゐた。

無類に無垢な詩の世界を歌った。

一九四八年（昭和二三年）気管支肺炎で急逝。六一歳。

鑑賞　千家さんの家を訪ねると、庭は雑草が生い繁り、あるじはいともにこやかに、その雑草を刈って煮て客をもてなしたという話をきいたことがある。伝説であろう。しかし千家元麿の詩の楽天的な明るさがしのばれる話だ。

どんな貧しい生活のなかにいても暗くない人柄。清貧というような行儀ぶった状態でもない自由さ。千家元麿は、自然を愛し、人間を愛し、人間と同じように犬や白鳥を愛し、易しい言葉で、その愛情を詩に歌った不思議な詩人だ。労働者や車引き、廃人に対する同

自分達は均しく感動した。
自分はその悲しみを見るのが白鳥にすまない気がした。
吾々の誤つてゐる事を卑しめられた。
白鳥に知らしてやれないのを悲しく思つた。
自分はその悲しみを早く忘れてくれるやうに願つた。

情や、子供達に対する親愛感がどの詩にもにじみ出ている。武者小路実篤氏は「千家の詩を大別して、思ひやりと讃美にわかつことが出来る。そしてこの二つが時々一緒になる」と言っているが、「白鳥の悲しみ」の白鳥の母の印象的な動作、玉子を盗られた母鳥の悲痛な姿は、詩人の素直そのものの心に消えない波紋をつくったのだ。その動揺はそして僕達読者の胸にも伝わり、忘れがたい余映を残す。

地面の底の病気の顔（詩集・月に吠える）

萩原朔太郎（はぎわらさくたろう）

地面の底に顔があらはれ
さみしい病人の顔があらはれ。

小伝　一八八六年（明治一九年）前橋に生れる。中学時代「明星」に短歌を発表。旧制の第六高等学校を中退、室生犀星らと「感情詩社」を結び詩の道に入る。
　一九一七年（大正六年）処女詩集「月に吠える」はその異常な感覚で

地面の底のくらやみに
うらうら草の茎が萌えそめ
鼠の巣が萌えそめ
巣にこんがらがつてゐる
かずしれぬ髪の毛がふるへ出し
冬至のころの
さびしい病気の地面から
ほそい青竹の根が生えそめ
生えそめ
それがじつにあはれふかくみえ
けぶれるごとくに視え
じつに　じつに　あはれふかげに視え

地面の底のくらやみに
さみしい病人の顔があらはれ。

緑色の笛（詩集・青猫）

この黄昏の野原のなかを

多くの人々の心をとらえた。朔太郎の詩集はこの他「青猫」（大正一二年）「純情小曲集」（大正一四年）「蝶に夢む」（大正一二年）「氷島」（昭和九年）「萩原朔太郎詩集」（昭和三年）等がある。その他「詩の原理」など、日本語の詩的韻律に関するユニークなエッセイもある。一九四二年（昭和一七年）歿。

鑑賞　朔太郎は現代詩の初期を代表する詩人である。その倦怠感にみちた麻薬的な情緒は、大正から昭和初期にかけての暗い社会情勢に対応する。朔太郎はいう。「詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である」（月に吠える）と。そして更に「私の情緒は激情（パッション）といふ範疇に属しない。むしろそれはしづかな霊魂の

耳のながい象たちがぞろりぞろりと歩いてゐる。
黄色い夕月が風にゆらいで
あちこちに帽子のやうな草つぱがひらひらする。
さびしいですか　お嬢さん！
ここに小さな笛があつて　その音色は澄んだ緑です。
やさしい歌口（うたぐち）をお吹きなさい
とうめいなる空にふるへて
あなたの蜃気楼をよびよせなさい
思慕のはるかな海の方から
ひとつの幻像がしだいにちかづいてくるやうだ。
それはくびのない猫のやうで墓場の草影にふらふらする
いつそこんな悲しい暮景の中で　私は死んでしまひたいのです。
　お嬢さん！

のすたるぢやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきである」（青猫）という。

　多くの人は朔太郎を単に官能の詩人というが、彼は感覚に酔うほど楽天的ではなかった。地面の病気、地底の顔を視る事の出来る詩人は、季節の変遷に敏感であるだけではなく、時の流れの背後に遠く輝く「実在」にあこがれ涙するのだ。朔太郎の詩は感覚を主音にした処女詩集の世界から、「青猫」の内省的詩情へ移り文語詩「氷島」の思索世界へ辿ってゆく。

　「地面の底の病気の顔」この詩は蒼ざめた冬の地面をみつめる詩人の重たい心をダブラセながらよんで下さい。「あらはれ」「萌えそめ」という連用形で各行を流してゆくリズムにも気をとめて下さい。

室生犀星（むろうさいせい）

室生犀星氏（詩集・叙情小曲集）

みやこのはてはかぎりなけれど
わがゆくみちはいんいんたり
やつれてひたひあをかれど
われはかの室生犀星なり

脳はくさりてときならぬ牡丹をつづり
あしもとはさだかならねど

「緑色の笛」この詩の最初の二行は春の慕情を実に印象的にうたいあげた象徴的技法です。「さびしいですか　お嬢さん！」という突然の呼びかけにも、ありきたりでない詩情があります。即ち気分の描写ではなく作者の肉声が、です。

小伝　一八八九年（明治二二年）石川県金沢市に生れた。一二歳の時室生寺室井氏の養嗣子となり母と生別、二一歳上京、白秋・朔太郎らと交り、大正元年一月処女詩集「愛の詩集」を刊行、「叙情小曲集」「寂しき都会」「青き魚を釣る人」「忘春詩集」「第二愛の詩集」「星より来れる者」「鶴」「鉄集」などを出版。後年詩人としてよりむしろ、小説家として独自の世界を描いている。芸術院会員。昭和

みやこの午前
洋杖（ステッキ）を曳き生けるとしはなく
ねむりぐすりのねざめより
銀のゆくあなた緑けぶりぬと
午前をうれしみ辿り
うつとりとうつくしく
たとへばひとなみの生活をおくらむと
なみかぜ荒きかなたを歩むなり

されどもすでにああ四月となり
さくらしんじつに燃えれうらんたれど
れうらんの賑ひに交はらず
賑ひを怨んずることはなく唯うつとりと
洋杖（ステッキ）をもて
つねにつねにただひとり
坂をくだらんとするわれなり

ときにあしたより

三七年歿。

鑑賞　中野重治氏は犀星と朔太郎を比較して次のように言っている。「萩原にはいわば生活をぬきにして「人生観のイデヤ」があり、室生には「人生観のイデヤ」というようなイデヤがそもそもなしに生活そのものがあり、萩原には一歩一歩の具体的生活なしに「求めなやむ人生があり」、室生にはこの一歩一歩以外に「求めなやむ人生」はないし、なかった」

　犀星の詩には「人間と生活とを生きものとして具体的に愛する」もののみが示す、格調の高さがある。「叙情小曲集」から後年の「鶴」や「鉄」の詩篇。例えば「彼と我」のなかの

　雨戸のそとに大なる者立てり

とほくみやこのはてをさまよひ
ただひとりうつとりと
いき絶えむことを専念す

ああ四月なれど
桜を痛めまれなれどげにうすゆき降る
哀しみ深甚にして座られず
たちまちにしてかんげきす

佐藤春夫（さとうはるお）

一家団欒図（詩集・失眠雑詩）

壌（つち）を撃（たた）いて讃（たた）ふべき
いにしへの世のとほければ
太鼓たたいてをさな子と
遊ばんものと書（ふみ）やめて
さ庭べに来つ

我は彼とともに或物を交換す
死のごとく苦しきものを交換す

というように、人生のきびしさのなかからにじみ出たような表現へと進む。上掲の作品にも、特別客気も持たず、感傷的にもならず、世界のなかを歩む若き犀星の、重くふみしめた歩調が感ぜられる。

小伝　一八九二年（明治二五年）和歌山県新宮町に生れた。中学時代より詩に志し、生田長江・与謝野寛に師事。後、永井荷風を慕って慶応大学に入学。古典的な形態のなかに清新でユーモラスな感覚を盛った詩をかいた。一方、小説「田園の憂鬱」で新進作家としての声価を得た。「殉情詩集」「寒蟬鈔」「車塵集」「消閑雑詩」「失眠雑詩」「魔女」等の詩集がある。

墨つきし指さへわすれ
ゆりかごの子が頬をつつき
いとほしき笑くぼをたたへ
二つあるつむじをそしり
世に二なき吾子万歳を称へつつ
でまかせのわが子守唄
　トントントンとんがり頭の下ぶくれ
　　にぎりめしめく顔の形
　百貫デブのボテボンボン
打ちならす太鼓おもしろ
わがうたの雨だれ拍子
新吉の気違い調子
打ち打ちて打ちもてゆけば
音につれていとけなき日の
わがこころ太鼓の中ゆ湧き出でて
今のこころを追ひやりぬ
歎きさへ憤りさへ負目さへ
しばしは忘れまた打てば

鑑賞　佐藤春夫の詩といえば「秋刀魚の歌」という定評がある。

　あはれ
　秋かぜよ
　情あらば伝へてよ
　――男ありて
　夕餉にひとり
　さんまを食らひて
　念ひにふける　と。

ではじまるこの詩の哀傷と自嘲のミックスした内容は、「さんま　さんま」というリズムにとけあい代表作の名に恥じない大衆性を持つ。
　春夫の詩に多くみられるユーモアと諷刺は大きな特徴ともいえよう。
「一家団欒図」に於ても、子をよろこびあやす父の、赤裸々な情感が全篇に躍動しているが、反面、

藤の花降りこぼるると
さかしげに目見かがやかし
声あげて子の呼ぶままに
はしけやしその子の母も
おどけたるふりに答へつ
むつまじき夫婦をかしと
くりや女ら囁き笑ふ
芝生にはいつか出で来し
猫二つ戯れまろぶ
そがうへに夕日かぎろひ
日時計の日かげも尽きて
何寸のうつろふ景ぞ
むなしくも遊びたはむれ
菅の根のながき春日の
惜しからで暮るるものかな

反歌

いにしへの桜かざして遊びけむ
大宮びとももののかずかは

古い雅語を巧みにまじえた歌いくちには、道化てみせる稚気もあり、一家眷族が、てもなく子供にアヤサレるシーンへの愉快な諷刺も仄見される。愉快な詩である。新吉とは、春夫宅に寄寓していた詩人高橋新吉の、若き日の姿であろうか。

宮沢賢治

原体剣舞連（詩集・春と修羅　1）

(mental sketch modified)

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

こよひ異装のげん月のした
鶏の黒尾を頭巾にかざり
片刃の太刀をひらめかす
原体村の舞手たちよ
花やかに波だつむねを
アルペン農の辛酸に投げ
ふくよかにかがやく頰を
高原のひかりと風にささげ
菩提樹皮と縄とをまとふ
気圏の戦士わが朋たちよ
青らみわたる灝気をふかみ

小伝　一八九五年(明治二八年)八月二七日、岩手県花巻町に生れた。盛岡中学を経て盛岡高等農林で、農芸化学・地質・土壌を修め、同校卒業後、岩手県内の土性調査を行い、三年間家業（質商）を手伝ったが、賢治の性格にはまるで合わなかった。

　この間、短歌をつくり、童話を書きはじめた。大正一〇年一月、無断上京して田中智学の国柱会に入り、法華経敬信のきざしをみせた。九月帰宅、一二月、花巻農学校教諭となり、詩の創作を始め、童話も書きつづけた。大正一三年に心象スケッチと傍題する詩集「春と修羅」を自費出版、童話集「注文の多い料理店」とともに生前唯一の刊行物となった。大正五年農学校をやめ、花巻町で自炊農耕の生

楢と椈とのうれひをあつめ
蛇紋山地に篝をかかげ
ひのきの髪をうちゆすり
まるめろの匂のそらに
あたらしい星雲を燃せ

dah-dah-sko-dah-dah

肌膚を腐植と土にけづらせ
筋骨はつめたい炭酸に粗び
月月に日光と風とを焦慮し
敬虔に年を累ねた師父たちよ
こよひ銀河と森とのまつり
准平原の天末線に
さらにも強く鼓を鳴らし
うす月の雲をどよませ

Ho! Ho! Ho!

むかし達谷の悪路王
まつくらくらの二里の洞
わたるは夢と黒夜神

活をはじめ、ここを「羅須地人協会」と名づけて若い人々に農耕の講義をし土質改良、施肥の実践に挺身した。昭和三年肺炎になり生家に帰り、昭和六年四月、一時小康を得たが、昭和八年九月二一日「自分の作品はすべて迷ひの跡であった」と言い、法華経千巻の頒布を遺言して永眠した。三八歳。

死後その傑出した詩業はみとめられ「春と修羅」(一―四集)の他「銀河鉄道の夜」「グスコーブドリの伝記」など日本の文学を代表するような童話が次々と多くの人によみつがれている。

鑑賞 「雨ニモ負ケズ…」の詩で多くの人に親しまれている賢治の詩の全貌は、日本では珍らしくスケールの大きなものだ。詩人とし

首は刻まれ漬けられ
アンドロメダもかがりにゆすれ
　青い仮面このこけおどし
　太刀を浴びてはいつぷかぷ
　夜風の底の蜘蛛をどり
　胃袋はいてぎつたぎた
dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah
さらにも強く刃を合はせ
四方の夜の鬼神をまねき
樹液もふるふこの夜さひとよ
赤ひたたれを地にひるがへし
雹雲と風とをまつれ
　dah-dah-dah-dah
夜風とどろきひのきはみだれ
月は射そそぐ銀の矢並
打つも果てるも火花のいのち
太刀の軋りの消えぬひま
　dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

ての鮮明な感覚、鳥やケダモノや樹木や雲などと自在に交流する彼の天衣無縫性のなかには、大乗仏教のもつ、深い宇宙感覚があり、また、農業技師として社会的実践を行った賢治の詩や童話には、愉しい空想や幻想があっても、決して多くの詩人の如く、作りものめいてはいないのだ。リアリティ（現実性）があります。

　メンタル・スケッチ（心象スケッチ）という傍題をつけたのは、賢治が自分の作品を「作りもの」ではなく、詩をかくという作意さえなしに日々の心の糧を日記の如く書きつづける即興の連続と考えていたからです。

「原体剣舞連」

　この詩は、岩手県原体村に伝わ

太刀は稲妻萱穂（いなづまかやほ）のさやぎ
獅子の星座に散る火の雨の
消えてあとない天（あま）のがはら
打つも果てるもひとつのいのち
dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

無声慟哭（詩集・春と修羅　1）

こんなにみんなにみまもられながら
おまえはまだここでくるしまなければならないか
ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ
また純粋やちひさな徳性のかずをうしなひ
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
信仰を一つにするたったひとりのみちづれのわたくしが
あかるくつめたい精進（しやうじん）のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や螢光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

る剣の踊りをみて書いたものです。賢治の詩や童話には岩手県の民話に取材したものを多くみかけます。古代人が大自然と呼応して自然に歌い踊るその大らかな詩情を賢治は大切にしました。

　dah-dah-dahという異様なリズムにのって踊る舞手たちの力強さ、それはもう地上の人というより、星雲の燃える大空とともに限りなく生きる原始のエネルギーでもあります。この詩を賢治の弟の宮沢清六さんが朗読されたのをきいた事があります。賢治が口誦していたのをきき覚えたのだと清六さんは言っていました。そしてそのリズムからはゆれ動く風の声がきこえてくるようでした。

　「無声慟哭」大正一一年に病歿した妹とし子への悲しい愛の詩で

（おら　おかなぃふうしてらべ）
何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら
またわたくしのどんなちひさな表情も
けっして見遁さないやうにしながら
おまへはけなげに母に訊(き)くのだ
（うんにゃずゐぶん立派だぢゃい
けふはほんとに立派だぢゃい）
ほんたうにさうだ
髪だっていっそうくろいし
まるでこどもの苹果の頬だ
どうかきれいな頬をして
あたらしく天にうまれてくれ
《それでもからだくさぇがべ？》
《うんにゃ　いっかう》
ほんとうにそんなことはない
かへってここはなつののはらの
ちひさな白い花の匂でいっぱいだから
ただわたくしはそれをいま言へないのだ

す。岩手県の方言が死にゆく者とそれを見守る沈痛の兄との心の交りを実に印象的に表現しています。（『愛の詩歌集』参照）

（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは
わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ
ああそんなに
かなしく眼をそらしてはいけない

佐藤惣之助（さとうそうのすけ）

潜水夫（詩集・深紅の人）

潜水夫は武装した星の兵卒である。
　金の頭を
暗の中にとぢこめ
全身に
風と水の鱗や獣皮をつける。
兜をもつて、星を閉ぢ、世界を隔て

小伝　一八九〇年（明治二三年）一二月三日神奈川県に生れた。佐藤紅緑に師事、千家元麿・福士幸次郎等と同人雑誌を出した。処女詩集「正義の兜」をふくめ二二冊の詩集がある。言葉の効果を才気にまかせてねらいすぎた彼は、晩年沢山の流行歌をかくようにもなった。琉球、南洋、支那、オホーツク海に漂泊の生活をおくり、昭和一七年五月一五日、多彩な生活をとじた。五一歳。

鑑賞　「深紅の人」は大正一〇年に刊行された第四詩集で、「新都市雑

波濤の眼鏡一重が
同じ船の人々と千万里を異にし
水と星の世界へ出発する

潜水夫は怒濤から生れた新らしき龍である。
　金星の眼をかゞやかせ
麻に赤絹の生命をよりまぜた網と
悲しき呼吸機管を引いて
水中のふしぎな花咲く岩地へ降りてゆく。

　海底は無人の荒野の如く
夜の恐怖とたゝかひ、死に襲はれ
海の亡霊と打交つて、深紫の牛のやうに
重々しい水中の開拓にかゝる。

　潜水夫は哀れな海の十字架である

港の下や荒磯の底にゐて

曲集」と傍題されている如く、いかにも惣之助らしい絵画的イメージがめまぐるしく表現され、都会に住む男女やその他激しく動く種種相が多彩なタッチで展開してゆく。惣之助は序文で「わたしは壮大さを両手をあげて仰ぎみるものだ」といい、また「どうしても写実本位の記者にはなれぬ」とも言っている。惣之助のロマンティシズムは精神の世界より、人造美の世界にあこがれながら、その奥にはるか「永遠」といわれるものを見ようとしていた、ともいえよう。「小さく完成したくない。放大な、未完成な異端でゐたい」という生き方が、新奇なものをもとめて彼を世界の涯まで漂泊させた。上掲の詩もフレッシュな表現と異相の世界に夢を托す詩人の性癖がはっ

はれやかな星や愛情といつしよに生活する
地上の妻や妹を
天の燭光のやうに仰ぎながら

　電気ランプをともし、斧をもち
難破船の死骸の上に
この世の金貨をさがしにゆく
武装した骸骨である。

大手拓次（おおてたくじ）

象よ歩め（詩集・藍色の蟇）

赤い表紙の本から出て、
皺だみた象よ、口のない大きな象よ、のろのろあゆめ、
ふたりが死んだ床（とこ）の上に。
疲労ををどらせる麻酔（ますゐ）の風車、
お前が黄色い人間の皮をはいで

きり出ているすぐれた作品である。

小伝　一八八七年（明治二〇年）一二月三日群馬県磯部温泉に生れた。胸をやみ中学を中退後、早稲田大学英文科に入る。白秋主宰の「ザンボア」にはじめて詩を発表、「近代風景」「日光」などに独特の官能的な詩を書いた。彼は生涯現実の又は幻の恋人を慕って歩き、昭和九年四月一八日茅ケ崎の南湖院で寂しく死んだ。

深い真言の奥へ、のろのろと秋を背に負うて象よあゆめ、
おなじ眠りへ生の嘴は動いて、
ふとつた老樹をつきくづす。
鷲のやうにひろがる象の世界をもりそだてて、
夜の噴煙のなかへすすめ、
人生は垂れた通草の頸のやうにゆれる。

魚の祭礼（詩集・黄色い帽子の蛇）

人間のたましひと虫のたましひとがしづかに抱きあふ五月のゆふがた、
そこに愛につかれた老婆の眼が永遠にむかつてさびしい光をなげかけ、
また、やはらかなうぶ毛のなかににほふ処女の肌の香炉のやうにたえまなく幻想を生んでゐる。
わたしはいま、窓の椅子によりかかつて眠ろうとしてゐる。
そのところへ沢山の魚がおよいできた、
けむりのやうに、またあをい花環のやうに。
魚のむれはそよそよとうごいて、

鑑賞　朔太郎はむしろ拓次の発想に多く刺激されたという。朔太郎には、拓次にくらべまだ観念的な要素が多い。拓次の体質的ともいえるこの不思議に病的な感情は、純粋である。

「象よ歩め」の超現実的な情景には死の妙な存在感がただよう。死んだあとの恋人同志の重たい魂の歩行をみるおもいだ。

「魚の祭礼」に現れる奇妙な魚のむれも、心の疲労が投げかける映像のようだ。しかし単に幻覚といって片づけられないのは、詩人の触手の先が、人生の淋しさのなかに、とっぷりとつかっているからだ。「人間のたましひと、虫のたましひがしづかに抱きあふ五月のゆふがた」この一行にこめられた情緒は、単なる抒情詩を超えた精

窓よりはいるゆふぐれの光をなめてゐる。
わたしの眼はふたつの雪洞(ぼんぼり)のやうにこの海のなかにおよぎまはり、
ときどき　その溜塗(ためぬり)のきやしやな椅子のうへにもどつてくる
魚のむれのうごき方(かた)は、だんだんに賑(にぎや)かさを増してきて、
まつしろな音楽ばかりになつた。
これは凡(すべ)てのいきものの持つてゐる心霊のながれである。
魚のむれは三角の帆となり、
魚のむれはまつさをな森林となり、
魚のむれはまるのこぎりとなり、
魚のむれは亡霊の形なき手となり、
わたしの椅子のまはりに　いつまでもおよいでゐる。

吉田一穂(よしだいっすい)

帆　船（詩集・海の聖母）

•

（海ゆく晨の序曲をうつ波の拍子）

神界の出来事のやうだ。

小伝　一八九八年（明治三一年）北海道上磯郡木古内町字釜谷村に生れ、後、早稲田大学英文科に学ぶ。一九二六年処女詩集「海の聖母」、一九三〇年「故園の書」、一九三六年「稗子伝」、一九四八年「未来者」、一九五一年定本吉田一穂詩集「羅甸薔薇」、一九五三年「吉田

別宴の埠頭に盃あげて、
友よ！
纜は解かれた。

I

空
鷗
波
岬
燈台
（海の聖母（マドンナ）！）

II

雲
驟雨（スコール）
貿易風
潮の急走
海は円を画く

一穂詩集」を上梓。他に詩論集「黒潮回帰」（一九四一）、「古代緑地」（一九五八）、童話集「海の人形」（一九二四）、「ぎんがのさかな」（一九四〇）、「ヒバリハソラニ」（一九四一）、「樫の木と小鳥」（一九四四）がある。

鑑賞　吉田一穂は文字通り孤高の詩人だ。一穂の詩は、紙に書かれた言葉というよりも、精神の内壁に刻まれた不死の呪文だ。

鍛えられ、練りあげられた言葉は、情緒とか官能美とかいう不安定な属性をすべて捨て去った、もっとも始源的な意味だけで成立する。それは常識的な理論の世界をもはるかにこえたメタフィジカルを構成する。一穂のイメージはまた絵画的でもある。多彩で油絵的

（太陽は真裸だ！）
痙攣（ひきつ）る水平線
水の落魄
回帰線
流木
鱶！
泡

Ⅲ

終夜・船橋（ブリッヂ）に立つ者よ！
傾く南十字星（サザン・クロッス）
風速 20 米突
三角波
眩暈
愁…
灯…

Ⅳ

（帰帆の夕の終曲をうつ波の拍子）

な南国性ではなく、色彩はあるが、銅版画のもつ線描のきびしさがある。北方的なのだ。「帆船」という詩においてもその事はいえる。南海の黒潮を唄ってもその口調には寂漠とした「涯」の印象がある。「…愁」「灯…」という奇妙なテクニックを用いても一穂の場合、それが単に美学上の配慮に終らない必然性が感じられる。永遠を航海するものの眩暈なのだ。

この詩が言葉を極端に短く使っている点に注目して下さい。

詩人が厳密な指さきでならべた鍵のようなそれらの語句を、読者は音楽のように聴くと同時に、絵画的な連想で自由に拡げてしまう。

掌の金貨に、その「自由」を賭けて
乗員(クリュ)よ！
純粋の葡萄酒を酌まふ。

尾崎喜八(おざききはち)

蛇　（詩集・花咲ける孤独）

君たち、私に遭遇するや
たちまちいわれもない憎しみと
不条理な恐怖とに痙攣して、
世にもいまわしい姿かたちに弾力ある
怨念(おんねん)のいきもの、まがつみの霊へのように、
必殺の杖や石をかまえる者よ！

水無月(みなつき)の水浸(みつ)く草はらを行く私は
涼しく長い銀のながれだ。
勿忘草(わすれなぐさ)の空色をさざめきよぎり

小伝　一八九二年（明治二五年）一月三一日、東京に生れた。大正四年二四歳の時、文学への熱望やみがたく、一人の女性との恋愛のために、父と訣別し、自活をしながら詩を書き、翻訳の仕事もつづけた。

その間、高村光太郎・武者小路実篤を精神の支柱とし、作品の多くを「白樺」に発表した。ロマン・ロランを愛し傾倒したことも、その作品を考える上で大きな意味を持っている。

大正一三年現在の妻と結婚してからは、都会と田園との生活をくりかえし、殊に戦後は信州富士見高原の自然を愛した。

かおる薄荷の草むらをわけて、
行くとしもなく行きながら、風無き波——
私は発端もなく終末もなく
白昼をゆらめき進む燐の軌跡だ。

呪いの形に強くわがねた環からほどけて、
錯迷から錯迷へと溶けては湧き、
円から円へずるずると霧立ちけむる緑銀の渦巻、
私にとつて楽しく快い自律の動きが
君たちにはそれほど厭わしく堪えがたいか。

雷雨の待たれる片明りの野の木立に
古代ゲールの竪琴のように身を懸けた私が、
なめらかに硬い七宝のあたまを上げて
気圧の変化と湿気の波とを瞑想している時、
その純粋観客の不動の姿が
君たちの瞋恚を燃え立たすというのか。

詩誌「歴程」の同人。現代詩人会会員。「旅と滞在」「此の糧」「残花抄」「花咲ける孤独」その他「リルケ詩集」等の翻訳。最近は詩・随筆・翻訳をまとめた全集も刊行されている。

鑑賞　尾崎さんは僕達の属すグループ「歴程」の最も古く、最も若若しい同人の一人だ。会合のたびに、尾崎さんのドイツリードをきくのが僕達に共通する愉しみにもなっている。

尾崎さんの詩は男性的だ、と書いた事がある。光太郎の詩にもいえることだが、尾崎さんの場合はいっそう自然詩人として、大らかな大地の骨格が似つかわしい。「蛇」という作品をいつかラジオで朗読されたのをきいた事があ

背(せな)の鱗をいろどり濡らす華麗な縞と斑紋と
エナメルのような腹の青じろさや葵の色によそおわれて、
悦ばしめる他人目(よそめ)のための仕草もなく、
苦痛のきわに声も洩らさず、
忍辱(にんにく)のように強く耐え、
おおかたは亡命者か賢者のように退避する私が
それほど独善に、また不信に見えるか。

常時の保身とたまたまの反撃とは
私にあつて存続の原理だ。
そして存在とはついに業(カルマ)ではないだろうか。
しかも私の常の柔和と決定時の崛起、
私の勤勉と懶惰と底知れず深い執念、
私の美と醜悪と魅力と危険――
私が私そのものである時
君たちは私に逆説の権化を見る、
あたかもルーテルの烈火の卓を流し目に

る。少し捲き舌のリンゼンとした口調には江戸ッ子的なスガスガしさもあったが、何より高原の澄み切ったオゾンを感じとる事が出来た。

「白昼をゆらめき進む燐の軌跡だ」その一行がいつまでも耳についてはなれなかった。

この詩は「蛇」の立場で人間に向って放たれた存在誓言の歌だ。蛇の「自律の動きが」君たち人間にとってそんなに厭わしいのか、という沈痛なひびき。ルーテルとエラスムスとどちらが永遠の真理に殉じたのか、にわかには断じがたいが、作者が蛇の心をかりて、美と醜とをともに背負って生きるものの訴えを投げかけている事を、かみしめて味うべきだ。

おのがほのぐらい祈禱所へ韜晦する
あのコマニスト、
ロッテルダムのエラスムスのように。

金子光晴（かねこみつはる）

お医者さまの唄（詩集・人間の悲劇）

白い制服、白いつばさの
頰ぺたの赤い看護婦をしたがへ
地上一メートルのへんを
お医者さまはとびまはる。

ほう鮫の山のやうな
石油くさい人類のうへを
聴診器をかけた蠅のやうに
お医者さまは首を左右にかしげ、

小伝　一八九五年（明治二八年）愛知県生れ。暁星中学四年の頃より小説家を志し、早大英文、東京美校、慶応英文に入るがいずれも中退。二二歳病臥、詩作に入る。詩誌「構図」文芸雑誌「魂の家」を友人と発刊。大正八年渡欧、イギリス、ベルギーに二年間過し、ボードレール、ヹルハアランの詩に接す。処女詩集「こがね虫」。「水の流浪」「鱶沈む」刊行。思想的生活的苦悩から渡欧、六・七年にわたる放浪旅行。その後「鮫」「女たちへのエレジー」を上梓・戦後出版した詩集「落下傘」「城」「鬼の児の唄」には反戦的な作品が多いといわれている。長篇詩「人間

地球の肩にとまつてお医者さまは
ベロをのぞき
おへそをながめ
しかつめらしい顔をなさる。

赤剝げに皮を剝かがれたものは
ほころびたざうふの袋は
こはれた脈管は
みんな修繕を待つてゐる。

――誰だい。こんなにしちやつたのは。
つぶやきながらお医者さまは診る。
お医者さまの心にうつる
斜かひになつた十字架の影。

看護婦たちも
手にもつ蠟燭も
涙をながす。

の悲劇」「水勢」などで旺盛な筆力を示している。「ランボオ」等訳詩集もある。

鑑賞　金子光晴は徹底的に反俗的詩人だ。もう一人の孤高の人、吉田一穂と金子光晴が親しい友人である点に僕は深い関心を持つ。

　一穂さんが、俗界から自己を峻別してそこに自我のきびしい砦をきずくなら、金子さんはむしろ、俗世界のあらゆるイヤラシサのなかに沈潜して泥まみれになりながら、そこに、こゆるぎもしない人生哲学をつくりあげて行った。彼は自由を犯すあらゆるものに抵抗する。権力、階級、そして戦争。さらには平和のなかで堕眠するブルジョワジーのズルサ。自分も含めた人間の内部にもひそむ醜さに、金子さんほど敏感に反応し

女の禱りの日ぐれ刻。

しやがれ声の子宮。
ひからびた卵巣。
一つの自我もそこからは
うまれ出てこないゆきづまり。

自我を頒ち与へる母の欣びは
それを失ふ悲歎の道につながる。
「先生。どうぞ
この子だけ生かせて下さいな」

ざんざんと雨はふりやまず
くされゆくざうふで世は息もできぬ。
ここは戦場だよ。だがいつたい
なにが生きのこらねばならないのだ？

天なる父の愛子のお医者さまは、

それを詩作のエネルギーに忽ち転化しうる詩人を知らない。

「お医者さまの唄」は詩集「人間の悲劇」の、No. ∞キリストが主題となる章の一部に収められている。「キリストとは、なんだらう。どうせ、人間の罪の影さ」という章句につづくこの詩一篇は、文明の涯の最終戦、その無残な戦場の有様を連想させる。お医者さまはもう奇蹟をおこせない天使であり、キリストである。「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」キリスト臨終の言葉といわれるこの「あゝ神なんぞ我を見捨て給う」という祈も役に立たない。

「救はれなかったもの」が神を見すてて立上る新しくグロテスクな世紀が、はじまろうとしているのだ。

2ccの注射器に
からつぽの奇蹟を透してみながら
エリ、エリ、ラマ、サバクタニ、

新しい鉄柵の影のやうに
救はれなかつたものの
肋骨どもが立ちあがる
怖るべき批判の曙、曠野の仄明り。

高橋新吉（たかはししんきち）

雀　（詩集・胴体）

雀は髭を剃つていた
顎も剃り落した
首から上も胴体も無くなつてしまつた
薄い毛が池に浮いている

そしてあらゆる女、あらゆる母は、その悲しい生理に従って、不具の子をぞろぞろうみ、地球に悪の総量は殖えてゆく。

小伝　一九〇一年（明治三四年）一月、四国伊予に生れる。一九二二年九月「ダダの詩三ッ」を「改造」に発表。一九二三年二月「ダダイスト新吉の詩」を刊行、一九二四年七月小説「ダダ」、一九五二年創元選書「高橋新吉詩集」、同五七年角川文庫「高橋新吉詩集」を上梓、一九五八年七月「無門関解説」一九六〇年「臨済録」を出版、一九六一年美術論集「すずめ」を出

雀は闇を恐れない
むしろ暁の来ぬ間に死ぬことを欲しているのだ

けれども屋根の上には草が生えている
土の上には人間の足音がある

これらのものと無関係に
力一杯飛び歩くことも雀はいやではない

夢の中では翼をどれほどひろげることも　可能であるのだから
雀は菜の花の咲くまで生きていることを　喜んでもいるのだ

しかし事実は雀の頭の中には
空虚しかないのだ

生きることはくだらぬ膨脹だ
煙が空にひろがるようなものだ

版した。他に詩集「雨雲」（一九三八）「胴体」（一九五六）等がある。

鑑賞　高橋新吉は我国に於けるダダイストの先駆者に間違いない。新吉さんの詩の超俗性は、詩で社会を批評するといったような論理的な手続きをつきぬけて成立している。

　にもかかわらずその作品が読者の心に、非常な具体性を持って侵入するのは、新吉さんの感覚がいちじるしく即物的だからだ。精神世界の出来事をのべるのにも、観念的発想にたよらず、新吉さんの詩は常に「物」を媒介にして提出される。彼の詩が仏教思想に基くという説もあるが、空疎な言葉を相手にせず、必ず現実に存在する「物」によってきりひらかれる。こ

死んでしまえば無駄なおしやべりは元より
首をアチコチねじまげることも要らなくなる

早く一個の無に収縮し
手足を伸べて安らぎたいのだ

であるから極力雀は忙しそうに
時間をひきちぎりかきまぜて

生を不安定なものにし
一刻も早くその終末を望んで止まないのだ

萩原恭次郎（はぎわらきょうじろう）

日比谷（詩集・死刑宣告）

強烈な四角
　鎖と鉄火と術策

の詩の雀は、西洋的な意味での比喩ではない。雀は雀なのである。唯、雀によってハッと宇宙の全体を視る事の出来た刹那の詩人の緊張が語られているのだ。最後の四行に注目して下さい。生と死をこえて、そこに「在る」ことの無邪気さが詩人にはおもしろくてたまらないのだろう。

小伝　一八九九年（明治三二年）群馬県に生れた。前橋中学を出て銀行員になった。大正九年川路柳虹等の「炬火」に参加。平戸廉吉の影響をうける。大杉栄等の無政府主義に近づく。一二年壺井繁治・川崎長太郎・岡本潤等と「赤と黒」を創刊、一九三八年歿。一

軍隊と貴金と勲章と名誉
高く 高く 高く 高く 高く 高く 聳える
首都中央地点――日比谷

屈折した空間
無限の陥穽と埋没
新しい知識使役人夫の墓地
高く 高く 高く 高く 高く より高く より高く
高い建築と建築の暗間
殺戮と虐使と噛争
高く 高く 高く 高く 高く 高く
動く 動く 動く 動く 動く 動く 動く
日 比 谷
彼 は 行 く――
彼 は 行 く――
凡てを前方に
彼の手には彼自身の鍵

九二五年に詩集「死刑宣告」を刊行。他に「断片」「萩原恭次郎詩集」

鑑賞 「死刑宣告」の多くの作品は、前世代のあらゆる詩形を徹底的に否定し去るダイナミックな表現にみちている。しかも活字の大小、太い細いを駆使する視覚的方法は、モダニストの単なる言語遊戯ではなく、大正末期の日本の頽廃したブルジョア生活と軍国主義の抬頭への反撥――無政府主義的な、やりばのない怒りの表現として、一種の必然性をもっている。「日比谷」という都会のある中心部が象徴する「知識使役人夫の墓地」労働者の犠牲の下にどんどん建つ高層建築、街には「刺戟的な貨幣の踊り」そんな非人間的風景の内

虚無な笑ひ
刺戟的な貨幣の踊り
彼は行く――
点
点々と――墓場――永劫の埋没へ
最後の舞踏と美酒
頂点と焦点
高く　高く　高く　高く　高く　高く　高く聳える尖塔

彼は行く　一人！
彼は行く　一人！
日　比　谷

小熊秀雄（おぐまひでお）

茫漠たるもの（小熊秀雄詩集）
茫漠たる不安のために

部をゆく一人の自由な男の怒りの唄声を、僕達は「現在」のものとしてきく事も出来る。この場合は詩的結晶度とか、完成度とかいうより、詩人の社会的発言の率直さを見るべきでしょう。

小伝　一九〇一年(明治三四年)九月九日、北海道小樽市稲穂町に生れる。一九一六年樺太泊居町にて高等小学校二年を卒業、雑役労働者として転々とする。一九二二年、旭川新聞社に見習社員として入社、文才を認められ社会部記者

私は必死となる
野であり、山であり、村落であり、海であり、都会であり、村であ
　り、空中であり、
地下道である。
すべての上に住み、
すべての中に住む、
そして何処にも不安がある、
そしてその不安を私の力で埋めようとする、
私はそれが出来るか、
私は知らない、
簡単明瞭な私の答へよ、万歳、
いま私は仕事の最中
突然衝動的に一米突とびあがる、
この異様な感動は
いつたい私の脳の
何番目の抽出（ひきだ）しにあつた奴か、
私は今それを調べてゐる、
抽出しにはかう貼紙がされてゐる、

となる。一九二五年崎本ツネコと結婚。一九二八年旭川新聞をやめて上京、民謡詩人社に藤田健次を訪問、そこで遠地輝武・甲賀上茂と知合う。一九三一年、遠地の紹介でプロレタリア詩人会に加わる。一九三三年秋より新井徹・遠地らと「詩精神」を発刊。プーシキン、ネクラーソフ、ゴーゴリ、マヤコフスキ等をよむ、デッサンを書きはじめた。一九三五年五月「小熊秀雄詩集」（耕進社）、六月「飛ぶ橇」（前衛社）を上梓。一九三六年、読売新聞に文壇風刺詩・文を連載して好評を博し、生活もやや落着くが、一九四〇年一一月二〇日午前五時歿。三九歳。

鑑賞　僕は小熊秀雄の詩が大好きだ。その詩集のだされた昭和一〇

――匂ひはロマンチック、
――性質はプロレタリア、
それでよし、それでよし、
私の精神の処方箋、
私は単なる掃除人のやうであつていい
右から左へ、
精神を移す、
悪臭ある汚穢なるもの、
喧噪なるもの、不自然なるもの、
雑多な性質と、無性格、
天を掴む飛躍と、地をさらふ脱落
私のひとふきの喇叭に
あらゆる素材よ、飛んで来い、
そして美事に整列してくれ、
――宿命はつらいし、
――運命は信じ難い、
そのことだけを考へても、
すぐ二三時間は経つてしまふ、

年頃はプロレタリア詩運動がやや下火になった頃ではあったが、他のプロレタリア詩人には断然みられない、詩としての感動がある。プロレタリア詩には一般的に言って怒号する作品や、理論負けのした生硬な詩が多いが、小熊秀雄の作品は、むろん生活のリアルな面を主題にしながらも、そこに詩人の深い眼がそそがれていて、自由で明るいリズム感がみちあふれている。彼は「しゃべり捲くれ」という詩で次のように言っている。

私は君に抗議しようというのではない。
――私の詩が、おしゃべりだと
いふことに就いてだ
私はいま幸福なのだ
舌が廻るといふことが！
沈黙が卑屈の一種だといふこと

それを喜べ、
喜ぶことは良いことである、
私の絶望上手は、
精神の貧しさを悲しんでゐる、
高邁な精神には縁のないことを
つくづく考へる、
愚劣な精神の労働にも
異常な感動をおぼえることはどうしたことか、
その時生き甲斐をかんじ
そのとき茫漠は去り、
友の哀れむべき精神の工場から
濛々と不安のけむりが
立ちあがつてゐるのを見る、
あゝ、その煙りは昼は灰色にみえ
夜は赤く美事に空に映つてゐる、
友は知らない、
その美しさを、
私だけがそれを見てゐる

を
私はよく知ってゐるし、
沈黙が、何の意見を
表明したことにも
ならない事を知ってゐるから

——そして「読者に素直にうなづいて貰へればそれで」終るという彼の詩は、本当に、その自由なきどらない話し口の故に、読む人の心にしみわたる。日常語を使い、俗語をもふんだんにとりいれた彼の詩は、恐らく多くの庶民的な人々にいつまでも愛読される事だろう。

小熊秀雄の詩はまた男性的でもある。労働者の、被支配者的な階級意識の底で、いじけた声など少しもあげない。人生の肯定派だ。「茫漠たるもの」一篇をみても、その事はよく分る。生きる不安のたえまない来襲のなかで「あらゆる

私の美しさは私が知らない。
だが友達がそれを見てゐてくれるやうに、
友よ、たがひに信じよう、
恐るべき時代に生れ合はしたことを――、
歴史の空白を
吐息と、われらが糞尿と
言葉の塵芥と、血と、
むなしい労働と、小さな反抗とで埋めよう、
すべて意味深し、
それでよし、
私は誰よりも軽忽でありたい、
私は我等の勝利の万歳をまつ先に叫ぶ、
私は偉大な啞呆の役を買ふ、
水蒸気は濃霧だ、
その中に我等の意志は停船してゐる、
不安は霧だ、混濁だ。
この茫漠たる中で
君は化粧する時間など持つな、

素材よ飛んで来い」と唄える詩人は単なる楽天家ではない。逆に「絶望上手」こそ厭うべき楽天家だ。

「恐るべき時代」に生れ「偉大な啞呆の役を買ふ」詩人の意志は、一見「停船」するようにみえはするが、彼は自らに道化をみる精神的享楽主義者の群れにはいない。

　匂ひはロマンチック
　性質はプロレタリア、

小熊の詩の単一でない面白さの謎はそこにある。

ただ君の警笛のために
君の咽喉（のど）のために
絶叫する機会を与へてやれ。

壺井繁治（つぼいはんじ）

風船（詩集・風船）

空に向つて
大きな欠伸（あくび）をすると、
口の中から
風船が一つ飛び出した。
空へずんずん昇るにつれて、
それはしだいに大きく膨れあがつていつた。

あの中には
毒瓦斯がいつぱい詰まつていて、
いつ爆発するかわからない。

小伝　一八九八年(明治三一年)香川県小豆島に生れる。早大英文科中退「赤と黒」の創刊に参加。大正末期のダダ的な芸術運動をおこしたが、その後アナキズムの立場をとる。「文芸解放」の創刊に参加、さらにマルキシズムに転じ三好十郎・高見順などと「左翼芸術同盟」を組織、昭和三年「ナップ」に参加、数年間筆を絶って「戦旗」の発行、経営に力を注いだ。この間二度検挙、投獄された。昭和一七年の「壺井繁治詩集」と三二年の「風船」との間に九冊余の詩集あり、半自伝風の評論として「現代詩の流域」がある。

——そんな噂が街中に拡がつていつた。

小さな街の
上空を覆う
巨大な風船。
それが朝から夜中まで、
幽霊のようにぶらぶらしている。

この街の人人は
生活に疲れきつて、
空に
太陽のあることすら忘れていたのだが、
風船の出現に恐れおののいて
空ばかり見上げている。
何時、
どんな変事が起るかわからぬので、
街中が
革命以上の大騒ぎとなつた。

鑑賞　戦後、新日本文学会の創立に力を尽した壺井さんは、岡本潤氏などとならんで最も古い左翼詩人の一人である。その作品の多くは、まじめ一途の人柄の反映か、やや生硬の感をまぬがれがたい印象を人に与えるが、戦後十数年経てまとめられた「風船」の作品群には、「笑い」の要素があらわれ、壺井さんの詩の世界を一層ゆたかなものにしている。

この「風船」は比喩である。なんの比喩か。抑圧された人間の心がうちあげたネガチーブな太陽である。

生活につかれた人々、どこかに革命を望む空気のひそんでいる疲れた街、そんな戦後の日本が、はきだした毒の太陽である。

この作品は諷刺の形をとってい

警察は四方八方へ
刑事たちを走らせたが、
肝腎の犯人は何処にも見つからなかつた。

——欠伸をした男を見たら知らせて下さい。
——その男の人相も出来るだけ詳しく。
そんな協力を街の人々に求めたが
欠伸をしている男が
あまり多過ぎるので、
どれが真犯人だかわからなかつた。

流石(さすが)の警察も
とうとう音をあげてしまつた。

そして今でも
その小さな街の屋根の上を、
風船は

るから、革命讃歌の如く勇ましく
はないが、却って不安な、現代人
の生活感情をキャッチしている。

相変らずぶらぶらしている。
風の吹くままに、
西に
東に……

終曲と序曲

岡本潤（おかもと じゅん）

おれは尾（つ）けられている
そのしつこい監視の眼から
おれは一刻も逃れることはできない
足音もなく
影も形もなく
つきまとう
尾行者
おれの一挙一動は

小伝　一九〇一年（明治三四年）埼玉県に生れ、幼年時代、母と共に京都に移る。東洋大学中退、ダダ、アナーキズムの影響をうけ、「赤と黒」の創刊に参加、以後、「文芸解放」「矛盾」「弾道」「反対」など種々のアナーキズム文芸誌に関係した。昭和一四年、中野秀人・花田清輝らの文化再出発の会に加わり、「文化組織」の刊行に参劃した。

戦後、新日本文学会に参加、また秋山清・金子光晴・小野十三郎らと詩誌「コスモス」を出した。詩集「夜から朝へ」「罰当りは生きている」「夜の機関車」「襤褸の旗」

見張られ
記録され
通報される
不可視のレンズはおれの内臓を照射し
夢のなかの快楽までもキャッチする

おれはまわり道を歩く
おれは一パイ飲屋にも高級料理店にもはいる
おれは怒りたいときに哄笑する
おれははげしく拒絶する女体を抱く
おれは童謡とパルチザンの歌をうたう
おれは未練のある恋人をすてる
おれは恩人を罵倒する
おれは愛するものを殺す
おれは乞食から剝ぎとり独占資本家に投げ与える
おれは　おれは　おれは……
おれのなかで

「橋」「岡本潤詩集」・

鑑賞　僕は前に岡本さんの詩を評して「男性的な」という言葉を使った。小熊秀雄のような、大らかさには乏しいが、いつまでも青年の情熱の失われない鮮明さがある。

　現代ほど人間が、人間以外の者によって管理され、監視されている時代も珍らしい。

　僕達は死ぬまで働く、労働は金に換算される。そして金で買える幸福はどこにもない。僕達はなんの為に働きつづけるのか。人間の幸福とは無関係の、価値のバランスを保つためにだけ、巨大な資本主義体制の内部で、歯車のように動きつづける。

　そんな世界で、自由を求める一人の詩人は、詩を嘔吐のようには

ふてくされるもの
逆流するもの
凶器をひらめかして迫るもの
〈血へどにまみれた言葉と
　飛び散る言葉〉

おれにはアリバイがない
おれは亡命もできない
おれをがんじがらめにするクモ網
四方八方からの放射線
スパイ
憲兵
友だちづらのオカッピキども
そいつらを顎でつかい
指令を発するやつ
通報を集めるやつ
戦争と平和を秤（はかり）にかけるやつ

く。

　おれは怒りたいときに哄笑する
　おれは愛するものを殺す
　おれは乞食から剝ぎとり……

次々に吐きだされる逆説、そのパラドックスの渦のなかで詩人は段段孤独になってゆく。

　おれにはアリバイがない
　おれは亡命もできない

そして「戦争と平和を秤にかけるやつ」どもに対して、怒るよりもむしろ背をむけ、「内臓のユートピア」へ自己韜晦の詩道を通って歩いてゆくのだ。

　それが果して「前へ」であろうか。その事はしかし誰にも恐らく分らない。しかし詩人は歩かないわけにはいかないのだ。やがて辿る方角から、ある「序曲」がきこえる。この詩の題に注意するがよ

おれは見知らぬ囚人の列にはいつて
窓のない壁にかこまれた回廊をゆく
いく曲り　いく曲り
回廊がどこまでつづいているか　おれらは知りようもない
おれらは盲人のように歩き
前へ
前へ
一歩
一歩
難破船のように傾き揺れる
　おれの内臓のユートピア
回廊のむこうから
潮騒のようにきこえてくる
終曲と序曲！

い。「終曲の序曲」ではなく、「終曲と序曲」なのだ。

小野十三郎(おのとうざぶろう)

重工業抄（詩集・大阪）

生国不詳。
昨日私はここに来たようであるし
何十年も昔からここにいるような気もする。
年齢だつてさだかでない。
まだ若いという人もいるが
記憶は朦朧としている。
ただ前方に枯れた葦原があり、
背後に暗い大きな海があつた。
葦原には鳥たちも啼いていた。
ところどころに家らしいものも建つていたが寥しかつた。
無人の野に一列の電柱がはしつていた。
その頃だろう。一粒の種子が
この荒漠たる岸に流れついた。

小伝　一九〇三年(明治三六年)七月大阪に生る、東洋大学中退、大杉栄の思想的影響と「赤と黒」の詩人たちとの出合いが「私の詩人としての進路に決定的な方向をあたえた」小野さんは更に「そのころ乱読した一九世紀のロシヤの写実主義文学にも大きな恩恵を感じている。日本の詩集はあまり読まなかったが、朔太郎の「月に吠える」と犀星の「愛の詩集」の二冊は忘れられない」といっている。
昭和一四年に出した第三詩集「大阪」以後、詩法が確立した。昭和二八年に戦中・戦後の作品を加え新版「大阪」を出したが「これらの詩集に見られる客観的リアリズムともいうべき手法からの脱出が、目下のところ私の課題だ」とも小野さんはいう。詩集一〇冊、

そして孤独にこの国の草の根のからんだ柔かい土から萠え出た。
それは昨日のようであるし
何十年も前の出来事のようでもある。
昔、海だつたあたりも
いつしかこんな遠く海からはなれてしまつた。
葦原のまん中だと思つていたが
どうしていまは仲間が増えてこの通りだ。
かつてこの国の岸が私にとつてそうであつたように
人々はまだ私になじまない
ひよつとするとこの国の人は私たちが嫌いなのかも知れない。
私たちはほんとうにこの国が好きなのに。
こんな居心地のよい土地はいま世界の何処にあるだろう。
私たちはようやく
この国の自然の中に自生して
生国不詳の悲しさを
忘れている。

評論五冊。

鑑賞　小野十三郎の詩の世界は、他の左翼系の詩人のそれとはことなり、多分に文学的である。つまり、自分の思想のプロパガンダとして詩を利用するというのではなく、小野さんの言葉をかりれば「他に向っての呼びかけよりも、そこでこそ自分の感性や思考力が鍛えられ、ためされる場」と考えている。小野さんの詩はリアリズム映画の画面のごとく彫りの深い白黒のトーンをもっている。

花鳥風月ならぬ鉄の塊りのような近代風景をテーマにそこから新鮮な抒情を導き出す手法は、冷静な写実精神を背景にし、文明の虚飾をとりさった原始的風景への憧憬というロマンを露骨でなく内包しながら生産される。

中野重治（なかのしげはる）

歌　（中野重治詩集）

お前は歌うな
お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそうそとしたもの
すべての物憂げなものを撥（はじ）き去れ
すべての風情を擯斥せよ
もつぱら正直なところを
腹の足しになるところを
胸先を突き上げて来るぎりぎりのところを歌え
たたかれることによつて弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気をくみ来る歌を
それらの歌々を

小伝　一九〇二年（明治三五年）福井県に生れる。東大独文科卒、一九二六年窪川鶴二郎・西沢隆二・堀辰雄らと同人雑誌「驢馬」をつくる。「戦旗」の編集に参加・一九三〇年小説集「鉄の話」一九三一年「中野重治詩集」、一九三五年同発刊、一九五六年「むらぎも」毎日出版文化賞授賞・一九五九年、筑摩書房より中野重治全集刊行中、一九六〇年「梨の花」読売文学賞受賞。

鑑賞　「雨の降る品川駅」などとともに中野重治の代表作の一つである。小野十三郎が戦後、詩歌に漫性化している古い抒情を否定したように、この詩も、気分だけの歌をはげしく否定してみせる。詩は有閑階級の風流なテスサビでは

咽喉をふくらまして厳しい韻律に歌い上げよ
それらの歌々を
行く行く人々の胸廓にたたきこめ

草野心平（くさのしんぺい）

ごびらっふの独白（詩集・定本蛙）

るてえる　びる　もれとりり　がいく。
ぐう　であとびん　むはありんく　るてえる。
けえる　さみんだ　げらげれんで。
くろおむ　てやあら　ろん　るるむ　かみ　ろ　りりむ。
なみかんた　りんり。

すでにない。小熊秀雄は中野重治の事を歌っている。

それは君がプロレタリア詩人として
攻勢の詩人ではなく
守備の詩人であったからだ

と、しかし中野重治の詩は読者に直流的に流れこむ自然さをもっている。

小伝　一九〇三年（明治三六年）福島県小川村に生れた。磐城中学から慶応普通部に転じ中退して単身下駄ばきで、大正一〇年中華民国広州に渡り、嶺南大学に入った。在学中謄写刷詩誌「銅鑼」を発刊。大正一四年排日英動乱のとばっちりをうけて帰国、自動車の運転手になろうとして八ッ山下の教習所に通ったのをきっかけに、職業転

なみかんたい　りんり　もろうふ　ける　げんげ　しらすてえる。
けるば　うりりる　うりりる　びる　るてえる。
きり　ろうふ　ぶりりん　びる　けんせりあ。
じゆろうで　いろあ　ほらあむ　でる　あん　ぶりりよ。
ぶう　せりを　てる。
りりん　てる。
ぼろびいろ　てる。
ぐう　しありる　う　ぐらびら　とれも　でる　ぐりせりや
　ろとうる　ける　あんたぶりあ。
ぷう　かんせりて　る　りりかんだ　う　きんきたんげ。
ぐうら　しありるだ　けんた　るてえる　とれかんだ。
いい　げるせいた。
でるけ　ぶりむ　かににん　りんり。
おりぢぐらん　う　ぐうて　たんたけえる。
びる　さりを　とうかんてりを。
ひひ　びりやん　げるせえた。
ばらあら　ばらあ。

転。
「銅羅」「学校」に次いで昭和一〇年仲間と共に「歴程」を創刊、現在に至る。詩集は第百階級・明日は天気だ・母岩・蛙・絶景・富士山・血・日本砂漠・牡丹園・草野心平詩集・天・亜細亜幻想等、随筆・小説なども多い。昭和二五年蛙の詩で第一回読売文学賞受賞。文化交流のため中共にも旅した。

鑑賞　草野心平の蛙をモチーフにした作品はことごとく面白い。なかでもこの「ごびらっふの独白」という奇妙な蛙語の詩には一種荘厳な讃美歌のおもむきさえある。蛙語は単に詩の技法の一種であるオノマトペ（擬声音）ではない。このフランス語に似た音楽の底に

日本語訳

幸福といふものはたわいなくていいものだ。
おれはいま土のなかの靄のやうな幸福につつまれてゐる。
地上の夏の大歓喜の。
夜ひる眠らない馬力のはてに暗闇のなかの世界がくる。
みんな孤独で。
みんなの孤独が通じあふたしかな存在をほのぼの意識し。
うつらうつらの日をすごすことは幸福である。
この設計は神に通ずるわれわれの。
侏羅紀（ジュラキ）の先祖がやつてくれた。
考へることをしないこと。
素直なこと。
夢をみること。
地上の動物のなかで最も永い歴史をわれわれが
　もつてゐるといふことは平凡ではあるが偉大である。
とおれは思ふ。
悲劇とか痛憤とかそんな道程のことではない。
われわれはただたわいない幸福をこそうれしいとする。

は蛙と交響する天然詩人の歌声もまじっていてユーモラスだ。「けえる」とか「てやあら」とかいういやに人間臭いセリフも入ってくる。日本語訳にもあるように詩人は蛙の「単簡な脳の組織」を一番尊敬している。侏羅紀という人類発生よりはるか以前からでんと坐って天をみている蛙の姿勢を愛しているのだ。詩人の眼にも蛙の眼玉にも移ろう時の流れ、その虚しさなど映らない。「人類への挽歌を人類でない他のなにものからもおくられるということはないだろうとは必ずしも断定は出来ない。しかし乍らそんな時でも「人間」は、「人間」の高い美しい精神は比類なく輝いてゐるだらう。自分が蛙をみるのは「人間」をそのなかに見ることに過ぎなかったかもし

ああ虹が。
おれの孤独に虹がみえる。
おれの単簡な脳の組織は。
言はば即ち天である。
美しい虹だ。
ばらあら　ばらあ

中原中也（なかはらなかや）

骨　（詩集・在りし日の歌）

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦労にみちた
あのけがらはしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、
ヌックと出た、骨の尖（さき）。

れない。この「人間」の強引のために蛙も人類も生きつづけてゐると言へないこともないと思ふ」。心平さんはそういっている。

小伝　一九〇七年(明治四〇年)山口市に生れる。一九一五年弟の死に接し初めて詩を作ったといわれる。一九二三年「ダダイスト新吉の詩」をよむ。その後富永太郎に会いフランス象徴詩派詩人を知る。一九才の時上京、小林秀雄に会う。アテネフランセ卒業、一九三四年「山羊の歌」を自費出版。一九三六年愛児の死にあい失意深し。一九三七年第二詩集「在りし日の歌」を小林に託し同年一〇月死す。こ

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、
雨を吸収する、
風に吹かれる、
幾分空を反映する。

生きてゐた時に、
これが食堂の雑踏の中に、
坐つてゐたこともある、
みつばのおしたしを食つたこともある、
と思へばなんとも可笑しい。

ホラホラ、これが僕の骨――
見てゐるのは僕？　可笑しなことだ。
霊魂はあとに残つて、
また骨の処にやつて来て、
見てゐるのかしら？

の詩はその翌年創元社から出版された。

鑑賞　中原中也の作品は同時代の誰の詩よりもイロニックな色彩を帯びている。白秋調の小唄のリズムで書かれたものも、ボードレエルばりの象徴詩にも、人生に倦怠し、その倦怠を武器に生きる孤高的なペーソスがある。「骨」という作品も自虐的なポーズを持つ秀作だ。立札ほどの高さに立つ骨、そのそばにぼんやり立って、自分の骨をみている「僕の霊魂」、これはユーモアというのでも、諷刺というのでもない。人生に加害された涯のなんとも寒々とした風景である。中也の詩の感動はその言葉のもつ肉声の深さからくる。

故郷（ふるさと）の小川のへりに、
半ばは枯れた草に立つて、
見てゐるのは――僕？
恰度立札ほどの高さに、
骨はしらじらととんがつてゐる。

八木重吉（やぎじゆうきち）

雲　（八木重吉詩集）

もくもくと
雲のやうに
ふるへてゐたい

○

ゆふぐれの陽のなかを
三人の児が
ななめの畑をのぼつてゆく
みてゐれば　なきたい

小伝　一八九八年（明治三一年）東京二月都下南多摩郡に生れた。東京高等師範学校英文科を卒業、兵庫県御影師範の教師となる。二五年千葉県葛飾中学に転任した頃より詩作さかんになり、一九二五年詩集「秋の瞳」を刊行。キリスト教への関心は学生時代からあったが、聖書を耽読、内村鑑三に私淑、熱烈な信徒となった。一九二七年一〇月没、二九才。

鑑賞　八木重吉詩集は昭和一七年草野心平の篇で刊行されている。

○

おほきな河のうへを
夜の汽車でとほる
むかうのはうにも
橋があるらしく
いちれつの灯がかはにうつつて
ひとつびとつ
ながいひかりになつてゐる

○

わたしでもなく
わたしをうごかすものでもなく
ふしぎなる両生のせかいの
いちばんやはらかないちばんはじめの
こころをどるいづみからものを云ひたい

○

あかつちの
くづれた土手をみれば
たくさんに

八木重吉の詩は凡てがキリスト者としての内的な告白である。

詩をつくるというより日記を書くような気持でかきつづったこれらの短詩は、宗教的な心情に裏打ちされた透明度とともに、清ければそれだけ傷つきやすい求道者の悩みにみちている。

　いちばんやはらかないちばん
　　はじめの
　こころをどるいづみからもの
　　を云ひたい

という詩では、八木重吉がどれほど無垢に、内的告白を言葉にたくしたかをよく物語っている。草野さんは八木重吉の詩について「思ったことを書けることが技術の最後の姿勢でありその他にはなんにもない」といっている。重吉の詩が、技術にあくせくしたところか

木のねつこがさがつてゐた
いきをのんでとほつた

○

西瓜をくはう
そこだけ明るく　光つたやうにおもはれる
はやく　喰はう

○

雨のおとがきこえる
雨がふつてゐたのだ
あのおとのやうにそつと世のためにはたらいてゐよ
雨があがるやうにしづかに死んでゆかう

岡崎清一郎（おかざきせいいちろう）

豪傑伝（詩集・新世界交響楽）

らではなく、「三人の児」や、「夜の汽車」のなんでもない動きがそのまま心に感応する純粋さから湧き出している点に僕等は感動する。「野心もなく泥んや衒気などなく」キリストを生理化し、感覚化し神と同質の裸で書いた詩がいつまでも新鮮なのは全く当然の事だ。

小伝　一九〇〇年（明治三三年）九月栃木県足利市に生れる。二歳年上に謹三という叔父がいた。二〇才で死んだが天才肌の人でその影響を強くうけた。一五才で詩をかきはじめる。一九才上京、下谷太

諸君よ諸君よ。
夜になツて寝につく前
荘兵衛はすこし腕力を要する仕事をしたいと考へた。
はツはツはあ！　まあためしてみるがいい。
荘兵衛はね。城楼に上に
窓をあけて灰緑色の外面をうかがツた。
手前の荒蕪地と小村落に降雨があり
河床に数条の流れが走ツてゐた。
敵ははやくも橋を渡ツてくる。
思ふ壺であツた。
諸君よ。
それは惨禍起らんとする前の脅威、興味津々たる幻影的光景であツた。
今や強風をおかしてますらをが
急峻を上り燃料を肩にして凸部の交叉点にさしかかツた。
何がよ。
敵がだ。
これは一大事だ。

平洋絵画研究所に通い、大画家を志す。北原白秋の「近代風景」に毎号作品を発表。二九才の時「母に金を一五〇円出してもらい」詩集「四月遊行」を出版、昭和一〇年「歴程」創刊同人になる。「肉体輝耀」にて文芸汎論賞、「新世界交響楽」にて高村光太郎賞受賞。

鑑賞　岡崎さんの制作意欲はますます旺んである。「歴程」に書く最近の作品のすべてはすごい長篇詩で、エネルギッシュな詩句にあふれている。

　岡崎さんの詩には、漢詩的発想、不思議な擬声音、俗語詩語いりまじって登場し、一種グロテスクな迫力さえ感じられる。

　画家を志していただけに、初期の詩以来、絵画的イメージは、そ

打ちすてておくわけにはゆかぬ。
遠く海湾にわたツて雷電あり
且つ或る部分は月に虹が立ツた。
ああ堀を乗り越えるもの。
『来い！
と叫ぶもの。
相容れぬ二個の性格は、拡散する雲の下でもはや正体がなかツた。
『遠からん者は音にも聴け！
おお与論よ。智識階級の諸君よ諸君。
荘兵衛には問ひただしたいことが多々あツた。
このごちやごちやした大奥における人々の嫉妬羨望。七面倒くさい
　頽廃のただよひよ。
荒野は領分は混雑し裂目が出来た。
逃げるならいまだぞ！
荘兵衛は免許皆伝だぞ。
倒れながら横にはらひ腹を抉り
一人残らず斬ツてしまへ。
大上段に刀をふりかぶり、くそ負けてたまるか。

の詩の特徴とするところだが、反骨りょうりょうたる詩精神は、凡百の詩家がおちいる老境雅趣の境にとどまらず、却って油彩的な濃度を示している。
「豪傑伝」にこめられたすさまじい笑いの熱量は、文明への諷刺などという社会時評的な次元をはるかにこえて、痛快な美学の世界へつきぬけている。

武士たるものがなんだ。
一矢射よと下知した。
討死せよ。
仆せ。
首領をころせ。
栄光ある大なる陽物を捕獲せよや。
激烈なる戦争は全貌を現し頂点をきはめた。
迂廻し西空高く円筒をなげうつ。
拱門めがけて駈けるやつはよぢれ、よろめき
飛沫に包まれた。
谷は焔にもえ上ツた。
生い茂る木立は生き埋めとなり
鏖殺のためのききなれぬ物音！
『あれですヨ。
　あれですヨ。
とうと敵味方の男女共は発狂いたした。
(笑う)
『はははははあ！

（笑う）
『ははははあ！
諸君よ　諸君よ。
さんざんに喰ひ荒されたこの莫迦々々しい
詳細に一驚を喫せよ。
さうですナ。荘兵衛よ。
貴下の腕前はこのくらいで満足されましたかナ。
（輪切りにされた胴体は垂直に佇み、じやぶじやぶ血潮を噴き上げてゐる。）

逸見猶吉（へんみゆうきち）

報告（ウルトラマリン第一）（逸見猶吉詩集）

ソノ時オレハ歩イテキタ　ソノ時
外套ハ枝ニ吊ラレテアツタカ　白樺ノヂツニ白イ
ソレダケガケワシイ　冬ノマン中デ　野ツ原デ
ソレガ如何シタ　ソレデ如何シタトオレハ吠エタ

小伝　一九〇七年（明治四〇年）九月栃木県に生れた。本名大野四郎、一九二〇年暁星中学の頃より詩作、ランボオに傾倒した。一九二六年早大に入学、丸岡明・田村泰次郎・緒方昇などと知る。赤羽の自宅の屋根裏をアトリエに弟五郎などと絵をかいた。このころ三・一五事件あり、特高の眼もきびしい時代であったが、神楽坂に酒場

《血ヲナガス北方　ココイラ　グングン　密度ノ深
クナル
北方　ドコカラモ離レテ　荒涼タル　ウルトラマ
リンノ底ノ方ヘ――》
暗クナリ暗クナツテ　黒イ頭巾カラ舌ヲダシテ
ヤ　ラ　羽搏イテヰル不明ノ顔々　ソレハ目ニ見エナ
イ狂気カラ転落スル　鴉ト時間ト　アトハ
サガレンノ青腿メタ肋骨ト　ソノ時　オレハヒドク
凶ヤナ笑ヒデアツタラウ　ソシテ　泥炭デアルカ
馬デアルカ　地面ニ掘ツクリ返サレルモノハ　君モシ
ル　ワヅカニ一点ノ黒イモノダ
風ニハ沿海州ノ錆ビ蝕サル気配ガツヨク浸ミコンデ
野ツ原ノ涯ハ監獄ダ　歪ンダ屋根ノ　下ハ重ク　鉄柵
ノ海ニホトンド何モ見エナイ
絡ンデル薪ノヤウナ手ト　サラニソノ下ノ顔ト　大キ
ナ苦痛ノ割レ目デアツタ
苦痛ニヤラレ　ヤガテ霙トナル冷タイ風ニ晒サレテ
アラユル地点カラ標的ニサレタオレダ

「ユレカ」をひらき、謄写版雑誌「学校」に参加、ウルトラマリンの詩を書いた。「歴程」創刊に参加、新京に渡る。藤原定・長谷川四郎と「満洲浪漫」に拠り、檀一雄と「物質と配給」なる機関誌を出した。

一九四六年五月一七日、蒙古風の吹きまく長春郊外で北を見つめつつ仆れた。

鑑賞　この詩のもつ独得のリズムを読者は声に出し再三味わっていただきたい。

北方の寒気、凍る土、そして「アラユル地点カラ標的ニサレ」る「オレ」のすさまじい孤独と憤怒――それらがまんじどもえになった感情をこれほど、えぐるように歌った作品は全く数少ない。

この詩の鑑賞に、当時日本帝国

アノ強暴ナ羽搏キ　ソレガ最後ノ幻覚デアッタラウカ
弾創ハスデニ弾創トシテ生キテユクノカ
オレノ肉体ヲ塗抹スル　ソレガ悪徳ノ展望デアッタカ
アア　夢ノイツサイノ後退スル中ニ　トホク烽火ノア
ガル　嬰児ノ天ニアガル
タダヨフ無限ノ反抗ノ中ニ
ソノ時オレハ歩イテキタ
愛情ニカカルコトナク　瀰漫スル怖ロシイ痴呆ノ底ニ
オレノヤリキレナイ
イツサイノ中ニ　オレハ見タ
悪シキ感傷トレイタン無頼ノ生活ヲ
アゴヲシヤクルヒトリノ囚人　ソノオレヲ視ル嗤ヒヲ
スベテ痩セタ肉体ノ影ニ潜ンデルモノ
ツネニサビシイ悪ノ起源ニホカナラヌソレラヲ
《ドコカラモ離レテ荒涼タル北方ノ顔々　ウルトラ
　マリンノスルドイ目付
　ウルトラマリンノ底ノ方ヘ――》
イカナル真理モ　風物モ　ソノ他ナニガ近寄ルモノゾ

主義の支配下にあった北満の政情を知っておく事も必要ではあるが、更に重要なのは、人間に対して常に敵意をもちつづける大自然の非情な力と、それを真正面からうけてたちすくむ一人の男、その自我の強さを試めそうとする沈痛な意志との対立を、ちかに感じる事なのだ。

　ウルトラマリンの詩が片仮名で書かれている点にも少し注意して下さい。その骨ばったポツンポツンとした象形性も、詩の内容にふさわしく計量されているのだ。

今トナツテ　オレハ堕チユク海ノ動静ヲ知ルノダ

尾形亀之助（おがたかめのすけ）

五月（詩集・障子のある家）

鳴いてゐるのは鶏だし、吹いてゐるのは風なのだ。
部屋のまん前まではつた陽が雨戸のふし穴からさし込んでゐる。
私は、飯などもなるつたけ十二時に昼飯といふことであれば中分がないのだと思つたり、もういつ起き出ても外が暗いやうなことはないと思つたりしてゐた。昨夜は犬が馬ほどの大きさになつて荷車を引かされてゐる夢を見た。そして、自分の思ひ通りになつたのをひどく満足してゐるところであつた。
から瓶につまつてゐるやうな空気が光をふくんで、隣家の屋根のかげに桜が咲いてゐる。雨戸を開けてしまふと、外も家の中もたいした異ひがなくなつた。

小伝　一九〇〇年（明治三三年）宮城県に生れた。生家は東北屈指の地主であったが、持病の喘息のため子供の頃から悩みは多かった。村山知義等と「三科」をはじめ未来派風の作品をかいた。一九二四年、詩集「色ガラスの街」、一九二九年「障子のある家」を刊行、彼はこの詩集の序文において既に肉身知友に袂別を告げ、死を目的に諏訪へ旅立ったりした。一九三一年、生家に促され仙台に帰り、市役所の一吏員となった。一九四二年二月二日歿、四三才。

鑑賞　中原中也の人生への倦怠がイロニーを含んだものだとしたら、尾形亀之助のそれは多分にユーモアを含有している。そのユー

筍を煮てゐると、青いエナメルの「押売お断り」といふかけ札を売りに来た男が妙な顔をして玄関に入つてゐた。そして、出て行つた私に黙つて札をつき出した。煮てゐる筍の匂ひが玄関までしてきてゐた。断つて台所へ帰ると、今度は綿屋が何んとか言つて台所を開けた。半ずぼんに中折なんかをかぶつてゐるのだつた。後ろ向きのままいゝかげんの返事をしてゐたら、綿の化けものは戸を開けたまゝ行つてしまつた。

山之口貘（やまのくちばく）

数学（詩集・思弁の花）

安いめし屋であるとおもひながら腰を下ろしてゐる
と　側にゐた青年がこちらを振り向いたのである

モアはそして、人生になんにも期待しないという徹底した「遊び」の精神から生れてくる、ほんものの笑いだ。

けだるい市井の日常のなかには変に間のぬけた、化物じみた時間があるものだ。変な物売りの現れるよき時代の物語ではあるが、この挿話には妙に身につまされる親しさがある。人間や事物を感傷を交えずにみるとこうした愉快な出来事にぶつかるのかもしれない。

小伝　一九〇三年(明治三六年)九月沖縄県那覇に生れた。本名山口重三郎、沖縄県立第一中学に学びその頃から郷里の新聞「琉球新報」「琉球朝日」「沖縄タイムズ」に詩を発表、大正一一年上京、翌年震災にあい、一三年再度上京、放浪

青年は僕に酒をすすめながら言ふのである
アナキストですか
さあ！　と言ふと
コミュニストですか
さあ！　と言ふと
ナンですか
なんですか！　と言ふと
あつちへ向き直る
この人間もまた人間なのか！　まるで僕までが　なに
　かでなくてはならないものであるかのやうに　なん
　ですかと僕に言つたつて　既に生れてしまふた僕な
　んだから
僕なんです

うそだとおもつたら
みるがよい
僕なんだからめしをくれ
僕なんだからいのちをくれ

の生活を送る。書籍問屋、暖房屋、お灸屋、汲取屋、ダルマ船生活、薬の通信販売等転々とした。東京府職業紹介所に勤務、昭和二三年に退職、三五年郷里沖縄へ旅す。詩集「思弁の苑」「山之口貘詩集」。歴程同人。高村光太郎賞受賞。

鑑賞　山之口貘ことバクさんはすごく遅筆である。感動や借りものの新思想がすぐペン先にほとばしるという風ではない。詩は山之口貘という不思議な迷路を潜航しながら、長い時間の重量、人生経験の重さを身につけて、少しトボケタ顔つきで現れる。

　バクさんの詩を一見トボケタ、オモシロイ味わいの詩とみるなら、誤りではないが半面しかみた事にならない。

僕なんだからくれくれいふやうにうごいてゐるんだが見えないの
　か！
うごいてゐるんだから
めしを食ふそのときだけのことなんだといふやうに生きてゐるんだ
　が見えないのか！
生きてゐるんだから
反省するとめしが咽喉につかへるんだといふやうに地球を前にして
　ゐるこの僕なんだが見えないのか！

それでもうそだと言ふのが人間なら
青年よ
かんがへてもみるがよい
僕なんだからと言つたつて　僕を見せるそのために死んでみせる暇
　などないんだから
僕だと言つても
うそだと言ふなら
神だとおもつて
かんべんするがよい

　バクさんの詩には意外に強い怒りの表情が隠されている。何に怒るか。あらゆる巧言令色に対してだ。
「思弁の苑」は昭和一三年の詩集であるが、その作風はいまも変らない。金子光晴はその跋文で「獏君によって人は、生きることを訂正される」と書いている。バクさんの詩が人間を動物と一族に扱い、而もその故に深く愛しているからだ。人は詩的な見方で人間という可憐な生物を改めて見直す事になる。
　現代人は上掲の詩の青年のように、人間である前に何者かに擬装する。弱さからだ。バクさんはそうしたレッテルなしの人間だけを愛しつづけてゆくように思われるのだ。このエゴイス

僕が人類を食ふ間
ほんの地球のあるその一寸の間

乳母車（詩集・測量船）

三好達治（みよしたつじ）

母よ——
淡くかなしきもののふるなり
紫陽花いろのもののふるなり
はてしなき並樹のかげを
そうそうと風のふくなり

時はたそがれ
母よ　私の乳母車を押せ
泣きぬれる夕陽にむかつて
轔々と私の乳母車を押せ

ト、その矛盾のかもすユーモア！

小伝　一九〇〇年(明治三三年)大阪市に生れる。士官学校に入ったが軍人は性に合わず中退。三高を経て東大仏文を卒業。三高時代、同人雑誌「青空」に作品を発表。朔太郎の「青猫」を愛読した。昭和六年「測量船」刊行。堀辰雄・丸山薫らと「四季」を発行。詩集は他に「南窗集」「開花集」「山果集」「春の岬」「艸千里」「一点鐘」「朝菜集」「花筐」「故郷の花」「駱駝の瘤にまたがって」などがある。

鑑賞　詩誌「四季」が伝統的な抒情詩の復活を骨子として出発した頃、我国の詩壇はシュールレアリズムの手法やプロレタリア詩のリ

赤い総(ふさ)ある天鵞絨の帽子を
つめたき額にかむらせよ
旅いそぐ鳥の列にも
季節は空を渡るなり

淡くかなしきもののふる
紫陽花いろのもののふる道
母よ　私は知つてゐる
この道は遠く遠くはてしない道

雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ　次郎の屋根に雪ふりつむ。

丸山(まるやま)　薫(かおる)

廂　（詩集・帆・ランプ・鷗）

アリズムが盛んであり、日本語の詩に於ける荒廃はおおうべくもなかった。三好達治はこうした時代を背景に、詩語の美しい語り手として登場した。「雪」という二行詩は余りにも有名であるが、この短詩には、俳句や短歌の伝統詩形にはない新しさが感ぜられる。
　巨きな時の脈動、自然の無言の営為の底で、植物のように生きる人間の運命といったものまで含んだ宇宙的な茫漠を僅か二行で描き切る詩の見事さを味わうべきだ。

小伝　一八九九年(明治三二年)大分市に生れた。三高を経て東大国文科卒。詩の出発は第九次の「新思潮」「柿の木」など。昭和九年「四季」を創刊。海が好きで昭和

空気を搏つ散漫な羽音をさせて、鳥が夜の廂に落して行つた物はなんだつたらう？　拾つてみれば、ひどく疲労に黒ずんだその鳥であつた。では落して速く翻つて行つた、あれはいつたいなんだつたらう

犀と獅子（物象詩集）

犀が走つてゐた
その脊に獅子がのり縋つてゐた
彼は噛みついてゐた
血が噴き上り　苦痛の頚をねぢつて
犀は天を仰いでゐた
天は蒼くひつそりとして
ひるまの月が泛んでゐた

これは絵だつた
遠く密林（ジャングル）の国の一瞬の椿事だつた
だから風景は黙し
二頭の野獣の姿もそのままだつた

一六年春から夏にかけ練習船で南方を航海し、三二年にも貨物船で豪州にでかけた。終戦の年戦災で山形に住み、いまは愛知県の豊橋市で教師をしている。詩集は十余冊。

鑑賞　丸山薫の詩の抒情性は三好のそれにくらべ一層内的な深みを帯びている。「廂」という詩をはじめてよんだ時の、不思議な心の動揺を僕はいまだに忘れえない。詩は奇をてらって常識を破るところからはうまれない。実によく視える眼と、敏感な心とが結びあって、凡人には見えない世界を教えてくれるのだ。「犀と獅子」でも、一枚の絵のなかの世界を、濃密に、静と動を二重映しにして描ききっている。

ただ　しじまの中で
獅子は刻々殺さうとしてゐた
犀は永遠に死なうとしてゐた

立原道造（たちはらみちぞう）

晩（おそ）き日の夕べに（詩集・萱原に寄す）

大きな大きなめぐりが用意されてゐるが
だれにもそれとは気づかれない
空にも　雲にも　うつらふ花らにも
もう心はひかれ誘はれなくなつた

夕やみの淡い色に身を沈めても
それがこころよさとはもう言はない
啼いてすぎる小鳥の一日も
とほい物語と唄を教へるばかり

詩人の耳はまた、永遠という静寂のなかに、烈しく解体するものの音をきいているのだ。

小伝　一九一四年(大正三年)七月東京日本橋に生れた。一高を経て東大工学部を卒業。堀辰雄・室生犀星に師事し、「四季」の同人となる。信州を愛しその風光を多く詩のテーマにした。昭和一二年「萱原に寄す」同年一二月「暁と夕の詩」を刊行。「優しき歌」は生前には上梓されなかった。昭和一三年旅先で発病し、入院中、中原中也賞を得たが、翌年二六才で歿した。

鑑賞　立原の詩は青春の哀傷にみちている。人生派的な生々しさはないが、清浄な魂の素顔を感じさせる作品である。道のほとりに立

しるべもなくて来た道に
道のほとりに　なにをならつて
私らは立ちつくすのであらう

私らの夢はどこにめぐるのであらう
ひそかに　しかしいたいたしく
その日も　あの日も賢いしづかさに?

富永太郎(とみながたろう)

恥の歌（富永太郎詩集）

Honte(オント)! honte(オント)!
眼玉の　蜻蛉(とんぼ)
わが身を　攫(さら)へ
わが身を　喰(くら)へ
Honte(オント)! honte(オント)!

つ者は、中原中也の「骨」のようには嘲笑わない優しく憂いにみちた青年だ。「なにをならって」そう彼はその優しさの故に、なにものをも傷つけず、孤りで立っていなければならない。

小伝　一九〇一年(明治三四年)東京湯島に生れた。ある恋愛事件から二高を中退、東京外語フランス語科に入る。ボードレールを愛し、油絵にも親しむ。大正一二年上海へ渡り二ケ月の貧窮生活の末帰国、この年の末喀血。「山繭」に作品を発表。大正一四年末二四才で歿。

鑑賞　富永太郎の全作品は三八篇、しかも生前に発表されたもの

燃えたつ　焜炉
わが身を　焦がせ
わが身を　鎔かせ
Honte!　honte!
干割れた　咽喉（のんど）
わが身を　涸らせ
わが身を　曝らせ
Honte!　honte!

おまへは　泥だ！

菱山修三（ひしやましゅうぞう）

夜明け（詩集・懸崖）

私は遅刻する。世の中の鐘が鳴つてしまつたあと

は九篇にすぎない。知的な構成詩ともいうべき散文詩が多いが、僕はむしろ「恥の歌」の緊張を愛する。この作品はランボーの「食の祭」を連想させる。「デイン　デイン　デイン　デイン　空気を喰おう…」

　そして「おまえは　泥だ！」という最終行の強く悲痛な響きは、知的に武装した彼の詩のなかでは、珍らしく人間的な肉声を放っている。

小伝　一九〇九年（明治四二年）八月東京に生れた。昭和七年東京外語卒。処女詩集「懸崖」は一六―二一才までの制作。最初、会津八一に帰事しのち堀口大学の主宰する「オルフェオン」に拠る。坂口安吾は青春当初の親友であった。

で私は到着する。私は既に負傷している。……

成熟（詩集・豊年）

わたしに何が残っているだろう　裸のわたしの心のほかに？
そうして何がわたしを引きとめるのだろう　泌みいるような美しい日ざしのなかに？　――もうわたしに何の悔いがあろう　悠久な小粒の太陽に　手鏡のように向きあうとき？
　わたしはまるで揺すられている　やさしい数千の波の影に　わたしはとうに裁くような過去を見失っているが　まだどんな未来も夢みていない　いったい何が準備されているのだろう――深いひろい　大きな現在の海のなかで　わたしの眼がひらくとき？
　わたしは気持ちよく乾いた空気につつまれて　ようやく感じる完全な円環のような生の成熟を

伊東静雄

わがひとに与ふる哀歌（詩集・わがひとに与ふる哀歌）

詩集は他に「荒地」「望郷」「豊年」「夢の女」など。ヴァレリイ詩集の訳その他評論・随筆がある。

鑑賞　生れながらに負傷しているこの詩人の意識はあきらかに、現代人のものだ。それはキリスト者的な「原罪」でも説明のつきかねる自我の深い痛みだ。この痛みを負って「生の成熟」にまで歩きつづけた詩人の、質的な誠実を深くよみとらなければいけない。

小伝　一九〇六年(明治三九年)長崎県諫早に生れた。佐賀高校を経て京大国文科に学んだ。ヘルダーリンに傾倒。大阪住吉中学に教鞭をとり詩を雑誌「岩」に発表、「コギト」にも関係した。昭和一〇年

太陽は美しく輝き
或は　太陽は美しく輝くことを希ひ
手をかたくくみあはせ
しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとへ
鳥々は恒に変らず鳴き
草木の囁きは時をわかたずとするとも
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無辺な広大の讃歌を
あゝ　わがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでゐる
音なき空虚を
歴然と見わくる目の発明の
何にならう

「わがひとに与ふる哀歌」を出版、朔太郎の賞讃を得た。昭和一五年「夏の花」で北村透谷賞を得、昭和二八年病歿。詩集はほかに「春のいそぎ」「反響」「伊東静雄詩集」。

鑑賞　朔太郎は「地下に固く踏みつけられ、ねぢ曲げられ、岩石の間に芽を吹かうとして、痛手に傷つき歪められた若さ」であると伊東静雄の詩の特質を語っている。

ここに描かれたものは単なる外界の描写でも、感傷的な感性の吐息でもない。「意志の姿勢」そのものなのだ。恋人とのしばらくの陶酔をさまたげるものは「音なき空虚を歴然と見わくる目の発明」の不幸である。最終八行にいたり詩の内部で詩人の声は幾重にも屈折して複雑な心の内界を展開する。

如かない　人気ない山に上(のぼ)り
切に希はれた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照さするのに

近代の寓話（詩集・近代の寓話）

西脇順三郎（にしわきじゅんざぶろう）

四月の末の寓話は線的なものだ
半島には青銅色の麦とキャラ色の油菜
たおやめの衣のようにさびれていた
考える故に存在はなくなる
人間の存在は死後になるのだ
人間でなくなる時に最大な存在
に合流するのだ私はいま
あまり多くを語りたくない
ただ罌粟の家の人々と
形而上学的神話をやっている人々と

小伝　一八九四年（明治二七年）新潟県に生れた。一九一七年慶応義塾大学卒業。一九二二年渡英、オックスフォード大学に学ぶ。一九二五年処女英文詩集 Spectrum を刊行、帰国。一九二七年詩誌「馥郁タル火夫ヨ」を刊行。一九二八年詩誌「衣裳の太陽」を刊行。「詩と詩論」の発刊。作品・詩論を旺盛に発表。一九二九年「超現実主義詩論」を刊行、一九三三年 Amvarvalia を刊行、一九四九年文学博士となる。一九五一年慶応大学文学部長となる。一九五三年日本学術会議会員、一九五七年読売文学賞をうける。一九六二年芸術院

ワサビののびる落合でお湯にはいるだけだ
アンドロメダのことを私はひそかに思う
向うの家ではたおやめが横になり
女同士で碁をうつてゐる
ふところから手を出して考えている
われわれ哲学者はこわれた水車の前で
ツツジとアヤメをもつて記念の
写真をうつして又お湯にはいり
それから河骨のような酒をついで
夜中幾何的な思考にひたつたのだ
ベドウズの自殺論の話をしながら
道玄坂をのぼつた頃の彼のことを考え
たり白髪のアインシュタインがアメリカの村を
歩いていることなど思つてねむれない
ひとりでネッコ川のほとりを走る
白い道を朝早くセコの宿へ歩くのだ
一本のスモ、の木が白い花をつけて
道ばたに曲つている、ウグイスの鳴く方を

会員、慶大教授を勇退。

鑑賞　西脇さんは詩集「近代の寓話」の序でいっている。「この詩集は単に『こわれた垣』とか『女の舌の甘さ』を集めたのでなく、一つの詩的見地から人間を慰めるために時々書いたものを集めたのである。詩の世界は通常の見地からみると矛盾（absurd）の世界である。しかしその矛盾は或る転換された世界からみると矛盾でなくなる」

一定の常識でしばられた人間生活はそのままいくら模写したところで面白味のないものであり、そこに詩を発見する為には、その一定の関係を破壊してみなければならない。西脇さんの詩にあらわれる自然描写も単に洋風形容句の新

みれば深山の桜はもう散つていた
岩にしがみつく青ざめた菫、シャガの花
はむらがつて霞の中にたれていた
私の頭髪はムジナの灰色になつた
忽然としてオフィーリア的思考
野イチゴ、レンゲ草、キンポウゲ、野バラ
スミレを摘んだ鉛筆と一緒に手に一杯
にぎるこの花束
あのたおやめのためにあの果しない恋心（れんしん）
のためにパスカルとリルケの女とともに
この水精の呪いのために

村野四郎（むらのしろう）

アニミストの歌（詩集・亡羊記）

人体模型について

あなたは男でも女でもない
性をたたれた肉体の　その無限の寂寥に

しさではなく肉眼ではとらえられない詩的遠近感——つまり遠近法の否定があるから新鮮なのだ。「詩はある永遠なものに対する仮説として作られる」と詩人はいうが、西脇さんの詩のもつ寓話性、というか感情と知性の起伏のからみあいの面白さは、すべて永遠に収レンされる水々しい情熱によって縁どられている。

小伝　一九〇一年(明治三四年)一〇月東京の西郊多摩に生れた。一九二七年慶大卒、経済を学んだが文学はすてきれなかった。一九二六年処女詩集「罠」を出版。一九二九年山崎泰男らと「旗魚」を創刊。この頃「詩と詩論」が「文学」と改題され、春山行夫のすすめでそ

はてしない宇宙の青さが
ひりひりと沁みるのだ

あなたは　そつと眼をとじている
その弱々しい抵抗
（だがその眼は内にむかつても閉されている）

さけびをうばわれた口
遠く忘れさられた耳や　鼻から
悲哀はいちめんに噴きだして
血管のように　爪先までながれている
存在から切りはなされた
この孤独の原型
そして亡びの道を断たれたもの
あなたは誰だ　あなたは何処から来た
そしてもう
何処へと聞くな

の流れに身を投じた。一方笹沢美明と「新即物文学」を創刊、第二詩集「体操詩集」を出した。一九六〇年詩集「亡羊記」で読売文学賞受賞、詩集九冊、詩論集五冊、童謡集二冊、随筆集一冊等がある。

鑑賞　村野さんの詩の持つ複雑な陰影は現代詩の典型を示すものだ。その作品の殆どが即物的にキャッチされた外的事物と内的世界との不思議な暗合からなっている。村野さんの詩は現代人が等しく体験している生の不安の見事な符号だ。「人体模型」のもつあの無気味な抽象性、「孤独の原型」に、暗い世紀を生きる僕等の、「亡びの道を断たれたもの」の立像を静かにダブらせ乍ら、村野さんの詩は、

腐敗を拒絶され
永劫の明るみにさらされた人
あなたは死者ではない
あなたは　悲哀に飾られた幻影の人
泳ぐようなあなたの手は　かすかに
文明の震動でふるえている

北園克衛（きたぞのかつえ）

黒の装置（詩集・煙の直線）

黄いろい三角
は
黒い
真昼であつた
青い四角
は

多くの人を一種の詩的救済へ、心憎くも導こうとしている。この精神の塑像をつくる達人！

小伝　一九〇二年(明治三五年)三重県に生れた。大正一二年以降・詩・絵画・演劇等の前衛運動に加わる。昭和一〇年より現在まで詩誌「VOU」を主宰し、抽象詩のスタイルを確立する。詩集は「ガラスの口髭」他二〇冊、詩論集「黄いろい楕円」ほか。ラディゲ等の訳詩集もある。

鑑賞　「煙の直線」は昭和三四年の出版である。
　その作品の重要な特色は、言葉

黒い
孤独であつた
赤い円筒
は
黒い
距離であつた
黒い四角
は
黄いろい
朝食であつた
黒い円筒
は
赤い
散歩であつた

の意味を極力とりのぞき、言葉の非形象的用法で独特の美学をうむところにある。したがって北園克衛の作品を構成する言葉も、あらかじめ意味の最も簡単なもの、例へば、白とか黒、三角とか四角とかいう幾何学的に単位的なイメージが採用されている。北園さんが自らいうようにその作品系列は三つに大別される。上掲の作品のように実験的なものと、古風な抒情詩（この抒情は意外に鮮新で、『愛の詩歌集』にも引用した事がある）と近代的な抒情詩がそれである。この三つのスタイルが一つになったようなものを書きたいと、北園さんは言っているが、実験的な作品がやはり同氏の特徴をもっともよく示している。こういう詩はむろん詩句の意味を追っていたので

黒い三角
は
青い
太陽であつた
黒いそれら
の
黒い
それら

竹中郁

ハムマー Cinēpoēme（詩集・象牙海岸）

A

1 走る線路。光る線路。ナイフのやうに交叉する、
交叉する線路。つづく枕木の並行線。

は理解出来ない。言語のリズムと、その配色、形態が構成する、文学によるデザインと思えば、あるいは少し詩の性格に接近出来るかも知れない。

小伝　一九〇四年(明治三七年)神戸に生れた。一九二三年北原白秋の「詩と音楽」の新進十一人集にえらばれた。これを機に画家志望をすて詩作。一九二八年小磯良平とヨーロッパに旅し、「詩と詩論」に参加。のち「四季」に作品を書いた。戦後、井上靖のすすめで児童詩誌「きりん」をはじめた。詩集七冊、他。

2　つぎつぎと別れてゆく線路。

3　つひに海だ。

4　海にうかぶ一艘の汽船。巨大な壁。拒絶。
　（行く手は壁なんだ）

5　乾舷標（かんげんへう）を洗はうとする波、匍匐（はふく）する波。

B

1　女の髪が風に騒いでゐる。顔のない髪。

2　白い帆のはためき。

3　高い檣（マスト）のてつぺんでペンキ塗りの水夫が働いてゐる。

4　俯瞰（ふかん）する海。迫る海。

鑑賞　「象牙海岸」は昭和七年一二月の刊行である。

竹中郁の詩にもモダニズム系の詩に共通するウィットと明るいユーモア、エキゾティックな味わいがただよっている。モダニズムの詩人達は、スタイルの新しさをとても大切にしている。竹中郁のこの映画のシナリオに似た、風景のモンタージュは、詩のもつ飛躍感をさらに意識的に定着したもので、その方法には無理のない自在さが感ぜられる。

「ハムマー」の持つ点景は、内容的にはさして前衛的な思想を示してはいないが、表現方法そのものにスピード感があって面白い。

竹中郁の楽天的な明るさは、やがて「四季」的な抒情にとけこみ、一方、児童詩の自由さの良き

5 あつ、顚落。落下する水夫。

理解者ともなったのだ。

6 砕けちる航海ラムプ。

C

1 ハムマー、ハムマーを握る手は鋲を打つ、眼に見えぬ速さで。

2 休む手、しかし開かうとはしない手。

3 血管、脈うつ血管。

4 海へ落ちこむ鎖の群。

5 波と波に呑まれて、泡泡、泡。

6 微(かすか)に消えてゆく波紋。

安西冬衛（あんざいふゆえ）

真冬の書（詩集・軍艦茉莉）

Mes Cahiers

常磐木は黒く、恒に私の手は潔（しろ）い。どんな悪徳も、もう私をよごしはしない。
閃く斧。
摧けちる薪。
営みは真冬（まふゆ）の中にも
薬におりて冬蝶は、もうそれとみわけられぬ。
藤波は夙く眠り、家畜達も今は寒を避けてゐる。
ただ道のみが行手にしるい、たとへば徳のやうに。

春（詩集・軍艦茉莉）

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた。

小伝　一八九八年(明治三一年)奈良市に生れる。大正一三年大連で「亜」に拠り詩作。昭和三年「詩と詩論」「文学」に参加。詩集六冊他に随筆集など。

鑑賞　「軍艦茉莉」は昭和四年の刊行である。「春」という一行の詩は、詩というものが包みうる空間の広さを実証してみせたような作品である。蝶という微少なるものと、海峡という広大な展望との対比が、不思議なイメージを僕達の心に起こさせるのだ。
　風景の底にひろがるロマン、弱小なるものの運命等々。

北川冬彦（きたがわふゆひこ）

馬と風景（詩集・馬と風景）

前屈みになつたかと思うと
その大きな尻と
縮めた二本のうしろ脚が
宙に浮いた、
風景を蹴上げたのだ
その風景は名残惜しげに飛び去つたが
その風景の還つてくるのは
いつのことであろう

やがて
馬は長い首を垂れて
その部厚な唇で
ま探（さぐ）つたが
その風景は　まだ還つていなかつた

小伝　一九〇〇年（明治三三年）滋賀県大津に生れた。三高を経て東大法科卒。仏文中退。「亜」「面」で短詩運動を起し現代詩形成の端緒をなす。「詩と詩論」に参加。新散文詩運動を推進。ネオリアリズム詩運動を詩誌「時間」を主宰しながら強力に推進している。詩集「戦争」など十数冊。「ダンテ神曲」の翻訳などがある。

鑑賞　北川冬彦の詩集「戦争」の諸詩は反戦的重量にみちていてこの詩人の歴史的直観力の鋭どさを示しているが、上掲の作品もまた、現実を切断してみせる詩的方法の新しさをこきみよく示している。動感に注意して鑑賞して下さい。

短歌

与謝野鉄幹(よさのてっかん)

咸鏡道(かんきやうだう)を旅行して、雪中に虎の吼ゆるをきくこと三回

いでおのれ向はば向へ逆剝(さかは)ぎてわが佩(は)く太刀(たち)の尻鞘(しりざや)にせむ

野に生ふる草にも物を云はせばや涙もあらん歌もあるらん

宿もなし。夕虹きえて、道塚の、石の仏に、しぐれ降るなり　（以上・東西南北）

情(なさけ)すぎて恋みなもろく才あまりて歌みな奇なり我をあはれめ　（紫）

わが妻は藤いろごろも直雨(ひたあめ)に濡れて帰り来(く)その姿よし

萩の花はつはつ咲きて蜱(いとど)啼く九月の二日母の日は来ぬ

しづかなる精舎の秋の朝じめり朴の広葉(は)の鬱金(うこん)ちり敷く

君と云ふ禁断の実を食みしより住む方も無く人に憎まる　（以上・相聞）

与謝野晶子(よさのあきこ)

髪五尺ときなば水にやはらかき少女(をとめ)ごころは秘めて放たじ

小伝　明治六年（一八七三）京都に生る。父は国学者、歌人。二五年上京、落合直文に師事し、浅香社の設立に与る。三二年新詩社を起し、翌年雑誌「明星」を刊行。新派和歌革新運動を推進した。昭和一〇年歿。歌集「東西南北」「紫」「相聞」。

鑑賞　鉄幹は女性的な御歌所派の歌風に反対し、歌に近代詩の性格を与えようと努力した。その強烈な浪漫主義的表白は時に「いでおのれ……」の歌の如く壮士風であり、そしてまた総じて楽天的な明るさをもっている。

小伝　明治一一年（一八七八）堺市に生る。旧姓鳳。堺女学校卒業後、関西青年文学会同人と交流。

その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづうみあまりさびしき

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏をうつくしと見ぬ

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここなる花の紅ぞ濃き

春三月柱おかぬ琴に音たてぬふれしそぞろの宵の乱れ髪

春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ　（みだれ髪）

ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経よます寺

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に　（恋ごろも）

ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の空

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり　（舞姫）

わが肩に春の世界のもの一つくづれ来しやと御手を思ひし　（夢之華）

おどけたる一寸法師舞ひ出でよ秋の夕のてのひらの上

大和なる若草山の山の精来てうたたねのわれに衣かく　（佐保姫）

梢より音して落つる朴の花白く夜明くるこゝちこそすれ　（青海波）

王ならぬ男の前にひざまづくはづかしき日のめぐりこしかな

三三年新詩社社友となり「明星」二号から作品を発表。三四年鉄幹と結婚し、情熱的な浪漫的作風で明治後期の明星隆盛期を現出。昭和一七年歿。歌集は「みだれ髪」「毒草」（鉄幹との合著）「恋衣」（山川登美子、増田まさ子との合著）「舞ごろも」「さくら草」等二一巻。

鑑賞　鉄幹の「新詩社」にあってもっとも活躍したのが鳳晶子であった。その人間肯定の明るさは、むしろ鉄幹に影響を与えるほどまばゆいものであった。「みだれ髪」の女性心理の表現は、当時にあっては想像以上に大胆で新鮮な印象を与えたと考えられる。晶子の歌風には更に、「清水へ…」「夏の花みな…」「鱶などの…」の如く、現実と幻想のいりまじる、いはば蕪村的夢幻の世界も登場する。「王

夏の花みな水晶にならんとすかはたれどきの夕立の中(なか)

鱶(ふか)などの著き干潟(ひがた)にのこされて死を待つばかり寝ぐるしき床(とこ)

山川登美子(やまかわとみこ)

ひとすぢを千金と買ふ王もあれ七尺みどり秋のおち髪

晶子の君と住の江に遊びて

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ

(恋ごろも)

わかき身の幸(さち)うすき世を歎きしかものこそ無けれ死の大前に

窓にさすこがねの色の夕映をえも見ず額に氷するかな

とこしへに身は斯く病めり心さへはた悲しまず冷えて朽(く)ちなむ

わが死なむ日にも斯く降れ京の山しら雪たかし黒谷の塔

灰色のくらき空より雪ふりぬわが焚く細き野火を消さむと

雲居にぞ待ちませ父よこの子をも神は召します共に往(い)なまし

ならぬ…」の歌などは万葉女流歌人、笠女郎の「相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づくごとし」をしのばせ、勝気で情のこまかい女心を想像させる。

小伝　明治一二年(一八七九)福井県生れ。新詩社創設と同時に入社。晶子と共に「明星」誌上で活躍した。合著「恋ごろも」出版。鉄幹への悲恋、病患の悩みが作風に反映し、晶子とは対照的である。一九〇九年歿。

鑑賞　晶子の奔放な情熱にくらべ、登美子の歌は哀切である。鉄幹への愛を晶子に奪われた彼女が、住の江に遊んで歌った作品がよくその事を示している。

その他、死を多くよんだ作品も、詠嘆の域をいでないとはいえ、不

泣かぬ日はさびし泣く日はやや楽しうつろなる身に涙こぼれよ　（明星）

伊藤左千夫（いとうさちお）

心の動き

牛飼が歌よむ時に世のなかの新(あたら)しき歌大いにおこる

秋の空の物かなしきに顧みて虚仮(こけ)をいだける心悔やしも

恋の籬

吾妹子(わぎもこ)が歎き明かして腫面(はれおも)に俯伏し居れば生けりともなし

立襖一重(たてぶすまひとへ)のおくにへだたりし君がけはひは人を死なしむ

明治四十二年二月二十八日九十九里浜に遊びて

天雲のおほへる下の陸(くが)ひろら海広らなる涯(はて)に立つ吾(わ)れは

天地(あめつち)の四方(よも)の寄合を垣にせる九十九里の浜に玉拾ひ居り

高山も低山(ひくやま)もなき地の果は見る目の前に天し垂れたり

三月六日独(ひとり)鶯を聞く

あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひ居れば鶯のなく

このあした小雨の庭に鶯やわが嬉しみをゆりつつ鳴くも

遇のうちに早世した才媛の筆跡をしのばせる。

小伝　元治元年（一八六四）千葉県に生る。本名幸次郎。明大中退。明治三三年子規門下となり、アララギを育成。子規の写生主義に主観的傾向を加味進展させ「叫びの説」を提唱した。門下に島木赤彦、斎藤茂吉がある。写生文のほか、小説を書き、代表作に「野菊の墓」がある。大正二年歿。

鑑賞　長塚節とともに子規の歌風をついだ左千夫は、節よりも主情的である。彼は子規が「写生」とよんだものを「写実」といった。即ち同じ自然主義の歌風でも左千夫の場合は、短歌の本質を刹那の感動の直接的表現、つまり「叫

人ごころ或はうつろふこともあると危ぶむ口を閉ぢて苦しも
虫まれに月も曇れるほのやみの野路をたどる吾が影もあやに

妻の里籠をいたはる

はしけやし我が見にくれば産屋戸に迎へ起ち笑む細り妻あはれ
産屋住みけながき妻が面瘦せのすがすがしきに恋ひ返りすも

冬のくもり

我がやどの軒の高葦霜枯れてくもり立てりに葉の音もせず
裏戸出でて見る物もなし寒々と曇る日傾く枯葦の上に

我が命

苦しくも命ほりつつ世の人の許さぬ罪を悔ゆる瀬もなし
生きてあらむ命の道に迷ひつつ偽るすらも人は許さず

ほろびの光

鶏頭のやや立ち乱れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり

わが幸

年あけてふみ子は四つ鈴子は五つ

みぎひだり背に寄りつくを負ひ並めて笑ひあふるる真昼の家に
九十九里の波の遠鳴り日のひかり青葉の村を一人来にけり

び」であるというのだ。
「万葉集」の調律を現代に生かそうとした歌人といえよう。人生の寂しさ。子供への愛、苦しい恋の歌などに秀作が多い。

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そそぎ栄ゆるみどり庭に足らへり
（伊藤左千夫歌集）

長塚節（ながつか たかし）

馬追虫（うまおひ）の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く相迫り見ゆ

芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ

青桐は秋かもやどす夜さればさわらさわらと其葉さやげり

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

病中雑詠

喉頭結核といふ恐しき病ひにかかりしに知らでありければ心にも止めざりしを打ち捨ておかば余命は僅かに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち騒がれて

生きも死にも天（あめ）のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき

我が命惜しと悲しといはまくを恥ぢて思（も）ひしはみな昔なり

人は我はかなきものかひたすらに悲しといふもわがためにのみ

小伝　明治一二年（一八七九）茨城県に生る。水戸中学中退。三二年上京して正岡子規の門に入る。伊藤左千夫らと交り、子規歿後「馬酔木」ついで「アララギ」同人となり、編集に従事。短歌・歌論・写生文を発表する。子規を継承して写生に徹し、客観的清純澄明な歌を詠む。生涯を一農民として送り、大正二年福岡九大病院で病歿。小説「土」は代表作。

鑑賞　「馬追虫」の歌にみられるように、長塚節の描写は実に精密である。

殊に、病床生活は、節の眼を、外部から内部にむけさせるのに役立ったようだ。

秋海棠の画に

白埴(しらはに)の瓶(かめ)こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

上州入山の山中にて

おしなべて白膠木(ぬるで)の木の実塩ふけば土は凍(こほ)りて霜ふりにけり

五月二十二日夜こころに苦悩やみがたきこと起りて

小夜(さよ)ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

ゆくりなく手もておもてを掩(おほ)へればあな煩(わづら)はし我が手なれども

病院の一室にこもりける程は心に悩むことおほくいできてまなこの窪むばかりなればいまは只よそに紛らさむことを求むる外にせん術もなく五月三十日といふに雨いたく降りてわびしかりけれどもおして帰郷す

垂乳根(たらちね)の母が釣りたる青蚊帳(あをがや)をすがしといねつたるみたれども

ひそやかに螫(さ)さむと止る蚊を打てば手の痺れ居る暫くは安し

いづれの病棟にもみな看護婦どもの其の詰所といふものの窓の北陸にささやかなる箱庭の如きをつくりてくさぐさの草の

役立つ、というのも妙な言い方であるが、病中吟の多くが感傷的になり易いなかで、節の歌が深い心情をえぐり出し、僕達に強い感動を与えるのは、やはり冷静な写実の眼が光っているからであろう。

花など植ゑおけるが、夕毎に三四人づつおりたちて砂なれば爪こまかなる熊手もて掃き清めなどす、十九日のことなり

水打てば青鬼灯(ほほづき)の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

目をつぶりてみれば秋既に近し

白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋は既にふふめり

白銀の鍼(はり)打つごときりきりす幾夜はへなば涼しかるらむ

八月一日、病棟の蔭なる朝顔三日ばかりこのかた漸くに一つ二つとさきいづ

嗽(うが)ひしてすなはちみれば朝顔の藍また殖(ふ)えて涼しかりけり

四日

あさがほの藍のうすきが唯一つ縋(すが)りてさびし小雨(こさめ)さへふり

渚にちかく檐(のき)を掩ひて一樹の松そばだちたるが枕のほとりいつしか落葉のこぼれたるをみる

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに咽(むせ)びてわれはさめにけらしも

夜は苦しき眠りに落つるまで虫の声々あはれに懐しく

こほろぎのしめらに鳴けば鬼灯(ほほづき)の庭のくまみをおもひつつ聴く

十四日

蝕(むし)ばみてほほづき赤き草むらに朝は嗽ひの水すてにけり

小さき蚊帳のうちに独りさびしく身を横たふるは常のならはしにて、また我が好むところなるに、ましてここは藪蚊のおほきところなれば只いつまでも吊らせてありけるが

幾夜さを蚊帳に別れてながき夜のほのかに愁(かな)し雨のふる夜は

（長塚節歌集）

島木赤彦(しまきあかひこ)

土荒れて石こそおほきこの村の坂にむかひて入る日のはやさ（氷魚）

畠なかに手もてわが扱(こ)く紫蘇(しそ)の実のにほひ清しきころとなりにし

わが庭に松葉牡丹(まつばぼたん)の赤茎のうつろふころは時雨降るなり

静けさの果てなきごとし鶏を塒(ねぐら)に入れて戸をしめしのみ

ひとりして籠(こ)に遊びゐる小雀(こがらめ)の鳴く音寂しも冬深みつつ

今日の日も足らふに似たりわが掘りし雪割茸(ゆきわりだけ)を羹(あつもの)にして

関東震災

埃(ほこり)づく芝生のうへにあはれなり日に照らされて人の眠れる

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも

諏訪湖畔

小伝　明治九年(一八七六)長野県に生る。本名久保田俊彦。長野師範卒。三八年太田水穂と合著「山上湖上」を刊行。伊藤左千夫に師事し大正三年上京して「アララギ」編集に従う。写生に徹し、平明静寂の東洋的歌風を完成した。歌集に「氷魚」「太虚集」「柿蔭集」等。評論「歌道小見」がある。大正一五年(一九二六)歿。

鑑賞　赤彦の歌は素朴である。自然観照の態度はアララギに共通したものであるが、信濃の風土に似つかわしい純朴さが親しみを与え

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

よべの雨に小径の石の現はれてすがしくもあるか散る松の花

燕嶽の上

よべ一夜雲ありけらし山のうへのお花畑は露しとどなり

（太虚集）

西吹くや富士の高根にゐる雲の片寄りにつつ一日たゆたふ

谷あひ川浅瀬の砂の粗くして暁のあさけの光沁むなり

戸を閉さで灯影のとどく草むらに蟋蟀鳴けりこの二夜三夜

野苺の赤実の珠は露をもてり心鮮けき光といはむ

深山木の仆れ木くぐり行く水のささやかにしてせせらぎにけり

栂の葉に音する雲は折りをりに小雨になりて過ぎ行かむとす

恙ありて

寒鮒の肉を乏しみ箸をもて梳きつつ食らふ楽しかりけり

或日わが庭のくるみに囀りし小雀来らず冴え返りつつ

信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ

（柿蔭集）

斎藤茂吉

としわかき狂人守のかなしみは通草の花の散らふかなしみ

ている。

鋭どい感覚や、機智はないけれど、いっそ古風な赤彦の歌はすてがたい。

小伝 明治一五年（一八八二）山形県に生る。本名茂吉（しげよし）。東大医学部卒。医学博士。三九年伊藤左千夫の門に入り、「アララ

けだものは食（たべ）もの恋ひて啼き居たり何（なに）といふやさしさぞこれは
ひんがしはあけぼののならむほそほそと口笛ふきて行く童子（どうし）あり

死にたまふ母

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる
のど赤き玄鳥（つばくらめ）ふたつ屋梁（はり）にゐて足乳根の母は死にたまふなり
めん鶏（どり）ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人（かみそりとぎ）は過ぎ行きにけり（赤光）
ふり灑（そそ）ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蛼（いとど）を追ひつめにけり
あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり
ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも
真夏日のひかり澄み果てし浅茅原にそよぎの音のきこえけるかも（あらたま）

箱根漫吟

しづかなる峠をのぼり来しときに月のひかりは八谷（やたに）をてらす（ともしび）

上高地

この谷をうづめて生（お）ひし山菅（やますげ）はひといろにして枯れ伏しにけり（白桃）
きさらぎの半（なか）ばを過ぎて降る雨を雪にならむと語りつつ居り

ギ」創刊と共に同人となり、左千夫歿後は子規の写生道を「実相に観入し、自然自己一元の生を写す」という理論に発展させ、万葉調を以て、西欧近代感覚に基く自我と官能とを歌う。歌集「赤光」「あらたま」「つゆじも」「寒雲」「石泉」「霜」。歌論・歌話の他「柿本人麿」「源実朝」の研究がある。昭和二八年（一九五三）歿。

鑑賞　茂吉の歌、ことに処女歌集「赤光」には、左千夫、赤彦にみられない鋭敏な感覚世界がある。「としわかき…」の歌にみる頽廃的傾向。「ひんがしは…」の大らかなロマンティシズム、また「めん鶏…」でとらえた、写実の底にある深い静寂。茂吉の歌の多様な面白さを味わっていただきたい。●

ひとむらの苔の上なるこもれ日を移ろふまでに恋ひつつゐたり
（のぼり路）

秋づくといへば光もしづかにて胡麻のこぼるるひそけさにあり
かなしくも遠山脈の晴れわたる秋の光にいでて来にけり

最上川逆白波（さかしらなみ）のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも
けふ一日（ひとひ）雪のはれたるしづかさに小さくなりて日が山に入る
八隅（やすみ）には雪山なみの浮びいで大きなるかなやこのゆふまぐれ
（白き山）

旅路よりかへり来りて老の身が独り寝むとし眼鏡をはづす
あぶら蟬鳴きゐるこゑもにくからずわれと汝とのなからひのごと
ひとねむりせし老の身が目をあきて寂しくなりぬ山の夜のゆめ
おとろへしわれの体を愛（は）しとおもふはやことわりも無くなり果てつ
（つきかげ）

北原白秋（きたはらはくしゅう）

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外（と）の面（も）の草に日の入る夕べ
すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなりにけるかも
廃れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏めば春たけにける

「あらたま」の諸作品もまた、枯淡でいてかつ近代的な情緒をみなぎらせ、ややもすると、無味乾燥に陥入り易い写実的歌境を、大きくうちやぶっている。

芭蕉の面影を感じるのは僕だけであろうか。

小伝　北原隆吉。福岡県柳河市に（一八八五年）生れた。処女詩集「邪宗門」「思い出」「白金の独楽」は在来の古い詩に新風をふきこんだはなばなしいデビュー作である。短歌に於ても「明星」に出発した彼は、「多磨」を創刊するま

病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出
あまつさへキャベツかがやく畑遠く郵便脚夫疲れくる見ゆ
悩ましき廻り梯子をくだりゆく春の夕の踊子がむれ
ふくらなる羽毛襟巻のにほひを新しむ十一月の朝のあひびき
　女は白き眼をひきあけてひたぶるに寄り添ふ、淫らにも若く
　美しく
どくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし
　二日経て弟面会に来りければ
監獄にも鳳仙花咲けりいと紅しとこの弟に言ひつげやらむ
　法廷へのゆくみちにて
日向葵日向葵囚人馬車の隙間より見えてくるくるかがやきにけれ
（桐の花）

大きなる手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも
寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚逃げてゆく真昼の光
網の目に閻浮檀金の仏ゐて光りかがやく秋の夕ぐれ
（雲母集）

あなかそか父と母とは目のさめて何か宣らせり雪の夜明を
雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母恋し雉子の尾ぐるま
薄野に白くかぼそく立つ煙あはれなれども消すよしもなし

で、ロマンティックな詩精神を核に、幽玄の世界へ沈潜し、アララギの写実に対しニュアンスに富むリズミカルな言語の美しさを追求した。「桐の花」から「黒檜」にいたる多くの歌集は日本詩歌の伝統に新しく大きな足跡を印した。その他、「赤い鳥」などに発表した多くの童謡「からたちの花」「この道」「ペチカ」などは恒久的な幅広い愛誦者層をもち、彼の諸作品は、童謡調の作品のなかでももっとも見事に結実しているということが出来る。その他、「城ケ島の雨」「松島音頭」等の民謡など、実に八〇巻に及ぶその全業績は、古今にその例をみない尨大さである。一九四二年一一月歿。

鑑賞　大雑把にいって白秋の歌は

昼ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり

米の白玉

ましら玉、しら玉あはれ、白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。そを一粒、また二粒、三粒、四粒と数ふれば白玉あはれ。うすき瀬戸白の小皿に幾すくひすくへどあはれ、かそかそと声ばかりして、ころころと音ばかりして、掻き寄せて十粒に足らず、ひろへど十粒を出でず、かそかそところころと、声するは音するは、空しき櫃の空櫃(むなびつ)の米櫃の底。ましら玉、しら玉あはれ、白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

反歌

米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはかなかりけり

短か日(び)の光つめたき笹の葉に雨さゐさゐと降りいでにけり

咽喉(のど)ぼとけ母に剃らせてうつうつと眠りましたりこれや吾が父

（雀の卵）

風たちてこまかに落つる竹の葉は日の照る方へみなちらふなり

（風隠集）

山茶花に雪ふりつもり閑(しつ)かなり七面鳥のくぐもりのこゑ

（海坂）

脛立ててこほろぎあゆむ畳には砂糖のこなも灯に光り沁む

幾度かの変遷をへている。

「桐の花」は詩集「思ひ出」とともにユニークな官能美、新しい香気と鮮麗な才気にみちた歌集である。その浪曼は白秋の恋愛体験を通して、飛躍的に「雲母集」の最も人間くさい作風に変る。「雲母集」は白秋の肉声がその生涯を通じて最も端的にきかれる興味深い歌集といえよう。大正一〇年の「雀の卵」にいたると、新しく自然歌人としての一面があらわれてくる。宗教的な匂いもいりまじり、芭蕉のめざした「わび」の近代的定着にふみいろうとしている。

白秋の卓抜した技術は益々精緻をきわめ、「黒檜」「牡丹の木」の幽玄体にまで進んでゆく事になるのだ。殊に「黒檜」は失明に近い眼疾にかかった白秋が、眼を内心

柿の蔕黒くこごれる枝見ればみ冬はいたも晴つづくらし

秋夜童女像

女の童あかき石榴を掌に置きてゐやまひ正し九九をこそよめ

（白南風）

行く水の目にとどまらぬ青水沫鶺鴒の尾は触れにたりけり

冬は観て幽かよとぞ思ふ繁に澄む青水沫あれば流るる泡あり

深夜に聴く

水底とつひに沈まむみ湯どころ小河内の村に一夜寝にけり

（溪流唱）

照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲ひてゆくなり

我が眼先しろきに蘊む菊の香の硝子戸あけて乱れたるらし

水ぐるま春めく聴けば一方にのる瀬の音もかがやくごとし

夏菊のしろき籬の角にして日のいちじるき光に遇ひぬ

いたりける妻なるならしねもごろとかたへ寄りつつこの夜読みつぐ

我が二人いたりつくらし何くれと言には出でね依り合ふ思へば

（黒檜）

さるすべり白き細枝の艶だつは朝凍とけて匂ふならしも

独楽うちて子らが声する戸外には花の曇のしづけくあらし

颱風の中なる凪を飛ぶ蜻蛉朱のあざやかに列しばしあり

にむけて魂の壁に刻みつけた作品集だ。「牡丹の木」は歿後に編まれたものである。

秋の蚊の耳もとちかくつぶやくにまたとりいでて蝈(かや)を吊らしむ　（牡丹の木）

若山牧水(わかやまぼくすい)

海哀(かな)し山またかなし酔ひ痴れし恋のひとみにあめつちもなし

白鳥(しらとり)はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇(くち)を君

ともすれば君口無しになりたまふ海は眺めそ海にとられむ

幾山河(いくやまかは)越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく　（海の声）

一人(いちにん)のわがたらちねの母にさへおのがこころの解けずなりぬる　（独り歌へる）

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆく　（別離）

海底(うなぞこ)に眼のなき魚(うを)の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり　（路上）

酒よ揺れよわれのいのちは汝(いまし)よりつねに静かに悲しみて居り

ただひとつ風にうかびてわが庭に秋の蜻蛉のながれ来にけり　（死か芸術か）

われを恨み罵りしはてに噤(つぐ)みたる母のくちもとにひとつの歯となき

小伝　明治一八年（一八八五）宮崎県に生る。本名繁。早大卒。柴舟に師事。明星に代って歌壇の自然主義運動の中心となり、牧水調を生む。歌風は詠嘆的抒情性に富む。歌集「海の声」「独り歌へる」「別離」「路上」「死か芸術か」「くろ土」等。昭和三年歿。

鑑賞　牧水の歌は、平明な表現で多くの人に親しまれている。

浪漫派の歌人が、技術偏重に傾き、自然派の歌人が、写生を専らにしすぎて、人間味を失うとき、牧水の直情的に人生の哀歓を歌う調べは、切実に人の心に通うものを持つ。

酒を主題に歌っていることで、

わがそばにこころぬけたるすがたしてとすれば父の来て居ること多し　（みなかみ）

妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓あけくもり日に居る　（秋風の歌）

十一月のなかば、打続きたる好晴に乗じ秩父なる山より渓を歴巡る、その時の歌。

朝雲の散りのかすけさ秋冴えし遠嶺に寄ると見れば消えつつ

はだら黄の木の間に見えて音もなく流るる此所の淀（よど）深からし

瀬のなかにあらはれし岩のとびとびに秋のひなたに白みたるかな　（渓谷集）

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春のはじめの雨にあらずや　（くろ土）

うすべにに葉はいちはやく萠えいでて咲かむとすなり山桜花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花　（山桜の歌）

水草のうき葉のうへにとまりたるうす水色の蜻蛉なりけり　（黒松）

石川啄木（いしかわたくぼく）

万葉歌人の大伴旅人とよく比較されるが、あの格調の大きさはないけれど、人間愛に酔う点では大いに意気投合している。

小伝　明治一八年（一八八五）岩手県に生る。盛岡中学中退。三四年新詩社に入り、「明星」に詩と歌

我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頬(ほ)につたふ
なみだのごはず
一握(いちあく)の砂を示しし人を忘れず

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

はたらけど
はたらけど猶わが生活(くらし)楽にならざり
ぢつと手を見る

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

とを発表。代用教員や新聞記者をつとめて転々とし、四一年上京。雑誌「スバル」の編集などをした。後朝日新聞社に勤めるようになったが、貧窮と病弱に倒れ明治四五年(一九一二)、二七歳で歿した。歌集「一握の砂」「悲しき玩具」。

鑑賞 啄木は浪漫歌人として華やかに出発したけれど、人生体験の重圧を経て作風は変っていった。「一握の砂」には未だ多分に感傷の歌声がのこっているけれど、それは暗く哀しいリズムをもっている。第二歌集「悲しき玩具」になると、社会主義的な傾向を示してくる。啄木の人生と歌とが一枚になったときである。

呼吸すれば
胸の中にて鳴る音あり。

花を買ひ来て
妻としたしむ

女あり
わがいひつけに背(そむ)かじと心を砕く
見ればかなしも

ふるさとの訛(なまり)なつかし
停車場(ていしやば)の人ごみの中に
そを聴きにゆく

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

凩よりもさびしきその音

新しき明日の来るを信ずとい
ふ自分の言葉に
嘘はなけれど

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

（一握の砂）

古泉千樫（こいずみちかし）

小伝 明治一九年（一八八六）千葉県に生る。一四歳頃から作歌。一九歳「馬酔木」に発表して伊藤

甕ふかく汲みたる水の垢にごりさびしき恋もわれはするかも
燭の火をきよき指におほひつつ人はゑみけりその束のまを
夜は深し燭を続ぐとて起きし子のほのかに冷えし肌のかなしさ
うつつなくねむるおもわも見むものを相歎きつつ一夜明けにけり
山の町夕冷えはやしをみな子のになひ行く水みちに垂りつつ
ひたごころ静かになりていねて居りおろそかにせし命なりけり
うつし世のはかなしごとにほれぼれと遊びしことも過ぎにけらしも
秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさびたる見れば

（川のほとり）

左千夫に激賞された。四一年上京「アララギ」創刊号に作品発表。以後「アララギ」に力を尽す。大正一一年「竹里歌話」一二年茂吉と共に「竹の里歌全集」を上梓。一三年「日光」創刊同人となる。一四年歌集「川のほとり」刊行。一五年「長塚節選集」出版。昭和二年（一九二七）八月歿。

吉井勇

こがらしに耳傾けぬ遁れゆく君が心に聴き入るごとく
砂の上の文字は浪が消しゆきぬこのかなしみは誰か消すらむ
伊豆も見ゆ伊豆の山火も稀に見ゆ伊豆はも恋し吾妹子のごと
おもしろし六が二となる賽の目も娼家の子らが心がはりも

（酒ほがひ）

かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる
伽羅の香がむせぶばかりに匂ひ来る祇園の街のゆきずりもよし

小伝　明治一九年（一八八六）東京に生る。早大中退。三八年頃新詩社に加入。後、雑誌「スバル」に作品を発表する。平明な歌風で人生の哀歓を歌い、ことに京都祇園を主題にしたものが多い。短歌の他、戯曲・小説等がある。

雨降りて祇園の土をむらさきに染むるも春の夕残なるかな　（祇園歌集）

年ごとにまさる寂しき太祇忌もいつしか過ぎて京の秋来ぬ　（河原蓬）

わが胸のうちにも浪の音聴こゆ暗くさびしき海やあるらむ

凩の音はけうとし世を挙げてわれをあざける声にかも似る　（夜の心）

炉にちかきうつらうつらのもの思ひ検校のごと目をば閉ぢぬれ

さびしきは夜半の酒ごとわれとわが寒き影にも杯はさせ　（人間経）

送り来し土佐の干魚を焼くときは目も潤むがに海を恋しむ

さすらひのこころに聴けば雪を踏む藁雪沓の音も寂しく　（寒行）

釈迢空

この集を、まづ与へむと思ふ子あるに

かの子らや　われに知られぬ妻とりて　生きのひそけさに　わびつつをゐむ

島山

葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

小伝　明治二〇年（一八八七）大阪市に生る。本名折口信夫。国学院大学卒。文学博士。明治四三年根岸短歌会に参加。その後アララギ同人となったが、大正一〇年頃から遠ざかり、結社雑誌に関係せず、独自の道を歩む。歌集「海やまのあひだ」「春のことぶれ」、詩集「古代感愛集」、小説「死者の書」

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の石塔婆の立つてゐるのは、あはれである。又殆、峠毎に、旅死にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人のなどもある。

邑山(なら)の松の木(こ)むらに、日はあたり、ひそけきかもよ。旅人の墓
ゆきつきて道にたふるゝ生き物のかそけき墓は、草つゝみたり

夜

下伊那の奥、矢矧川の峡野に、海と言ふ在所がある。家三軒、皆、県道に向いて居る。中に、一人の翁がある。何時頃からか狂ひ出して、夜でも昼でも、河原に出てゐる。色色の形の石を拾うて来ては、此小名の両境に竝べて置く。其一つひとつに、知つた限りの聖衆の姿を、観じて居るのだと聞いた。どれを何仏、何大士と思ひ辨(わか)つことの出来るのは、其翁ばかりである。

光る湍の　其処につどはす三世(みよ)の仏(ほとけ)　まじらひがたき、現身。われは
ひたぶるに月夜おし照る河原かも。立たすは薬師。坐(ゐ)るは釈迦文尼(しやかもに)

の他、国文学者・民俗学者として「古代研究」「口訳万葉集」など研究書多数がある。昭和二八年（一九五三）歿。

鑑賞　迢空の市井の生活を歌った作品には、民俗学者としての眼のたしかさがあって、アララギの形式的写生を、はるかに超えて独自である。迢空の歌に句読点があったり、句間があいていたりするのは、発想法からきているもので、短歌の伝統を墨守する人々への無言の抗議ともうけとれよう。

水底に、うつそみの面わ、沈透き見ゆ。来む世も、我の寂しくあらむ

川霧にもろ枝翳したる合歓のうれ　生きてうごめく　ものあるらしも

合歓の葉の深きねむりは見えねども、うつそみ愛しき　その香たち来も
（海やまのあひだ）

春のことぶれ

歳深き山の
　かそけさ。
人をりて、まれにもの言ふ
声きこえつつ
（春のことぶれ）

年かはる山

山びとの　言ひ行くことのかそけさよ。きその夜、鹿の　峰をわたりし
（水の上）

ただびとの住みかの如く荒れ〳〵て、古き都の寺はのこれり

古き代の恋ひ人どものなげき歌　訓み釈きながら　老いに到れり
（遠やまひこ）

硫気ふく島

たゝかひのたゞ中にして
我がために書きし消息
あはれ　ただ一ひらのふみ——
かずならぬ身と　な思ほし——
如何ならむ時をも堪へて
生きつゝもいませ　とぞ祈る——

きさらぎのはつかの空の　月ふかし。まだ生きて子はたゝかふらむか

公報いたる

たたかひは永久(とは)にやみぬと　たゝかひに亡せし子に告げ　すべあらめやも

春遊ぶ

山深き最上高湯の春の日に、馬方つどひ遊ぶを　見たり

篁(たかむら)の鳴る音きこゆ。のどかなる一日の後のさらにしづけき

山湯にて

庭づたふ水のさやけさ。起きて聴き、臥(ね)て聞く音の　夜となり行く

(倭をぐな)

しかすがにひとり思へば
貴賓(まれびと)のごとく来りて、

ぬすびとの如く去りにし
　人を　我思ひかなしむ――。
盗人のごとくのがれし　人ゆゑに
我はすべなし。
　まことある隣びとらの　慰めぞ
　我に苦しき――。
ぬす人を　然(さ)はな憎みそ。
ひそやかに往きし　思へば、
　ぬすびとのごとく逐(お)ひしも、
　　我ならぬ誰ならめやも――。
盗人も　さびしかりけむ。
　とりあたふ　物もなき身を――。
古ぶみの散りぼふ牀(ゆか)を
塵(ちり)塗(まみ)める寝処(ねど)の畳を――。
蔑(さ)みしつゝ　しかも　あはれと――。
しかすがに　ひとり思へば、
　かの子らの去りにし後の、
いきのをの心　虚(むな)しき――。

わが魂は　ぬすまはれけり。
ぬすびとのごとく　かくれて、
まれびとの如く　しづかに、
いづくべに　今は住むらむ。
うつら病む人の如しも。ひとりの我は――。

（近代悲傷集）

前田夕暮（まえだゆうぐれ）

馬といふ獣は悲し闇ふかき巷の路にうなだれてゐる

君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしうつくしさかな

雪のうへに空がうつりてうす青しわが悲しみはしづかにぞ燃ゆ

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ

小伝　一八八三年（明治一六年）神奈川県に生る。牧水と共に自然主義を唱える。昭和四年「詩歌」を復刊し自由律を唱道。晩年定型和歌に復したが、革新的な歌人であった。昭和二六年歿。

木下利玄（きのしたりげん）

花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹（ぼたん）重たく萼をはなるゝ

背おひたる垂穂のおもみ百姓はたへつゝあゆむ一足（ひとあし）ひとあし

春ふかく曇れる空ゆこぼれ来て雨の脚光る牡丹の園に

小伝　一八八六年（明治一九年）岡山県に生れた。佐々木信綱に師事。雑誌「白樺」によって作品を発表。白秋や赤彦の影響もうけたが、正確なデッサン力により独自の歌境をひらく。一九二五年歿。歌集「銀」「紅玉」「一路」「みか

夜の室に牡丹が放つ香をつよみ壺次ぎの間に遠ざけにけり
曼珠沙華一むら燃えて秋陽つよしそこ過ぎてゐるしづかなる径

んの木」。

中村憲吉

灯のなかを遠く送られ行くならむ浅夜の街の裸馬の一列
岩かげの光る潮より風は吹き幽かに聞けば新妻のこゑ
倉にあがる小作人は老いて懇なり草鞋をぬぎて足ぬぐひ居り
この家に酒をつくりて年古りぬ寒夜は蔵に酒の滴るおと
夜の酒蔵に事おこれるを我れ知れり杜氏に蹤きて黙りて行きぬ
ぬばたまの夜に入れども応へざる都はひとのはた生きてありや

草千里

阿蘇山の見ゆるかぎりは草の山み空にちかき馬飼ひどころ
きり小雨牧場にいななく駒居ぬはいづべの山のかげにか群るらむ

小伝 一八八九年（明治二二年）広島県に生れる。東大卒。アララギ同人。はじめ官能的な都会情緒の歌をかいたが、のち東洋的な枯淡の歌境にかわる。歌集「馬鈴薯の花」「林泉集」「しがらみ」「軽雷集」。昭和九年歿。

会津八一

かすがののみくさをりしきふすしかのつのさへさやにてるつくよか

小伝 一八八一年（明治一四年）新潟市に生る。文学博士。書家としてもすぐれていた。秋艸道人・渾斎・翠莚と号した。良寛の歌風

も

うちふしてものもふくさのまくらべをあしたのしかのむれわたりつつ

こがくれてあらそふらしきさをしかのつののひびきによはくだちつつ

香薬師を拝して

みほとけのうつらまなこにいにしへのやまとくにばらかすみてあるらし

東大寺にて

おほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり

秋篠寺にて

たかむらにさしいるかげもうらさびしほとけいまさぬあきしののさと

室生寺にて

みほとけのひぢまろらなるやははだのあせむとすまでにしげるやまかな

雁来紅

を慕い、古都を訪れて独特の「いにしへぶり」の歌をよんだ。昭和三一年歿。歌集は「南京新唱」「鹿鳴集」「山光集」「寒燈集」など。

つくりこしこのはたとせをかまづかのもえのすさみにわれおいにけむ

からすみをいやこくすりてかまづかのこのひとむらはゑがくべきかな

かまづかはあけにもゆるをひたすらにすみもてかきつわがこころから

窪田空穂

憎みては懲りよと我の振舞へど人懲りずしてわれの荒みき

関東大震災の折、その翌日

とほとほとのろのろとふらふらと来る人ら瞳すわりてただに険しき

深溝に陥りて死ねる小さき馬鬣燃えし面を空に向けて

死ねる子を箱に納めて親の名を愬ろに書きて路に捨ててあり

寝入らむとする手童の眉ひそめ何思へかも固く目を閉づ

三界の首枷といふ子を持ちて心定まれりわが首枷よ

子の三人人となれるに離れゆきわが身はもとの一人となりぬ

小伝　一八七七年(明治一〇年)松本市に生れた。早大卒。のち母校の名誉教授となる。明治三三年新詩社に入り和歌革新運動に参加。大正三年「国民文学」を発行。昭和一五年芸術院会員となる。歌集「まひる野」など一七巻の他、「万葉」「古今」「新古今」「伊勢物語」などの研究あり。

子らが身のきまりのつくを待ちけるがその時の来て楽しからなく

川田順（かわだじゅん）

吹き過ぐる風は光れり丹頂の鶴つばさ張りひろげ声啼きにけり
あしたづの啼く時見たりほがらかに嘴（くちばし）を空に向けて啼きたり
目交（まなかひ）の岩山の間ゆうてつけに大きなる鳥の飛び出でにけり
立山の外山（とやま）が空の蒼（あを）深みひとつの鷲の飛びて久しき
吾が髪の白きに恥づるいとまなし溺るるばかり愛しきものを
母をおもふ娘はわれを罵りて蛇の如しと言ひにけらずや

小伝　一八八二年（明治一五年）東京に生れた。一高を経て東大法科卒。竹柏園に一六才の時入門、歌をよむ。小山内薫らと同人雑誌「七人」を創刊。白秋らと「日光」を出す。歌集一三巻。他に「西行」「定家」「吉野朝の悲歌」の著あり。

土屋文明（つちやぶんめい）

ただひとり吾より貧しき友なりき金のことにて交絶（まじはり）てり
いきどほり妻よぶ声の父親に似て来（こ）しことを吾知りて居り
ふるさとの盆（ぼん）も今夜（こよひ）はすみぬらむあはれ様々（さまざま）に人は過ぎにし
安らかに月光（つきかげ）させる吾が体（からだ）おのづから感ず屍（しかばね）のごと

小伝　一八九〇年（明治二三年）群馬県に生れた。東大哲学科卒。明治四二年上京。伊藤左千夫の門に入り、アララギに拠る。
歌集「ふゆくさ」「往還集」「山谷集」「六月風」「韮菁集」「山下水」「自流泉」等。「万葉集」の研究書が多い。

鶴見臨港鉄道

枯葦の中に直ちに入り来り汽船は今し速力おとす

吾が見るは鶴見(つるみ)埋立地(うめたてち)の一隅(いちぐう)ながらほしいままなり機械力専制(きかいりょくせんせい)は

このあした吾をよび起す吾妻(あつま)のこゑ入歯(いれば)はづしていたくやさしき

吉野秀雄(よしのひでお)

血吐きしはきのふのことと思はれず硝子戸透(とほ)す日はゆたかにて

かすかなるたのみごころや腕(うで)のべて腿(もも)にのこれるししむらを撫づ

へたばりて八方(はっぽう)すべなき己心(おのごころ)なだめなだめて生きむとするも

ながながといねたる胸に両手(まて)組みて我は久しく五欲にし遠し

玉簾集

昭和十九年夏妻はつ子胃を病みて鎌倉佐藤外科に入院し遂に再び起たず八月二十九日四児を残して命絶えにき。享年四十二会津八一大人戒名を授けたまひて淑真院歓尼貞初といふ。

古畳を蚤のはねとぶ病室に汝がたまの緒(を)は細りゆくなり

小伝　一九〇二年(明治三五年)群馬県高崎に生れた。肺をやみ、慶応義塾大学経済学部中退。正岡子規に傾倒して大正一三年歌をつくる。

鑑賞　会津八一の古代憧憬の歌風に接近し、吉野秀雄はさらに大らかな人間臭をその歌にこめて詠む。牧水の直情とはまた別の勁い歌の世界がここにある。

歌集「天井凝視」「苔径集」「早梅集」「寒蟬集」等。

病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし

生かしむと朝を勢へど蜩の啼くゆふべにはうなだれてをり

汝が魂はいづくさまよふ末の子の手をひき歩む夜の道暗し

手抱ける汝が骨壺に温みあり山をとよもす秋蟬のこゑ

酒酌めばただただただねむし骨髄に澱む疲れのせむすべもなき

風呂にしてわれとわが見る陰処きよくすがしく保ちてそあらな

百日忌

酒のみて我は泣くなり泣き泣きて死ににし者の母にうつたふ

ひしがれてあいろもわかず堕地獄のやぶれかぶれに五体震はす

俳句

正岡子規

あたたかな雨が降るなり枯葎

うつくしき色見えそめぬ葉鶏頭

蒟蒻にしぐれ初めけり笊の中

夕風や白薔薇の花皆動く

行く秋をしぐれかけたり法隆寺

小伝　（一八六七—一九〇二）俳人・歌人。本名常規。獺祭書屋・竹の里人とも号す。愛媛県生れ。俳句誌「ホトトギス」を創刊し、伝統的俳句形式の中に近代人の新しい感覚を盛ろうとした。又、「歌よみに与ふる書」を著して、万葉復古を唱え根岸短歌会を結成。機関誌「馬酔木」を出し、アララギ派のもとをつくった。更に、散文

法隆寺の茶店に憩ひて

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

馬の尻に行きあたりけり年の市

病中二句

しぐるゝや蒟蒻冷えて臍の上

小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん

病中雪

いくたびも雪の深さを尋ねけり　（寒山落木）

野分して蟬の少きあしたかな

この頃の蕣藍に定まりぬ

鶏頭の黒きにそそぐ時雨かな

草花を画く日課や秋に入る

絶筆三句

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

をととひのへちまの水も取らざりき　（俳句稿）

短歌

御仏にそなへし柿ののこれるをわれにぞたびし十まりいつゝ

の方面では写生文を生んだ。門下に鳴雪・碧梧桐・虚子・露月・左千夫・長塚節等著名の俳人・歌人多く、後世に大きな影響をあたえた。歌集「竹の里歌」、散文「墨汁一滴」「病牀六尺」がある。

鑑賞　俳句という言葉が用いられたのはひかくてき新しく、明治以後のことである。子規は俳諧の発句（第一句）を一切の附句から切りはなし、独立した短詩型とみなし、俳句なるジャンルをつくりだそうとした。

連句を俳諧の本質とした芭蕉を子規が無視しようとした理由はここにある。

子規は写生を主旨として、天明期の俳人蕪村を芭蕉より高く評価している。しかし子規には、蕪村

霜防ぐ菜畑の葉竹はや立てぬ筑波根颪雁を吹く頃
縁先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の緑手水鉢を掩ふ
くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
吾庵の檐端にかけし鳥籠の鳥さへづらず春の日曇る
夜の床に寝ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月ふけわたる
朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲く待てば久しも
瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり
瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり
藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも
藤なみの花をしみれば紫の絵の具取り出て写さんと思ふ
藤なみの花の紫絵にかかばこき紫にかくべかりけり
瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす
いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす
世の中はつねなきものと我愛づる山吹の花ちりにけるかも
別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも
くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

の幻想美はない。唯、子規の絵画への嗜好が、絵画的イメージに富む蕪村へ眼を注がした大きな要素であろう。

しかし、俳句という短詩型で写生をするという子規の考え方には、印象主義に陥る危険や、感動のない自然直写に走るおとし穴がないわけではなかったのだ。

内藤鳴雪

古雛の衣や薄き夜の市
日あたりや江戸を後ろに畑打つ
桶に浮く丸き氷や水ぬるむ
大沼や蘆を離るゝ五月雲
朝立や馬のかしらの天の川
鶏の窓に飛び込む野分かな
末枯に真赤な富士を見つけけり
初冬の竹緑なり詩仙堂
からからと日は吹き暮れつ冬木立
吹きはづす板戸の上を霰かな

（内藤鳴雪俳句集）

河東碧梧桐

春寒し水田の上の根なし雲
薪能小面映ゆる片明り

（新俳句）

小伝　（一八四七―一九二六）本名素行。別号老梅居。江戸に生る。父は伊予松山の人。
子規門。古典的情趣を句にしたものが多い。
「鳴雪句集」「鳴雪俳句集」「鳴雪俳話」などがある。

小伝　明治六年（一八七三）生る。子規門下に入り、子規歿後、「日本俳句」の選者となり、子規の写実的傾向を進め、「続春夏秋冬」を刊行。三九年から四四年にかけて全

鵜つかひや忍冬（にんどう）咲いて昼の宿
冬枯や墾（ひら）きすてたるこのあたり
（春夏秋冬）

ひやひやと積木（つみき）が上に海見ゆる
残る蚊もはたとなき夜や燭（しょく）の風
（続春夏秋冬）

鰯引く外浦（とうら）に出るや芒山（すすきやま）
出羽人（ではびと）も知らぬ山見ゆ今朝の冬
浦人や鯨の油幾日汲（く）む
蝦夷（えぞ）に渡る蝦夷（えぞ）山もまた焼くる夜に
（三千里）

国を遍歴し新傾向運動につくす。大正四年「海紅」創刊。漸次自由律に転ず。大正九年欧米を漫遊し、帰国後「碧」つづいて「三昧」を創刊。絶えず進展に努めたが、昭和八年俳壇を退き、一二年（一九三七）歿。句集「新傾向句集」「八年間」「碧梧桐句集」の他俳論、紀行、随筆などの著書が多い。

高浜虚子（たかはまきょし）

遠山に日の当りたる枯野かな
蜘蛛（くも）掃けば太鼓（たいこ）落して悲しけれ
年を以て巨人としたり歩み去る
大空に又わき出でし小鳥かな
大空に伸び傾ける冬木かな

鎌倉にて

秋天の下に浪あり墳墓あり

小伝　明治七年（一八七四）松山市に生る。本名清。正岡子規の門に入り、三一年以降「ホトトギス」を主宰。子規の写生の説に拠り、花鳥諷詠を唱えて、新傾向俳句に対して伝統的立場に立つ。昭和三四年（一九五九）歿。俳句の他随筆小説も著し「高浜虚子全集」一二巻がある。

雪解くるさゝやき滋し小笹原
藪入の田舎の月の明るさよ
道のべに阿波の遍路の墓あはれ
秋篠はげんげの畦に仏かな　（五百句）
麻の中雨すい〳〵と見ゆるかな
紫蘇(しそ)の実を鋏(はさみ)の鈴の鳴りて摘む
もの置けばそこに生れぬ秋の蔭
初蝶を夢の如くに見失ふ
手毬唄かなしきことをうつくしく　（五百五十句）
草花火たら〳〵落ちぬ芋(いも)の上
凍蝶(いててふ)の蛾眉衰へずあはれなり
山川のくだくる水に秋の蝶
彼一語我一語秋深みかも　（六百五十句）

村上鬼城(むらかみきじよう)

世を恋うて人を怖るゝ余寒かな
鹿の子のふんぐり持ちて頼母(たのも)しき

小伝　（一八六五―一九三八）本名荘太郎。東京生れ。子規・虚子に師事。聾と貧苦に悩みながら句作に精進し、客観写生の中にさりげなく情感を籠めた独特の句境をひらいた。句集「鬼城句集」「鬼城

茗荷汁にうつりて淋し己が顔
夏草を遣上りたる捨蚕（すてこ）かな
今朝秋や見入る鏡に親の顔
冬蜂の死に所なく歩行（ある）きけり
生きかはり死にかはりして打つ田かな
親よりも白き羊や今朝の秋
むかごこぼれて鶏肥えぬ草の宿
御仏（みほとけ）のお顔のしみや秋の雨
念力のゆるめば死ぬる大暑かな
秋雨や柄杓（ひしゃく）沈んで草清水
蚊柱や吹きおろされてまたあがる
いささかの借もをかしや大三十日（おほみそか）
鷹のつらきびしく老いて哀なり
種蒔や万古ゆるがず榛名山

（鬼城句集）

渡辺水巴（わたなべすいは）

除夜の畳拭くやいのちのしみばかり

俳句俳論集」。

小伝　（一八八二—一九四六）本名義。東京浅草に生る。鳴雪、後に虚子の門に入る。「ホトトギス」同人。大正五年俳誌「曲水」創刊。

障子張る妹に花も過ぎにけり

　土佐五台山竹林寺

ものの影みな涅槃なる月夜かな

落ち葉踏むやしばし雀と夕焼けて

　山葵沢（上大見村）

山葵田の水音しげき四月かな

天城嶺の雨気に巻きあふ蕨かな

ほんの少し家賃下りぬ蜆汁

空も星もさみどり月夜春めきぬ

日と空といづれか溶くる八重桜

　鹿野山にて

かたまつて薄き光の菫かな

年の夜やもの枯れやまぬ風の音

雪となりて火のうるはしき目刺焼く

そこら少し片づきしけふ蓮活けぬ

　矢野氏庭園

四阿や此処に春ゆく木瓜二輪

（水巴句集）

句集「水巴句集」「富士」等がある。

飯田蛇笏（いいだだこつ）

なかんづく学窓の灯や露の中
ひぐらしの鳴く音（ね）にはづす轡（くつわ）かな
蕎麦（そば）をうつ母に明うす榾火（はたび）かな
ある夜月に富士大形（だいぎやう）の寒さかな
袷人（あはせびと）さびしき耳のうしろかな

芥川龍之介の長逝を悼みて

たましひのたとへば秋のほたるかな
辣韮（らつきよう）の花咲く土や農奴葬
冬灯（ふゆともし）死は容顔に遠からず
火を避けて地（つち）の提灯凍るさま

小伝 一八八五年（明治一八年）山梨県に生れた。早稲田大学文科卒。「国民俳壇」「ホトトギス」に作品を発表。虚子に師事する。後「雲母」を主宰。著書「山廬集」「穢土寂光」他四。

原石鼎（はらせきてい）

山国の闇恐ろしき追儺（つゐな）かな
風呂の戸にせまりて谷の朧かな

小伝 一八八六年（明治一九年）島根県に生る。のち吉野山中に入り次兄の医業を手伝う傍ら句作し、ホトトギスに入る。大正六年東京日日新聞社の俳句欄を担当。一〇年「鹿火屋」発刊。昭和一六年（一

白魚の小さき顔をもてりけり
撃たれ落つ鳥美しや山枯木

放浪久しく

おもひ見るや我屍にふるみぞれ

瞑目して時に感あり

秋風に殺すと来る人もがな
凩や列車降りなば妓(ぎ)買はむ
梟(ふくろふ)淋し人の如くに瞑る時

前田(まえだ)普羅(ふら)

月出てて一枚の春田輝けり
寒雀身を細うして闘へり

病　中

慈悲心鳥おのが木魂(こだま)に隠れけり
足重き蒲団にこぼす梅花かな
形代(かたしろ)にわが名を書きて恐ろしき

九五一)歿。著書に「花影」「石鼎句集」「言語学への出発」等がある。

小伝　一八八九年(明治二二年)東京に生る。早稲田大学英文科卒。虚子門に入る。「辛夷」を主宰し、戦後脳溢血で倒れる。(一九五四)「普羅句集」「春寒浅間山」「飛驒紬」「能登蒼し」などの著書がある。

尾崎放哉（おざきほうさい）

つくづく淋し我が影よ動かして見る
聞こえぬ耳をくつつけて年とつてゐる
淋しいからだから爪がのびだす
一日雪ふるとなりをもつ
蛇が殺されて居る炎天をまたいで通る
あるものみな着てしまひ風邪ひいてゐる
あすは元日が来る仏とわたし
やせたからだを窓に置き船の汽笛
すつかり病んなつて柳の糸がふかれる

水原秋桜子（みずはらしゅうおうし）

蟇（ひき）ないて唐招提寺春いづこ
梨咲くと葛飾（かつしか）の野はとの曇り
野いばらの水漬く小雨や四つ手網

小伝　一八八五年（明治一八年）鳥取市に生れた。東大を経てのち朝鮮火災海上保険会社の支配人となる。大正一二年震災以後、人生への態度を一変し、財物をなげすて、妻とも別れて、孤独の生活に入る。近畿の寺に寺男として転々、小豆島に渡りすみ門外に出ず、大正一五年漁師夫妻の手に抱かれて死す。句集「大空」などあり。

小伝　一八九二年（明治二五年）東京に生れた。東大医学部卒。昭和二八年以後医業を廃す。大正八年「渋柿」によって俳句を学び、九年「ホトトギス」昭和七年以後は「馬酔木」に拠り、子規の写生から脱

柴漬や古利根今日の日を沈む
石鹸玉木の間をすぐるうす〱と
蒲公英や激浪寄せて防波堤
桑の実や越え来し山は雲立てり
蟻の道白雲木の花降れり
猛犬のふぐりゆゝしき枯野かな
寄生木やしづかに移る火事の雲
べたべたに田も菜の花も照りみだる

山口誓子

白き船造られてあり労働祭
海は春入渠の船のうすき煙
唐太の天ぞ垂れたり鰊群来
玄海の冬浪を大と見て寝ねき
渤海を大き枯野とともに見たり
ひとり膝を抱けば秋風また秋風
凍鶴の啼かむと喉をころろころろ

し、ロマンティシズムの湧出をはかった。句集「葛飾」他一四部。選集五巻。その他エッセイが多い。

小伝　一九〇一年(明治三四年)京都に生れた。三高を経て東大卒。住友本社を昭和一七年退職。「ホトトギス」「馬酔木」を経て「天浪」を主宰。句集「凍港」「黄旗」「炎座」「七曜」「激浪」「遠星」「晩刻」「青女」「和服」など。

秋桜子のロマンに更に理智的な構成を加え、俳句を風流の遊びから一層高次のものにしたのは誓子であるといえよう。

嘴(はし)のべて鵜(う)が炎天もまたさびし
紅くあかく海のほとりに梅を干す
町中(なか)に入りて隠れぬ冷し馬
海に出て木枯帰るところなし
濁流に日のあたりたり青葡萄
酩酊に似たり涅槃(ねはん)をひた歎き

富安風生(とみやすふうせい)

一もとの姥子(うばこ)の宿の遅桜
あしあとの千鳥のなかの鳥かな
よろこべばしきりに落つる木の実かな
石階の二つの蜥蜴(とかげ)相識らず
凍土(いてつち)をなほいましむる木の根かな
蜘蛛(くも)の囲をゆすりて霧の疾(と)き流れ
老木の芽をいそげるをあはれみぬ

小伝 一八八五年(明治一八年)愛知県に生る。東大法科卒。のち逓信次官になる。
大正七、八年頃より作句。虚子の門に入る。昭和四年ホトトギス同人。俳諧誌「若葉」を主宰。

芝不器男（しばふきお）

鴨うてばとみに匂ひぬ水辺草
繭玉（まゆだま）に寝（い）ねがての腕あげにけり
永き日のにはとり柵を越えにけり
人入つて門のこりたる暮春かな
白藤や揺りやみしかばうすみどり
虚国（むなぐに）の尻無川や夏霞
ころぶすすや蜂腰（すがるごし）なる夏痩女（め）
泳ぎ女の葛隠るまで羞ぢらひぬ
秋の夜の影絵をうつす褥かな

小伝　一九〇三年(明治三六年)愛媛県に生れた。東大農学部から東北大工学部に移る。その頃（大正一四年）俳句をつくりはじめている。「ホトトギス」「天の川」に作品を発表。原石鼎に最も傾倒した。

万葉用語を駆使し、しかも新興俳句運動の先駆者のひとりとなるような新しさも持っていた。

昭和四年肉腫にかかり、昭和五年歿。

日野草城（ひのそうじょう）

病室にて
野分（のわき）してしづかにも熱いでにけり
春の月ふけしともなくかがやけり

小伝　一九〇一年(明治三四年)東京に生れた。京大法科を経て大阪海上保険に入社。

俳句は大正六年「ホトトギス」に出発。九年鈴鹿野風呂等と「京

春の灯や女は持たぬのどぼとけ
小むかでを搏つたる朱(あけ)の枕かな
春の夜や檸檬(レモン)に触るる鼻のさき
壮佼(わかもの)ら胸板厚く哄笑(わら)ひ去る
そことなく楽欲(げうよく)の眼をおぼえけり
湯あがりやアダムのごとくゐて涼し
冬薔薇の咲くほかはなく咲きにけり
霜白し妻の怒りはしづかなれど
死ぬときの鼠の声を聴きにけり
わが手枯れ妻の手は固くなりにけり

吉岡禅寺洞(よしおかぜんじどう)

はたくが　とばないで　雑草も暮れる
日蝕をうたがい　きいろにそまつてゐる　嫗(おうな)
山の雪がきえた　地虫たちに　ノックしよう
光りをおそれ　口を真一文字(まいちもんじ)にして　坐つている
大空をささえて　仏舎利塔の　昼がまだある

鹿子」創刊。昭和四年ホトトギス同人となる。一〇年「旗艦」創刊。二〇年肺結核を病む。二四年「青玄」創刊。三一年(一九五六)歿。「花水」「青空」「昨日の花」「転轍手」「人生の午後」「銀」等の句集あり。

小伝　一八八九年(明治二二年)福岡県に生れた。三宅吟志に俳句の手ほどきをうけ日本新聞に投句。のち「ホトトギス」に拠る。大正七年「天の川」主宰。戦後口語俳句を唱道。

空の紺　ふかく　原爆のあの口ちかづく

杉田久女

花衣ぬぐやまつはる紐いろ〱
白萩の雨をこぼして束ねけり
花蕎麦に水車鎖して去る灯かな
紫陽花に秋冷いたる信濃かな
羅に衣通る月の肌かな
病み痩せて帯の重さよ秋袷
花ふかき館に径ある夜宴かな
爪ぐれに指そめ交はし恋稚く
土濡れて久女の庭に芽ぐむもの

川端茅舎

露径深う世を待つ弥勒尊
一聯の露りん〱と糸芒

小伝　一八九〇年（明治二三年）、鹿児島に生れた。お茶の水高女卒。虚子に昭和一一年まで師事。後、草城・禅寺洞などとともにホトトギスをやめる。「花良」主宰。一九四六年歿。

小伝　一九〇〇年（明治三三年）東京に生れた。日本画家川端龍子の弟。茅舎も絵を岸田劉生について学んだが、病をえて、大正四年頃より虚子門に入り作句。昭和一六

芋腹をたたいて歓喜童子かな
自然薯（じねんじょ）の身空ぶる〳〵掘られけり
たらたらと日が真赤ぞよ大根引
雪の上ぼつたり来たり鶯が
青炎の松囀りを鏤（ちりば）めぬ
陽炎の道がつくりときりぎしへ
昼蛙う行幽かにえごの花
わが咳や塔の五重をとびこゆる
咳かすかかすか喀血とくとくと
洞然と雷聞きて未だ生きて
夏痩せて腕は鉄棒より重し
身みづから潰えんとして柿は凝り
満月に金炎え立ちし銀杏（いちやう）かな

松本（まつもと）たかし

南（みんなみ）の海湧き立てり椿山
羅（うすもの）をゆるやかに着て崩れざる

年歿。

同時代の無季俳句（季題のない俳句）をとなえる近代派にあって彼は、松本たかしなどとともに、伝統的な有季俳句を作り、却って独自の道を見出した。

小伝　一九〇六年(明治三九年)東京神田に生れる。能役者の家に生れたが、一六、七の頃健康を害し、作句生活に入る。虚子に師事。昭和二一年「笛」を創刊主宰する。二九年句集「石塊」で読売文学賞

芥(けし)咲けばまぬがれがたく病みにけり
渡鳥仰ぎ仰ぎてよろめきぬ
チチポポと鼓打たうよ花月夜
我庭の良夜の薄湧く如し
水鶏(くひな)鳴く旅寝はじまる一夜かな
冬山の重囲に陥ちし身一つ
一火ありまた一火あり冬山家
又しても家路まどへる夜霧かな
激流に密室の如紅葉谿
雪満目温泉を出し女燃えかがやき

をうく。三一年五月歿。

中村汀女(なかむらていじょ)

夜の客に手探りに葱(ねぎ)引いて来し
晩涼や運河の波のややあらく
地階の灯春の雪ふる樹のもとに
香水の坂にかかりて匂ひ来し
もろこしを焼くひたすらになりてゐし

小伝　一九〇〇年(明治三三年)熊本市に生れた。大正七年より作句。一時中絶していたが、昭和七年より再び創作生活に入る。「汀女句集」「花影」「都鳥」などがある。

あはれ子の夜寒の床の引けば寄る
呼鈴の紐のありかや夕時雨
いそいそとちやんけん勝ちし毬をつく
蝶白し目かくしの鬼あはれめば

中村草田男（なかむらくさだを）

猫の恋後夜かけて父の墓標書く
秋の航一大紺円盤の中
前空（まえぞら）となく稲妻のひろかりき
　孤児なる女中突如発狂す
狂ひ寝や雪達磨に雪降りつもる
妻二夕夜あらず二夕夜の天の川
木兎（うく）は呼ぶ父は頭黒（う）うして逝けりし
夜半の夏人形の目は目そらさず
鳴く蟬は海へ落つる日独り負ひ
末枯や御空（みそら）は雲の意図に満つ
わが背丈以上は空や初雲雀

小伝　一九〇一年（明治三四年）中華民国廈門で生れた。東大卒。昭和四年に虚子門に入り、秋桜子の指導をうけ、八年ホトトギス同人となる。「万緑」主宰。
　草田男はホトトギスの写実を基にしかも独自である。その天真ランマンたる資質は天与のものであるが、時に才に走り、晦渋な作品をつくる。
　秋桜子のディレッタンティズムをうけつぐところありとはいえ、その作品に内在するリズムはより豊かである。

春立つ夜あの夜の友にも為事(しごと)あれ
生れて十日生命(いのち)が赤し風がまぶし

石田波郷(いしだはきょう)

ある宵の菊のおごりにひとりゐぬ
雀らも西日まみれやねぶの花
鶏頭に隠るゝごとし昼の酒
子の涙こんこんと出づ涼しき如
綿虫やそこは屍(かばね)の出でゆく門
寒林を月跳ね出でてわたらふも
手鏡や二月は墓の粧ひ初む
残菊より低く病者等跼(つつ)み合ふ
寒き眼の何に縋れる一病者

加藤楸邨(かとうしゅうそん)

かなしめば鵙(もず)金色(こんじき)の日を負ひ来

小伝 一九一三年（大正二年）愛媛県に生れた。松山中学時代「渋柿」派の影響をうけ俳句を始め、のち秋桜子の「馬酔木」に入る。
新興和歌興隆期には伝統を守って人間諷詠の道を進み、戦後「現代俳句」創刊。
「馬酔木」「鶴」の同人。第六回読売文学賞を受く。

小伝 一九〇五年(明治三八年)金沢に生れた。村上鬼城に俳句を学び、後、秋桜子の門に入る。
句集「寒雷」「穂高」「颱風眼」「雪後の天」「起伏」「火の記憶」

しぐれきて仏体は木に還りける
泣きし子も蟇（ひき）も真青ぞ青嵐
雉子（きじ）の眸（め）のかうかうとして売られけり
鮟鱇（あんかう）の骨まで凍ててぶちきらる
こがらしや女は抱く胸をもつ
雪割や駈け出て豚は尾も桃色
雪国や身を出て熱き尿とばす
炭負のよく見れば目を瞠（みは）りゐる
冬夜霧声が先づきて友が来ぬ

西東三鬼（さいとうさんき）

狂院をめぐりて遠き盆踊
猫か人の声して走る寒（かん）の闇
夕焼へ群衆だまり走り出す
百舌に顔切られて今日が始まるか
穴掘りの脳天が見え雪ちらつく
石の上に踊るかまきり風もなし

「砂漠の鶴」「野哭」「山脈」等。他に「俳句表現の道」「芭蕉秀句」等の著書がある。

小伝　一九〇〇年（明治三三年）岡山県津山市に生れた。両親を早く失い、シンガポールで歯科医を開業。昭和三年帰国。昭和九年同人誌「走馬燈」で俳句をはじめ「天の川」を経て「京大俳句」に拠る。その間、新興俳句運動の中心となり活躍。
　昭和二三年誓子の「天狼」創刊にたずさわる。

生き馬のゆくに従ひ枯野うごく
咆えてもみよ往きては復る泥田の牛
機関車の瘤灼け孤り野を走る

「旗」「三鬼百句」「夜の桃」「今日」等。「断崖」を主宰。
昭和三七年歿。

あとがき

現代篇で、戦後に活躍する諸家にふれえなかったことを、心のこりとする。収容能力の限界によるもので編者としては、そのすべてにふれたかったのだ。なぜなら、編者が意図した「歴史の持続」は、「現代」を詳述しえて、はじめて意味を持ちうると信ずるからだ。

この小著を編むにあたって、山本美智子の大きなバックアップをえたことを特記したい。殊に古典に関する僕の身勝手な逸脱的解釈を、常に匡すのが彼女の役割でもあった。ほぼ共著ということができよう。

編集部の八坂安守氏も、不精な僕を鞭韃する退屈な仕事をあきずにつづけてくれた。あわせて謝意を表する次第である。

山本太郎

マ

ヤ

ラ

索　　引

（数字は作品引用頁を示す）

ア

カ

索　　引

著者略歴

1925年東京に生る
1949年東京大学独文科卒業
現在　「歴程」同人，現代詩人会会員，日本ペンクラブ会員，法政大学・中央大学講師
《著　書》　詩集「歩行者の祈りの唄」「山本太郎詩集」「ゴリラ」「単独者の愛の歌」・「愛の詩歌集」（編著）
《現住所》　東京都下北多摩郡国立町中区 201

現代教養文庫 381　日本の詩歌

昭和 37 年 7 月 10 日　初版第 1 刷発行
昭和 41 年 11 月 5 日　初版第 7 刷発行

編　　者　山 本 太 郎
発 行 者　土　屋　実
本文印刷　株式会社　文弘社
製　　本　合資会社黒田製本所

発行所　株式会社　社 会 思 想 社
東京都千代田区神田駿河台3—5
電 話 代 表 (292) 2 6 1 1
振 替 東 京　7 1 8 1 2

現代教養文庫の定価はすべてカバーに明記してあります

現代教養文庫

一九六六年新刊

●六月の新刊まで記載しました。既刊五四〇点の解説目録進呈いたします。

萩原龍夫	祭り風土記(上)・(下)	各280
関 楠生訳編	知と愛について	160
ジード 白井健三郎訳	狭き門・田園交響楽	200
伊藤信吉他編	紙絵と詩 智恵子抄	280
関 泰祐編	ファウスト物語	200
スティヴンソン 橋口稔訳	若い人たちのために	160
アラン 宗左近訳	幸福論	200
三浦一郎	ユーモア人生抄	160
芥川龍之介 社会思想社編	生と死の思索	200
白石浩一	愛と性のレポート	280
「歴程」同人編	詩と随想 人生案内	240
本多顕彰	若い人とともに	160
江守五夫	結婚の起源と歴史	280
草野心平編	賢治のうた	240
松山悦三	明治大正昭和 作家追想	200
邑井操	維新の群像	200
山本光雄他編	ギリシァの知恵	200
P・H・バック 鈴木満男訳	偉大なる航海者たち	280
小倉芳彦 小島晋治他	教養人の東洋史(上)・(下)	各280
井上宗和	日本の五名城	280
B・パスカル 渡辺秀訳	パンセ	200
G・ジンメル 阿閉吉男訳	社会学の根本問題	200
楠本憲吉	戦後の俳句	240
日本植物友の会編	花の名所案内	280
シュトルム 秋山英夫訳	みずうみ・三色すみれ	160
L・トルストイ 西本昭治訳	人生論	200
草野心平	わが生活のうた	240
串田孫一	生きるための思索	200
村上一郎	世界の思想家たち	200
河北倫明	日本美術入門	240
安田元久編	年表要説 日本の歴史	320
渡辺公平 矢沢保共編	たのしいコーラス 山旅歌集	240
横田正知編	茂吉のうた	240
ロレンス 羽矢謙一訳	現代人の愛について	160
矢崎源九郎	世界の民話	200
今井金吾	東海道五十三次 今と昔	280

カバー印刷　方英社
41・5

¥ 280 社会思想社刊